ISSN　1341－0105

九　州　大　学
健康科学センター年報

── 自己点検・評価報告書資料 ──

第　34　巻（平成23年度）

橋本公雄先生退職を記念して …… 3

教　育　活　動 …… 17

業　務　活　動 …… 29

研　究　活　動 …… 65

社　会　的　活　動 …… 97

委　員　会　活　動 ……103

資　料 ……107

人　事　等　の　一　覧 ……125

九州大学健康科学センター

平　成　25　年　3　月

スタディオン・クレスト

人間が姿勢よく立って歩くさまを「健」という。歩くふたりの間に横たわる二重のらせんには，Read Nature，Not Books”と刻まれている。ＤＮＡの生命の糸は，普遍の記号でつづられたヒトと生物たちの物語，温古の手がかり，知新の源泉である。

砂漠の朝，太陽が昇る。巨大な日輪が出始めてから地平を離れるまでの時間に，人が歩いた平均距離を，古代バビロニアンはスタディオンと定めた。この単位で古代人たちは，地理を測り旅程を考えた。地球の全周は25万スタディアと記されている。人間そのものが社会活動の基準にすえられた時代があった。世紀で刻むにはあまりにも巨大な進化の流れ，そのなかをヒトは歩きつづけてきた。

「歩けないヒト」のためには医学が生まれた。現代文明における「歩かなくなったヒト」を反省し未来を拓くため，「歩くヒト」の健康科学は，物質ではなく生命に，神よりは人間に，具体具象の基盤，新しいスタディオンを探るものである。

夜の闇をたちきる黎明，スタディオンの刻まれるときであった。

橋本公雄 教授 近影

健康科学センターの未来に向けて

健康科学センター長　熊谷 秋三

健康科学センターは、このたび基幹教育院と共同申請した「大学改革活性化制度（後述）」への「キャンパスライフ支援センターの新設」が採択されたことにより、平成 25 年度をもって発展的に解消されることとなった。教員の所属部局は、九州大学における全学教育の中核的組織となることが期待されている基幹教育院となる。新組織の構成メンバーは、現健康科学センターの 12 名（医師 7 名、臨床心理士 2 名、体育系教員 3 名）と現基幹教育院の修学指導・学生相談部の 3 名（臨床心理士）、および今回の活性化制度で新規増員の 3 名（教授、准教授、助教各 1 名）の合計 18 名である。この 18 名の構成員で基幹教育院に学修・健康支援開発部門を設置し、伊都地区に設置予定のキャンパスライフ・健康支援センター（仮称）本部を中心として、全学出動体制のもと活発な業務活動を展開していく。また、今回の申請を契機に体育系教員 9 名中 6 名は人間環境学研究院への異動となり、念願であった本研究院において基幹講座を開設予定である。

1978 年（昭和 53 年）に健康科学センターが設置され 34 年が経過したが、前述したように 2012 年（平成 25 年度）からは現構成員の総意として組織の発展的解消を伴って、今まさに、その歴史に新たなページが刻まれようとしている。今回の出来事は、これまでの 34 年間の健康科学センターの歴史と実績の重みを噛みしめながらの現構成員の教員の皆様の決断・英断であったと私は確信している。以下に、最後の健康科学センター長としての所感を述べさせていただきたい。

今回の健康科学センター改組の背景要因としては、以下の 2 つの重要なポイントがあげられる。1 点目は本学におけるメンタルヘルスの悪化といった現代の社会背景（健康問題は時代背景によって変遷するものである）を基盤とした喫緊の健康問題への対応および解決の必要性があったこと。2 点目はその実現にむけた人員の要求・統合および事務組織を含む九州大学における健康支援機構の拡充・統合化の必要性があったこと。大学における健康問題としての学生の自殺問題や学生・教職員のメンタルヘルスの悪化への改善対策に関しては、この数年間は大学の執行部等から健康科学センターに対してその抜本的対応が強く求められ（期待され）ていた。かつ我々としても、これらの健康問題は健康科学センターが主導すべき喫緊の健康問題と認識していたが、その改革に関しては限りある人的環境では手詰まり状態であった。かかる状況下にあって、本学のメンタルヘルス関連の専門家の分散と事務組織の非効率さなどは、メンタルヘルス問題に限らずその他の健康問題の解決に向けての大きな障害となっていた。

平成 23 年度国立大学法人評価委員会による大学評価において、本学が全国で唯一の“極めて高い評価”を受けた「大学改革活性化制度」は我々にとって非常に魅力的な制度であった。この制度は、部局等の努力だけでは実現可能性が低い新規の教員増を学内処置で対応しようとする九州大学独自の制度である。私は、4 月のセンター長就任時から、その解決に向けての人的・環境的・事務機構的、およびそれらを統合したシステムの再構築を健康科学センターが主導するものであるという強い意識・意欲があった。就任直後の概算要求のヒアリングでは健康科学センターとしてのプライオリテイの一番高いミッションは、メンタルヘルス対策であるとも宣誓しておいた。その改革のためには、かなりの大手術が必要であると危惧すると同時に、何らかの突破口があれば改革は可能であるとも予測していた。今回の件を回顧すれば、やはり何といっても、大きな原動力は大学改革活性化制度への申請であったと感じている。大学関係者からは、学生・教職員の健康支援に関わる教員の補充は、この活性化制度に馴染まないとの意見もだされた。我々も、そのように考えを理解し、期待もし、かつ要求もしてきたのであるが、何も実現しないままに時間だけが経過していったのである。しかし視点を変えれば、今回の申請は結果として九州大学の学生・教員全体のアカデミックパフォーマンスの向上・強化に多大な恩恵をもたらすことが期待されることから、今回の申請は十分に大学改革活性化制度に馴染むものであると確信している。

そうはいうものの、健康科学センター内部の構成員においては課題の共有化が必ずしも一枚岩ではなかった。改革は内部をうまくまとめきれなければ進まないものである。それ故に、今回の組織改革は極めてバランス感覚のいる仕事であった。しかし、健セ内での教員の皆様からの真摯なご意見やご忠告、および事務部や執行部の皆様の示唆に富んだご助言などもあり、この大手術を無事に終えることが出来たことに関しましては、皆様のご支援・ご協力の賜物であり、心底から感謝申しあげる次第でございます。

健康科学センターの本来のミッションは心身の総合的な健康支援の構築とその実践にあります。そのためには、学内の様々な専門職の皆様が共通の目的のために知恵を出し合い、学生や教職員にとって意義のある大学という社会環境の仕組みや基盤を作ることが必要です。キャンパスに生活し、世界への知や技術の情報発信を任務・目的とする九州大学の健康環境の構築は我々の切なる願いでもあります。新センターはそれを支える組織へと転換していきます。

最後に、健康科学センターの現構成員および、過去 34 年間を支えていただきました歴代のセンター長および教職員の皆様のご理解への感謝と益々のご支援を期待しつつ、年報の巻頭言とさせていただきます。

2013 年 1 月 25 日

橋本公雄先生退職を記念して

人を育て、自らを育てる …… 3
チャレンジ …… 4
名誉教授推薦文（功績調書） …… 6
履歴書 …… 7
業績表 …… 8

人を育て、自らを育てる

斉藤 篤司

昭和 62 年は先生が福岡工業大学から健康科学センターにこられた時であり、私もはるか九州まで来てしまった年でもありました。当時は助教授 1 名と助手 2 名が一度に採用という、なんともバブリーな時でした。2 人とも運動好きでテニスやゴルフに、いそしんでいたのですが、運動ってこんなに楽しいのに何で運動不足なんてことが問題になるんかいね？という話から、心理学、生理学双方でバラバラに行っていた、運動継続という課題をテーマに一緒に取り組んで来ました。橋本先生は心理で、生理学のことはまったく分からず、私は生理で、心理学はまったく記憶にないという 2 人でした。ただ、教育学部出身の先生にしてみると、学生がいない健康科学センターでの仕事は何となく不完全燃焼という感が否めなかったような…。

橋本先生にはアイディアを出して、ちょっとやると、その途中で、他のことに興味が向いていき、後には一緒に始めた人間が 1 人残されるという非常に迷惑な習性があります。私も研究以外で、テニス教室、学会関連、各種委員等々4 つ 5 つ橋本先生が放り出したものを世話する羽目になっています。たぶん、こういう目に遭っているのはたくさんいるのではないかと思います。ただ、アイディアを出す、という点ではすばらしく、授業の中でも、様々なアイディアで授業をいかに楽しくするか、ということを常にこころがけている、というより、それしか考えてないのでは、というところがありました。授業中、学生はいつも楽しまされており、いつの間にか一所懸命動かされているという、『いつの間にかマジック』にごまかされています。

このアイディア出しっぱなしが加速したのは、大学院ができて、初めて学生を持ってからではないかと思います。当時、周辺には運動心理学の大学院が少なく、結構いい学生が集まって来ました。彼らが様々な興味を持って集まって来るものですから、それに対応している内に、さすがのアイディアマンも収拾がつかなくなるかな〜、と思っていたら、学生が優秀でした。そして、学生からの様々な要求（刺激）が先生を良い意味で変え、完全燃焼へと導いたように思えました。

江戸時代、50 歳を過ぎて隠居しない者は強欲と言われたそうです。年長者の一番の仕事は人を育てること、伸びようとする若者の障害を取り除き、道を示すこと、とされていました。大学院ができて 10 年間、たくさんの学生が学び、巣立っていきました。そして、先生の育てた学生が先生の後任として採用されたわけですから、学部を持たない我々にとって、教員冥利に尽きるというところでしょうか。

25 年間、公私ともにお世話になりました。言っても無理でしょうけれど、新天地をあまりかき回さないよう、そして、学生が楽しんで運動する『いつの間にかマジック』を存分に生かしていただければと思います。

チャレンジ

橋本　公雄

健康科学センターに在職した 25 年の四半世紀という歳月。今振り返ってみると、あっという間の一瞬のことであったように思われる。生命は躍動し喜びに満ち溢れているときは時間の流れは速く感じ、苦悩しているときは遅く感じるもの。このことを考えると、健セで過ごした時間は快適でポジティブであったことになる。これもすべては健セの教職員の皆さんのお陰であり、多々ご迷惑をおかけしたこともあるが、深く感謝申し上げたい。

健セには昭和 62 年（1987 年）39 歳のときに赴任したが、私より若い菊幸一先生（現筑波大学）や齋藤篤司先生も同期であり、その後高柳茂美先生も赴任して来られたので、体育系の先生方の平均年齢は 30 代と、若々しい研究者集団であった。このような環境に身を置けたのは幸運であった。

大学卒業後 22 歳で福岡工業大学の教員になったときから、九大には共同研究や非常勤でお世話になっていた。よって、先生方はよく存じ上げ、それほど緊張感はなかった。しかし、着任した日の 4 月 1 日、応接室で徳永幹雄先生（現福岡医療福祉大学）から「もっと研究を頑張りなさい」と叱咤激励の温かいお言葉をいただいた。「そうか、研究していなかったんだ」と猛反省し、採用してくださった先生方の顔を潰してしてはならないと、真剣に研究に励むことを決意した。それまでは、「体育授業に対する態度と行動」「スポーツ行動の予測と診断」「競技不安とそのマネジメント」等々の研究を、徳永先生を中心としたスポーツ社会学の先生たち（金崎良三先生：現福岡女子大学、多々納秀雄先生:故人）と行なっていた。しかし、いずれも自分自身のオリジナリティのある研究テーマではなかった。小宮秀一先生（名誉教授）からも「徳永先生と同じことをやっていてもオリジナリティのある研究はできないぞ」と夕方事務室で酒を飲みながら言われた。そこで、これまでやってきた競技スポーツの心理から少し距離をおき、健セに来たので「健康にかかわるスポーツ心理」をやろうと研究の方向性を変えた。しかし、このことは後に大いに役立った。実はその後、健康心理学や運動心理学という学問・研究領域の台頭があり、体育系の先生方が大学院人間環境学研究科（現在は学府）に参画したときは、「運動心理学」を担当することになったからである。退職後も現在の熊本学園大学でのライフ・ウェルネス教育にも繋がっている。このように良い人的環境に恵まれ、私の健セでの生活が始まった。人は環境によって変わるし、環境は人によって変わる。まさに主体（正報・人間）と客体（依報・環境）は依正不二で渾然一体の関係なのである。

オリジナリティのある研究、これが私の命題であった。そこで、すべての事象を研究者の視点ではなく運動者の視点から捉え、現場主義に徹することにした。知恵は現場にあるからである。坂道は上から見るか下から見るかで全く異なって見えるもので、物事は視点を変えれば違って見えてくる。研究も同じであろう。お陰で、つぎつぎと面白いアイディアが浮かび、それらを研究に結び付けた。運動の継続化を意図した主観的運動強度の「快適自己ペース」、eustress 状態を診断する「精神的健康パターン」、自己成長を育む「スポーツドラマチック体験」、運動継続のメカニズムと介入法としての「運動継続化の螺旋モデル」等々であり、これらの研究はまだ進行中である。

座右の銘は「チャレンジ」。大学 1 年生のとき、アーノルド・トインビーの文明史観を 1 年間学んだ。氏のキーワードは Challenge & Development。文明は人間のあくなき挑戦によって進歩・発展するというもの。人間もしかりと、そう思った。そこで、「チャレンジ」を座右の銘とした。よって、内面的には常に保守的ではなく革新的であった。学生時代は大学紛争が起こり、機動隊から催涙弾を撃ち込まれたり、デモにも参加した。福岡工業大学に赴任したときは安月給で、卒業生の初任給の方が高かった。教職員組合と理事側とのベースアップ交渉の春闘は恒例の行事であった。九大に来てからさほど外圧もなく健セの将来構想に関して議論していたことが懐かしい。特に藤野武彦先生（名誉教授）や峰松修先生（名誉教授）たちの発想は実現性に乏しかったが、夢を語り、ユニークで面白かった。ただ 1 つ、大学院生たちが研究室の改善要求をして一時騒然としたことがあった。このときは学生時代の紛争の体験が彷彿として湧きあがり、血沸き肉踊るという心境であった。学生を動かす陰の力を暴きだそうと楽しんだものだ。

副センター長をさせて頂いたときは、健セが如何に弱小で微力であるかを色々な話し合いの場に参加する中で垣

間見た。この辺りから、また「戦う心」が少し見え隠れし始めた。どうしても権威や権力には抗したい気持ちが強い。如何にして健セの存在価値を高め、市民権を得るか。そのためにはどうしたらいいのか。研究面ではプロジェクトしかなかったが、すでに健セでは個人研究を重視していく方向にシフトしていたのでプロジェクト研究の再構築は難しかった。健セ存続の危機感を抱いていたが、この危機感を共有できなかった。「人が良い」といことは大事なことだが、それだけでは事は進まない。「異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事実叶うこと難し」のごとく、成就しなかった。「獅子身中の虫、城者として城を破るがごとし」を肌で感じた。「時代を創るのは青年の熱と力である」と言われる。若い人たちが活躍できる場の設定を考えなければ組織は沈滞し、やがては衰退していく。この信念だけは今も変わらない。「蒼蠅驥尾に附して万里を渡り、碧羅松頭に懸かりて千尋を延ぶ」。人は依処となる法や哲学に基づく信念体系を持たなければ主張に一貫性がなくなる。また、成長もない。

筑紫野市の健康づくり推進協議会委員として、15 年以上にわたってウォーキング推進をボランティアの方々と一緒に進めてきた。人口 10 万人の市民のアクティビティを高めるのはなかなか難しい。しかし、挑戦してみたかった。市長や市職員を動かし新しい健康づくりの筑紫野版モデルの構築を試みた。多くの市民ボランティアを育成し、協働で取り組んだ。しかし、問題が 1 つあった。市行政の人事の回転が早く、人が変わればまた振り出しに戻るのである。行きつ戻りつの連続であった。また、市行政は保守的であり、改革をあまり好しとしないところもある。ただ、構想の一部は実現し、現在ボランティアの方々を中心としたウォーキング事業が推進されている。この健康づくり事業には相当の時間と研究費を投入したが、やりがいがあった。市民の皆さんと触れ合う楽しみがあった。協力してくれた学生たちにも大いに感謝している。

九大には学生の諸活動を支援する学生後援会がある。この支援組織の設立当初から退職するまで理事と運営委員会の長を仰せつかり、長年にわたって学生の諸活動（課外・学業・研究など）や生活を支援してきた。よって、学生たちがどのような活動をし、活躍しているのか、また困窮な生活状況に追い込まれている学生がいるのかがよくわかった。九大の学生の全体像を把握するには非常に役立った。この支援活動を通じて多くの学務部の事務の方々とは長いお付き合いをさせていただいた。また、筑紫テニスクラブにも所属し、夕方はテニスを楽しむとともに総長杯や学生後援会主催のテニス大会に参加した。決してテニスが上手いわけではない。多くの教職員の方々と親睦が目的で部局を超えての人間関係は私の人的財産ともなっている。

一方、教育のほうでは、六本松で一般教育としての健康・スポーツ科学を担当した。平成 14 年度には人間環境学研究科が新設され、健セの第一部門（体育系）だけが参画することになり、大学院生の教育・研究にも携わるようになった。これは非常に大きな変化をもたらした。教養教育とは異なり専門教育に携わり直接の教え子を持つことができたからである。全国から多くの修士課程や博士課程の学生を受け入れ、教育と研究ができたこと、また彼らが社会の第一線で九大の看板を背負って活躍していることを考えると、望外の喜びである。

現在は熊本の地に 42 年ぶりに戻り、熊本学園大学で教鞭をとっている。体育教員、健康運動指導士、社会福祉士を目指す学生たちである。学部教育は初めての経験で、しかも九大生とは異なり戸惑いもあるが、学生たちが人懐っこく人間味あふれている。「石も磨けば玉となる」ので、わずかの期間ではあるが夢を抱いている。同時にスローライフをエンジョイすることも忘れず、ゴルフの教材研究に余念がない昨今である。

長年お付き合いいただいた健セの教職員の皆さん方に再度感謝申し上げ、ご挨拶に代えさせていただきたい。

名誉教授推薦文（功績調書）

元九州大学教授　　橋本 公雄

教授橋本公雄は、昭和 45 年 3 月熊本大学教育学部保健体育科を卒業し、昭和 45 年 4 月に福岡工業大学助手として採用された後、昭和 49 年 10 月福岡工業大学･同短期大学講師、昭和 56 年 4 月福岡工業短期大学助教授を経て、昭和 62 年 4 月九州大学健康科学センター助教授として着任した。平成 8 年 2 月に教授に昇任し、平成 10 年 4 月九州大学大学院人間環境学研究科の発足に伴い、同研究科の兼担教授となった。平成 24 年 3 月定年によって退職するまで、25 年間の永きにわたり九州大学において、鋭意、教育と研究に従事した。この間、宮崎大学、熊本大学、佐賀大学、大分大学、九州芸術工科大学、九州工業大学、福岡女子大学、熊本学園大学などの非常勤講師として、スポーツ心理学、運動心理学、健康・スポーツ科学、ウエルネスプロモーションの教育に携わった。

橋本教授は、研究面では 141 編の原著論文、3 編の総説論文を発表し、また 26 編の専門書や一般書を著し、国内外の学術研究の発展に貢献してきた。研究面では、3 つの特筆すべき業績があげられる。一つは、九州大学着任後に開始した運動に伴うポジティブ感情の最大化と運動の継続化を意図した主観的運動強度としての「快適自己ペース」に関する研究である。これら一連の研究では、「快適自己ペース」という運動強度は運動後のポジティブ感情を最大化する至適運動強度であることを立証するとともに、研究の視点をネガティブ感情からポジティブ感情へと導くなど成果を挙げ、平成 7 年 3 月に奈良女子大学から博士（学術）の学位を取得している。第二の特筆すべき業績は、身体活動や運動の増強に向けた研究であり、人の運動・スポーツ行動の規定要因を明らかにするとともに、理論ベースの介入研究を行っている。特に子どもの身体活動や運動の増強に関する研究においては、平成 19 年 6 月に（財）日本体育協会　秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞を受賞している。また第三の特筆すべき業績は、大学体育授業の改善に関する研究である。九州の多領域にまたがる研究者を糾合し、2 度にわたる科研費（B）の採択を受け、大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラムの開発を精力的に行っている。これらの研究成果は平成 24 年 3 月に書籍として発刊されることになっているが、この種の学術書としてはわが国では初めて刊行されるものである。また、大学体育授業に関する研究論文に対し、平成 17 年 3 月に（社）全国大学体育連合から大学体育教育賞を受賞している。

学内においては、キャンパス移転検討委員会、学生委員会、教務委員会、全学教育企画委員会、留学生センター委員会等々、多岐にわたる全学的な委員会の委員として職務を担ってきた。また平成 16 年度から平成 19 年度までは、健康科学センターの副センター長として、同センターの運営に尽力した。さらに大学院人間環境学研究科（人間環境学府）の教育･研究においては、博士号学位取得者 7 名、修士学位取得者 27 名、学術振興会特別研究員 3 名、国公私立の大学･短大の教員として 6 名など、多数の人材を輩出している。

学外においては、日本体育学会、日本スポーツ心理学会、九州体育・スポーツ学会、九州スポーツ心理学会、九州地区大学体育連合の学術機関において
、理事、理事長、副会長、会長などを歴任し、学界の発展に貢献してきた。また日本学術振興会から特別研究員等審査会専門委員を委嘱され、若手研究者の育成にも尽力してきた。さらに（財）健康づくり財団などが主催する資格認定講習会を始め多くの講師なども委嘱され、専門家の育成にも努めてきた。このような研究者や専門家の育成のみならず、長年筑紫野市の健康づくり事業に積極的に携わり、多大な社会的貢献を行い、平成 18 年 11 月には筑紫野市から功労表彰を授与されている。

以上のように、同人は終始一貫、学術研究、学生の教育および大学の運営に尽力し、本学の発展に寄与するとともに、学外においても学界の発展や学問の振興に多大な貢献をした。その功績はまことに顕著なものがあり、ここに本学の名誉教授に推薦するものである。

履歴書

氏名　橋本　公雄　　本籍地　福岡県

生年月日　昭和 22 年 7 月 19 日

学　歴

昭和 41 年　3 月　宮崎県立延岡高等学校卒業
昭和 45 年　3 月　熊本大学教育学部保健体育科卒業
平成　7 年　3 月　博士（学術）

職　歴

昭和 45 年　4 月　福岡工業大学一般教養助手
昭和 49 年 10 月　福岡工業短期大学・同大学講師
昭和 56 年　4 月　福岡工業短期大学助教授
昭和 60 年　3 月　福岡工業大学講師（兼任）解任
昭和 62 年　3 月　福岡工業短期大学退職
昭和 62 年　4 月　九州大学健康科学センター助教授
平成　8 年　2 月　九州大学健康科学センター教授に昇任
平成 10 年　4 月　九州大学大学院人間環境学研究科の担当
平成 12 年　4 月　九州大学大学院人間環境学府の担当
平成 16 年　4 月　健康科学センター副センター長（～平成 21 年 3 月）
平成 20 年　4 月　兼ねて高等教育開発推進センター共通教育推進部勤務
平成 24 年　3 月　定年退職

研 究 業 績

橋本 公雄

【著 書】

1) 金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄ほか：スポーツ行動の予測と診断. 不昧堂出版, 分担執筆, 1985.
2) 多々納秀雄, 徳永幹雄ほか：現代スポーツの社会心理. 遊戯社, 1985.
3) 健康の科学（分担執筆）. 学術図書出版社, pp. 224-296, 1986.11
4) 橋本公雄：14 章, スポーツ集団と伝統. 末利博, 鷹野健次, 柏原建三編, 応用心理学講座 8, スポーツ心理学, 福村出版, 1988.
5) 橋本公雄：「高血圧とストレス・マネージメント」. 徳永幹雄, 川﨑晃一編, 高血圧の健康処方, 九州大学出版会, pp. 145-160, 1990.
6) 橋本公雄：「第 3 章, 1.はじめに, 2.イメージトレーニングの理論」. 箱田裕司編, イメージング, サイエンス社, 東京都, pp. 40-54, 1991.
7) ヘルス＆フィットネス（分担執筆）, ナカニシヤ出版, pp. 7-195, 1991.3
8) 橋本公雄: 気力, 生活意欲. 小宮秀一執筆代表, あなたの健康シグナル, 法研, pp.16-19,1994.
9) 橋本公雄: 第 3 章 快感情を求める身体運動. 竹中晃二著, 健康スポーツの心理学, 大修館書店, pp.32-39, 1998.
10)橋本公雄（担当執筆）第 3 章 3(2) エクササイズの継続化, 現代人のエクササイズとからだ. 健康科学木曜研究会編 ナカニシヤ出版, pp.75-79,1998.
11)橋本公雄（担当執筆）第 3 章 運動と心の健康, 第 4 章生活習慣と運動, 健康と運動の科学. 九州大学健康科学センター(編), 新版, 健康と運動の科学, 大修館書店, pp. 96-97, p.101, pp.104-106, pp.108-111, pp.114-115, pp.126-127, 1998.
12)橋本公雄: 「リラクゼーションとサイキングアップをコントロールしたいのですが, 具体的にはどうしたらよいでしょうか」「試合中の心理はどのような方法でとらえられるのですか」. 日本スポーツ心理学会編, コーチングの心理Q＆A, 不昧堂出版, pp.178-179, pp. 204-205, 1998.
13)橋本公雄: 第 1 章運動心理学研究の台頭とその成果, 第 2 章メンタルヘルスを改善, 向上するための運動処方の視点, 徳永幹雄(編), 健康と競技のスポーツ心理, 大修館書店, pp. 10-22, pp. 23-36, 2002.
14)竹中晃二, 橋本公雄（翻訳): 身体活動の健康心理学－決定因, 安寧, 介入－, 橋本公雄, 村上雅彦（分訳）: 第 2 部 第 5 章 身体活動と態度との関連, 大修館書店, 2005.
15)橋本公雄: 12 章健康スポーツの心理学とは, 14 章-1 健康スポーツの指導上の注意, 15 章運動, スポーツ心理学研究における研究デザイン, 附章-15 運動, スポーツに関係する行動変容理論, 附章-17 運動, スポーツに伴う感情変化のメカニズム. 徳永幹雄（編）「教養としてのスポーツ心理学」, 大修館書店, pp. 108-114, pp. 125-126, pp. 146-147, pp. 194-196, pp. 199-200, 2005.
16)橋本公雄: 「身体活動, 運動と健康」研究の課題と展望. スポーツ心理学－その軌跡と展望－. 日本スポーツ心理学会, 大修館書店, pp.129-134, 2004.
17)竹中晃二, 橋本公雄 （監訳）: 身体活動の健康心理学－決定因, 安寧, 介入－, 橋本公雄, 村上雅彦（分訳）: 第 2 部第 5 章身体活動と態度との関連, pp.98-116, 大修館書店, 2005.
18)橋本公雄: 12 章健康スポーツの心理学とは, 14 章-1 健康スポーツの指導上の注意, 15 章運動, スポーツ心理学研究における研究デザイン, 附章-15 運動, スポーツに関係する行動変容理論, 附章-17 運動, スポーツに伴う感情変化のメカニズム. 徳永幹雄（編）「教養としてのスポーツ心理学」, 大修館書店, pp. 108-114, pp. 125-126, pp. 146-147, pp. 194-196, pp. 199-200, 2005.
19)橋本公雄: 状態－特性不安尺度, スポーツ競技不安尺度, ソシオメトリック, テスト, 体育における学習

意欲検査, 投映法（投影法）, 東大式エゴグラム, バウムテスト（社）日本体育学会監修, スポーツ科学事典, 平凡社, pp. 432-434, 2006.9.

20)橋本公雄: 実習で学ぶ健康, 運動･スポーツの科学. 九州大学健康科学センター（編）, 大修館書店, pp.18-21, 92-95, 2008.

21)橋本公雄: 3-3: わが国における身体活動量増強および体力向上対策, 4-2: 合理的行為理論と計画的行動理論, トピック 18: 高齢者のテニスクラブ, 竹中晃二（編）身体活動増強および運動の継続のための行動変容マニュアル, ブックハウス HD, pp.24-26, pp.41-42, pp.111-112, 2005.

22)橋本公雄: 態度、合理的行為理論・計画行動理論、運動処方. 日本スポーツ心理学会編,スポーツ心理学事典, 大修館書店, pp.432-434, 2008.

23)橋本公雄: ワークブック. 九州大学健康科学センター（編）, 大修館書店, pp.432-434, 2008.

24)体を動かすってカッコイイっ!! 楽しい!!､アクティブ･チャイルド 60min., 2 節心理社会的見地. pp.84-87, pp.92-95, pp.110-113, 財団法人日本体育協会, 2010.3.

25)橋本公雄: 第 3 章 2 節 心理社会的見地. 財団法人日本体育協会（監修）竹中晃二（編）, アクティブ, チャイルド 60min.－子どもの身体活動外ドライラインー, pp.84-112, 2010.4.

26)橋本公雄: 生涯スポーツの心理学. 杉原　隆（編）, 第 13 章 スポーツが感情に与える影響, 福村出版, pp.141-157, 2011.4.

【論 文】

1) 徳永幹雄, 松本寿吉, 橋本公雄 ： 学生の体型・体力・性格と体育・スポーツに対する態度および活動の関係. 九州大学体育学研究, 4(4): 15-21, 1971.

2) 徳永幹雄, 橋本公雄, 千綿俊機: 学生の体格・体力・性格の相互関係. 体育学研究, 16(2):109-114, 1971.

3) 許斐貞美, 橋本公雄 ： 本学学生の体力と体力低位学生の特性. 福岡工業大学研究論集, 4: 102-106, 1972.

4) 橋本公雄, 大坂哲郎, 許斐貞美 ： 体育の授業形態が態度変容に及ぼす影響（第 1 報）. 福岡工業大学研究論集, 5: 1-8, 1973.

5) 橋本公雄, 大坂哲郎, 安永　誠, 千綿俊機 ： 体育の授業形態が態度変容に及ぼす影響（第 2 報）－ボウリングコースについて－. 福岡工業大学研究論集, 6: 41-50, 1974.

6) 徳永 幹雄, 橋本公雄: 高校運動選手にみられる形態,機能および性格特性の差異. 九州大学体育学研究, 5(2): 1-8, 1974.

7) 徳永幹雄, 橋本公雄: 学生の体育実技に対する態度変容とその要因（第 3 報）－履習開始から終了までの変化について－. 九州大学体育学研究, 5(3): 34-40, 1975.

8) 徳永幹雄, 橋本公雄: 運動経験と発育・発達に関する研究 ： 高校運動選手について. 体育学研究, 20(2): 109-116, 1975.

9) 徳永幹雄, 橋本公雄 ： 体育の授業形態が態度変容に及ぼす影響（第 3 報）－一般実技コースの履習期間の変化について－. 福岡工業大学研究論集, 8: 104-115, 1976.

10)橋本公雄, 徳永幹雄 ： 体育の授業形態が態度変容に及ぼす影響（第 3 報）－一般実技コースの履習期間の変化について－. 九州大学体育学研究, 5(4):　　, 1976.

11)徳永幹雄, 橋本公雄, 坂井純子: 身体運動に対する態度の構造と運動の関係についての研究. 九州大学体育学研究, 5(4): 9-20, 1976.

12)金崎良三, 橋本公雄: 学生の課外体育活動に関する研究(1)－その規定要因について－. 九州大学体育学研究, 5(4): 27-35, 1976.

13)徳永幹雄, 橋本公雄 ： 身体活動に対する態度と行動に関する研究. 健康科学, 1: 53-62, 1979.

14)山本勝昭, 大浦隆陽, 橋本公雄 ： 知覚運動学習の転移に関する研究－練習課題の難易及びペースの遅速からの分析－. 福岡大学体育学研究, 10(1): 49-56, 1979.

15)徳永幹雄, 橋本公雄 ： 体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究. 健康科学, 2: 75-90, 1980.

16)徳永幹雄, 多々納秀雄, 橋本公雄, 金崎良三: スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究 (1)－ランニング実施に対する Fishbein の行動予測式の適用－. 体育学研究, 25(3): 179-190, 1980.

17)徳永幹雄, 橋本公雄, 多々納秀雄, 金崎良三: スポーツ行動の予測因子として行動意図・態度・信念に関する研究(2)－ランニング実施者と非実施者の諸属性の比較－. 健康科学, 2: 91-101, 1980.

18)金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄 ：スポーツ行動の予測因に関する研究(1)－社会学的要因について－. 健康科学, 3: 55-69, 1981.

19)徳永幹雄, 多々納秀雄, 金崎良三, 橋本公雄: スポーツ行動の予測因に関する研究(2)－身体的・心理的要因について－. 健康科学, 3: 71-85, 1981.

20)徳永幹雄, 橋本公雄, 金崎良三, 多々納秀雄: 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(1)－心理的・身体的要因について－. 健康科学, 4: 35-49, 1982.

21)多々納秀雄, 金崎良三, 徳永幹雄, 橋本公雄: 学生のスポーツ行動の予測因に関する研究(2)－社会的要因について－. 健康科学, 4: 51-76, 1982.

22) 金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄: 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(3)－スポーツ関連要因について－. 健康科学, 4: 77-89, 1982.

23)徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: スポーツ行動診断検査の試案. 健康科学, 4: 105-118, 1982.

24)多々納秀雄, 徳永幹雄, 金崎良三, 橋本公雄: スポーツ種目のパターン分析と関連要因の分析－大学生の事例から－. 体育学研究, 26(4): 269-290, 1982.

25)徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: スポーツ行動診断検査(DISC.1)の作成. 健康科学, 6: 113-127, 1984.

26)徳永幹雄, 橋本公雄, 金崎良三, 多々納秀雄: スポーツ行動の予測因に関する研究(3)－男女別・年代別の比較－. 健康科学, 6: 129-139, 1984.

27)安永　誠, 千綿俊機, 大坂哲郎, 橋本公雄, 許斐貞美: 本学学生の体力と肥満度. 福岡工業大学研究論集, 16: 1-5, 1984.

28)多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄: 喫煙行動の形成・変容過程に関する考察. 健康科学, 7: 11-28, 1985.

29)橋本公雄, 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄: スポーツ選手の競技不安の解消に関する研究(1)－競技前の状態不安の変化およびバイオフィードバック・トレーニングの効果－. 福岡工業大学エレクトロニクス研究所所報, 1: 77-86, 1985.

30)徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツ選手に対する心理的競技能力のトレーニングに関する研究(2)－皮膚温バイオフィードバックを利用したリラクセーション・トレーニングについて. 健康科学, 8: 65-77,1985.

31)徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニングに関する研究(3)－テニス選手のメンタルヘルス・トレーニングについて－. 健康科学, 9: 79-88, 1987.

32)橋本公雄, 徳永幹雄, 多々納秀雄, 金崎良三: スポーツ選手の競技不安の解消に関する研究(2)－バイオフィードバック・トレーニングによる特性不安への影響について－. 健康科学, 9: 89-96, 1987.

33)橋本公雄, 徳永幹雄, 多々納秀雄, 金崎良三, 山本勝昭: スポーツ選手の競技不安の解消に関する研究(3)－ストレス・マネージメント・プログラムの開発－. 福岡工業大学エレクトロニクス研究所所報, 4: 169-175, 1987.

34)梅田靖次郎, 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 菊　幸一: スポーツと恥意識に関する研究(1)－恥意識の関連要因について－. 西日本工業大学紀要, 3: 55-64, 1987.

35)岩崎健一, 徳永幹雄, 庭木守彦, 橋本公雄: スポーツ選手に対するメンタル・トレーニングの実施と効用性. 九州体育学研究, 1(1): 23-35, 1987.

36)徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツ選手の心理的競技能力の診断とトレーニングに関する研究. デサントスポーツ科学報告書, 8: 43-54, 1987.

37)徳永幹雄, 橋本公雄, 有川秀之: 陸上短距離選手のメンタルヘルス・トレーニングに関する事例研究. 陸上競技紀要, 1: 48-56, 1988.

38)徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニングに関する研究(4)－診断テストの作成－. 健康科学, 10: 73-84, 1988.

39)金崎良三, 徳永幹雄, 藤島和孝, 岡部弘道, 橋本公雄: スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究(1)－婦人テニス教室参加者の場合－, 健康科学, 11: 71-85, 1989.

40)徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 菊　幸一: スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究(2)－大学生の場合－, 健康科学, 11: 87-98, 1989.

41)徳永幹雄, 川﨑晃一, 上園慶子, 橋本公雄 ： 軽症高血圧者に対する健康処方の適用と効果に関する研究(第 3 報). 健康科学, 11: 107-120, 1989.

42)松田民子, 橋本公雄 ： 女子学生の食行動に関する研究（第 2 報）－男子学生との比較について－. 精華女子短期大学紀要, 16: 83-92, 1989.

43)橋本公雄, 徳永幹雄, 多々納秀雄, 金崎良三, 菊　幸一, 高柳茂美 ： 運動によるストレス低減効果に関する研究(1)－SCL 尺度作成の試みと運動実施者のストレス度の変化－. 健康科学,　12: 47-61, 1990.

44)金崎良三, 徳永幹雄, 藤島和孝, 冷川昭子, 岡部弘道, 橋本公雄 ： 中年婦人の健康処方の適用と効果に関する研究(2)－健康テニス教室終了後 2 年間の追跡調査－. 健康科学,　12: 107-113, 1990.

45)橋本公雄, 斉藤篤司, 徳永幹雄, 磯貝浩久, 高柳茂美 ： 運動によるストレス低減効果に関する研究(2)－一過性の快適自己ペース走と感情の変化－. 健康科学,　13: 1-7, 1991.

46)磯貝浩久, 徳永幹雄, 橋本公雄, 高柳茂美, 渡植理保 ： 運動パフォーマンスに及ぼす自己評価と自己効力感の影響. 健康科学, 13: 9-13, 1991.

47)Ryozo Kanezaki, Tokunaga Mikio, Tatano Hideo and Hashimoto Kimio：A study on the factors determining sport behavior：Some methodological problems. 健康科学,　13: 15-22, 1991.

48)徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 梅田靖次郎: 試合前の状態不安と実力発揮度の関係. 健康科学,　13: 105-114, 1992.

49)徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 高柳茂美: スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発. デサントスポーツ科学,　12: 178-190, 1991.

50)鈴木正敏, 佐久本壽代, 島井正史, 橋本公雄, 徳永政夫: 学生の体格と体力および健康について. 九州工業大学情報工学部紀要,　4: 71-87, 1991.

51)橋本公雄, 高柳茂美, 徳永幹雄, 斉藤篤司, 磯貝浩久: 一過性の運動による感情の変化と体力との関係. 健康科学, 14: 1-7, 1992.

52)徳永幹雄, 橋本公雄, 磯貝浩久, 高柳茂美: 運動の爽快感とその規定要因(1). 健康科学,　14: 9-17, 1992.

53)Isogai H., Tokunaga M., Hasimoto K., Takayanagi S: Relationship between psychological competitive ability and completive performance in high school baseball players. 九州工業大学情報工学部紀要（人文・社会科学）, 5: 101-110, 1992.

54)徳永幹雄, 橋本公雄, 高柳茂美: 健康度と生活習慣からみた健康生活パターン化の試み. 健康科学,　15: 29-38, 1993.

55)橋本公雄, 徳永幹雄, 多々納秀雄, 金崎良三: スポーツにおける競技特性安尺度(TAIS)の信頼性と妥当性. 健康科学, 15: 39-49, 1993.

56)橋本公雄, 徳永幹雄, 高柳茂美, 斉藤篤司, 磯貝浩久: 快適自己ペース走による感情の変化に影響する要因－ジョギングの好き嫌いについて－. スポーツ心理学研究. 20(1): 5-12, 1993.

57)徳永幹雄, 橋本公雄ほか 5 名（2 番目）： 大学生の最高血圧およびその変動性に関係する要因. 健康科学, 15: 129-136, 1993.

58)上園慶子ほか 8 名（5 番目）: 血圧・脈拍の変動性および立位負荷に対する反応性. 健康科学, 15: 155-159, 1993.

59)橋本公雄, 徳永幹雄, 高柳茂美: 精神的健康パターンの分類の試みとその特性. 健康科学, 16: 49-56, 1994.

60)橋本公雄, 斉藤篤司, 徳永幹雄, 高柳茂美, 瀧　豊樹 ：快適自己ペース走の再現性の検討. 健康科学, 16: 57-63, 1994.

61)徳永幹雄, 橋本公雄, 高柳茂美, 許斐　健: スポーツ選手の心理的競技能力の「特性」および「状態」に関する研究－準硬式野球大会参加選手について－. 健康科学, 16: 65-73, 1994.

62)徳永幹雄, 橋本公雄, 高柳茂美: 運動の爽快感とその規定要因(2). 健康科学, 16: 75-82, 1994.

63)Tokunaga, M., Hashimoto. K., Takayanagi, S.: Relationship between psychological- competitive ability and competitive performance in Japanese athletes. Journal of health Science. 16: 83-89,1994.

64)斉藤篤司, 鈴井正敏, 後藤真二, 橋本公雄: 長時間運動における感情の変化に及ぼす運動強度の影響. 健康科学,　16: 109-118, 1994.

65)藤島和孝, 吉川和利, 橋本公雄: 高校生の低体温と血圧,脈拍および健康度との関係. 健康科学, 16: 143-148, 1994.

66)山本教人, 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 高柳茂美: 血圧及び健康度と生活形態に関する調査研究. 健康科学, 16: 155-163, 1994.

67)斉藤篤司, 橋本公雄, 高柳茂美: 運動による心理学的「快」の生理学的裏づけと運動処方への応用の検討. 体力研究,　85: 146-154, 1994.

68)高柳茂美ほか 6 名（6 番目）: 一流競技選手の競技特性不安について－関東リーグ所属の水球選手を対象に－. 久留米大学保健体育センター研究紀要, 2: 37-43, 1994.

69)橋本公雄, 徳永幹雄: 感情の 3 次元構造に基づく身体運動特有の感情尺度の作成－　MCL-3 尺度の信頼性と妥当性－. 健康科学, 17: 43-50, 1995

70)橋本公雄, 斉藤篤司, 徳永幹雄, 高柳茂美, 磯貝浩久: 快適自己ペース走による感情の変化と運動強度. 健康科学, 17: 131-140, 1995.

71)橋本公雄, 斉藤篤司, 徳永幹雄, 高柳茂美, 磯貝浩久: 快適自己ペース走時の運動　　強度を規定する生理心理学的要因. 健康科学, 17: 141-150, 1995.

72)橋本公雄: 快適自己ペース走における心理的ストレス低減効果に関する基礎的研究－特に運動に伴うポジティブな感情の変化について. 奈良女子大学文学部研究科, 学位論文, pp.145, 1995.

73)徳永幹雄, 橋本公雄, 高柳茂美: スポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処能力に及ぼす影響. 健康科学, 17: 59-68, 1995.

74)Ryouzou Kanezaki and Kimio Hashimoto: A study on measurement of sport commitment and sport involvement among the youth. Journal of the Faculty of Education Saga Universuity, 43(1): 57-65, 1995.

75)橋本公雄, 徳永幹雄: 運動中の感情状態を測定する尺度(短縮版)の作成の試み－MCL-S.1 尺度の信頼性と妥当性－. 健康科学, 18: 109-114, 1996.

76)橋本公雄, 斉藤篤司, 徳永幹雄, 花村茂美, 磯貝浩久: 快適自己ペース走に伴う運動中, 回復期の感情の変化過程. 九州体育学研究, 10(1): 31-40, 1996.

77)斉藤篤司, 橋本公雄, 堀田　昇: 歩行による運動直後および回復期の感情の変化. 久留米大学保健体育センター研究紀要, 4: 17-22, 1996.

78)斉藤篤司, 大柿哲朗, 橋本公雄, 金谷庄蔵: スポーツ選手の心理的キャパシティとしての心理的ストレス耐性の検討－血漿抱合型のカテコールアミン値の指標としての有効性の検討－. デサントスポーツ科学, 18: 120-129, 1997.

79)山田裕章, 馬場園明, 橋本公雄: 職場の自覚的ストレスと精神的健康. 九州神経精神医学,　43(2): 79-85, 1997.

80)佐久本稔, 橋本公雄: 大学受験前後のストレス症状とその関連要因. 福岡女子大学人間環境学部紀要,

28: 13-21, 1997.

81)山田裕章, 馬場園明, 橋本公雄, 吉永亮治: GHQ 因子得点を利用した集団のメンタルヘルス. 健康科学, 20: 9-14, 1998.

82)MikioTokunaga, Kimio Hashimoto, Hirohisa Isogai, and Toyoki Taki: Diagnostic Methods for Athletes' Psychological Competitive Abilities and Psychological States before and during Competition. Journal Health of science, 20: 15-20, 1998.

83)橋本公雄, 斉藤篤司, 徳永幹雄, 丹羽劭昭 ：快適自己ペース走によるポジティブな　　感情の変化量を規定する生理心理学的要因. 健康科学, 20: 31-38, 1998.

84)斉藤篤司, 鈴井正敏, 後藤真二, 橋本公雄: 長時間運動時の感情の変化に及ぼす性差の影響. 健康科学 20: 39-43, 1998.

85)徳永幹雄, 橋本公雄, 瀧　豊樹, 磯貝浩久: 試合中の心理状態の診断法とその有効性.　　健康科学, 21: 41-51, 1999.

86)橋本公雄, 徳永幹雄: メンタルヘルスパターン診断検査の作成に関する研究(1)－MHP 尺度の信頼性と妥当性－. 健康科学, 21: 53-62, 1999.

87)橋本公雄, 徳永幹雄: スポーツ競技におけるパフォーマンスを予測するための分析的　枠組みの検討. 健康科学, 22: 121-128, 2000.

88)西田順一, 橋本公雄, 徳永幹雄: 児童の組織キャンプ体験がストレス反応に及ぼす影響－認知的評価との関連から－. 健康科学, 22: 151-157, 2000.

89)渡壁史子, 橋本公雄, 徳永幹雄: メンタルヘルスパターンと健康行動との関係(1)－特に身体活動関連変数を中心として－. 健康科学, 22: 159-166, 2000.

90)橋本公雄, 渡壁史子, 西田順一: 運動に伴う一過性のポジティブな感情の増加とメンタルヘルスの改善, 向上との関係. 体育・スポーツ教育研究, 1(1): 5-12, 2000.

91)橋本公雄: 運動心理学研究の課題－メンタルヘルスの改善のための運動処方の確立を目指して－. スポーツ心理学研究, 27(1): 50-61, 2000.

92)磯貝浩久, 徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツにおける個人, 社会志向性尺度の作成. スポーツ心理学研究, 27(2): 22-31, 2000.

93)橋本公雄: 魅力ある授業づくり－「健康・スポーツ科学講義」におけるディスカッション授業導入の試み－. 体育・スポーツ教育研究, 2(1): 40-42, 2000.

94)徳永幹雄, 橋本公雄: 学生の健康度, 生活習慣に関する診断検査の開発.健康科学, 23: 53-63, 2001.

95)西田　保, 橋本公雄: ゴルフによる気分の変化に影響を及ぼす要因. 名古屋総合保健体育学, 24(1) ：15-23, 2001.

96)村上貴聡, 徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツ選手のメンタルヘルス評価尺度の開発. スポーツ心理学研究, 28(1): 44-56, 2001.

97)橋本 公雄: ディスカッション授業の展開と評価－体育. 体育・スポーツ教育研究, 3(1): 54-58, 2001.

98)内田若希, 橋本公雄, 西田順一: 運動習慣をもつ身体障害者の自尊感情の構造. 日本障害者体育・スポーツ研究会研究紀要, 25, 2002.

99)徳永幹雄. 橋本公雄: 青少年の生活習慣が健康度評価に及ぼす影響. 健康科学, 24:　39-46, 2002.

100) 橋本公雄, 徳永幹雄: 運動参加タイプとその特性－健康関連要因に基づく分析－. 健康科学, 24: 47-55, 2002.

101) 西田順一, 橋本公雄: 組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果. 野外教育研究, 5(2): 45-54, 2002.

102) 西田順一, 橋本公雄, 柳　敏晴: 児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性, 妥当性の検討. 野外教育研究, 6(1): 49-61, 2002.

103) 磯貝浩久, 徳島　了, 徳永幹雄, 橋本公雄: メタ分析を用いた競技動機の性差に関する研究. 九州体

育・スポーツ学研究, 16(1): 13-21, 2002.

104) 西田順一, 橋本公雄, 徳永幹雄: 児童用精神的健康パターン診断検査の作成とその妥当性の検討. 健康科学, 25: 55-65, 2003.

105) 村上貴聡, 橋本公雄, 徳永幹雄: スポーツ選手のメンタルヘルス評価尺度改訂版の作成. 健康科学, 25: 67-77, 2003.

106) 内田若希, 橋本公雄, 藤永　博: 日本語版身体的自己知覚プロフィールー尺度の開発と性および身体活動レベルによる差異の検討ー. スポーツ心理学研究, 30(2): 27-40, 2003.

107) 西田順一, 橋本公雄, 徳永幹雄: 組織キャンプ体験が児童のメンタルヘルスに及ぼす効果ーとくに自己決定感を中心としてー: スポーツ心理学研究, 30(1): 20-32, 2003.

108) 内田若希, 橋本公雄, 竹中晃二, 荒井弘和, 岡浩一朗: 男子車いすスポーツ競技選手の心理的競技能力に関わる要因. 障害者スポーツ科学, 1(1): 49-56, 2003.

109) 村上雅彦, 橋本公雄, 西田順一, 内田若希, 村上貴聡: 通信を用いた介入が非監視下のウォーキング継続へ及ぼす効果ー快適自己ペースおよび運動継続化の螺旋モデルの適用ー. 九州体育・スポーツ学研究, 19(1): 1-7, 2004.

110) 馬場亜紗子, 西田順一, 橋本公雄, 柳　敏晴, 中島俊介: 組織キャンプ体験が母子関係に与える影響ーソーシャルサポート感の変化に着目してー. 野外教育研究, 8(1): 87-95, 2004.

111) 橋本公雄:「健康･スポーツ科学講義」で身体活動量は増強できるかー行動変容技法の指導の効果ー. 体育・スポーツ教育研究, 6(1): 13-22, 2004.

112) 橋本公雄: 「健康・スポーツ科学講義」におけるディスカッション授業導入の試み. 大学体育学, 1(1): 3-12, 2004.

113) 村上貴聡, 徳永幹雄, 橋本公雄: 青少年の健康生活スキルとスポーツ活動経験との関連.体育測定評価学研究, 3: 7-19. 2004.

114) 橋本公雄: 運動と精神的健康との関係　ーライフステージの観点からー. 健康科学, 27: 27-32, 2005.

115) 橋本公雄: 「健康, スポーツ科学講義」で身体活動量は増強できるかー行動変容技法の指導の効果ー. 体育, スポーツ教育研究, 6(1): 13-22, 2005.

116) 西田順一, 橋本公雄, 柳　敏晴, 馬場亜紗子: 組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデルーエンジョイメントを媒介とした検討ー.教育心理学研究, 53(2): 196-208, 2005.

117) 西田順一, 橋本公雄, 柳　敏晴, 村井伸二, 田中一生: 組織キャンプ体験に伴う日常生活における身体活動量および TV 視聴時間への影響. 体育学研究, 50(6): 699-711, 2005.

118) 内田若希, 橋本公雄: 自尊感情および身体的自己知覚とソーシャル, サポートの関連ー多面的階層モデルに準拠してー. スポーツ心理学研究, 32 (1): 29-37, 2005.

119) Uchida, W., Hashimoto, K., & Lutz, R.: Examination of the hierarchical self-esteem model in adults with physical disability. Perceptual and Motor Skills, 100: 1161-1170, 2005.

120) 平木貴子, 橋本公雄, 村上貴聡, 楠本恭久: ゴルフ･パフォーマンスとライフスタイルの関係ー競技用ライフマネジメント尺度の開発ー, および信頼性と妥当性の検討ー. 日本体育大学紀要, 35(1): 21-27, 2005.

121) 清水知恵, 橋本公雄: 舞踊セルフ･エフィカシー尺度(ISED)作成に関する研究ー信頼性及び妥当性の検討ー. 福岡教育大学紀要・第 5 分冊, 芸術・保健体育・家政科編, (54): 53-62, 2005.

122) 内田若希, 橋本公雄: 日本語版身体的自己知覚プロフィールにおける回答形式の改訂ー改訂版の作成と男女差の検討ー. スポーツ心理学研究, 31(2): 19-28, 2005.

123) 内田若希, 橋本公雄: 自尊感情に関する運動心理学研究. 体育学研究, 50(6): 613-628, 2005.

124) 橋本公雄: 運動行動の促進を意図した「健康, スポーツ科学講義」の効果ー行動変容技法指導の導入ー. 大学体育学, 3: 25-35, 2006.

125) 平木貴子, 橋本公雄, 村上貴聡, 藤永　博, 楠本恭久: 日本語版ゴルフ・パフォーマンス尺度ー尺度作

成および信頼性・妥当性の検討ー．スポーツ心理学研究, 33(2): 35-48, 2006.

126) 内田若希, 平木貴子, 橋本公雄, 徳永幹雄, 山崎将幸: 車椅子陸上競技選手の心理的競技能力向上に向けたメンタルトレーニングに関する研究. 障害者スポーツ科学, 5(1): 41-49, 2007.

127) 内田若希, 橋本公雄: 自尊感情の多面的階層モデルと身体活動の関係. 健康心理学, 20(2): 42-51, 2007.

128) 橋本公雄, 胡嘉明: 日中間の学生における精神的健康への計画行動理論の予測力. 健康科学, 30: 27-38, 2007.

129) 村上貴聡, 橋本公雄, 村上雅彦: 非監視型ウォーキング参加に伴うメンタルヘルスおよび生活習慣の改善効果. 東京理科大学紀要・教養篇, (41): 515-527, 2008.

130) 内田若希, 橋本公雄, 山崎将幸, 永尾雄一, 藤原大樹: 自己概念の多面的階層モデルの検討と運動, スポーツによる自己変容ー中途身体障害者を対象としてー. スポーツ心理学研究, 35(1): 1-16, 2008.

131) 橋本公雄, 堀田　亮, 山崎将幸, 甲木秀典, 行實鉄平: 運動・スポーツ活動におけるメンタルヘルス効果の仮説モデルー心理・社会的要因を媒介変数としてー. 健康科学, 31: 69-78, 2009.

132) 濱田綾子, 斉藤篤司, 橋本公雄: 栄養素等摂取状況と自己管理スキルの関連ー自己効力感を媒介変数としてー. 健康科学, 31: 79-85, 2009.

133) 山添健陽, 橋本公雄, 鋤崎澄夫, 山崎将幸, 藤原大樹, 阿南祐也: 子どもの身体活動測定法としての主観的な身体活動時間報告の妥当性の検討. 健康科学, 31: 87-92, 2009.

134) 木内敦詞, 荒井弘和, 中村友浩, 浦井良太郎, 橋本公雄: 体育実技終了時のセルフ, モニタリングが運動の意思決定バランスと身体活動量に及ぼす効果. 大学体育学, 6(1): 3-11, 2009.

135) 橋本公雄: 「健康・スポーツ科学演習」の授業で人間関係は醸成できるのか?. 大学体育学, 6(1): 23-31, 2009.

136) 西田順一, 橋本公雄, 山本勝昭: 「大福帳」を用いて対人コミュニケーションスキル支援を意図した大学体育実技が初年次学生の大学適応感に及ぼす影響. 大学体育学, 6(1): 43-54, 2009.

137) 岩田銀子, 橋本公雄, 平井敏幸, 森谷潔: 初妊婦の不安尺度の作成と不安の構造ー信頼性および妥当性の検証ー. 北海道文教大学研究紀要, (33): 43-50, 2009.

138) 橋本公雄: 運動継続化の螺旋モデル構築の試み. 健康科学, 32: 51-62, 2010.

139) 橋本公雄, 村上雅彦: 運動に伴う改訂版ポジティブ感情尺度（MCL-2.）の信頼性と妥当性. 健康科学, 33: 21-26, 2011.

140) Wang Wei, Gao Jian, Xu Yao, Hashimoto Kimio, Fu Jian Wei: The relationship between work stress and mental health of enterprise management. Chinease Journal of Health Psychology. 19(10): 45-48, 2011.

141) Gao jian, Zhang liping, Sun hongmei, Nishida,Junichi, Hashimoto Kimio, Wen zidong: The influence of life style on older pupils' physically and mentally health. Chinese Journal of School Doctor. 25(8): 60-65, 2011.

【総 説】

1) 橋本公雄: 運動心理学研究の課題ーメンタルヘルスの改善のための運動処方の確立を目指してー. スポーツ心理学研究, 27(1): 50-61, 2000.

2) 村上貴聡, 徳永幹雄, 橋本公雄: 競技パフォーマンスに影響する心理的要因ー心理的スキル及び心理的健康を中心としたー. 健康科学, 24, 76-84, 2002.

3) 内田若希, 橋本公雄:自尊感情に関する運動心理学的研究. 体育学研究, 50(6): 613-628, 2005.

教　育　活　動

概況 …… 17
内容 …… 18

教　育　活　動

概　況

健康科学センターの教育活動としては，全学教育，業務を通した教育，大学院教育，課外活動への支援，研究生指導，FD 活動等がある。

全学教育では，第一部門担当の健康・スポーツ科学関連科目（演習，講義，実習，保健コース），コア科目（共通コア，理系コア）,第二部門担当の周辺教養科目（健康科学）と高年次教養科目（応用心理学，心理健康学）が開講された。

開講科目の受講者数の一覧は次頁のとおりである。健康・スポーツ科学演習は，G30 用のコマを新設した。身体運動科学実習は，曜日・時限によって受講者にバラツキがあったが，全体としては人数を保っている。学生による授業評価は，概ね高い評価であった。

業務を通した教育には，定期健康診断の待ち時間を利用した健康教育，サイコリトリート（箱崎分室）へ来室する学生へのリラクゼーション指導，肥満改善および生活習慣病予防支援を意図したウェルカムホームベース型健康支援プログラムなど多様な健康指導・支援があり，旧第一部門と旧第二部門とで協力しておこなわれている。

大学院教育では，人間環境学府と芸術工学府の教育・指導のほか，大学院共通教育科目があり，第一部門と第二部門の教員が担当している。人間環境学府では，9 名の常勤担当者によって，修士課程科目 10 科目と博士課程の研究指導がおこなわれた。平成 23 年度の入学者数は，修士課程 6 名，博士課程 8 名であった。博士課程では，3 名が学位を取得した。大学院共通教育科目「大学院生に対する人間教育」が，平成 19 年度よりひきつづき筑紫地区でおこなわれた。前期の登録者 5 名，後期の登録者 5 名であり，そのほとんどが筑紫地区以外のキャンパスからの受講生であった。

課外活動の支援では，筋力トレーニングの方法などの問い合わせを受けている。

FD 活動としては，恒例の健康・スポーツ科学科目研修会（学内）のほか，九州地区大学体育連合研修会が鹿児島で開催され，3 名が参加している。

（文責: 西村 秀樹）

全学教育の開講状況

科目区分	科目名	単位	対象学年	開講期	開講数	受講者数	備考
健康・スポーツ科学科目	健康・スポーツ科学講義Ⅰ	2	1年	後期	1	12名	
	健康・スポーツ科学講義Ⅱ	2	2年	前期	1	47名	
	健康・スポーツ科学演習	2	1年	前期	50	2,699名	必修
	健康・スポーツ科学演習（保健コース）	2	1年	前期	1	6名	必修
	身体運動科学実習Ⅰ	1	1年	後期	34	954名	
	身体運動科学実習Ⅱ	1	2年	前期	13	356名	
	身体運動科学実習Ⅲ	1	3・4年	前期	2	41名	
				後期	2	16名	
	身体運動科学実習Ⅳ	1	3・4年	前期	2	5名	
				後期	2	7名	
理系コア科目	健康科学Ⅰ「健康と運動の科学」	2	1年	前期	1	250名	
	健康科学Ⅰ「精神医学入門」	2	1年	前期	1	227名	
	健康科学Ⅱ「運動とスポーツの心理学」	2	2年	後期	1	88名	
	健康科学Ⅱ「健康科学概論」	2	1・2年	後期	1	217名	
	健康科学Ⅲ「アスリートの食事を科学する」	2	2年	前期	1	114名	
高年次教養科目	理系主題科目Ⅷ「体験で学ぶコミュニケーションと心の健康」	2	3・4年	前期	1	53名	
	理系主題科目Ⅷ応用健康学	2	3・4年	後期	1	34名	

1. 全学教育

健康・スポーツ科学科目として開講されたのは，必修科目である「健康・スポーツ科学演習（保健コースを含む)」（2単位）51コマと，選択科目である「健康・スポーツ科学講義Ⅰ」（2単位）1コマ，「健康・スポーツ科学講義Ⅱ」（2単位）1コマ，「身体運動科学実習Ⅰ」（1単位）34コマ，「身体運動科学実習Ⅱ（1単位）13コマであった。また，高年次生対象としては，「身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳ」（各1単位）8コマが開講された。各々の具体的な内容等については下記を参照されたい。総開講科目数は115であり，このうち常勤が70を，非常勤が45を担当した。

（文責: 斉藤 篤司）

（1） 健康･スポーツ科学関連科目

1）健康・スポーツ科学演習

全学生必修科目である「健康・スポーツ科学演習」は，すべて，前期に開講された。具体的な実施内容は，右表に示すとおりである。テキストは，前年度と同様に，2008年3月発刊「実習で学ぶ健康・運動・スポーツの科学」および2011年3月発行「同 別冊 平成23年度版」(いずれも，九州大学健康科学センター編，大修館書店）を用いた。

＜授業内容＞

A: オリエンテーション，健康とは何かについての講義，脈拍測定
B1：健康づくりのための運動に関する講義
B2：最大酸素摂取量の測定
B3：有酸素性運動実習
C1：身体と心身に関する講義
C2：身体・体力測定
C3：栄養評価，ストレッチング実習
D1：動き・運動・スポーツ科学に関する講義
D2：筋力・敏捷性の測定
D3： SAQ・筋持久力トレーニング実習
E1～4： コミュニケーションゲーム
F：総括

また，この年度より，学部国際コースにおいて，健康・スポーツ科学演習（Laboratory of Health and Sports Science）が開講され，熊谷教授が主担当を務めた（林准教授および杉山も，それぞれ，3コマ，1コマを担当した)。

（文責: 杉山 佳生）

【G30 関連の健康・スポーツ科学演習】

平成 23 年度の健康・スポーツ科学演習の G30 関連の受講者数は 26 名であった。初の英語による授業開講であった。テキストは，現在使用している日本語版の縮小版を作成し，冊子は全訳して使用した。授業担当は熊谷教授が担当し，TA として博士課程の楢崎がサポートした。学生による授業評価は極めて良好であった。

（文責: 熊谷 秋三）

2）健康・スポーツ科学講義Ⅰ・Ⅱ

①健康・スポーツ科学講義Ⅰ

健康・スポーツ科学講義Ⅰは，後期の月曜日5時限に開講した。受講生は12名（1年生7名，2年生2名，3年生1名）であった。現代生活と健康問題（生活習慣病），特定病因説とその破綻，社会変化と健康・福祉，現代社会とストレス，生活習慣病の各論，健康と身体活動との関わり，健康の維持増進の手段としての運動の科学的基礎等について講義なった。定期試験の成績に基づいて評価し，全員が合格であった。

（文責: 大柿 哲朗）

②健康・スポーツ科学講義Ⅱ

・火曜日第5 時限開講

前期火曜日 5 限に開講した。受講者は 43 名であった。「健康・スポーツをめぐる現代的課題を考える」というテーマとした。内容は，健康に対するアンチテーゼ，体内時計，睡眠，記憶術，笑いの効能，日本人の歩行，スポーツマンシップ，修行，高校野球の魅力･弊害，ガッツポーズの是非などであった。

（文責: 西村 秀樹）

3）身体運動科学実習Ⅰ

身体運動科学実習Ⅰは，伊都地区において1年生を対象に選択科目として，後期: 11コマ・34コース（集中1コースを含む）が開講された。今年度の受講者は， 954人（登録者数）で，種目内容（コマ数）は，テニス（4），サッカー（1），バドミントン（6），バスケットボール（2），ソフトボール・卓球（2），ソフトボール（1），卓球（4），卓球＆軽スポーツ（1），バレーボール（1），ソフトバレー（1），筋力トレーニング（2），ゴルフ（1），空手道（1），ヨガ＆リラクセーション（1），ヨガ＆ピラティス（2），ボディワーク（3），スキー（集中コース: 1）であった。

（文責: 高柳 茂美）

4）身体運動科学実習Ⅱ

身体運動実習Ⅱは，伊都地区において2年生を対象に選択科目として，前期: 4コマ・13コースが開講され，受講者は356人（登録者数）で，種目内容（コマ数）は，テニス（2），ソフトボール（2），バドミントン（2），ソフトバレー（1），卓球（3），ヨガ・ピラティス（1），中国拳法（1），ボディワーク（1）であった。

（文責: 高柳 茂美）

5）身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳ

身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳは，箱崎地区および伊都地区において，高年次生対象の選択科目として，前後期それぞれ，1 コースずつ開講された。受講者は，前期 46 人（実習Ⅲ・41 人，実習Ⅳ・5 人），後期 23 人（実習Ⅲ・16 人，実習Ⅳ・7 人）であり，実施種目は，箱崎が前期 : バドミントン，後期:バドミントン，ソフトボール，バスケットボール，クリケット，バレーボール，ドッヂボール，伊都が前期 : サッカー，テニス，卓球，後期 : ビリヤード，ダーツ，テニス，バドミントン，卓球であった。

（文責: 橋本 公雄，熊谷 秋三，杉山 佳生，林　直亨）

6）保健コース

受講者数は健康スポーツ科学演習の登録者9名であった。一般コースの内容も交えながら，受講者の心身の状況を考慮したスポーツ種目（ダーツ，ビリヤード,パターゴルフ，シャッフルボード，卓球，吹き矢，射的，動体視力や折り紙を用いた巧緻性のトレーニング等）を取り入れた。運動・スポーツの実施に当たっては，個々に心身の状況に応じて内容（強度や時間）を調整した。これらの運動・スポーツ活動を通して，各々の状況に応じて身体を動かすこと（どこまで身体を動かせるか）を学ばせた。同時に健康スポーツ科学演習の目標でもある身体運動の必要性や方法の理解や人間関係の改善・向上を図った。

（文責: 村木 里志）

（2）コア科目

1）共通コア科目

「共通コア科目」は，「人間性」と「社会性」の二科目からなっており，それぞれ2単位の修得が必要となっている。それぞれの主題については3つのサブテーマ群（『人間性』－「意識と言葉」「歴史と文化」「生命と身体」，『社会性』-「社会と制度」「平和と共生」「自

然と環境」）が設定されており，健康科学センターでは，「人間性」の中の「生命と身体」部の講義を担当した。具体的には，前期2名，後期2名の健康科学センター教員が，生命や身体に関する科学的な見方とそれにまつわる実践的問題について解説し，人間存在や人間性に対しての理解が深まるような講義を実施した。

（文責: 高柳 茂美）

2）理系コア科目

①健康科学Ⅰ: 健康と運動のリテラシー

健康や運動に関する話題を，生理学の観点から扱った。主な内容としては，神経系，骨格筋，循環系，体温調節についてであった。受講希望者は 350 名以上であったが，教室の都合で受講制限を行い，220 名程度が受講した。基礎と応用とを組み合わせた内容は好評であった。一方，高校の生物の発展的な内容も多かったため，生物を履修しなかった一部の理系学生には難易度が高かったと感じる者もいたようである。

（文責: 林　直亨）

②健康科学Ⅱ: 運動とスポーツの心理学

1 年次後期の理系コア（運動とスポーツの心理学）を担当し，受講生は 88 名であった。平成 23 年度は，スポーツ競技の心理を中心にしながらも，健康スポーツの心理を含む内容とし，「運動・スポーツの心理学（資料編）」を製本・配布した。授業内容の理解を深めるために，1 コマの授業を講義，演習，ディスカッションという 3 本柱で組み立て，さまざまなスポーツに関連する心理的検査用紙を用いて自己診断をさせ，講義の内容の深化を図った。スポーツ競技の心理は如何に試合場面で実力を発揮させるかに焦点を当て，運動心理学は健康づくりのための運動行動の理論と実践に関する内容とした。

（文責: 橋本 公雄）

③健康科学Ⅲ: アスリートの食事を科学する

アスリートにとって，食事がトレーニングの一部であるという考え方無しに，パフォーマンスの向上を図ることはできない。それにもかかわらずアスリートの食事は量質ともに貧しいこと，食事の自己管理ができない等，意識の低さが指摘されている反面，アスリートの勝ちたいという欲求に対し，数兆円に上るサプリメント市場（社会・経済），ドーピングという果てしないイタチごっこ（科学・倫理）等々，社会のすべてが凝集する。本授業では栄養や食事にとどまらず，多様なサプリメントからドーピングまで，ロから入って，パフォーマンスが高まると信じられているものを多岐にわたって，紹介しながら，それがエルゴジェニック（ergogenics）かどうか，科学的エビデンスをもとに紹介した。

（文責: 斉藤 篤司）

（3）周辺教養科目

1）学生による講義評価（健康学講座）

低学年を対象とした健康学の授業として，平成23年度は，理系コア「健康科学」の枠の中で，一宮が精神疾患や精神保健に関する「健康科学I」を前期に，永野，眞崎，上園，丸山，入江，福盛，一宮によるオムニバス形式の「健康科学II」を後期に，それぞれ伊都地区センターゾーンで開講した。高学年向きには，全学共通教育科目（高年次教養科目）として，「体験で学ぶコミュニケーションと心の健康」を前期に福盛と入江が，「応用健康学」を後期に丸山，上園，眞崎が，それぞれ箱崎で開講した。また，総合科目として山本が後期に「病気と社会と文化」を担当した。

また，大学院向けの講義として，「大学院生に対する人間教育」を通年で筑紫地区で開講した。これらの健康学についての講座は，全学生に共通する身近な問題を取り扱っており，日常生活にも直結するため，関心や需要が大きいものと思われる。

平成23年度の学生による講義評価結果を後の表に示す。評価はおおむね良好であった。

（文責: 永野　純）

2）健康科学Ⅰ

今年度も前期に「精神に関わる問題について考え，精神的な健康について自分なりの合理的な意見を持つこと」を目的とした講義を，1～2年生を対象とした全学教育科目の健康科学Ⅰとして開講した。これは九州大学では医学部以外の学生が精神医学入門として受講することができる唯一の講義である。

講義の内容は，基本的に専門である精神医学からみたメンタルヘルスに関する講義で，23年度は新たに発達障害と人格障害を社会的に問題とされる行動の異常として紹介することにした。

受講登録をした者は241名であるが，希望者が343名と多く，講義室のキャパシティから受講制限をしなければならず初回に選抜試験を行った。実際に出席していたのは229名前後で出席率は高かった。毎回，その講義で取り上げた内容を確認する小テストを行い出席点とし

た。単位認定のための試験は235名が受験し再試験は実施しなかった。

（文責: 一宮 厚）

3）**健康科学Ⅱ**

健康科学Ⅱは，理系コア科目の一つとして1年生を対象に健康科学センターの保健管理担当の教員が，誰にでも起きうる心身の疾患などの健康上の諸問題を取り上げ，学生自身の健康の維持増進と学生の身近な人たちへの啓発を目的としている。学習目標としては，自分自身の健康問題や社会的な健康問題に興味を持っている医学的知識に触れる機会が少ない学生を主な対象として，医学や臨床心理学・健康科学などを教養として広く学び，健康に関する正しい見識と良好な生活習慣を身に付けることや，自分自身や身近な友人などの心身の不調の早期発見や，良好とは言えない生活習慣を科学的に説明し改善を助言できるようになることをあげている。単位認定の方法は，各講義担当の教員が毎回の講義で小テストやレポートを課すことで評価することで行っており，学期末試験は行っていない。

受講者数は249名で，実際に出席していたのは230～240名前後で，出席率は高かった。小テストやレポートの結果は，大半の者が良好で講義内容をよく理解しているものと考えられた。249名中，242名が修了した。保健管理を担当しているため，オムニバス形式とはいうものの同じ教員が続けて講義できないことが課題として残っている。

（文責: 眞崎 義憲）

学生による健康学講義の評価

質問内容	平成23年度 前期			平成23年度 後期	
	健康科学Ⅰ	体験で学ぶコミュニケーションと心の健康	病気と社会と文化	健康科学Ⅱ	応用健康科学
	一宮	福盛 入江	山本	永野・上園 眞崎・丸山 入江・福盛 一宮・松下	丸山・眞崎 上園
1 学期のはじめに、この授業には積極的な気持ちでのぞんだと・・・・・	4.3	4.3		3.9	3.5
2 その後、学期全体を通して授業への積極的な気持ちは続いたと・・・・・	3.8	4.1		3.7	3.5
3 総合的に考えて、現在この授業に満足していると・・・・・	3.9	4.4		3.8	4.1
6 この授業のテーマ・目標は明確だったと・・・・・	4.4	4.6		4	4.5
7 授業の構成・内容や展開は適切だったと・・・・・	4.2	4.5		3.9	4.4
8 授業の準備は周到になされていたと・・・・・	4.3	4.7		4	4.5
9 よいテキスト・教材・資料が使われていたと・・・・・	4	4.6		3.8	3.9
10 成績の評価基準は明確だったと・・・・・	3.9	4.3		3.5	3.3
11 レポート作成などに必要な時間・労力が考慮されていたと・・・・・	3.7	4.2		3.6	3.3
12 授業内容の難易度は・・・・・	3.3	2.9		3	2.9
13 授業の進行ペースは・・・・・	3.5	2.9		3.1	3
14 学生と授業担当者とのやりとりに双方向性があったと・・・・・	3.3	4.4		3.3	2.8
15 授業担当者に、教えようとする熱意があったと・・・・・	4	4.6		3.7	4
16 授業担当者に、学び続けている者の姿勢を見たと・・・・・	4.1	4.2		3.6	3.9
17 授業担当者は学生の理解度を把握して授業を進めていたと・・・・・	3.7	4.2		3.4	3.3
18 授業担当者が学生に接する態度は適切だったと・・・・・	4.1	4.6		3.7	4.3
19 授業の開始・終了時刻は守られていたと・・・・・	4.2	3.6		3.8	4.6
20 黒板や視聴覚機器の使い方は工夫されていたと・・・・・	4.2	4.5		3.7	4.1
21 ある分野について一定の知識を身につけることができたと・・・・・	4.2	4.2		3.7	3.8
22 ある分野について系統的に学ぶことができたと・・・・・	4.1	4.1		3.6	3.9
23 後に専攻科目を学ぶための基礎を固めることができたと・・・・・	3.5	3.4		3.2	2.5
24 自分なりに考えて捉え直すところに学びがいがあったと・・・・・	3.6	4.1		3.5	3.5
25 調べて検証し考察する方法を経験する学びだったと・・・・・	3.2	3.8		3.2	2.8
26 自分の今後にどう役立つかを意識する学びだったと・・・・・	3.9	4.4		3.6	3.9
27 自分の能力や可能性に自信を得ることができたと・・・・・	3.4	4		3.4	2.9
28 自らの関心事として考えることの大切さに気づいたと・・・・・	3.7	4.2		3.6	3.9
29 物事の見方を新たにすることに楽しみがあったと・・・・・	3.7	4.3		3.5	3.7
30 より難しい問題に取り組もうとする姿勢を培ったと・・・・・	3.3	3.7		3.3	2.7
31 社会的問題の解決と研究とのつながりを見つけたと・・・・・	3.7	4.1		3.4	3.5
32 考えや意見に共感し合える仲間との出会いがあったと・・・・・	3.4	4.3		3.3	2.1
33 よい評価・成績をめざして努力することができたと・・・・・	3.7	4.1		3.5	3.1

4) 高年次教養科目　理系主題科目Ⅷ　体験で学ぶコミュニケーションと心の健康

3, 4 年生を対象に，ストレスに関する知識と，人との関わり方，コミュニケーションのあり方を改めて考えていくことをねらいとし，今後，社会人となっていくときには，人間関係・コミュニケーションのスキルは重要なものとなることが予想されるので，学生が自分を見つめなおす機会となることを願い，平成 23 年度前期に開講した。体験実習型講義のため，ペアでのコミュニケーション実習，グループで協力して問題解決を行う課題，グループプレゼンテーションを行った。授業評価も別表のように高い数値であったが，21 世紀交流プラザで行っていたため，文系キャンパスや農学部・理学部の学生にとっては遠く，時間超過に関して厳しいコメントもあったので，今後改善したい。

（文責: 福盛 英明）

5）高年次教養科目　応用健康学（後期）

平成23年度後期の理系主題科目（高年次教養科目）の応用健康学は，箱崎地区の高年次学生を対象に後期の火曜日一限目に開講した。講義内容は，学生の日常生活に関連する健康問題や身近な疾患の対処法，将来的に自分の意見やスタンスを持つべき社会的な医療問題に焦点を当てた。具体的には食に関する問題，アルコール問題，エイズ予防，代替医療，移植医療，旅行医学，心拍のゆらぎの観察などを丸山が，インフルエンザや結核などの感染症の動向と予防，喫煙の健康被害と禁煙の重要性を眞崎が，血圧の測定法や生命現象のバイオリズムを上園が行い，全員参加型で簡単な実習や体験を通した双方向的な授業を心がけた。

理農系で生物系を専攻する学部生にとって自身の生命系の研究テーマをヒトの疾病や自身の健康管理にいかに結び付けるかは重要なテーマである。本講は例年通り高年次教養科目の後期授業で，卒業がかかった受講者や就活中の学生も多く，受講態度は概ね良好であった。最終的な受講者（履修登録者）数は34名（3年生25名，4年生9名）で，講義は毎回定刻に始まり休講はなかった。受講者は文系と理系にまたがり，講義内容によっては共通の理解を得る事が困難な場面もあり講義資料を毎回準備しビデオなど視聴覚教材も使用した。評価方法で「未履修」や「未受験」の記載がなくなったため，「不合格」となった学生が4名となった。

（文責: 丸山　徹）

6）病気と社会と文化（後期）

上記科目を開講した。

（文責: 山本 和彦）

2. 業務を通した教育

1）定期健康診断時の健康教育

定期健康診断は，本来の目的である健康状態のチェックと同時に，年に一回多くの学生が参加する貴重な健康教育の機会でもある。こうした考えに則り，本学では，毎年健診の流れに関する説明時間を利用して学生への健康教育を行っている。時流に応じて若干テーマを変えることはあるが，基本的な健康教育内容は，健康生活支援調査の結果報告と，結核を中心とした感染症の実態とその危険性に関するものである。平成 23 年度は，そうした基本事項に加えて，麻疹や薬物乱用など時宜を捉えたテーマについて教育を実施した。健康生活支援調査のような業務に関連した研究成果は，学内広報誌 CAMPUS HEALTH などに掲載して周知させる他に，今後もこうした健診などの機会を利用して学生に還元していく必要がある。

（文責: 永野　純）

2）サイコリトリート（箱崎分室）へ来室する学生へのリラクゼーション指導

箱崎分室において，サイコリトリートに来室する学生を対象にボディワークの指導を実施している。また，健康相談・学生相談に来室する学生・教職員で，身体への気づき・リラクゼーションが必要であると，医師あるいはカウンセラーが判断した者を対象にボディワークの個人指導を延べ50回にわたって実施した。

（文責: 高柳 茂美）

3）ウエルカムホームベース型健康支援プログラム（学生に対する肥満改善および生活習慣病予防支援）

ウエルカムホームベース型健康支援プログラムは，肥満の改善および生活習慣病予防を目的に，学生が日常生活をしている場（home）で目標達成型の行動変容を目指すものとし，各キャンパス分室（健康相談室）で実施した。

4 月の定期健康診断時に, BMI が 25 以上の肥満と判定された学生と腹囲が 85cm 以上あった男子学生に，参加を勧奨した。内容は，週 1 回体重・血圧・腹囲を測定し，食事・運動・生活の 3 つの行動目標を実行してもらいな

がら，個人面接の中で目標を実行するにあたっての助言や食事・運動・生活についての指導を行った。また，参加者には歩数計を貸与し，歩数を活動量の目安として利用してもらえるよう支援した。期間は 5～7 月の 10 週間とし，それ以降の継続は自由とした。

平成 23 年度の定期健康診断受診者は 14,076 名であり，BMI が 25 以上の学生は 1,543 名（受診者の 11.0%），腹囲が 85cm 以上の男子学生は 1,312 名であった。プログラムへの参加申し込み者は 221 名であったが，7 月まで 10 週間参加した者は 100 名（男性 86 名・女性 14 名）であった。10 週間終了後は平均して，体重が 2.94kg，BMI が 1.03kg/m^2，収縮期血圧が 11.1mmHg，拡張期血圧が 5.8mmHg，腹囲が 2.28cm 減少した。

（文責: 松園 美貴）

3. 大学院教育

1）人間環境学府 行動システム専攻健康行動学コース

平成 23 年度の入学者数は，修士課程 6 名（2 名は留学生），博士課程 9 名（1 名は 10 月入学者）であり，ほぼ定員を満たした。修士課程の修了者数は 12 名であり，そのうち 3 名が博士課程に進学した。博士課程の修了者は 1 名（堀田亮氏，博士（心理学））であった。年間行事としては，修士論文の中間発表会（5 月），修士論文発表会（2 月），および博士論文公聴会（11 月, 2 月）を開催した。

（文責: 橋本 公雄）

2）生体ストレス人類学特論

上記科目を開講した。 （文責: 山本 和彦）

3）大学院共通教育科目（大学院生に対する人間教育 '11）

平成 23 年度の 「大学院生に対する人間教育第一・第二」は筑紫地区で，「第一」は前期の 6-7 月に 7 回(7.5 コマ)，「第二」は後期の 10-11 月に 7 回(7.5 コマ)，水曜の 4 限目に開講した。 大学院生に対する，専門教育を推進する支援的教育として，体力アップ・精神力アップ・コミニュケーション能力アップ・チーム力（人的ネットワーク）の形成・知る楽しみ・気晴らし・就職試験対策等を目的に，心身の健康に関するさまざまな話題をオムニバス形式で講義し，前期・後期それぞれ 1 回ずつ実習を行った。教員の専門分野により，実践的なことから文学に見る健康観まで多岐に亙っており，新鮮な視点が好評であった。テキストは定めず，講義・実習に必要な資料は担当教員が作成し配布した。また評価は出席点・実習点・テスト･レポートから総合的に実施した。

受講生数は，前期は登録数5名，内修了者2名，後期は登録者 5 名と聴講生 1 名，修了者 5 名と全回聴講 1 名であった。 筑紫地区以外のキャンパスからの受講生が大半を占めたが，欠席者はほとんど無く，講義や実習に対する受講生の反応は良好であった。

（文責: 上園 慶子）

4. 課外活動の支援

本年度の体育会支援は体育会からのメイルでの問い合わせが1件あった。内容は筋力トレーニングの方法に関するものであった。

（文責: 林 直亨）

5. 研究生の指導

平成 23 年度健康科学センター研究生

氏　　名	研 究 期 間	指 導 教 員	研　究　題　目
李　　旭	H23. 4. 1～23. 9.30	杉山　佳生	エリートバスケットボール選手の心理的スキル
丁　健東	H23. 4. 1～23. 9.30	杉山　佳生	Study about character building in university PE class
大石　彩加	H23. 4. 1～24. 3.31	杉山　佳生	スポーツ成績向上に効果的な動機づけを行える人間関係や方法，タイミングの検討

6. ＦＤ活動

（1）九州地区大学体育連合

平成 23 年度九州地区大学体育連合研修会

日時: 平成 24 年 3 月 17 日（土）・18 日（日）

場所: ホテルウェルビユーかごしま

「平成 23 年度体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」が平成 24 年 3 月 17 日（土）・18 日（日）の 2 日間, 鹿児島市のホテルウェルビユーかごしまで開催され, 九州大学から橋本公雄教授（会長）,西村秀樹教授, 杉山佳生准教授（理事）の 3 名が参加した。研修会プログラムは, 研究発表, 招待講演, シンポジウム, 特別講義の 4 部構成であった。研究発表は 8 演題の発表が行われ, 招待講演では, 台湾の国立体育大学から, Dr.Frank Lu 氏が招聘され,「台湾の体育・スポーツ事情—日本および世界からの影響—」と題して, 講演が行われた。また, シンポジウムは,「これからの大学体育のあり方を探る」のテーマのもと,「日常生活に活かす大学体育講義（飯干明, 鹿大)」「体力も向上させる大学体育実習での取り組み（角南良幸, 福女学院大)」「演習授業の一例と課題（杉山佳生, 九大)」の観点から話題が提供され, 活発な質疑応答が行われた。橋本公雄氏（九州大学）が特別講義として 60 年の連合の歴史を語りつつ, 今後の体育連合のあるべき姿について話をした。盛会な春期研修会であった。

（文責: 橋本 公雄）

（3）健康・スポーツ科学科目ＦＤ研修会

平成 23 年 4 月 1 日(金)の午後 1 時から 4 時 30 分に, 伊都キャンパスで実施した。科目授業にあたっての留意事項や成績評価の基準, P&P 研究の内容などについての説明が講義室においてなされた。その後, 体育館にて, 演習・実習授業で用いる施設や用具・機器等の点検と説明とが行われた。参加者は常勤教員, 非常勤講師および TA 大学院生であった。

（文責: 林　直亨）

（4）全学 FD

平成23年度の全学ＦＤは合計3回, 以下の要項で開催された。

平成23年度 第1回全学ＦＤ（新任教員の研修）

1. 企画運営： 全学ＦＤ委員会, 高等教育開発推進センター, 教育改革企画支援室

2. 実施日時： 平成23年4月4日（月） 10: 00～14: 25

3. 場 所： 旧工学部本館大講義室（箱崎地区）

4. テ ー マ： 新任教員の研修

5. 趣 旨

本学に新たに採用となった教員等を対象として, 本学が取り組んでいる諸問題等について共通認識を持つことを目的として, 本学の歴史を踏まえた将来の展望等について理解を深め, 教育者・研究者としての資質と九州大学教員としての自覚を高める契機とします。

6. 対 象

平成22年4月2日から平成23年4月1日の間に採用の教員（教員相当職を含む）

（※平成22年度第1回全学ＦＤ（平成22年4月2日開催）の参加対象者のうち参加できなかった者も希望があれば参加を受け付けます。）

7. プログラム

9: 40 受 付 開 始

10: 00 開 会

10: 00 挨 拶・講演（30分）

総長 有川 節夫 「九州大学の教員に対する期待」

10: 30 講 演（30分）

理事（副学長）丸野 俊一 「九州大学が求める教育とは」

11: 00 講 演（30分）

理事（副学長）藤木 幸夫 「九州大学の研究活動について」

11: 30 事務連絡（10分）

『教員ハンドブック』について

13:00 講 演（50分）

健康科学センター准教授 福盛英明

「いまどきの学生のこころとコミュニケーション」

13: 50 講 演（35分）

高等教育開発推進センター教授 淵田 吉男 「九州大学の全学教育」

14: 25 閉 会

※プログラム終了後希望者に対し, ワークショップを開催した。

平成23年度第2回全学ＦＤ（教育の質向上支援プログラム（EEP）成果発表会）

1. 企画運営: 全学ＦＤ委員会, 高等教育開発推進センター, 教育改革企画支援室

2. 実施日時: 平成23年6月30日（木）13: 20～17: 00（受付開始13: 00）
3. 場所: 創立五十周年記念講堂大会議室（創立五十周年記念講堂4階）
4. テーマ: 教育の質向上支援プログラム成果発表会
5. 趣旨: 教育の質向上支援プログラム

（EnhancedEducationProgram: EEP）は，中期目標・中期計画に掲げる教育に関する目標・計画の達成に資する部局等の主体的な取組を支援することにより，教員及び組織の教育力の向上を図り，本学の教育改革を推進することを目的として，平成21 年度から実施しています。実施初年度である平成21 年度には，8取組を選定し，2年間の経費支援期間のうちに様々な教育改善に関する成果が上がっています。

そこで，今回の全学ＦＤでは，それら取組の成果発表を通じて各部局の参考としてもらうとともに，教育の実施方法や課題等の意見交換を行うことで，教育方法の改善に役立ててもらうことを目的とします。なお，この成果発表会は，教育改革企画支援室による各取組の事後評価も兼ねています。

6. 対象: 本学教職員。他機関の高等教育関係者にも広く開放します。

※EEPの成果を広く周知するため，当日の模様を撮影し，撮影した画像や映像の一部を九州大学ウェブサイト上に掲載する予定ですので，ご承知置きください。撮影につき不都合がある方は，事務局にご連絡ください。

7. プログラム
13: 00 受付開始
13: 20 開会・挨拶（10分）理事・副学長（教育改革企画支援室長）丸野俊一
13: 30 ＥＥＰの各取組の成果報告・第1部（20分）
(1)経済学府【ＭＢＡプログラムの競争力向上への取組】
13: 50 ＥＥＰの各取組の成果報告・第2部（40分）
(2)医学系学府【保健学リーダー養成海外ＦＤプログラム】
(3)工学府【国際工学教育環境整備と若手教員の海外研修】
14:50 ＥＥＰの各取組の成果報告・第3部（40分）
(4)経済学部・経済学府【経済学部・学府教育の高度化推進プログラム】
(5)人間環境学府【学際教育の実質化に向けての取組】
15: 50
ＥＥＰの各取組の成果報告・第4部（60分）
(6)附属図書館【電子・オンライン教材の作成支援プログラム】
(7)高等教育開発推進センター・言語文化研究院【プレゼンコンテストを利用した外国語教育】
(8)文学部【人文学共通教育方法の充実に関する研究】
16: 50
講評（10分）理事・副学長（教育改革企画支援室長）丸野俊一
17:00 挨拶

平成23年度 第4回 全学ＦＤの実施について

1. 企画運営: 全学ＦＤ委員会，基幹教育院，健康科学センター
2. 実施日時: 平成24年3月1日（木） 15: 00～17: 00
3. 場 所: 箱崎地区・箱崎理系地区旧工学部本館2Ｆ 4番講義室
伊都地区・総合学習プラザＡＭＳ講義室Ｉ（遠隔システム）
4. テ ー マ: 心の危機の予防と連携～われわれ教職員にできること
5. 対 象: 本学教職員（広く一般教職員: 特に学生委員会委員，教務委員会委員，学部相談員，窓口職員，学生支援職員）等
6. 趣 旨: 近年，九州大学でも，疾病による休学者の増加や成績不良者，不登校・ひきこもり学生への対応ニーズの増加，うつ病を発症した学生への対応の増加など，多くの教職員が教育的指導に困っている実態があります。本学でも，これまで自殺予防講演会を毎年行ってきましたが，大学全体の問題として各部署が連携し，システムを整備するなど組織的対応なくしては，効果を挙げることはできません。不幸にも自殺に至ってしまった学生さんの関係者への聞き取りを行った結果，自殺にはメンタルヘルス上の病気など治療上の問題や，就職の問題，履修などの学務上の問題などさまざまな要因が影響していることがわかりました。自殺予防では，履修や修学状況の不良や不適応などへの早期発見・介入が必要で，教職員がゲートキーパーの役割がとれることが重要であると考えます。今回の研修会では，教育現場での日常の指導の中での対応力を高め，予防システムを構築することについて考えます。
7. プログラム
箱崎地区 進行: 健康科学センター 福盛英明

教育改革企画支援室 大津 正知

伊都地区 進行: 健康科学センター 松下 智子

14: 45 受付開始

15: 00 開 会

15: 00 挨 拶

15: 05 企画趣旨説明

「九州大学の現状と自殺予防」

一宮 厚 （九州大学健康科学センター・教授）

「疫学的手法を用いた大学生のメンタルヘルス対策」

熊谷 秋三 （九州大学健康科学センター・教授）

1. 講話「危機状態の学生を支えるための教職員と専門家の連携」

講師 池田忠義（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）

2. 講話とディスカッション「心の不調のある学生への対応について考える～仮想事例を用いて～」

ファシリテーター（箱崎） 福留留美 福盛英明

ファシリテーター（伊都） 松下智子

16: 50 質疑応答

17: 00 閉会の挨拶 健康科学センター副センター長 一宮厚

17: 00 メンタルヘルスミニ相談会ブースを開いて，精神科医，臨床心理士が，個別相談に応じる。

17: 30 挨 拶

（文責: 熊谷 秋三）

業　務　活　動

概況 …… 29
内容 …… 29

業　務　活　動

概　況

九州大学健康科学センター（以下，健セ）は，研究所として種々の専門分野の研究者が健康について科学的研究を行っているが，同時に大学の構成員に対して，自立した個人の健康の維持・増進を支援するという理念のもとに健康教育そして健康支援活動を実施している。

日常の相談業務や定期健康診断などについては，年間計画のもと，教員・技術職員・事務職員で構成する通称 支援会議を毎月開催し，各担当者や各分室からの課題を討議しつつ情報を共通化し対策決定を行っている。

学生に対する健康支援業務は学生健康支援会議で検討し実施している。従来，旧健康科学第 2 部門（健康医学・心理学）の教職員が中心となって担当していたが，5 年評価・10 年組織見直しにより平成 23 年 1 月，部門が廃止された後は，健康科学センターに所属する教職員全員（教授 7 名，准教授 9 名(平成 23 年 10 月からは 10 名)，講師 1 名）と技術職員である保健師・看護師（定員 3 名，3 年雇用 2 名，および短時間雇用 3 名）が本会議のメンバーとなり，支援活動の企画・立案・実施について討論し活動している。事務職メンバーは筑紫事務部教務課保健係である。

職員に対する健康支援活動は職員健康支援会議で検討し実施している。メンバーは　旧健康科学第 2 部門（健康医学・心理学）の教員（教授 3 名ならびに准教授 6 名）と技術職員である保健師・看護師（定員 3 名，3 年雇用 2 名，および短時間雇用 3 名）と，総務部職場環境室に所属する 3 年雇用の産業保健師 5 名である。事務職は箱崎地区の本部総務課職場環境室安全衛生係が担当している。職員健康支援会議は環境安全衛生推進室の健康衛生部門会議も兼ねている。

日常の健康支援業務は，5 カ所の全てのキャンパスに設置している分室（健康相談室）において，健康相談・診療・保健相談などのサービスを提供している。学生の定期健康診断は，例年通り 4 月に全学生を対象として実施した。新入留学生のための健診は春季・秋季の 2 回実施した。また，新入生に対する面接を，健康調査結果（健康支援パッケージなど）をもとに 5 月に実施した。教職員の定期健康診断は，健セと環境安全衛生推進室が中心となって企画立案し，一次健診は従来通り外部の業者に委託し 6 月に各地区で実施したのち，二次検診や健康相談などの事後措置は健セが主体となり，環境安全衛生推進室の援助を受けながら実施した。

健康教育は，健康支援の活動を充実させるために，学生に対し全学共通教育の中でも行っている。健康支援モデルに基づいた健康学の講義を，平成 23 年度も，健康科学 I，健康科学 II，応用健康学，心理健康学の講義(実習を含む)として，全教員が分担した。学生による講義評価も全学共通の評価法で行った。教職員に対しては，従前通り，10 月の健康週間をはじめ人事課が企画する様々な研修会の講師を務めた。また，学内の FD や学外からの講師依頼にも積極的に応じた。

また，教員の共通理解と資質向上のためにＦＤとしての教員研究会を技術職員（保健師や看護師）に対する教育に拡大して毎月 1 回行っている。

医師である教員は，産業医として教職員に対する産業保健活動を行っている。具体的には 休職・復職判定，長時間労働者やメンタル不調者の面接，勤務部署への説明などの個別の対応をこなし，毎月，それぞれの事業場における安全衛生委員会に出席し，また職場巡視を行っている。

日常の健康支援業務

日常の健康支援業務では，学生および教職員のプライマリー・ケア活動を行うことを最も重視している。福岡地区の 5 つのキャンパスのそれぞれにある健セの分室において，内科医師による一般健康相談と診療，精神科医師・心療内科医師による精神保健相談と診療，ならびに臨床心理士による学生相談，さらには保健師・看護師による保健相談や各種プログラムを実施した。平成 23 年度に健康科学センターを訪れた来室者は 23,831 名（前年 23,914 名）であった。常勤の医師 7 名，臨床心理士 1 名，保健師 13 名（うち 5 名は安全推進室所属で，このほかに非常勤の職員もいる）で全 5 キャンパスの毎日の健康支援業務に当たった。教員は週に 2.5～3 日を各分室での相談・診療業務に当てているが，それでも学生と教職員のニードをこなせないため，非常勤の医師，臨床心理士の方々の協力を得ながら運営している。

学生の定期健康診断

全学生を対象とする定期健康診断は，支援担当の教員と保健師・看護師のスタッフ全員が担当し，多くのアルバイトを雇用して，毎年4月に3週間にわたり病院地区同窓会館で実施している。

平成 23 年度の受診者は 14,077 名であり，受診率は 74.2%であった。受診率は前年より 0.1%増加した。受診率を向上させるために，例年同様，ポスターやHPなどで開催日等の情報を広報し，授業担当教員へ休講措置を依頼した。

健康支援パッケージによる新入生面接

5 月の連休翌週から伊都地区センターゾーン分室において，心理系の教員と内科系の教員が協力して，新入生に対する面接を行った。この新入生面接は，入学時の健康調査票（健康支援パッケージ）にもとづいて，学業に影響を与える可能性のある重大な疾病の罹患や既往がある学生，多くの自覚症状が認められる学生に対して，個人宛に案内状を郵送して面談を促しているものである。なお，平成 18 年度からは，心理的問題として対人コミュニケーションに支障があると考えられる学生を対象に含め，また，従来，面談を実施しても問題が少なかった相談希望のみの学生には，今年度も来談を勧奨するだけに留めた。

その結果，平成 23 年度の面接の対象者は心理系が 172 名で内科系が 11 名，来談者は心理系が 151 名（88%）で内科系が 9 名（82%）であった。

健康教育

学生に対する健康教育は全学共通教育の中で支援担当の教員が行っている。講義は，低年次向けの「健康科学 I」「健康科学 II」および「病気と社会と文化」，高年次向けの「応用健康学」「心理健康学」，大学院生向けの「大学院生のための人間教育」ならびに「生体ストレス人類学特論」で，健康問題について理解し自分自身で対応するだけでなく，問題を持った他の人に対しても健康支援ができるようになるための健康教育として開講した。学生の授業評価は平成 19 年度以降，本学共通の“学生による授業評価”を利用し，評価結果を参考にしながら授業内容や方法の改善に努めている。

産業保健活動

支援担当のスタッフは平成 16 年度の独立法人化以降，環境安全衛生推進室の室員を兼任し，医師である教員は福岡地区の 7 つの事業場の産業医，保健師は衛生管理者を担って，安全衛生委員会への出席や職場巡視を行っている。大学全体として教職員の労務は増大しており，長時間労働者の面接や休職や復職の判定など職員への対応は年々増加して，支援担当スタッフの業務も増大している

職員の定期健康診断

教職員の定期健康診断は，健セと環境安全衛生推進室が中心となって企画立案し，一次健診は従来通り外部の業者に委託し 6 月に各地区で実施した。6 月の未受検者には健診機関での受検機会を設置し，平成 23 年度の最終的な受診者は 6,668 名，受診率は 99.2%であった。受診率は前年より 0.2%減少した。受診率を向上させるために，例年同様，大学のホームページに実施をアップする，一斉メールや個人宛のメールなどで周知徹底を図る，折々の受検率を部局長会議で報告し，部局長から部局の構成員への受検勧奨を行うなど，受検率 100%を目指している。二次検診や健康相談などの事後措置は健セが主体となり，環境安全衛生推進室の援助を受けながら実施した。

教職員研修

例年，人事課人材評価係が実施する本学の職員のための研修会や国大協が実施する国立大学の職員に対するさまざまな研修会などにおいて講師を務めているが，平成 23 年度も，心身の健康増進のための講義を教員が分担して行った。メンタル面の対応に関する講義の需要が大きい。

技術職員研修

平成 8 年度から健康科学センターならびに環境安全衛生推進室の技術職員（保健師・看護師）を対象として研修を行ってきた。平成 23 年度も，保健師・看護師が中心となって月に 1 度ずつ学生や教職員に対する栄養指導やそのための調査研究に関する研修を行い，必要に応じて教員が指導を行った。また教員による最近のトピックスを中心とした講義も実施した。学外での研修活動として，九州地区大学保健管理研究協議会や全国大学保健管理研究集会，日本健康支援学会や日本禁煙科学会など，学会・研究会での研修や発表も可及的多数のスタッフが積極的に参加してレベルアップに努めている。また，大学構内の禁煙対策のため，禁煙科学会認定の禁煙指導士の資格保有者も次第に増加している。

（文責: 上園 慶子）

1. 一般健康相談

1) 伊都地区センターゾーン分室

伊都地区センターゾーンには，学部 1 年，2 年生（前期のみ）と，比較社会文化学府および数理学府の大学院生が学んでいる。

伊都センターゾーン分室の健康相談・健康教育は，前述の学生および教職員を対象とし，健康科学センター教員である医師 4 名（一宮・丸山・永野・眞崎），看護職 2 名（野村・三谷），事務職員 1 名（田川）と非常勤医師 3 名（内科医：佐々木悠医師，尾前豪医師，精神科医：川島範子医師）が行った。

平成 23 年度の来室者数は学部生 3,734 名，大学院生 343 名，教職員 501 名で，その他も含めると延べ 4,648 名の利用があった（表 1）。来室者数は昨年に比べて減少している。特に冬季の感冒の減少が著しく，一昨年度の新型インフルエンザの流行が完全に沈静化したのが一因と考えられる。また，講義室の前など各所にアルコールが設置されており，感染予防の意識が高まっていると思われる。さらに，近隣に少しずつ医療機関が充実してきており，そちらを受診する学生が増加していることも予想される。

利用者は例年通り 4～6 月に集中している。この時期には，学生定期健康診断の 2 次検査（健診フォロー965 名）や新入生面接（174 名）を実施しており（表 1, 4），利用者の 8 割以上を学生が占めている。

教職員は，健康診断事後措置，産業医面談のほかに，血圧や体重などの定期的な測定による利用もあった。

内科系の相談は，上述した感冒による相談が減少した以外は例年と同様であった。（表 2）

外科系の相談は，例年と同様，創傷・擦過傷と捻挫・打撲が主である（表 3）。全学教育科目の健康・スポーツ科目を履修中の外傷や課外活動中の受傷，化学実験中の外傷が含まれている。また，伊都地区への通学手段は公共交通機関が限られるため，雨天や強風時でも自転車やバイクを利用する学生も多く，転倒事故も多かった。

伊都地区センターゾーンでは，未成年者が多数在籍するキャンパスとして，喫煙対策にとり組んでいる。平成 23 年度は，センターゾーンの広場を利用して「肺年齢測定イベント」を実施した。肺活量の測定や喫煙・禁煙に関する掲示を行ったところ，学生と教職員を含め述べ 53 名が参加し，非常に好評であった。また，奈良女子大学の高橋裕子先生をお招きし，「なぜ大学で禁煙をすすめるべきなのか？」というテーマの講演も開催した。ほとんどが非喫煙者である学部 1～2 年の時期の禁煙教育は，大学全体の喫煙率を下げるためにも重要である。

（文責：一宮　厚，野村 桃子）

表 1　来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	2162	614	632	326	3734	80.3%
修士	138	40	45	37	260	5.6%
博士	43	16	9	15	83	1.8%
教職員	158	142	132	69	501	10.8%
研究生他	8	0	18	9	35	0.8%
その他	10	8	9	8	35	0.8%
計	2519	820	845	464	4648	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
感冒	347	56	111	67	581	64.2%
上部消化管	11	4	4	3	22	2.4%
下部消化管	18	7	12	2	39	4.3%
頭痛	15	7	7	4	33	3.6%
その他	84	49	74	23	230	25.4%
計	475	123	208	99	905	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	88	60	29	13	190	44.1%
打撲・捻挫	60	26	45	10	141	32.7%
熱傷	11	12	6	0	29	6.7%
腰痛	2	4	6	1	13	3.0%
その他	27	23	7	1	58	13.5%
計	188	125	93	25	431	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	41	10	20	3	74	2.1%
禁煙相談	1	6	23	2	32	0.9%
眼科	18	8	10	5	41	1.1%
皮膚科	27	12	20	3	62	1.7%
耳鼻科	9	3	3	2	17	0.5%
歯科	8	3	4	3	18	0.5%
婦人科	8	1	8	2	19	0.5%
健診ﾌｫﾛｰ	965	173	138	75	1351	37.6%
身体計測	337	219	192	100	848	23.6%
血圧測定	140	51	72	38	301	8.4%
保健ｺｰｽ	9	0	0	0	9	0.3%
新入生面接	172	0	2	0	174	4.8%
その他	186	82	71	86	425	11.8%
産業医面談	19	13	10	3	45	1.3%
心理・精神相談	48	29	34	42	153	4.3%
健康診断証明書	14	5	1	5	25	0.7%
計	2002	615	608	369	3594	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	419	101	96	72	688	12.8%
与薬	323	83	109	62	577	10.8%
消毒	83	64	28	4	179	3.3%
休養室	112	50	81	28	271	5.1%
病院紹介	90	29	52	28	199	3.7%
心理的対応	155	28	29	27	239	4.5%
その他	1724	577	566	340	3207	59.8%
計	2906	932	961	561	5360	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	4	0	0	0	4	2.6%
精神保健相談（医師）	28	18	23	28	97	63.4%
精神保健相談（看護職）	12	8	7	7	34	22.2%
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0.0%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（医師）	2	0	2	3	7	4.6%
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（看護職）	2	3	2	4	11	7.2%
電話相談計	4	3	4	7	18	11.8%
計	48	29	34	42	153	100.0%

2）伊都地区ウエストゾーン分室

平成 23 年度の伊都地区ウエストゾーンは，工学系の学生と職員あわせて 5,000 人以上が生活する規模となっている。学生の多くは実験・研究に従事しているが，取り扱う化学薬品等の種類が多岐に渡ること，大型クレーンや旧型の実験器具を設置した部屋が多いこと，酸素欠乏作業の危険のある部屋の存在，健康影響について未知の新素材開発に携わる研究室の存在，その一方で，これらの管理や対策が必ずしも徹底されていない研究室等が存在することなど，教職員と共有する課題が少なくない。自然環境に恵まれたキャンパスは，修学，研究，生活支援の施設が充実してきている一方，キャンパス周辺は飲食店や遊興施設等が無く，いわゆる息抜きができる環境は不十分である。また，徒歩圏に医療機関が無いため，幅広い一次医療への対応が分室に求められる状況も依然として続いている。

平成 23 年度のスタッフは，健康科学センターの教員 4 名（一宮，福盛，眞崎，永野），非常勤医師 1 名（佐々木），非常勤カウンセラー1 名（中園）と看護職員 2 名（竹下，高尾），事務職員 1 名（高尾）であった。来室者総数は 6123 人と前年度（6,743 人）よりやや減少した。内訳を見ると，内科系，外科系，心理・精神相談の各区分で利用者数がやや減少している（表 1～表 4，表 6）。利用者区分では，学生の利用者数は前年度と比べて大きな違いはない一方，教職員の利用者が 1,759 人から 1,383 人へと減少し，全体に占める割合が 20～25%で落ち着いてきた感がある。

利用者数は，担当する医師やカウンセラーの充足状況に依存する側面が強いが，新任の常勤カウンセラーを迎える平成 24 年度は利用者数が増加することが見込まれる。内科系医師の慢性的な不足の解消は，引き続き今後の課題である。

（文責：永野　純）

表 1　来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	421	304	460	277	1462	23.9%
修士	761	669	645	416	2491	40.7%
博士	234	129	151	142	656	10.7%
教職員	234	527	362	260	1383	22.6%
研究生他	18	7	33	15	73	1.2%
その他	7	16	24	11	58	0.9%
計	1675	1652	1675	1121	6123	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
感冒	169	66	184	139	558	71.0%
上部消化管	17	7	14	20	58	7.4%
下部消化管	15	4	8	13	40	5.1%
頭痛	14	26	11	12	63	8.0%
その他	17	17	22	11	67	8.5%
計	232	120	239	195	786	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	76	50	26	18	170	56.3%
打撲・捻挫	36	21	27	15	99	32.8%
熱傷	0	5	3	2	10	3.3%
腰痛	0	2	3	7	12	4.0%
その他	0	4	6	1	11	3.6%
計	112	82	65	43	302	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	43	39	47	12	141	1.8%
禁煙相談	0	31	97	31	159	2.1%
眼科	6	3	10	13	32	0.4%
皮膚科	29	32	15	12	88	1.1%
耳鼻科	1	2	8	2	13	0.2%
歯科	6	4	0	3	13	0.2%
婦人科	10	6	4	1	21	0.3%
健診ﾌｫﾛｰ	560	359	169	117	1205	15.7%
身体計測	371	720	578	413	2082	27.1%
血圧測定	327	711	590	421	2049	26.7%
保健ｺｰｽ	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	164	200	414	169	947	12.3%
産業医面談	13	16	23	14	66	0.9%
心理・精神相談	204	172	196	167	739	9.6%
健康診断証明書	98	11	9	7	125	1.6%
計	1832	2306	2160	1382	7680	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	224	144	382	207	957	13.4%
与薬	171	119	209	172	671	9.4%
消毒	54	19	14	12	99	1.4%
休養室	32	36	30	14	112	1.6%
病院紹介	97	58	70	60	285	4.0%
心理的対応	141	137	158	135	571	8.0%
その他	1228	1315	1174	741	4458	62.3%
計	1947	1828	2037	1341	7153	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	47	62	89	85	283	38.3%
精神保健相談（医師）	90	62	71	53	276	37.3%
精神保健相談（看護職）	59	34	24	10	127	17.2%
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	7	7	0.9%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	2	0	0	2	0.3%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（医師）	1	1	0	4	6	0.8%
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	3	4	9	4	20	2.7%
電話相談（看護職）	4	7	3	4	18	2.4%
電話相談計	8	12	12	12	44	6.0%
計	204	172	196	167	739	100.0%

3）箱崎地区分室

箱崎地区分室の一般健康相談は，保健師 3 名（松園・荒川・豊田*，いずれも学生相談・精神相談，産業保健を兼務)・健康科学センターの内科系教官 4 名（一宮・丸山・入江・上園）・医学部からの非常勤医師 2 名（精神科 古賀，心療内科 古川）・事務職員 2 名（藤尾・安藤）で行った。

全体でのべ 6,878 名（前年度 5,651 名）が利用した。依然来室者は多い。来室者の身分（表 1），目的，症状などは表に示すとおりである。例年同様，内科的症状（表 2）は風邪症状が圧倒的で，外科的相談（表 3）は外傷や打撲・捻挫が多かった。内科・外科以外（表 4）では健診後のフォローや体重・体脂肪や血圧の自己測定も多いが，さまざまな心身の症状を訴えての健康相談が 2,782 名で最も多い。 処置（表 5）では保健師・看護師による心理的対応が多くなっている。箱崎分室では，多目的室ウイズ(with)やロビーで，細やかな心くばりの健康教室を実施中であり好評である。留学生や教職員の来室者も相変わらず多い。

*豊田千寿子保健師は職場環境室所属であるが，箱崎地区分室に常駐し，健セ教職員と協力して活動した。

（文責: 上園 慶子，松園 美貴，荒川　令)

表 1　来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	552	358	424	312	1646	23.9%
修士	544	380	418	291	1633	23.7%
博士	199	188	157	177	721	10.5%
教職員	313	722	486	308	1829	26.6%
研究生他	72	56	99	80	307	4.5%
その他	148	190	211	193	742	10.8%
計	1828	1894	1795	1361	6878	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
感冒	95	36	86	68	285	56.9%
上部消化管	8	8	10	6	32	6.4%
下部消化管	6	12	5	9	32	6.4%
頭痛	7	9	4	5	25	5.0%
その他	26	40	32	29	127	25.3%
計	142	105	137	117	501	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	37	30	25	9	101	46.5%
打撲・捻挫	19	11	19	9	58	26.7%
熱傷	4	4	5	3	16	7.4%
腰痛	2	3	1	1	7	3.2%
その他	15	7	6	7	35	16.1%
計	77	55	56	29	217	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	18	17	19	21	75	1.1%
禁煙相談	0	52	125	46	223	3.3%
眼科	11	8	8	9	36	0.5%
皮膚科	21	17	12	7	57	0.8%
耳鼻科	2	4	9	3	18	0.3%
歯科	3	6	6	9	24	0.4%
婦人科	8	4	11	7	30	0.4%
健診ﾌｫﾛｰ	612	602	286	86	1586	23.6%
身体計測	124	185	193	143	645	9.6%
血圧測定	52	57	94	63	266	4.0%
保健ｺｰｽ	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	1	0	1	0.0%
その他	74	111	117	113	415	6.2%
産業医面談	87	129	120	119	455	6.8%
心理・精神相談	626	677	758	721	2782	41.3%
健康診断証明書	67	18	10	25	120	1.8%
計	1705	1887	1769	1372	6733	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	235	267	326	269	1097	13.8%
与薬	73	68	103	72	316	4.0%
消毒	48	32	25	12	117	1.5%
休養室	30	39	32	22	123	1.5%
病院紹介	115	75	83	80	353	4.4%
心理的対応	603	663	743	704	2713	34.2%
その他	944	1024	792	462	3222	40.6%
計	2048	2168	2104	1621	7941	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	261	270	301	304	1136	40.8%
精神保健相談（医師）	127	172	180	177	656	23.6%
精神保健相談（看護職）	19	30	37	30	116	4.2%
ﾘﾄﾘｰﾄ	196	185	221	194	796	28.6%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	12	8	7	13	40	1.4%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（医師）	0	3	3	1	7	0.3%
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	2	3	8	2	15	0.5%
電話相談（看護職）	9	6	1	0	16	0.6%
電話相談計	11	12	12	3	38	1.4%
計	626	677	758	721	2782	100.0%

4）病院地区分室

病院地区分室は，医歯薬系の学生や教職員以外に，九州大学病院の職員の健康管理も担当しており，平成 17 年度から病院地区の専属産業医（九州大学病院を除く）となった入江が分室長を務めている。病院の建て替えに伴い，平成 19 年 12 月に旧九州大学病院歯科医療センターに移転した。

平成 23 年度の病院地区分室の一般健康相談（診療を含む）は，健康科学センター教員の入江（医歯薬系の専属産業医を兼任），丸山（九州大学病院専属産業医を兼任），ならびに非常勤内科医師 6 名，保健婦 1 名（戸田）と看護師 1 名（田中）が行った。精神保健相談は，心療内科医の入江と精神科医の一宮，非常勤精神科医が担当し，心理相談は，基本的に学生に対しては，非常勤の臨床心理士の中園照美先生，教職員に対しては磯貝希久子先生にそれぞれ週一日担当して頂いた。その他，平成 20 年度から安全衛生推進室所属の産業保健師の体制も強化されることになり，教職員の健診や健康管理業務の企画や運営などの中核的役割を担う病院地区は 2 名に増員された。平成 23 年度は，上田，三輪が従事した。

平成 23 年度の病院地区分室の来室者数は，学部生 707 名，大学院生 676 名，教職員 2,484 名，研究生 60 名で，その他を含めると総計 4,011 名であった。平成 22 年度（総計 3,980 名）と比べて来室者数がわずかに増え，主に教職員の来室の増加によるものであった。

教職員の来室者数は，平成 16 年度の 546 名から平成 17 年度 941 名，平成 18 年度 1,287 名，平成 19 年度 1,405 名，平成 20 年度 1,605 名へと増加の一途を辿っていたのが，平成 21 年度は 1,440 名に減少した。これは，一時的に移転した場所が手狭であったため，面談件数を制限したことによる。平成 22 年度は，2,440 名と再度増加傾向に転じ，平成 23 年度は過去最多を記録した。平成 16 年度からの大学法人化前と比べると，教職員の来室者数は約 5 倍となっている。大学法人化以降，教職員を対象とした健康診断事後措置や長時間労働者面接，心理・健康相談などの産業保健活動が充実してきていることや，後述するようなメンタルヘルス不調者が法人化を境に増加しているためである。

利用者数を疾患別にみると，内科系が 185 名（平成 21 年度 207 名），外科系が 56 名（同 88 名），内科・外科系以外が 4,419 名（同 4,143 名）であり，産業保健関係や心理相談関係など，内科・外科系以外の増加が著しかった。心理・精神相談は，前年の 1,051 名から 1,189 名へと増加している。臨床心理士による心理相談（196 名から 300 名へ），医師や看護職による精神保健相談（849 名から 884 名へ），いずれの場合も同様であるが，特に臨床心理士による心理相談の増加が著しい。平成 16 年度の心理・精神相談件数が 96 名であったことを考慮すると，実に約 12 倍もの極めて著しい増加であり，病院地区におけるメンタルヘルス不調者数の増加や対応件数の増加を示している。

ちなみに，平成 23 年度は，精神神経科の中尾智博医師，第二内科の二宮利治医師，浅野光一医師，医療経営管理学の馬場園明医師，桑原一彰医師，臨床薬理学の笹栗俊之医師に非常勤医師を依頼した。

（文責: 入江 正洋，戸田美紀子，田中 朋子）

表 1　来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	260	179	175	93	707	17.6%
修士	79	31	35	23	168	4.2%
博士	219	134	91	64	508	12.7%
教職員	643	765	619	457	2,484	61.9%
研究生他	32	13	16	8	60	1.5%
その他	19	22	15	19	75	1.9%
計	1,252	1,144	951	664	4,011	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	29	18	21	26	94	50.8%
上部消化管	6	3	4	3	16	8.6%
下部消化管	5	2	2	2	11	5.9%
頭痛	4	1	3	0	8	4.3%
その他	17	14	15	10	56	30.3%
計	61	38	45	41	185	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	10	4	4	3	21	37.5%
打撲・捻挫	3	3	5	5	16	28.6%
熱傷	1	0	1	0	2	3.6%
腰痛	2	0	1	2	5	8.9%
その他	7	1	3	1	12	21.4%
計	23	8	14	11	56	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	0	7	1	7	15	0.3%
禁煙相談	0	88	148	24	260	5.9%
眼科	4	2	5	2	13	0.3%
皮膚科	6	7	4	0	17	0.4%
耳鼻科	2	1	2	1	6	0.1%
歯科	12	9	1	4	26	0.6%
婦人科	1	2	0	1	12	0.3%
健診フォロー	764	470	271	131	1,636	37.0%
身体計測	35	94	81	33	243	5.5%
血圧測定	16	80	68	15	179	4.1%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	19	17	15	11	62	1.4%
産業医面談	113	181	175	175	644	14.6%
心理・精神相談	254	287	308	340	1,189	26.9%
健康診断証明書	58	43	10	14	125	2.8%
計	1,284	1,288	1,089	758	4,419	100.0%

表 5　処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	224	297	263	264	1,048	21.5%
与薬	50	78	114	25	267	5.5%
消毒	12	3	10	5	30	0.6%
休養室	12	12	13	8	45	0.9%
病院紹介	43	46	36	36	161	3.3%
心理的対応	233	201	299	337	1,070	22.0%
その他	892	672	450	235	2,249	46.2%
計	1,466	1,309	1,185	910	4,870	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	61	66	90	83	300	25.2
精神保健相談(医師)	166	185	185	187	723	60.8
精神保健相談(看護職)	25	36	31	69	161	13.5
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0.0
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0
電話相談(医師)	2	0	1	1	4	0.3
電話相談(ｶｳﾝｾﾗｰ)	0	0	1	0	1	0.1
電話相談(看護職)	0	0	0	0	0	0.0
電話相談計	2	0	2	1	5	0.4
計	254	287	308	340	1,189	100.0

5）大橋地区分室

表 1　来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	70	37	103	44	254	38.8%
修士	71	26	50	53	200	30.6%
博士	10	6	15	2	33	5.0%
教職員	29	22	54	30	135	20.6%
研究生他	2	2	4	1	9	1.4%
その他	5	2	11	5	23	3.5%
計	187	95	237	135	654	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
感冒	33	10	33	6	82	70.7%
上部消化管	0	2	3	0	5	4.3%
下部消化管	1	0	2	0	3	2.6%
頭痛	4	1	7	2	14	12.1%
その他	1	4	6	1	12	10.3%
計	39	17	51	9	116	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	16	14	21	10	61	66.3%
打撲・捻挫	5	5	11	5	26	28.3%
熱傷	0	2	0	0	2	2.2%
腰痛	0	1	1	1	3	3.3%
その他	0	0	0	0	0	0.0%
計	21	22	33	16	92	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	1	0	3	4	8	1.8%
禁煙相談	0	2	9	0	11	2.4%
眼科	0	0	1	0	1	0.2%
皮膚科	0	0	0	0	0	0.0%
耳鼻科	0	0	0	0	0	0.0%
歯科	0	0	4	1	5	1.1%
婦人科	0	0	0	3	3	0.7%
健診ﾌｫﾛｰ	41	4	12	0	57	12.5%
身体計測	2	3	10	3	18	4.0%
血圧測定	4	3	13	2	22	4.8%
保健ｺｰｽ	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	17	6	11	13	47	10.3%
産業医面談	0	4	1	3	8	1.8%
心理・精神相談	45	32	89	89	255	56.0%
健康診断証明書	16	4	0	0	20	4.4%
計	126	58	153	118	455	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	36	26	34	27	123	16.3%
与薬	37	18	39	18	112	14.8%
消毒	16	16	21	9	62	8.2%
休養室	1	1	10	4	16	2.1%
病院紹介	0	2	15	4	21	2.8%
心理的対応	45	31	83	78	237	31.3%
その他	69	20	77	19	185	24.5%
計	204	114	279	159	756	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	45	31	76	78	230	90.2%
精神保健相談(医師)	0	1	5	11	17	6.7%
精神保健相談(看護職)	0	0	0	0	0	0.0%
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0.0%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談(医師)	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談(ｶｳﾝｾﾗｰ)	0	0	7	0	7	2.7%
電話相談(看護職)	0	0	1	0	1	0.4%
電話相談計	0	0	8	0	8	3.1%
計	45	32	89	89	255	100.0%

6) 筑紫地区分室

筑紫地区の一般健康相談は，健康科学センター教員，眞崎，上園，丸山，入江，永野，一宮（精神保健相談）と保健師 1 名（濱田），事務職員 3 名（高原，笹部，吉村）で行った。

平成 23 年度の来室者数は，学部生 34 名，大学院生 856 名，職員 573 名，研究生･その他 54 名を合わせると 1,517 名であった。平成 22 年度と比較して約 400 名，昨年度の来室者数の 1／3 に相当する増加を認める。大学院生と教職員がともに 200 名ほど増加している。

疾患別利用者数では，内科が 112 名，外科が 73 名，内科・外科以外が 1459 名であった。内科・外科以外は健診フォローが 664 名であった。前年度と比較して 240 名ほどの増加し，健診フォローでの来室が増えていることは，健セの取り組みが評価されているものと思われる。

来室者数は，昨年の 1,127 名より大幅に増加した。修士課程が 150 名ほど増加で，博士課程は 50 名の増加である。ここ数年来の傾向であるが教職員が 200 名ほど増加している。内訳で検討すると，内科・外科ともに利用者数はほぼ横ばいである。しかしながら，疾患別で検討すると，心理･精神相談が昨年の 230 名から 221 名になっており，横ばいの状態である。減少したようにも見えるが，学外の医療機関への紹介もあるため，事実上は増加している可能性がある。また，産業医面談も 27 名と増加している。こちらも毎年増加の一途をたどっている。

産業医面談の中にもメンタル不調を訴える学生に関する教員からの相談が含まれており，心理・精神相談にあがっていない，メンタル不調の相談も少なくない。今後ともメンタルヘルスに関する啓発を行っていく必要がある。

保健活動としては，生活習慣病の予防，メンタルヘルスに問題を持つ学生の支援を中心として行った。分室の役割は広く学生のプライマリ・ケアを行うことである。今までにも増して，分室で幅広い機能も充実させるとともに，地区内における FD の実施などメンタルヘルス面での対応の強化が望まれる。

（文責: 眞崎 義憲，濱田 百合）

表 1　来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	13	7	7	7	34	2.2
修士	253	194	135	78	660	43.5
博士	96	57	26	17	196	12.9
教職員	96	172	206	99	573	37.8
研究生他	14	6	9	2	31	2
その他	6	8	1	8	23	1.5
計	478	444	384	211	1517	100

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	27	14	21	15	77	68.8
上部消化管	2	3	1	3	9	8
下部消化管	3	1	5	1	10	8.9
頭痛	2	2	1	0	5	4.5
その他	3	5	2	1	11	9.8
計	37	25	30	20	112	100

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	11	7	11	5	34	46.6
打撲・捻挫	11	6	3	1	21	28.8
熱傷	1	1	2	0	4	5.5
腰痛	3	0	0	0	3	4.1
その他	2	5	2	2	11	15.1
計	28	19	18	8	73	100

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	11	8	5	0	24	1.6
禁煙相談	0	45	112	29	186	12.7
眼科	2	1	2	0	5	0.3
皮膚科	1	2	4	0	7	0.5
耳鼻科	0	1	0	1	2	0.1
歯科	1	1	0	1	3	0.2
婦人科	1	1	0	0	2	0.1
健診ﾌｫﾛｰ	242	224	127	71	664	45.5
身体計測	29	33	15	22	99	6.8
血圧測定	31	39	13	21	104	7.1
保健ｺｰｽ	0	0	0	0	0	0
新入生面接	0	0	0	0	0	0
その他	41	17	12	9	79	5.4
産業医面談	4	9	7	7	27	1.9
心理･精神相談	62	57	55	47	221	15.1
健康診断証明書	25	6	2	3	36	2.5
計	450	444	354	211	1459	100

表 5　処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	67	75	51	44	237	13
与薬	53	54	48	38	193	10.6
消毒	13	10	10	4	37	2
休養室	4	2	1	1	8	0.4
病院紹介	31	27	24	13	95	5.2
心理的対応	46	40	37	26	149	8.2
その他	354	326	286	143	1109	60.7
計	568	534	457	269	1828	100

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	21	17	29	12	79	35.7
精神保健相談(医師)	28	28	22	28	106	48
精神保健相談(看護職)	10	7	3	6	26	11.8
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0
電話相談(医師)	1	0	0	0	1	0.5
電話相談(ｶｳﾝｾﾗｰ)	0	0	0	0	0	0
電話相談(看護職)	2	5	1	1	9	4.1
電話相談計	3	5	1	1	10	4.5
計	62	57	55	47	221	100

2. 産業保健活動

1）伊都地区センターゾーン事業場

伊都地区センターゾーン事業場の産業保健活動は，六本松を引き継ぎ一宮が嘱託産業医として担当している。引き続き教職員の相談件数はさほど多くなかった。

事業場の巡視・衛生委員会は年間を通して予定通り行われた。新しいキャンパスであるために主として屋外に安全面の問題を多く抱えている。自転車道などの整備がなされておらず交通問題は見過ごせない問題である。この地区は実験施設があるものの，その数は少

なくまた大きな施設でもないため，巡視においても安全面の問題は殆どない。

（文責: 一宮　厚, 三谷 梨沙）

2) 伊都地区ウエストゾーン事業場

伊都地区ウエスト・ゾーンでは，産業医永野と保健師高尾が毎月の職場巡視と安全・衛生委員会，ならびに健康診断および事後措置などの産業保健活動を担当した。

教職員の伊都地区ウエスト・ゾーン分室への来室者は年々増加傾向にあったが，23 年度 1,384 名とやや減少し，来室者に占める割合は 20～25%程度で落ち着きつつある。産業医の面談件数は 66 名であり，健診事後措置についての面談と心理・精神面での面談が主であった。

職員健診の結果に基づいて行った，肥満者を対象とした継続的な生活指導「リフレッシュプログラム」は本年度も好評であり，プログラム終了後も測定を継続する職員が多かった。

安全・衛生委員会の主な議題は，事故報告書・ヒヤリハット報告書の作成，路面・法面の陥没箇所の修復等，実験室等の試薬・設備管理についてであった。また，伊都ウエスト・ゾーンに存在するが他の事業場の管理対象となっている研究施設については，23 年 6 月から各研究施設職員（7 施設）がオブザーバーとして安全・衛生委員会に参加しており，新たに巡視場所の対象となった。

職場巡視は毎月 1 回，産業医，労働衛生コンサルタント，安全・衛生委員，保健師，巡視先の衛生管理者，および人事係のメンバーで実施された。主な指摘事項は，棚等の転倒防止，整理整頓，転落防止，試薬の管理方法であった。各部門でも週 1 回，衛生管理者が巡視を行っており，安全衛生に関する労働者の意識も向上しているが，部門により報告状況に差があり，更なる周知・徹底が必要である。

（文責: 永野　純，高尾 祐果）

3) 箱崎地区事業場

箱崎地区事業場の産業保健活動は，産業医 1 名(上園)と専任衛生管理者の産業保健師 1 名（豊田千寿子: 総務部人事課職場環境室 所属，環境安全衛生推進室勤務）を中心としつつ，健康科学センターの内科系教員 3 名（一宮・丸山・入江)，保健師・看護師 2 名（松園・國松），事務職員 2 名（H23.4～H24.3;藤尾・安藤）の全面的協力を得て進めた。

(1)日常の健康相談

箱崎分室には平成 23 年度に全体で 6,878 名の利用者があったが，教職員の利用は 1,829 名（26.6%）であった。健診の事後処理や体重・体脂肪・血圧の自己測定のための来室者が多かった。休職中や復職後の職員など，心身の問題を抱える職員に対する面談を 1~2 カ月毎（延べ 503 名）に実施しており，このための来室者も多い。

(2)健康診断

6 月に実施した職員健診の事後処理のため 8～9 月から職員が来室したが，再検査は期限を区切らず，職員の都合に合わせて実施したため，年末まで受診者が続いた。また，過体重の職員を対象に，ステージ理論を利用したリフレッシュプログラムを展開し，その体重管理のフォローのためや個人的な関心のため，自己測定を継続する教職員も多かった。受診後，有所見者には所見の種類により，紹介状を発行して再検査や治療を勧告したり，或いは面談を行って事後指導を実施した。

(3)裁量労働者の報告書

箱崎地区事業場にある部局の教員から，1 年間で 766 件の報告があった。全員今までに報告をしたことがある人達であり，初回の報告は無かった。健康診断の結果を参考にして，健康状態を確認し，面談希望者には面談を実施した。

(4)長時間労働者の面談

時間外勤務が 1 カ月で 100 時間を超えるか，2～6 カ月の平均で 1 か月につき 80 時間を超える場合は，面談を行った。H23 年度は延べ 5 名が対象となった。面談結果は意見書にて所属部署や部局へ報告し事後対策を依頼した。多くの場合，面談時には既に疲労が回復していたが，回復が完全でない職員については面談を継続した。

(5)職場巡視

箱崎地区・貝塚地区の部局を順に，毎月 1 回巡視した。巡視は産業医，専任衛生管理者の他，巡視先部局の衛生管理者 1～2 名・工営係 1～2 名が加わり，1～1.5 時間程度 見て回った。巡視結果は産業医と専任衛生管理者の連名で報告した。年々，部局での対策が進んで指摘事項の改善が見られるものの，相変わらず，整理・整

頓・清潔・清掃の 4S, 高圧ボンベの固定, 本棚等の固定, 消火器・防災設備・避難通路, 喫煙に関することが指摘された。薬品管理システムへの薬品登録は徐々に進んでいた。

(6)安全・衛生委員会

箱崎地区事業場の衛生委員会は箱崎地区部会（委員長: 人文科学研究院長,高木彰彦先生）の担当で毎月 1 回, 原則として第 4 火曜日の午前 10:30 から開催された。産業医・専任衛生管理者と労働衛生コンサルタントからの職場巡視報告と, 対象部局からの改善報告, 各部会からの活動報告がなされ, 赤水問題・喫煙場所・駐車場問題・放置自転車問題などが引き続き議論された。

（文責: 上園 慶子, 豊田千寿子）

4）病院福岡地区事業場

病院福岡地区の平成 23 年度の産業保健活動は, 産業医丸山と三輪彩産業保健師が担当した。年間を通じた産業医の面談件数は, 2,484 名であり（病院教職員と馬出地区教職員を含む）, 職員健康診断の事後措置としての面談と長時間勤務に対する面談が主であった。職員数もさることながら長時間勤務に対する面談数の多さは病院事業場の最大の特徴である。これは病院職員は対人業務が多く, 業務は常に逼迫し予見しにくく負荷が大きいことに起因するものと言える。

病院職員における産業衛生相談や長時間労働の面談に関しては, 事務系職員を主に入江が, 医療系職員を主に丸山が対応し, 精神的な問題に関しては一宮が対応した。事務は神田（常勤）と奥村（非常勤）が担当した。職員健康診断で血圧高値, 脂質異常, 耐糖能障害, 過体重を指摘された職員に対しては, 他地区同様リフレッシュプログラムを呼びかけており, 徐々に対象者も増えている。

職場巡視は病院地区事業場においても年度計画に基づいて予定通りに行われた。安全衛生週間においては病院長をトップとした安全衛生パトロールを行い当月の職場巡視もこれに替えた。病院内も病棟, 事務部, 検査部や放射線部など業務の特殊性によって指摘事項はまちまちであったが, 室内照度の問題（照度不足）や配線の問題（タコ足, ケーブルの過長と巻線）はかなり共通した指摘事項であった。通年での職場巡視実施箇所を表に示す。

安全衛生委員会も年間を通して予定通り行われた。委員会では巡視報告以外にも職員健診や特殊健診の案内と結果報告, 時間外労働の実態, 衛生週間の取り組み, 年間の労働災害の内容と件数などについて議論された。

九州大学生体防御医学研究所附属病院から九州大学病院として統合された別府地区事業場の巡視をどのように進めるか現在検討中である。

	巡視実施箇所
4 月	南棟 3～5 階
5 月	南棟 6～7 階
6 月	南棟 8～9 階
7 月	南棟 10～11 階
8 月	北棟 3～5 階, 栄養管理室
9 月	北棟 6～7 階
10 月	北棟 8～9 階
11 月	北棟 10～11 階
12 月	総合外来, 医療器材サプライセンター
1 月	検査部
2 月	放射線部, 病理部, 遺伝子・細胞療法部
3 月	事務部

（文責: 丸山 徹, 戸田美紀子）

5）馬出地区事業場

馬出地区事業場の産業保健活動は, 産業医の入江と産業保健師の上田が担当した。馬出地区事業場と病院福岡地区事業場を合わせた病院地区分室への教職員の来室者数は, 平成 16 年度の 546 名から平成 17 年度 941 名, 平成 18 年度 1,287 名, 平成 19 年度 1,405 名, 平成 20 年度 1,605 名, 平成 21 年度 1,440 名（一時移転のため減少）, 平成 22 年度 2,440 名, 平成 23 年度 2,484 名へと著しい増加を示しており, 大学法人化以降約 5 倍となっている。概して, 教職員のメンタルヘルス不調や過重労働, あるいはそれらに起因する休職者数が増加し, そのための面談件数が増えている。特に, 心理・精神相談は, 平成 16 年度の 96 名から平成 23 年度は 1,189 名となり, 実に約 12 倍もの増加である。医師による精神相談の大部分は, 産業医である入江が担当している。産業医の入江は, これまで職場メンタルヘルスや平成 13 年の脳・心臓疾患の労災認定基準改正の草案作成に携わってきた経緯から, 病院職員のメンタルヘルスや過重労働に関する面談も担当しているが, 近年は事務系職員や医師のメンタルヘルス問題への対応件数が増えている。

（文責: 入江 正洋, 上田 真衣）

6) 大橋地区事業場

大橋地区産業医として，職場巡視を行った。

（文責: 山本 和彦）

7) 筑紫地区事業場

筑紫地区の平成 23 年度の産業保健活動は，産業医眞崎と保健師濱田が担当した。教職員の来室者数は 573 名で昨年より 190 名と顕著に増加している。また，産業医面談を求める職員が増加して, 27 名となった。筑紫地区での産業保健活動の認知が広がり来室者が増えたのと同時に，学生，教職員のメンタルヘルス問題に関して対処に苦慮している指導的立場の教員が多く相談に訪れている。

長時間労働を行っている裁量労働勤務者が著しく多いわけではないが，長時間労働を行っている者はほぼ固定化しており，報告書を見るたびに改善を指示しているところであるが，長期的に改善が見られることは少ない。啓発とともに全学での対応が望まれる。

事業場の職場巡視・衛生委員会は年間を通して予定通り行われた。総合理工学府自体が，産業との結びつきが比較的強いため各衛生委員の意識は高く活発な議論が行われた。衛生委員会と学務委員会が主導して，筑紫地区の教職員がまとまって作成した「安全の指針」は学生・教職員の研究・実習環境における安全・衛生管理についてまとめたものであり，英語版も作成され配布された。

職場巡視ではここ数年の巡視成果が蓄積され，指摘事項の改善が多く見られようになった。その反面，改善が見られない部署が際だってきた面も否めず，今後はさらなる指導が必要だと考えられる。

（文責: 眞崎 義憲）

3. 学生相談

平成 23 年度は，心理相談は，10 月より松下智子准教授が赴任し，常勤カウンセラー2 名，非常勤のべ 11 名（1 回 4 時間，週 1 回～月 2 回）体制になった。相談対応時間は伊都ウエストで 1 日，箱崎で 2 日増加した。大橋地区での常勤カウンセラー（木曜）の相談を開始した。これまでのところ，ほとんどが教員との連携ケースで，ひきこもり傾向の学生を指導教員と協働して卒業に向けて対応したり，危機対応について保護者と連携し精神科入院対応があったり，すでに医療受診している学生が学内サポートを行いながら教職員と連携したりするようなケースが多い。また，病院地区での常勤カウンセラー（金曜午後）の相談も開始し，他キャンパスにまたがるケース，教員との連携が必要なケースの対応を行いやすくなった。

（1）箱崎地区分室

箱崎地区・学生相談では，常勤カウンセラー2 名（福盛: 火・金，松下: 月），非常勤カウンセラー，（吉永先生，斎藤先生，高野先生，太田先生: 原則各週 1 回・4 時間が主）（高野先生は複数曜日）で対応した。人間環境学府より佐々木先生に学内非常勤で相談を担当していただいた。

（2）伊都地区ウエストゾーン分室

週に 1 回，水曜日に伊都地区で学生の居場所活動（スタッフ: 喜安悠氏（人間環境学府））を開始した。利用者は毎回で 1～2 名と少なかったので，今後周知をすることが必要である。

（3）病院地区分室

非常勤カウンセラーの中園先生（週 1 回, 4 時間）と教職員相談担当カウンセラー磯貝先生が担当，10 月より松下が週に 1 回担当した。

（4）筑紫地区分室

筑紫地区学生相談では，週に 4 時間ほど，常勤カウンセラー 福盛・松下が対応した。

（5）大橋地区分室

これまで吉永先生，井上先生，馬場先生に加え, 10 月より，福盛が週に 1 回，4 時間で新たに相談対応を行うようになり，相談室を快適に相談できるようにリニューアルした。平成 23 年度はほとんどが教員との連携ケース。ひきこもり傾向の学生を指導教員と協働して卒業に向けて対応したり，危機対応について保護者と連携し精神科入院対応があったり，すでに医療受診している学生の学内での修学サポートを行いながら教職員と連携したりするようなケースが多い。

相談件数は伊都ウエスト 283 件，伊都センター4 件，箱崎 1,136 件，病院 300 件，大橋 230 件，筑紫 79 件の合計 2,032 件であった。

長期休み期間中は常勤のみで相談対応を行った。

＜個人カウンセリング＞

副次分類によれば，不安，うつ，などの問題，対人関係の問題，休学・復学の問題などが多い。近年発達の偏りや発達障害を疑われる事例などが多くみられ，コミュニケーションの問題や不登校，教員との関係，就職活動の困難などのテーマでの相談が目立つ。また関係

者の相談（保護者・教職員）の相談が増えており，学内各部署と連携しながら心理支援を行っている。

＜サイコリトリート活動＞

サイコリトリート（学生の居場所活動）は，活性化してきたが，平成23年度は月に1～2回の頻度で行事を実施した。平成21年度からスタッフとして人間環境学研究院の大野真利奈氏，九州産業大学の山川京子氏に入ってもらっているが，今年度も継続してスタッフとして活動していただいた。また，九州産業大学の峰松教授にも行事等にご参加いただいている。

リトリートのメンバーが，福岡市こども総合相談センターでボランティア活動をしたりといった，居場所間交流も行われている。

＜親の会活動＞

親の会を2回行った。第1回は平成23年9月10日（土）13:00～16:00「ミニシンポジウム「居場所活動から社会参加（就労，その他）へ」というテーマで，峰松 修先生（九州大学名誉教授，九州産業大学教授），明石久美子先生（福岡市こども総合相談センター），緒川秀俊先生（ひきこもり成年地域支援センター）にご講演いただいた。また第2回は平成24年3月17日（土）13:00～16:00，人生の停滞や問題や悩み，迷いに対する見方や知恵，乗り越え方，というテーマで，峰松修名誉教授に講演していただいた。

（文責: 福盛 英明）

相談内容		学生相談					
地区別		箱崎地区	病院地区	筑紫地区	大橋地区	伊都地区	
						センター	ウエスト
月曜日	午前	松下					福盛
	午後	松下 △斉藤 △佐々木			△吉永 （月2回）		福盛
火曜日	午前	福盛					松下
	午後	福盛 △吉永	△中園		△馬場		松下
水曜日	午前			福盛			
	午後	（△高野）		松下			
木曜日	午前				福盛		松下
	午後	△高野			福盛		松下
金曜日	午前	福盛・松下ミーティング					
	午後	福盛 △太田	松下		△井上		△中園

4. 精神保健相談

精神的な問題について，健康科学センターの各キャンパス分室において医師が診療したものを精神保健相談業務として報告する。平成15年度以降，常勤の精神科医（一宮）と心療内科医（入江）が中心となって精神症状を有する学生ならびに教職員の診療業務に携わっている。精神面の問題での談者は年々増えており，カウンセラーを始め，内科医，保健師・看護師などによる対応も増えている。診断は15年度からICD-10に従って分類している。

常勤の精神科医（一宮）は，平成23年度も大橋地区を除くすべてのキャンパスにおいて週に半日の相談の機会を確保すべく各地区を転々として診察に当たった。原則として月曜から水曜をほぼ半日毎各地区での診療に当て，それでは不十分な場合，木曜や金曜の半日を病院地区などで診療に当てた。金曜午前は従来から九大病院精神科神経科の外来で診察をしてきたが，そこでも一部の九大の学生の診察を行っている。そもそも常勤の精神科医1人では5つのキャンパス（7つの事業場）の全てをカバーするには十分ではない。そのため，従来通り医学部精神科神経科の教員に非常勤業務をお願いした。23年度は箱崎地区には水曜に平岡健太郎医師と本田慎一医師，病院地区には水曜に中尾智博助教

に来ていただいた。また，伊都地区には金曜日に外部から川島範子医師に来ていただいている。

常勤の心療内科医（入江）は相談件数の多い箱崎，病院地区と，筑紫地区において診察に当たった。また各地区では，他の内科医師も精神面の問題を抱えた学生を診療している。

教員については，主たる診察業務は産業医としてのそれである。休職やその後の復職の可否に関する手間のかかる判定業務が多く，入江と一宮の業務の多くを占めている。

こうして平成23年度の精神面に関する診療は学生134名と教職員240名，そのほか卒業生などの32名に対して行った。

学生の診療者数は前年度が多く 161 名であったので16.8%減少し過去最低となった。診察回数は延べ624回で前年の690回に比べ約9.6%減少し，1人当たりの診察回数は前年度の約4.7回でほぼ変わらない。長期の治療を要する学生は市内の医療機関を紹介するが，九大病院に受診することができる学生は引き続き大学病院外来でも治療している。

教職員は前年度の252名に比べて4.8%減少した。独法化直前の平成15年の23名に比べると毎年着実に増加して10.5倍にも増加したことになる。延べ診療回数は1024回で前年の946回に比べ8.2%増加している。また1人当たりの診察回数は前年度の約3.8回から約4.3回／人（最多21回～最少1回）に増えた。産業保健は，復職後の職場環境調整などのために職場の上司との面談が必要で，本人の診察だけでは終わらないのが普通である。この上司等との面談業務が増えており，

教職員との面談時間は増加した。産業医としての業務にますます多くの時間を取られている状況である。

診断内訳は，表に示すとおりである。産業保健においては，職員自身のみならず，職場での対応などのために関係者支援が重要になり時間も割かれることになる。

	統合失調症	感情障害	ストレス関連（含む神経症）	人格障害	その他	関係者面談ほか	合計
学生	2	13	98	0	21	0	134
職員	6	32	76	0	0	126	240

（文責: 一宮　厚）

5. 健康診断

学生定期健康診断

平成23年度の学生定期健康診断は，例年通り病院地区の同窓会館を会場として実施した。4月4, 5, 6, 7日が新入生（新入修士学生等を含む），12日から21日までが在校生を対象とした健診であった。最終日の4月22日は，新入外国人留学生の健診日とした。その後，6月下旬まで再検査や精密健診を行った。さらに，肥満学生に対する「ウェルカム」生活習慣改善プログラムを実施した。

平成 23 年度の定期健診の全体的な受診数は 14,077人，受診率は74.2%で，前年度の74.1%から僅かに上昇した。例年と同様に，学部新入生は98.6%と高い受診率を示し，就職活動年に相当する学年では受診率が高くなるものの，その間の学年，とりわけ学部2年生の低い受診率も例年と同様であった。さらに，学部 2 年生は，昨年度と同様，休講措置の配慮がなされなかったことの影響を受けて，44.2%と低調であった。また，学部によるばらつきが小さくないことも例年通りであり，受診率が低い学年や学部では，当該部局等に働きかけているものの，効果が見られない集団も存在する。

健診の実施については特に大きなトラブルはなく，日程通りに無事終了した。ただし，指定日外受診者の中には健診項目の異なる者があり，その対応が煩雑であったことが反省材料として残る。

なお，伊都地区でも定健を実施すべく，定健内容の見直し，関係部署への働きかけなどに努めた結果，平成25年度よりこれが実現する見通しとなった。伊都地区学生の利便性が向上し，受診率の向上につながることを期待している。

（文責: 永野　純）

精密健診

定期健康診断で精密検査が必要と判断された者について，精密健診を行った。心電図や心音にて心疾患が疑われた者は，健診会場にて健康科学センター医師が診察を行い，必要に応じて後日分室で面談を行った。血圧の高い者（150/90 mmHg 以上）や脈拍の速い者（110 bpm 以上）は，後日分室にて二次測定および自己測定を行い，異常が続く場合は医師が診察を行った。尿検査異常（蛋白または糖が 1+以上）のあった者は，後日分室にて最大 2 回の再検査を行った。既往歴などから必要と判断された者についても，分室にて診察を行った。これらの健診にて，さらなる精査や治療が必要と判断

された者については九大病院などの二次医療機関へ紹介した。

胸部X線（間接撮影）で異常所見のあった者のうち，骨格系異常者（高度の側弯など）は整形外科に紹介し，心疾患が疑われた者は，分室にて健康科学センター医師が診察を行った。これ以外の者（主に呼吸器疾患が疑われた者）については，福岡結核予防センターの県庁内診療所および伊都，病院，箱崎の 3 地区で検診車による直接撮影を行った。その結果治療または精査が必要な者は九大病院へ紹介し，精査は不要だが経過観察が必要な者は 3 ヶ月，6 ヶ月，または 12 ヶ月後の再検査（直接撮影）を行った。胸部X線の読影（間接撮影，直接撮影とも）は，九大病院放射線科の全面的な協力のもとに行われた。

以上についての該当者数は，「資料」章の「定期健康診断精密検査実施状況」項に示す。

（文責: 永野　純）

職員健康診断

大学法人化以降，国立大学時代に行っていた健康診断から，労働安全衛生法に則った健康診断へと順次移行し，現在はほぼその体勢が整っている。国立大学時代に低かった一般健康診断の受診率も，法人化以降は受診率を高めるための様々な活動を行い，全学的にもこれに呼応するようになり，平成 22 年度の職員総合健康診断（一般健康診断および前期特殊・特定業務従事者健康診断）の受診者数は 5,494 人，受診率は 99.37%（平成 20 年度は 98.91%，21 年度は 99.01%）に達している。具体的な健康診断の種類と時期は以下の通りである。

・一般健康診断（6 月）
・特定業務従事者健康診断（前期 6 月，後期 11-12 月）
・特殊健康診断（前期 6 月，後期 11-12 月）
・雇入時健康診断（各月随時）
・労災二次健康診断（8 月）
・海外派遣労働者健康診断（随時）
・遺伝子組換え及び研究用微生物実験従事者健康診断（11 月）
・ＶＤＴ作業従事者健康診断（11 月-12 月）
・電離放射線健康診断（2 月, 4 月, 9 月, 11 月）
・大腸集団検査（11 月）
・胃集団検査（11 月）
・子宮頚がん検査（11 月）

このうち，雇入時健診の受診数は 1,420 人，後期特殊・特定業務従事者健診は 2,480 人，海外派遣労働者健診は 18 人，遺伝子組換え等実験従事者健診は 1,390 人（学生 882 人を含む）であった。

（文責: 永野　純）

職員健康診断・事後措置

総合健診等の結果，再検査や精密検査が必要とされた事後措置対象者は以下の通りであった。

・二次検査（尿）：769 人
・二次検査（血圧）：280 人
・要産業医面談: 175 人
・要精査（再検査）：1,130 人
・治療継続勧奨: 1,041 人

事後保健指導として，肥満者に対する「リフレッシュプログラム」（生活習慣改善のために本学独自に開発した特別プログラム）を勧奨した。参加同意者は 122 人（昨年度は 92 人）であった。

（文責: 永野　純）

遺伝子組換えおよび研究用微生物実験従事者等の健康診断

本学では，九州大学遺伝子組み換え実験安全管理規則および九州大学研究用微生物安全管理細則の規定に基づいて，遺伝子組み換えおよび研究用微生物を用いた実験に従事する職員，ならびに学生を対象として，特別健康診断を実施している。遺伝子組み換え実験安全委員会の委員である健康科学センターの教員（医師），および病院地区の保健師が実務を行い，総務部職場環境室が事務処理を担当している。

本年度の対象者は，1,396 名（職員 506 名，学生 885 名）であった。全員を対象に，質問票を用いて既往歴，現在の治療歴，自覚症状，定期健康診断受診の有無と結果についての問診を行った。

昨年度から，下記基準に示すレベル 3 以上は全員特別健康診断対象者とし，下記基準 2 あるいは 3 に該当する者に関しては健康科学センターの教員（医師）が問診票による判定を行った上で対象者を決定し，特別健康診断を実施することとなった。健診結果の総合判定は同じ教員が実施することになった。

以下に特別健康診断実施にかかる要否判断の基準を示す。

1. レベル 3 以上（「遺伝子組み換え実験従事者のうち封じ込めレベルが P3 以上」あるいは「研究用微生物実験従事者のうちレベル 3 以上の研究用微生物を用いて実験を行う者」）の実験従事者

2. レベル 2 の実験従事者のうち，人に対する病原微生物を取り扱う者で，かつ「自覚症状」や「定期健康診断受診状況と結果」等の記載から受診が必要と判断された者。
3. その他，とくに受診が必要と判断された者。

上記の基準2, 3に該当した者4名について，問診票　などによる判定を実施し，4名全員が特別健康診断の対象外となった。特別健康診断はレベル3に相当する該当者が5名あり，「遺伝子組み換え実験従事者等健康診断」を実施した結果，「総合判定」では全員　異常なしの結果となった。

質問票は，平成 16 年以降は職場環境室で保管している。また，血液検査の余剰血清は，筑紫地区の冷凍庫で保管しており，その保管期間は原則として5年間である。

（文責: 眞崎 義憲）

外国人留学生の秋季特別健康診断

実施期日: 平成 23 年 10 月 26 日

実施場所: 健康科学センター病院分室および歯学部講義室

対象者: 春季留学生は，留学生センターのみならず正規の学部生にも含まれるため，全体数の把握は困難であった。秋季入学者の留学生で，入学の際に胸部X線撮影を含む健康診断を受け，健康診断書を提出し，かつ結果に異常が無いと判断された場合は，健康診断受診を免除する措置を行った。その結果，秋季の留学生健診対象候補者 528 人のうち，受診が必要であった者は 387 人であった。この数は，年々増加傾向にある。

受診者: 339 人（平成 23 年度 303 人）

受診率: 87.6%（平成 23 年度 83.5%）

検査項目: 身体測定，尿検査，血圧測定，心電図，内科診察，胸部X線撮影

秋季は，胸部 X 線撮影の異常者は 15 名，尿検査の異常者は 17 名，血圧測定の異常者は 7 名，その他内科診察での有所見者が 2 名であった。尿検査･血圧･心電図に所見がある学生は健康科学センター分室において二次･精密検査を行った。胸部X線撮影で精査が必要とされた学生は，日本人学生と同様に，放射線科で直接撮影による再検査を行い，必要に応じて九大病院呼吸器科や放射線科等を紹介した。

（文責: 永野　純）

大学院生対抗駅伝大会のための健康診断

実施期日: 平成 23 年 11 月 7 日～11 月 29 日

実施場所: 健康科学センター伊都地区ウエストゾーン分室

対象者: 工学府駅伝大会

受診者: 103 人（H23 年度 95 人）

工学府駅伝大会への出場希望者を対象として大会直前に実施している。ただし，本健康診断は，学生定期健康診断を受診していることを受診の条件とし，項目は医師による問診と診察である。参加不可と診断された者はなく，7人が条件付きで承認，残る96人は参加可能と診断された。

（文責: 永野　純）

6. 健康および安全・衛生に関する全学会議

1）保健管理専門委員会

保健管理専門委員会は，健康科学センター長を委員長とする全学的な学生保健管理業務に関する会議であり，本会議を通じて学生保健管理に関する日常業務への全学の理解と協力を得ている。委員は地区別に定めた順番で選出された 12 名で構成されている。

平成23年度も前年度と同じく以下のような内容について開催した。筑紫地区事務部教務課保健係が事務を担当している。

（文責: 上園 慶子）

（第 1 回）

日時: 平成 23 年 7 月 14 日（木）　13 時 30 分から

場所: 箱崎理系地区 21 世紀交流プラザ 1　2 階 講義室A

報告:

1. 平成 22 年度の学生自殺者について
2. 平成 23 年度新入生面接の結果について
3. 健診のデジタル化について

議題:

1. 副委員長の選出について
2. 平成 22 年度学生健康診断等経費の決算（案）について
3. 平成 23 年度学生健康診断等経費の予算（案）について
4. その他

（第 2 回）

日時: 平成 23 年 9 月 8 日（木）　13 時 30 分から

場所: 箱崎理系地区本部第2庁舎　2階 第二会議室
議題:
1. 平成24年度学生定期健康診断実施要項（案）について
2. その他

（第3回）
日時: 平成24年2月9日（木）　13時30分から
場所: 箱崎理系地区21世紀交流プラザ1　2階 講義室A
報告:
1. 平成23年度学生保健管理に係る年間行事について
2. 結核の発生について
3. インフルエンザの届出について
4. 卒煙Qについて
5. 平成24年度以降の学生定期健康診断について
6. その他
議題:
1. 平成24年度学生保健管理計画（案）について
2. その他

2）環境安全衛生推進室会議

（第1回）
1. 日時: 平成23年5月31日（火）16時00分～17時05分
2. 場所: 本部第二庁舎3階　第3会議室
3. 報告事項
（1）各部門の報告事項
①健康衛生管理部門
3月23日及び5月25日に開催された部門会議において報告，審議した事項について，以下のとおり報告があった。
・職員のメンタルチェックについて
・平成23年度卒煙プログラムについて
・胸部エックス線撮影のデジタル化について
・海外派遣労働者の健康診断について
・人間ドック等の受診者への対応について
②環境安全管理部門
部門会議における化学物質管理規程の検討状況について報告があった。また，化学物質管理支援システムの移行について，ワーキング・グループを設置して検討を開始することを了承いただきたい旨の発言があったため，追加議題とすることとなった。
③高圧ガス等安全管理部門
箱崎地区高圧ガス製造施設保安管理協議会内規を制定するため，関係部局と調整を行っている旨の報告があった。
④特定分野安全管理事務部門
・実験動物飼養保管施設の調査については，順調に進んでおり，6月27日に終了予定である。
・6月7日，8日に国立大学ＲＩセンター長会議を本学の当番で開催する。
⑤エネルギー資源管理部門
4月26日に開催された部門会議について，以下のとおり報告があった。
・平成22年度エネルギー使用量について
・平成23年度計画について
・平成23年度省エネルギー（夏季）パトロールの実施について
・省エネポスターについて
（2）第8回七大学安全衛生管理担当者連絡協議会について
4月20日に東京大学で開催された協議会の概要について報告があった。
（3）平成22年度職員総合健康診断の受診状況について
平成22年度職員総合健康診断の受診率は，99.4%であり，昨年度の 99.01%より少し上がった旨の報告があった。
（4）平成23年度職員総合健康診断の実施について
平成23年度職員総合健康診断を6月1日（水）から6月23日（木）の間に学内の各地区において実施すること，また，学内の各地区において受診できない場合には，6月1日（火）から6月25日（土）の間に健康財団クリニックにおいて受診が可能であることについて報告があった。
なお，5月12日付けで各部局等へ通知し，各職員へ受診票を配付済みである旨の説明があった。
（5）平成22年度後期作業環境測定結果について
平成22年12月から平成23年1月 に実施した作業環境測定の結果について，以下のとおり報告があった。
・有機溶剤，特定化学物質463物質，粉じん12作業場について測定した結果，5カ所が，管理区分第2及び第3であった。
・結果は，各事業場総括安全衛生管理者及び各部局長に通知，管理区分第2及び第3の作業場については，職場巡視を実施した。
・職場巡視の報告を該当部局へ送付し，改善報告を依頼

する。

（6）東日本大震災を踏まえた省エネ対策の推進に向けて

5 月 24 日開催の部局長会議において報告が行われた，東日本大震災を踏まえた省エネ対策の推進について説明があった。

4. 議題

（1）平成 23 年度計画について

平成 23 年度計画を具体的に実行するため，引き続き作業ワーキング・グループにおいて，検討を開始することについて説明があり，審議の結果，これを議決した。

なお，作業ワーキング・グループは，上園室長，横本環境安全衛生推進室教授と施設部 及び職場環境室の構成であるが，必要に応じ，推進室会議メンバーに協力いただきたいとの依頼があった。

（2）化学物質管理支援システムの移行について

化学物質管 理支援システムの移行のため，ワーキング・グループを設置して検討を開始することについて説明があり，審議の結果，これを議決した。

※次回開催日

7 月下旬開催予定とし，後日日程調整の上，職場環境室安全衛生係から通知することとした。

（第 2 回）

1. 日時: 平成 23 年 8 月 1 日（月） 16 時 00 分～16 時 40 分

2. 場所: 本部第一庁舎 2 階 第 1 会議室

議事に先立ち，オブザーバーとして出席いただく近藤施 設部長の紹介が行われた。

3. 報告事項

（1）各部門の報告事項

①健康衛生管理部門

6 月 15 日及び 7 月 20 日に開催された部門会議において報告，審議した事項について，以下のとおり報告があった。

・平成 23 年度職員総合健康診断の受診状況等について

・胸部エックス線撮影のデジタル化について

・人間ドック等の受診者への対応について

・福岡東労働基準監督署の訪問調査について

・七大学事故情報共有システムへのデータ提供について

②環境安全管理部門

平成 22 年度の化学物質登録状況調査結果について報告があった。なお，化学物質管理支援システムについて，前回の会議で設置が承認された移行検討ワーキング・グループにおいて，検討した結果，現時点では，移行を行わず，現システムへの登録を促進していくこととなった旨の説明があった。

③高圧ガス等安全管理部門

7 月 26, 27 日に国立七大学安 全衛生管理協議会高圧ガスワーキンググループを開催，各大学が共通して使用できる高 圧ガス関連の安全教育教材を作成するための検討等を行った旨の報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

・6 月 7 日，8 日に国立大学ＲＩセンター長会議を本学の当番で開催，無事終了した。

・上記会議において，昨年度実施された管理下にない放射性同位元素等に関する一斉点検結果について，調査対象 3,065 事業所のうち 3,063 事業所から回答があり，発見報告が 60 件（うち大学・教育関係 28 件）であった旨の報告があった。

・医学研究院における動物実験中，職員が負傷する事故があり，再発防止対策を講じるとともに，改めて注意喚起が行われた。

・実験動物飼養保管施設の調査が 6 月 27 日に完了，対象 68 施設を確認し，概ね良好であったが，施設基準を満たしていない施設については，施設部と協議の上，対応することとしている。

⑤エネルギー資源管理部門

省エネパトロールを 7 月 19 日から 7 月 25 日に実施した旨の報告があった。なお，実施結果は，次回の会議において報告する旨の説明があった。

（2）平成 23 年度東京大学「安全の日」安全講演会について

7 月 5 日に東京大学で開催された講演会の概要等について報告があった。

（3）平成 23 年度全国安全週間について

7 月 1 日から 7 月 7 日の全国安全週間及び同週間の行事として，各安全・衛生委員会等において実施された事項について報告があった。

（4）平成 23 年度安全衛生セミナーＩの実施について

作業主任者等を対象とした「安全衛生セミナーＩ」を 7 月 13 日開催し，33 名の参加があったことについて報告があった。

（5）平成 22 年度後期作業環境測定結果に基づく改善報告について

労働衛生コンサルタントの職場巡視報告を該当部局

に送付した後，提出のあった改善報告について説明があった。 なお，作業環境測定結果が第 2 管理区分であった医学部基礎研究Ａ棟 BC060 室については，まだ巡視を実施していないため，状況を確認するとの説明があった。

4. 議題

（1）国立七大学事故情報共有システムについて

・七大学における事故情報の共有については，大阪大学から提案があり，各大学における事故発生状況を共有することにより，事故の予防等に活用できるとして，国立七大学安全衛生管理者連絡協議会において，検討が行われていた。

・この度，大阪大学と東京大学で高秘匿性ルーターの設置が行われ，接続テストが完了したため，大阪大学より，事故情報データの提供及び高秘匿性ルーターの設置について，依頼があった。

その後，本学において把握している事故情報は，健康科学センターを授業・実験中のけがにより受診した状況及び労災請求の状況であるため，この情報を提出すること及び高秘匿性ルーターを設置することについて，審議の結果，これを議決した。

なお，事故情報データの提出範囲等については，各大学で判断の上，可能な範囲で差し支えないとのことであるため，データの集約が容易な平成 22 年度以降を提出すること，個人情報に配慮し提出することについて説明があった。

※次回開催日

10 月上旬開催予定とし，後日日程調整の上，職場環境室安全衛生係から通知することとした。

（第 3 回）

1. 日時: 平成 23 年 11 月 4 日（金）16 時 00 分～17 時 00 分

2. 場所: 部第二庁舎 2 階　　第 2 会議室

3. 報告事項

（1）各部門の報告事項

①健康衛生管理部門

9 月 14 日及び 10 月 19 日に開催された同部門会議において報告，審議された事項について，以下のとおり報告があった。

・特殊健康診断・特定業務従事者健康診断における血液検査について

・卒煙Ｑプログラムについて

・胸部エックス線撮影のデジタル化について

・リフレッシュプログラムの実施状況について

・胃がん検診のデジタル化について

②環境安全管理部門

9 月 28 日に開催された環境保全管理委員会において審議された「九州大学化学物質管理規程」の制定についての報告があった。これまで区別されていなかった毒物と劇物の管理について，毒物と劇物に分けて記載する方針であることが説明された。今後，ヒ素化合物紛失の調査委員会の調査結果を待って，更に部門において検討していくこととなった。

③高圧ガス等安全管理部門

箱崎地区の高圧ガス管理体制について，現在は保安統括者を低温センター長，保安統括代理者を理学部等事務長が務めているが，農学部も高圧ガスを使用しているため，農学研究院長を保安統括代理者として，農学研究院も管理に参画させる方針で話を進めているとの報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

ヒ素化合物の紛失・発見についての経緯について報告があった。また，以下のとおり報告があった。

・医学研究院において未登録麻薬が発見され，それを受け学内一斉調査を行ったところ，複数の部局で管理下にない覚せい剤原料等が発見された。覚せい剤原料については，対応を部局事務と福岡県で協議中である。

⑤エネルギー資源管理部門

10 月 25 日に開催された同部門会議において，以下の事項等について報告及び審議した旨の報告があった。

・平成 23 年度上半期のエネルギー使用量について

・平成 23 年度年度計画の中間報告について

・平成 23 年度省エネルギーパトロール（冬季）の実施について

（2）前期作業環境測定結果について

平成 23 年 6 月から 7 月にかけて実施された前期作業環境測定の結果について報告があった。 管理区分第 2，第 3 とされた 16 の作業場について，職場巡視を実施し，その指摘事項やアドバイスに基づいた改善状況を報告させ，把握していくことについて説明があった。

（3）全国労働衛生週間について

毎年 10 月 1 日から 10 月 7 日の間は，「全国労働衛生週間」となっており，同週間に関連して，衛生管理者を対象とした安全 衛生セミナーⅡ及び乳がん自己検診講習会を実施したことについて，報告があった。

（4）衛生管理者等資格取得について

衛生管理業務に携わる者を養成するため，衛生管理者試験準備講習会を 9 月 15 日，16 日に実施し，40 名が受講したこと，受講者は 10 月 21 日及び 11 月 7 日に実施される衛生管理者試験を受験し，資格を取得予定 であることについて報告があった。

また，農場については，衛生推進者養成講習を12月に1名受講予定であることも併せて報告があった。

4. 議題

（1）平成 23 年度計画の自己点検・評価（10.1 現在）（案）について

年度計画の進捗状況に係る年度の中間である 10 月 1 日時点の自己点検・評価の実施について説明があった。
引き続いて，事務局から，平成 23 年度計画とその取り組みの実施状況を踏まえた自己点検・評価の案について説明があり，審議の結果，これを議決した。

（2）平成 23 年度計画（環境安全衛生推進室）について

8 月 26 日開催された作業WGにおいてまとめられた，環境安全衛生推進室の平成 23 年度計画について，各部門において内容等を検討し，各部門の検討結果を踏まえて，同WGで再度検討することとしたい旨の説明があった。なお，各部門の検討結果の報告期限については，平成 24 年度計画の提出が 12 月 14 日までとなっており，次回の室会議を 12 月初旬に開催を予定しているため，それまでの間に部門会議を開催し，その検討結果を 11 月 30 日までに職場環境室へ報告していただくよう提案があり，審議の結果，これを議決した。

（3）『九州大学百年史』部局史編の編集について

「九州大学百年史」の部局史編について，部局の一つとして環境安全衛生推進室についての編集依頼が大学文書館百年史編集室からあり，その編集委員会の編集スケジュール及び委員の選定を行う必要があるとの説明があった。

引き続いて事務局から，平成 25 年 3 月を原稿締切とする編集スケジュールの案及び室長，副室長，各部門長を編集委員とする編集委員会の案について提案があり，審議の結果，これを議決した。

（第 4 回）

1. 日時: 平成 23 年 12 月 13 日（火）14 時 00 分～14 時 40 分
2. 場所: 本部第二庁舎 2 階　第 2 会議室

3. 報告事項

（1）各部門の報告事項

①健康衛生管理部門

11 月 16 日に開催された同部門会議において報告，審議された事項について，以下のとおり報告があった。

・職員総合健康診断の受診状況について
・七大学事故情報共有システムに係るデータの提供について
・「労働安全衛生法の一部を改正する法律案要綱」について

②環境安全管理部門

・12 月 8 日及び 9 日に開催された，第 29 回大学等環境安全協議会総会・研修会についての報告。なお，次回の当該総会・研修会は来年 7 月に，九州大学において開催される。
・11 月 29 日に開催された同部門会議において審議された，「九州大学化学物質管理規程（案）」について，劇物の管理方法として，本数管理ではなく原則使用量管理とし，申請等により本数管理を認めるとの方向で検討するとの報告があった。また，九州大学の安全衛生管理のガイドラインと労働衛生コンサルタントの指導の内容に食い違いがあるケースがあったため，統一してもらいたいとの要望があったとの報告があった。

③高圧ガス等安全管理部門

特になし

④特定分野安全管理事務部門

現在，平成 23 年度の放射性同位元素取扱施設への立ち入り検査（学内検査・放射性同位元素取扱施設の関係教員による相互チェック。）が実施中で，来年 1 月 19 日に終了予定である旨の報告があった。

毒物等管理に関連して，12 月 12 日に行われた部局長懇談会において，安浦理事から毒物等の保管場所等について，ID カードによる入室管理等のシステムを導入することが可能かどうかを検討する方向であるとの発言があった旨の報告があった。

⑤エネルギー資源管理部門

冬季の省エネパトロールを，12 月 5 日から 12 日の日程で実施した旨の報告があった。なお，省エネパトロールの結果については，部門会議で報告後，本会議において報告する旨の説明があった。

（2）第 2 回平成 23 年度計画実行のための作業WGについて

12 月 6 日に同WGが開催され，各事業場における安

全・衛生委員会の運営の在り方の調査及び各部局等における安全衛生・環境保全管理体制の調査について，それぞれ調査結果が報告されたこと，また，前回の本会議において，各部門で検討することとされていた，平成 23 年度計画についての検討結果も併せて報告された旨の説明があった。

今後，これらの資料を基に，全学的な集中管理体制の整備へ向け検討を行うこととなった。

4. 議題

（1） 2 期中期計画の「成果指標」の見直しについて

第 2 期中期計画の「成果指標」の見直しについて事務局から説明があり，審議の結果，議決した。

（2） 平成 24 年度計画について

平成 24 年度計画について事務局から説明があり，審議の結果，議決した。

（第 5 回）

1. 日時: 平成 24 年 3 月 23 日（金）9 時 30 分～11 時 00 分
2. 場所: 本部第三庁舎 2 階　第 5 会議室
3. 報告事項

（1）各部門の報告事項

①健康衛生管理部門

平成 23 年 12 月から平成 24 年 3 月に開催された同部門会議において報告・審議された事項について報告があった。

② 環境安全管理部門

九州大学化学物質管理規程に関する第 14 回環境保全管理委員会（書面会議）において検討された以下の事項について報告があり，今後引き続き検討する旨の説明があった。

・毒物及び劇物の，在庫量及び使用量の把握のための管理方法について

・規程中の化学物質管理支援システムの定義について，全学で統一したシステムとするか，部局独自のシステムを認めるかについて

③ 高圧ガス等安全管理部門

2 月 28 日に大阪府立消防学校で行われた，国立七大学安全教育用教材作成のための火災消火実験について，映写機を使い実験の映像を交えた説明が行われ，当該映像を国立七大学安全教育用の共通教材として使用する旨の報告があった。

④ 特定分野安全管理事務部門

・ヒ素化合物紛失に関する調査委員会の調査報告書（案）について

・毒物及び劇物の適正な管理方法についての学内一斉調査の結果について

・管理外麻薬が医学研究院，先導研，理学研究院，農学研究院で続けて発見されたことについて，福岡県へ提出する報告書（案）について

⑤ エネルギー資源管理部門

3 月 14 日に開催された同部門会議において報告・審議された以下の事項について報告があった。

・平成 23 年度のエネルギー使用量の推移（H23.4～H24.1）について

・平成 23 年度年度計画自己点検・評価（年度末）の自己評定について

（2）転倒・落下防止マニュアルの配布について

施設部で作成され各部局等へ配布されている「地震による非構造部材・実験機器等の転倒・落下防止対策に向けて」について説明があり，環境安全衛生推進室から各地区安全衛生委員会へ配布し，各地区で行われている職場巡視の際の点検に役立てて欲しい旨の提案があった。

（3）喫煙対策検討ワーキング・グループについて

3 月 13 日に開催された同ワーキング・グループについて説明があり，事務局から同ワーキング・グループにおいて報告・審議された以下の事項が報告された。

・平成 23 年度卒煙Qプロジェクトの実施報告について

・平成 24 年度卒煙Qプロジェクトの実施予定について

・建物内喫煙場所の廃止及び建物外喫煙場所の削減について

・喫煙のマナーアップへの対応策等について

（4）安全衛生セミナーの開催について

2 月 14 日及び 2 月 21 日に開催した安全衛生セミナーについて報告があり，来年度も平成 23 年度と同様に年 4 回の安全衛生セミナーを予定している旨の説明があった。

（5）国立七大学安全衛生管理協議会について

2 月 8 日に京都大学において開催された協議会の概要について報告があった。また，京都大学から議事要録が届き次第，環境安全衛生推進室会議構成員に送付する旨の説明があった。

（6）後期作業環境測定結果について

平成 23 年 12 月に実施された後期作業環境測定結果について報告があった。

管理区分第2，第3とされた6箇所の作業場について，職場巡視を実施し，その指摘事項やアドバイスに基づ

いた改善状況を環境安全推進室へ報告させることにした。

4. 議題

（1）平成 24 年度安全衛生管理年間計画（案）について

平成 24 年度の安全衛生管理年間計画について説明があった。また，本計画については，福岡中央労働基準監督署に報告すること，その後各部局長及び各総括安全衛生管理者に通知することについて，併せて説明があった。

なお，修正等意見がある場合は，3 月 30 日（金）までに職場環境室安全衛生係あてに提出いただくこととし，修正案については室長に一任することを議決した。

（2）平成 23 年度計画の自己点検・評価について（資料 10）

年度計画の進捗状況に係る年度末の自己点検・評価の実施について説明があり，審議の結果，これを議決した。

（3）平成 24 年度計画について

平成 24 年度計画を具体的に実行するため，引き続き作業ワーキング・グループにおいて，検討を開始することについて説明があり，審議の結果，これを議決した。

（文責: 上園 慶子）

7. 新入生健康支援面接

新入生面接

健康科学センターでは，学生の健康に関するニーズに基づいたサービスを提供するという「健康支援モデル」に基づいた業務活動を目指しているが，その一環として新入生の潜在的なニーズに対応する目的で，入学後に健康相談を実施してきた。

対象は，1. 自覚的な心身の不調が多く認められる学生，2. 日常生活に支障を来すような障害を有する学生で，封書を送って健康相談室への来談をうながし，内科と精神科の医師，臨床心理カウンセラーによる面談を行っている。平成 23 年度は，伊都センターゾーン分室で 5 月の連休翌週の 9 日から 20 日まで 2 週間にわたって実施した。

平成 18 度以降，新入生向けの「健康支援パッケージ」では高校時代の生活習慣と既往歴について調査し，平成 14 年度から行っている定期健康診断時の自覚症状と生活習慣についての調査「健康生活支援調査」と併せて入学時の健康調査とし，これらをもとに面接の対象を選出した。

1）心理精神健康相談

心理健康相談は，カウンセラー（常勤の福盛と非常勤の井上綾子，中園照美）と精神科医（常勤の一宮と非常勤の川島範子）とで行った。対象は，1.精神疾患ならびにストレス関連疾患の既往がある者，2. 対人コミュニケーションに問題がある可能性がある者，3.発達障害の問題を有する可能性がある者，とした。

1. 精神疾患ならびにストレス関連疾患の既往がある者とは，「健康支援パッケージ」の「次の病気にかかったり，次の健康問題で悩んだことがありますか」という既往歴に関する質問項目の中の 13. 自律神経失調症，17. 神経衰弱・ノイローゼ，19. 統合失調症・うつ病・心因反応，20. 自殺未遂のいずれかに○をつけている者であった。

2. 対人コミュニケーションに問題がある可能性がある者とは，「健康支援パッケージ」の「高校時代の生活習慣などについて」の質問項目「友達作りがうまくできず，いつも孤独である」にハイ，そして「悩みを相談できる友人がいた」にイイエと回答した者であった。

3. 発達障害の問題を有する可能性がある者とは，発達障害スクリーニングのために作成された「プール学院大学発達障害チェックリスト」で，高得点の者であった。

来談勧奨者は 172 人で，実際の来談者は 151 人であり，来談率は 87.8%であった。

内訳は,神経症水準の問題が 7 名（4.6%），精神病水準の問題を有する者も 1 名（0.7%）いた。また，性格上の問題が 50 名（33.1%），むしろ身体の問題であった者も 9 名（6.0%）であった。 68 名（45.0%）は異常なしであった。発達障害の問題を有する者は 25 名（疑いは 15 名）であった。

これらの学生に対しては，心理相談の紹介を 59 名（41.0%）に，治療の指示も 5 名（8.4%）に対して行い，そのほか性格･行動面についての認識の促進や生活指導を行った。55 名（25.3%）に対しては特に指導の必要性がないと考えられた。

2）一般健康相談

一般健康相談は，主として身体に関する相談で，内科医 3 名（常勤の眞崎と永野，丸山）と精神科医 1 名（常勤の一宮）が行った。対象は，1-C. 「障害者手帳を持っていますか」，1-D. 「心身の病気や障害のために日常に支障をきたしていますか」に○をつけている者であった。ただし，該当する問題について定期健康診断時に検討され指導を受けたり，あるいは診断結果によって問題なしとされた者は対象から除いている。

来談勧奨者は 11 人で，来談者は 9 人で，来談率は

81.8%であった。内訳は,1名（11.1%）が異常なし，身体疾患が2名(22.2%)，身体障害は6名(66.7%)で，精神疾患は0名(0%)であった。これらの学生に対して，健康相談の継続の指導を4名（44.4%）に，生活のアドバイスを5名（55.6%）に，治療の指示を1名（11.1%）に行った。

（文責: 一宮　厚）

8. **感染症対策**

今年度は，昨年までに完成させた新型インフルエンザ感染確認システムが活用できることを確認できたため，今後はそのメンテナンスを中心に行うことになった。今回の双方向による確認は，東日本大震災のような大規模災害発生時にも応用できることから，今後災害時にも活用できるようにしていくことが提案され，感染症対策としての利用と全学の安否確認インフラとしての利用の双方で活用されることになる方針である。

今年度も，新入学生に対する麻疹等感染症の感受性調査票送付と麻疹ワクチンの接種勧奨は今年も実施した。ワクチン接種は，健康科学センターからの呼びかけが接種動機になっている者が多かった。今後も感受性調査とワクチン接種勧奨を行っていく予定である。

（文責: 眞崎 義憲）

9. **情報発信活動**

健康科学センターのHPが刷新されて2年が経過した。学生や教職員，一般の方がそれぞれ必要とする情報に容易にたどり着けるようにしたこともあり，健康診断関係やQUウォーク，公開講座などの情報もHPで容易に確認できるようになったと考えられる。

また，ホームページ構築の際に，新着情報の項目を組み入れてもらい，適時適切な情報のアップデートが可能となった。新着方にリンクして，かわら版などもＨＰから確認ができるようになったことで，健康科学センターの活動を広く知ってもらうことが可能となった。

今後は，新着情報をもっと有効に活用できるように，各キャンパスの情報などの細かな情報を更新できるような体制を作ることを目指したい。

（文責: 眞崎 義憲）

10. **ＦＤ活動**

第8回七大学安全衛生管理担当者連絡協議会

日時: 平成23年 4月20日（水）13時30分～17時00分

会場: 東京大学工学部2号館31A会議室

議題:

(1) 各地区（各大学）大学安全衛生研究会の活動報告

(2) 安全衛生教育用教材等に係る大学間連携の具体化について　（大学間連携に係るアンケート更新版）

(3) 「平成22年度　大学研究室の実験環境に関するアンケート調査」結果について（経済産業省委託事業株式会社日本総合研究所実施）

(4) 協議会の「名称（及び目的）」の変更及び要項制定について

第9回七大学安全衛生管理協議会

日時: 平成24年 2月 8日（水）13時30分～17時00分

会場: 京都大学稲盛財団記念館三階大会議室

議題:

(1) 実験室の安全管理について…東日本大震災の教訓を踏まえての安全管理

(2) 安全衛生教育用教材等に係る大学間連携の具体化について

(3) 「中間報告書」をベースにした提言の作成について

(4) 各地区国立大学への情報伝達について

(5) 大学の全面禁煙化について

(6) 七大学事故情報共有システムの進捗について

(7) 今後取り組むべき課題，テーマについて

(8) その他

2回とも健セからは上園が出席した。議事要録は職場環境室安全衛生係にて保管している。

（文責: 上園 慶子）

第49回全国大学保健管理研究集会

第49回全国大学保健管理研究集会は，中国四国地方部会が担当した。共通テーマ「保健管理維新－教育的視点から今後を見据えて－」のもとに，平成23年11月9日と10日の2日間，山口大学が当番校となって下関市で開催された。本学からも教員，看護職員，事務職員が多数参加した。

（文責: 永野　純）

第41回九州地区大学保健管理研究協議会

第41回九州地区大学保健管理研究協議会は，平成23年8月17・18・19日の3日間（初日は保健・看護分科会），久留米大学が当番校となって開催された。参加

校は合計 62 校であった。

（文責: 永野　純）

平成 23 年度国立大学法人等保健管理施設協議会

平成23年度の国立大学法人保健管理施設協議会は，広島大学が当番校となり，平成23年11月11日に山口県下関市の海峡国際貿易ビルで開催された。国立大学法人88校から91名の施設長が参加した。

午前中には，議長から事前の質問と要望事項について報告と，各種委員会，研究班からの報告があった。文部科学省からは昨年に続き欠席者が来なかった。午後，新しい会長に大阪大学の守山敏樹教授が選出された。千葉大学の長尾啓一教授が会長を退任され，それに伴い一宮も副会長を辞することになった。その後，協議がなされ，倫理委員会を倫理審査委員会として常設委員会とすることが決まった。今後，英米の大学保健管理の学会と交流を強めることになった。

平成24年度は，兵庫教育大学が当番校で兵庫県神戸市での開催が承認された。

（文責: 一宮　厚）

第 14 回フィジカルヘルス・フォーラム

コーディネーター: 東北大学保健管理センター所長 飛田渉先生

期日: 平成 24 年 3 月 15 日(木)～3 月 16 日(金)

会場: 東北大学片平キャンパスさくらホール

健康科学センターからは上園が出席した。

以下に，平成 24 年 4 月 4 日付で国立大学法人保健管理施設協議会フィジカルヘルス委員会委員長 立身政信 先生，フィジカルヘルス・フォーラム会長 大塚盛男先生から送られた報告等を抜粋して掲載する。

《ご報告》

第 1 日　3 月 15 日（木）

1. 特別講演「東日本大震災被災地域医療機関からの報告」石巻赤十字病院呼吸器内科部長 矢内 勝先生: 東日本大震災により壊滅的な被害を受けた石巻市において唯一大きな被害を免れた医療機関として，震災直後から患者の治療に当たられた様々なご経験について詳細にご報告いただいた。大混乱の中，多数の業務に対応するためには情報や指揮系統の一元化が必要であるが，事前にある程度の体制作りが行われていたとのことであった。また，今回の震災では阪神･淡路大震災とは異なり津波による被害が大部分であったこと，呼吸器疾患患者については，津波による土壌の汚染に伴う粉じん吸入や避難所生活に伴う感染症や避難に伴う ADL の低下により，先ず肺炎患者が増加し，次いで慢性閉塞性肺疾患の急性増悪患者が増加し，次いで気管支喘息患者が増加したとのことが興味深かった。今後，長期的にはアスベスト吸入による悪性中皮腫等の疾患の発生が懸念されるため，これらへの取り組みの重要性が強調された。

2. シンポジウム I 「学生生活と生活習慣病」

1）高血圧「学生の肥満と高血圧」 東北大学腎高血圧内分泌内科 森 建文先生: 近年，高血圧，糖尿病および慢性腎臓病では体内にメチルグリオキサールなどのカルボニル物質が増えることが報告されていることから，学生健康診断時に検査される尿を用いて尿中のメチルグリオキサール等を測定し，肥満や血圧との関係を検討した結果を報告された。被験者の負担のない検査であり研究成果の発展が期待される。

2）消化管疾患「学生の便通異常を診る」 東北大学保健管理センター 木内喜孝先生: 便通異常を訴える学生は多く，その多くは過敏性腸症候群によるものと考えられるが，炎症性腸疾患である潰瘍性大腸炎やクローン病も類似の症状を呈するので注意が必要であり，血便や貧血の症状や所見があった場合には炎症性腸疾患を疑う必要があることを強調された。

3）糖尿病「肥満学生における臓器障害と糖尿病合併症の共通メカニズムの解明とその対策」 東北大学保健管理センター 小川 晋先生: 糖尿病では血管障害の合併が問題となるが，血管障害を起こす例では血液中のメチルグリオキサールが高値であり，この値が高値の例に重点的に血管障害予防治療を行うことにより効率的な血管障害防止治療が実現できる可能性が期待されること，この物質は肥満に伴って産生が亢進することから糖尿病合併症との共通のメカニズムの存在が示唆されることを報告された。

4）睡眠呼吸障害「学生生活における睡眠障害」 東北大学環境安全推進センター 小川浩正先生: 学生生活においてみられる睡眠障害としては，概日リズム睡眠障害，種々の精神疾患，夜間の気管支喘息や睡眠時無呼吸症候群などが原因となっていることがあるので注意が必要であることを強調された。

5）メンタルヘルス「生活習慣と心の健康」 東北大学環境安全推進センター 山﨑尚人先生: 東北大学保健管

理センターにおける精神保健相談来訪学生（学部生，大学院生）の実施状況と概要，学生生活調査結果に基づいた学生生活のストレスに影響する生活習慣要因について，学部生・大学院生別のキャンパスでのセクハラ・アカハラ被害意識調査結果等の報告があった。また，厚労省研究班による「東日本大震災被害者の健康状態に関する調査研究」（宮城班）の調査結果の一部と被災経験からメンタル不調を来した学生の事例について紹介がなされた。

3. 業務連絡 (1) 次期開催校: 第 15 回フィジカルヘルス・フォーラムは，岡山大学保健管理センターの小倉俊郎先生にご担当いただくこととなった。第 16 回の担当は関東甲信越地区で，長岡技術科学大学保健管理センターの三宅 仁先生にご担当いただく予定となり，第 17 回は北海道地区が候補となり，開催校は今後相談していくこととなった。(2) フォーラム会則の変更: 本フォーラムは当初から国立大学法人保健管理施設協議会フィジカルヘルス委員会の下で活動いていることから会則にその旨を明記すること，今後の開催校の選出の方法や会費（参加費）等について議論し会則の一部を変更することが了承された。会費は，会員が 2,000 円，オブザーバー参加者 1,000 円とすることとなった。(3) メーリングリストについて: phf-net を管理されている三宅 仁先生からメーリングリスト用ソフトのバージョンアップについてご報告があった。(4) 新会員自己紹介: 新しく会員になられた滋賀大学保健管理センター 山本祐二先生の自己紹介があった。(5) 退職会員のご挨拶: 今年度でご退職になられる京都工芸繊維大学保健管理センター 知念良教先生，東北大学保健管理センター 飛田 渉先生，千葉大学総合安全衛生機構長尾啓一先生からご挨拶があった。なお，ご参加されてはいないが，東京工業大学保健管理センター 影山任佐先生，電気通信大学保健管理センター 坂口 明先生，お茶ノ水大学保健管理センター 森田 寛先生，静岡大学保健管理センター 池谷直樹先生，大分大学保健管理センター 寺尾英夫先生がご退職とのことである。
参加者数 83 人

第 2 日 3 月 16 日（金）
4.シンポジウムⅡ「キャンパス禁煙をめぐって」
話題提供「東北大学キャンパス内全面禁煙の歩み」 東北大学環境安全推進センター 黒澤 一先生: 平成 22 年 10 月に禁煙宣言を行い，平成 23 年 10 月からキャンパス内全面禁煙を実施した東北大学の実施までの歩みを報告された。実施にあたって，禁煙推進 WG でロードマップを作成し，建物内禁煙や各事業場での段階的禁煙，各事業場内での推進組織の育成，喫煙者への支援等を実施された。今後，全面禁煙を維持するために喫煙者への対応，大学周辺での喫煙に対する対応，無関心への対応等が重要であると述べられた。
1)「大学禁煙化ロードマップと学生禁煙治療」 奈良女子大学保健管理センター 高橋裕子先生: 施設協議会喫煙対策の推進に関する特別委員会委員長として，これまでに長年取り組んできた大学禁煙化を推進するための対策や今後の取り組みのためのロードマップを示された。学内外の関係者の情報の共有化をはかるために知識の提供，禁煙化実施までの猶予期間の設定，大学近隣の協力の重要性を強調された。
2)「3 年後キャンパス禁煙へむけて～タバコ対策の過去・現在・未来～」 岡山大学保健管理センター 小倉俊郎先生: 当初は禁煙講演会や尿中コチニン測定の実施等による受動喫煙防止対策を行っていたが，平成 26 年 4 月から全面禁煙化を実施する予定となった。その経緯や取り組みついて報告され，実施に向け禁煙推進者の育成，情報提供，実施までの猶予期間の設定，トップダウンの決断等が重要であると述べられた。
3)「岐阜大学の敷地内全面禁煙の経験―7 年を経過して―」 岐阜大学保健管理センター／大学院連合創薬医療情報研究科 山本眞由美先生: 平成 16 年に禁煙宣言し 17 年から敷地内全面禁煙を実施されたが，講演会の実施，ニコチンパッチの配布，学長もメンバーの全学的禁煙化 WG の活動，FD の実施等，全面禁煙に向けた取り組みや実施後の取り組みについて報告された。また，岐阜県下の 25 校の大学の調査から，全面禁煙校は分煙校に比して有意に学生の喫煙率が低かったとの結果が得られと報告された。
4)「岩手大学敷地内禁煙のその後」 岩手大学保健管理センター 立身政信先生: 大学禁煙化を中期目標に導入し，平成 20 年 4 月から敷地内禁煙となったが，それまでの取り組みや禁煙化後の状況について報告された。学内の吸い殻拾い，敷地外での喫煙状況の調査，地域との連携等により，敷地外での喫煙状況の改善が報告され，これらの地道な活動の継続の重要性を強調された。

5. ランチョンセミナー（共催: 帝人ファーマ株式会社／帝人在宅医療株式会社）

「東日本大震災における被災地在宅医療機器メーカーの対応」 帝人在宅医療株式会社仙台市店仙台営業所長 松本忠明様: 被災地の 24,000 人以上の在宅酸素療法や在宅人工呼吸患者に対し，医療機器メーカーとして震災直後から全社挙げて支援されてこられたことの詳細な報告があった。患者の安否確認に災害対応支援マップシステムが有用であったことや患者・医療機関との情報交換が重要であったことが強調された。

「東日本大震災・福島原発事故における大学の対応」 福島県立医大呼吸器内科教授 棟方 充先生: 福島県立医大地域医療担当理事としての立場から，大学として東日本大震災および福島原発事故の発生直後からの緊急時災害医療，避難住民や各地域への医療支援，被ばく者スクリーニングや被ばく医療等について実施されてこられたことや今後の復興に対する大学の取り組み等について詳細にご講演をいただいた。大学の教職員や関係者が団結して困難な使命に対しベストを尽くしてこられたことに感銘を受けたが，この間全学ミーティング等を通じて全教職員が情報を共有し指揮系統を一本化できたことが最も重要であったことをお伺いし，今後の組織運営に対し非常に大切なことを学ばせて頂いた。

6. 特別企画 「東日本大震災における各大学の対応」

1)「被災地近隣大学（北関東）からの報告」 茨城大学保健管理センター 宮川八平先生: 大学の被災状況の報告があり，人的被害はなかったが建物や実験器具・資料等の被害は約 30 億円であったことや学生の安否確認に約 1 ヵ月を要したとのことである。また，震災直後は学生会館に学生，教職員，受験生，付近の住民等，約 500 人が避難し，保健管理センターのスタッフが医療班として 28 人の利用者に対応されたとのことである。応急処置として，洗浄用の水および大型懐中電灯の備蓄の重要性を強調された。

2)「原発事故による放射能災害の現状」 福島大学保健管理センター 渡辺 厚先生: 福島第一原発の事故により飛散した放射性物質の福島市や福島大学における汚染状況について報告があり，事故後 1 年が経った現在でも学内や市内の建物内以外の線量が比較的高いことや除染が進んでいないためストレスフルな生活を余儀なくされていることが強調された。

3)「岩手大学東日本大震災復興本部と保健管理センターの係わり」 岩手大学保健管理センター 立身政信先生: 震災に対する保健管理センターや大学の対応の報告があった。震災直後は保健管理センターを昼夜開放しセンターの医師や保健師が宿泊対応したこと，その後大学の復興対策本部の健康管理部門といて学生や地域支援を担当し，メンタルヘルス調査で PTSD が約 5%，うつが約 2.5% の学生にみられたこと，現在は復興推進本部の生活支援部門の心のケア班として心理カウンセラーが活躍していること等が報告された。

4)「震災後の学生への心理的支援～学生相談と全学学生対象調査を通じて～」 東北大学学生相談所 池田忠義先生: 震災に伴う学生への心理的支援について報告があった。一次支援として，震災直後は震災前に来談していた学生への連絡，その後は震災関連の相談，二次・三次支援として，学生・教職員向けのリーフレット配付を実施された。相談内容は，心身の不調や進路に関するものが多かったとのことである。また，学生に対し被災状況や心理面等について記名式調査を行い，PTSD が約 12%にみられ，被災者や留学生に多い傾向があり，相談希望者や PTSD ハイリスク群に面談やメール等での情報提供を行ったとのことである。

5)「教育・研究機関における安全管理～東日本大震災を教訓に～」 東北大学環境安全推進センター 色川俊也先生: 大学の被災状況の報告があり，建物や実験器具・資料等の被害は約 700 億円であったとのことである。通路の確保，高層階における物品の固定や配置，化学物質の管理，高圧ガスボンベの固定，実験機器の緊急時の対処法の確認等について，震災に備えて職場巡視で注意すべき点の報告があった。また，安否確認や指揮系統等の問題が指摘され，防災訓練や災害の経験・教訓を引き継ぐシステム作りの重要性が強調された。

《次回のご案内》

第 15 回フィジカルヘルス・フォーラム

コーディネーター: 岡山大学保健管理センター 小倉俊郎教授

日時: 平成 25 年 3 月 20 日(水)～21 日(木)

場所: 岡山大学創立五十周年記念館

（文責: 上園 慶子）

第 31 回全国大学メンタルヘルス研究会

全国大学メンタルヘルス研究会は，平成 18 年度から全国学生相談研究会議との合同で学生支援合同フォーラムとして開催されていたが，学生支援機構の支援が事業仕分けで打ち切りとなり，今年度から再び単独の開催となった。今年度は福岡教育大学が主催して平成

24 年 1 月 28-29 日に宗像市のグローバルアリーナで開催された。これには九大からは一宮が参加し司会を担当し運営委員会にも出席した。また保健師 4 名が参加した。特別講演，教育講演のほか，研究班報告，一般演題などの発表があった。

（文責: 一宮　厚）

第 45 回全国学生相談研究会議

日時: 平成 24 年 1 月 26 日（木）～1 月 28 日（土）
会場: ホテル鴎風亭（広島県福山市）
健康科学センターからは，福盛（シンポジウム話題提供者），松下が出席した。学生支援のあり方，ケース検討，各種取り組み（自殺対策・発達障害学生支援他）についての発表がなされ，有意義なディスカッションが行われた。

（文責: 松下 智子）

平成 23 年度九州地区メンタルヘルス研究協議会

メンタルヘルス研究協議会は，学生のメンタルヘルス支援の充実を目指して全国の大学と高専の一般教職員を対象として開催される研修会として，文部科学省が主催者のひとつとして平成 8 年から始まった。平成 17 年度からは独立行政法人日本学生支援機構と国立大学法人保健管理施設協議会が主催し文部科学省が協力する形で運営されることとなった。平成 13 年度からは全国 7 つのブロックごとに開催され，4 年に一度全国会を行っている。平成 23 年度は九州地区での開催であった。残念ながら，独立行政法人日本学生支援機構の事業仕分け対象となり，今年度を最後に本協議会は一旦中止されることとなった。

平成23年度は，大分大学が当番校で同大保健管理センターの藤田長太郎教授が実行委員長であった。本センターの一宮は本協議会の九州地区の本部運営委員であり，また当センターの福盛准教授とともに本協議会の実行委員会であるので今年度も企画から携わった。

協議会は9月15日と16日の2日間にわたって大分市の大分センチュリーホテルで行われた。1日目の基調講演は「どう生きる？どんな早さで生きる？～大学生の不登校が私たちに問いかけていること～」と題されたもので，香川大学保健管理センター長を務められていた小柳晴生放送大学客員教授が講演された。また，特別講演として福島大学保健管理センター長の渡辺厚教授が「災害とメンタルヘルス～大地震・原発事故の経験から～」と題する講演をされた。

その後1日目午後から2日目午前にかけて分科会が5会場で行われたが，当センターの一宮が「教職員のメンタルヘルス」をテーマとした第3分科会で司会を，福盛が「不登校学生への支援–学内外の連携を視野に入れて」をテーマとした第2分科会で助言者として，それぞれ運営に参加した。

参加者は九州圏内の30大学から59名，6短期大学から7名，10高等専門学校から19名教職員の申込みがあり84名の参加があった。アンケートの結果，1人を除く人が概ね～十分満足との回答であり，このような研修会の実施を求める声も極めて多かった。

（文責: 一宮　厚）

三大学協議会

本学健康科学センターと同様，健康に関連する学際部局である名古屋大学総合保健体育科学センター，旧大阪大学健康体育部（現: 大阪大学大学院医学研究科・同保健センター等）との合同会議は，三大学のみに共通の議題が発生しなかったため，平成 23 年度も開催されなかった。

（文責: 上園 慶子）

学生健康支援会議

産業保健師を含む各分室の看護職員と保健係の事務職員をまじえて，毎月第 3 水曜日の午後に学生健康支援会議を開催している。平成 23 年度も，本会議において，予算案の作成，春の学生定期健康診断ならびに秋の留学生健康診断の準備・実施・事後措置，各分室の日常診療対応（対応困難なケースの検討，各分室で共通した統一すべき基準の検討など），保健管理専門委員会や学生委員会などの学内への対応，保健管理関連の学会での発表演習など，学生の安全・衛生・健康に関連する様々な業務の企画，立案，実施，問題点などについて協議した。なお，平成 23 年 1 月の部門撤廃を受けて，センターが一致協力して学生健康支援に取り組むべく，平成 23 年度からは旧第一部門（保健体育担当）教員も本会議に出席している。さらに，特筆すべきこととして，本業務における学務部との連携強化の一環として，学務部学生生活課より本会議にオブザーバーとして参加している。

（文責: 永野　純）

職員健康支援会議

安全衛生推進室所属の産業保健師を含む各分室の看護職員と職場環境室の事務職員をまじえて，毎月第3水曜日の午後に本会議を開催している。学生健康支援会議に引き続いて行われるものである。平成 23 年度も，各事業場の毎月の産業保健活動報告や安全衛生推進室会議報告から始まり，定期健康診断，特殊健康診断などの各種健康診断の準備・実施・事後措置，平成 20 年度から開始された特定健診・保健指導，過重労働者面談，対応困難な事例など，産業保健活動に関する様々な業務の企画，立案，実施，問題点などについて協議した。

（文責: 永野　純）

技術職員研修

各分室で日ごろ別々に業務を行っている看護職員（看護師，保健師，産業保健師）に共通して必要な知識やスキルを習得してもらうために，毎月第3水曜日に看護職研修を実施した。

また，新採用の看護職員や事務員の教育として，健康科学センターの組織や役割，業務などに関するオリエンテーションを年度末に実施している。平成 23 年度は，各教員による講義に加えて，筑紫地区事務部の黒岩教務課長，および職場環境室の徳吉室長補佐による特別講義が行われた。

その他，毎月第3水曜日に教員による研究発表会を開催しているが，看護職員も全員参加することで FD としての機能も果たしている。

（文責: 永野　純）

産業保健管理体制

法人化以前は，国立大学設置法施行規則第20条の5の5（「九州大学に，健康科学に関する研究並びに保健及び体育に関する教育を行なうとともに，職員及び学生の保健管理及び体育指導に関する専門的業務を行なうための施設として，健康科学センターを置く」）に則って，健康科学センターは学生ならびに教職員の健康管理（健康診断後の相談や健康教育など）を実施していた。平成16年度からの大学法人化に際しては，産業医としての役割を含めて産業保健活動に従事することを大学側に提案し，協議を重ねた結果，安全衛生法における産業医の選任基準に基づいて，箱崎地区，馬出地区，九州大学病院（福岡）に専属産業医が，六本松地区，筑紫地区，大橋地区，別府地区には嘱託産業医がそれぞれ配置されることが決まり，平成17年10月から加わった伊都地区も含めて，別府地区を除く7事業所の産業医を健康科学センターの医師が担当することになった。また，教職員の安全衛生管理を担当する組織として，新たに「安全衛生推進室」が設置され，健康科学センター第2部門の全教職員も併任安全衛生推進室員の立場で参画した。安全衛生推進室には，3名の産業保健師（非常勤）が専任衛生管理者として採用になり，専属産業医の担当事業場に配属された。また，平成21年度に六本松地区が伊都地区センターゾーンへと移転になり，伊都地区ウエストゾーンと合わせた職員数が急増したことを踏まえて，もう1名の産業保健師（非常勤）が伊都地区ウエストゾーンに配属となった。

平成 23 年度は，平成 16 年から手がけた安全衛生体制をさらに構築，定着させることを目標に，産業保健活動を実施した。具体的には，各事業場において毎月職場巡視を実施し，巡視結果や健康診断結果，その他の健康管理事項について衛生委員会で報告や協議を行い，各種健康診断の円滑かつ効率的な実施を支援するとともに，事後措置を担当した。さらに，人事係の労働時間調査結果に基づいて，長時間労働者に対する面接や助言，指導を行った。このような業務を円滑かつ適切に実施し，さらなる改善をはかるために，健康科学センターのスタッフ，人事系職員，産業保健師からなる教職員健康支援会議を毎月開催し，産業保健活動について協議する場を設けている。また，後述するような，新人から管理職まで及ぶ様々な職員教育を実施した。

（文責: 永野　純）

厚生補導特別企画

第 1 回メンタルヘルス研修会

実施日時: 平成 23 年 12 月 21 日（水）　13:00～15:00

場　　所: 箱崎理系地区旧工学部本館 2F　4 番講義室

※伊都地区は遠隔で中継予定　総合学習プラザＡＭＳ講義室Ｉ

対　　象: 本学教職員（広く一般教職員: 特に学生委員会委員，教務委員会委員，学部相談員，窓口職員，学生支援職員）　等

プログラム

企画趣旨説明「九大生のメンタルヘルスの現状」（健康科学センター　一宮　厚）

講演「メンタルヘルスと対人コミュニケーション」

荒木 登茂子　先生（九州大学医学研究院　基礎医学部門 医療経営・管理学教授）

メンタルヘルスミニ相談会「健康科学センターの精神科医，臨床心理士が，個別相談に応じ，必要に応じて後日相談できる予約をとった。

平成 23 年度第 4 回全学 FD: 健康科学センター&学生生活・修学相談室講演会
テーマ「心の危機の予防と連携～われわれ教職員にできること」
日時: 平成 24 年 3 月 1 日（木） 15: 00～17: 00
場所: 箱崎理系地区旧工学部本館 2F 4 番講義室
※伊都地区は遠隔で中継予定 総合学習プラザＡＭＳ講義室Ｉ
対象: 本学教職員（広く一般教職員: 特に学生委員会委員，教務委員会委員，学部相談員，窓口職員，学生支援職員，学外の希望者）等
プログラム:
1. 企画趣旨説明
①「九州大学の現状と自殺予防」 一宮 厚（九州大学健康科学センター・教授）
②「疫学的手法を用いた大学生のメンタルヘルス対策」熊谷 秋三（九州大学健康科学センター・教授）
2. 講話「危機状態の学生を支えるための教職員と専門家の連携」
講師 池田忠義先生（東北大学高等教育開発推進センター准教授・学生相談所カウンセラー）
3. ミニディスカッション「心の不調のある学生への対応について考える～仮想事例を用いて～」
ファシリテーター（箱崎） 福留留美 福盛英明
ファシリテーター（伊都） 松下智子
メンタルヘルスミニ相談会を開き，精神科医，臨床心理士が，個別相談に応じた。

※講師旅費等，経費は健康科学センター厚生補導特別経費を用いた。

（文責: 福盛 英明）

第 3 回ＱＵウォーク

例年好評のイベントを今年も引き続き行った。平成 23 年 11 月 3 日， 大濠公園を出発し，伊都キャンパス体育館まで歩く九州大学創立百周年記念・第 3 回 QU ウォーク（主催: 健康科学センター，百周年事業推進室）が開催された。「九州大学百周年記念 QU ウォーク，頑張るぞ」の掛け声とともに大濠公園能楽堂前を 8 時過ぎに出発した 207 名の参加者は，ももち浜，小戸公園，長垂海浜公園を経由して，21km 先のゴールである伊都キャンパスを目指した。12 時前から 14 時頃までに 195 名がゴールした。完歩者には記念の Finisher タオルや協賛企業（エグチスポーツ，エムジーファーマ（株），大塚製薬（株），城島印刷（株），トーヨーフィジカル，日本製粉（株），（株）マルタイ）からの記念品が配布された。本イベントは QU ウォーク実行委員会（委員長: 林准教授，副委員長: 眞崎准教授）と百周年事業推進室を主体に企画・実行された。

（文責: 林 直亨）

筑紫地区トレーニング室

運動を通して健康の維持・増進を図るため，筑紫地区唯一の屋内運動施設であるフィットネスルームを平日 16 時～20 時に開放した。厚生補導特別経費の援助を頂き，大学院生に監督を任せている。1 日当り平均 11～16 名の来室者で，時間帯によっては混むことも多かった。 毎月当りの利用者延べ人数は以下の通りであった。4 月 217 名，5 月 295 名，6 月 341 名，7 月 332 名，8 月 241 名，9 月 236 名，10 月 258 名，11 月 256 名，12 月 214 名，1 月 228 名，2 月 261 名，3 月 230 名。

（文責: 林 直亨）

11. その他の活動

職員健康研修

平成23年度も例年通り，総務部人事課や職場環境室の年間計画により，教職員を対象とした健康に関する研修会で，講師派遣の要請があった。これに対して教員および看護職員が適宜分担して講師を担当した。講義は，九州大学新任係長・専門職員研修，九州大学新任課長研修，九州大学労働衛生週間講演会，および九州大学教室系技術職員研修などであった。

（文責: 永野 純）

入学試験や全学行事等における急患対応

平成23年度も，教員および看護職員は入学試験や全学行事等における急患対応に従事した。主な項目は，九州大学入学式，九州大学オープンキャンパス，九州大学大学院入試，九州大学AO入試，九州大学ホームカミングデー，各大学院（学府）入試，大学入試センター試験，九州大学入学試験などであった。

（文責: 永野 純）

健康白書 2010（学生の健康白書特別委員会）

「学生の健康白書 2010」に関する委員会は平成 23 年 10 月 19 日 海峡メッセ下関に於いて第一回の会合が開かれた。事務局の京都大学から，データの収集結果，不明な点を問い合わせ中であることの報告があり，平成 24 年度に項目毎の担当者が各自，分析及び執筆をする事，その際の執筆要領などが話し合われた。

（文責: 上園 慶子）

CAMPUS HEALTH の発行

キャンパスヘルスを年 2 回発刊した。記事は健康に関する啓発などで，教員，保健師が寄稿した。新しいコーナーとして，本の紹介やインタビュー記事などを掲載した。

第 36 号（2011 年 11 月）

・伊都キャンパスはオシャレ（斉藤）
・「自信」とこころの健康（福盛）
・From My Bookshelf ハーバードの人生を変える授業
・ケンセンジャー「心の健康を守るの巻」
・けんこう豆知識「朝食で元気な 1 日を始めましょう」

第 37 号（2012 年 3 月）

・第 4 回 QU ウォーク参加者募集
・大相撲の八百長が大騒ぎとなりましたが…（西村）
・飲酒について（一宮）
・ケンセンジャー「学生と教職員を守るの巻」
・運動によるストレス解消効果と“鍛える”ことの重要性について　橋本公雄先生インタビュー（松下）
・けんこう豆知識「質の良い睡眠で元気に過ごそう」

（文責: 松下 智子）

研　究　活　動

概況 …… 65
個人研究活動 …… 66
研究業績 …… 71
研究助成金 …… 84
国際学術交流活動 …… 93
学会・研究会での役職 …… 94
その他 …… 95

研　究　活　動

概　況

平成 23 年度における健康科学センターの研究活動を，「個人研究活動」「研究業績」「研究助成金」「国際学術交流活動」の項目で以下に示す。

「個人研究活動」に関して健康科学センターでは運動生理・生化学，運動疫学，スポーツ心理・社会学,内科学,心身医学，精神医学，心理学分野を中心に研究活動を行っている。しかし当センター教員の「個人研究活動」は，その枠に収まらない部分が多く見受けられる。このことは当センターの多様性や多能性を示すと同時に，「健康科学」そのものの学際性を示すものでもある。

「研究業績」は，著書・翻訳，原著論文，総説，資料・報告，学会・研究発表，講演・ワークショップ・シンポジスト・コメンティター等，論文査読，その他に区分してまとめた。

昨年度との比較では著書･翻訳の編数は 7 編から 10 編，原著論文は学会・機関誌等論文で 22 編から 25 編，紀要等論文では 20 編から 15 編，総説は 7 編から 5 編，資料･報告書は 16 編から 24 編へと増減が見られた（筆頭著者とそれ以外を含む)。学会・研究会での発表件数は，昨年度の 78 編から 81 編となり，増加した。

論文査読の件数は，平成 23 年度 63 件（昨年 64 件）で昨年度と大きくは変わらなかった。特に英文雑誌の査読件数は，当センター教員の国際的評価の一つの指標でもあると考えられる。

「研究助成金」は，平成 23 年度は総計 32 件であり，昨年度の 28 件より増加した。採択件数の増加の背景には地道な申請件数の増加もある点は考慮すべきであろう。独立行政法人化以降，大学からの研究費が削減されている現状を考えると，今後の研究発展のためには大型の研究費獲得へのさらなる努力が必要と思われる。

「国際学術交流活動」は 21 件で昨年度の 14 件に比べてやや増加した。

研究 FD は，今年度は 1 回となったが，センター全体での研究交流会議において教員の研究発表を行った。教員の個人研究発表は，教員相互が研究を理解することにより共同研究を促進させることが期待される。さらに，大学院生にもオープンにすることで，大学院生がセンター内研究の全体像を理解する上でも不可欠と考えられる。

当センターでは，各分野の研究者がすでに共同で取り組んでいる研究課題をさらに発展的に継続させるとともに，全学構成員や地域･社会から求められるオリジナルな研究を創出していく努力も必要である。

（文責: 高柳 茂美）

1. 個人研究活動

大柿　哲朗

平成 23 年度も，共同研究者としての科学研究費（C）による調査研究を中心とした研究活動であった。

科学研究費による調査研究は，ネパールの山岳地と都市（首都: カトマンズ）の小中学校を対象に，形態や身体組成，身体活動量等の測定を行うとともに，アンケート調査による生活習慣の調査も実施した。都市部の子どもたちは，日本の子どもと同程度の歩数であり，都市部の運動不足は明らかであった。とくにネパールでは体育の授業がなく，今後のますます運動不足が深刻化することが懸念された。一方，山岳地の子どもたちは体育がなくても一日の平均歩数が 16,000 歩を超えていた。現在 24 時間心電計による心拍数のデータを比較している。

学会活動としては，第 16 回東アジア運動・スポーツ科学会が，韓国の嶺南大学で開催され，日本側の代表者としての挨拶，企画運営に参画するとともに，ポスター発表を行った。

西村　秀樹

平成 23 年度は,『角界モラル考 – 戦前の大相撲はおおらかだった – 』の出版が主目的であった。年度中の出版に向けて 10 月に脱稿したが，近年の出版界の状況にあって遅れ込んだ(24 年 5 月 28 日，不昧堂出版からの刊行となった)。以下，本書の構成である。

Ⅰ 感情表出パフォーマンスと礼儀

Ⅱ 物言い – 情実裁定と曖昧な決着 –

Ⅲ 大相撲はスポーツにあらず – 取組(競技)におけるモラル –

Ⅳ 力士の芸人性 – 緩やかな就業倫理と生活倫理 –

Ⅴ 祝祭空間としての国技館

Ⅵ 厳粛化される大相撲 – 天皇制ファシズムのなかで –

その他に共同研究として，「伝統的な地域スポーツ・イベント」に関するものである。高知県山間部における市町村運動会や宮相撲が村・町づくりにいかに寄与しているかを考察するものである。

熊谷　秋三

研究室では，生活習慣病および介護予防に関する運動・社会疫学研究を展開している。生活習慣病関連では，久山町研究に参画し，死亡率，罹患率，認知症等をアウトカムとして運動疫学研究を展開している。職域研究では，ストレスとメタボリックシンドロームの関連性に関する前向き研究を展開している。介護予防関連では，65 歳以上の地域在住高齢者対象として，認知機能，うつ症状，介護認定，医療費などをアウトカムとした運動・社会疫学研究を展開している。また，九州大学新入生全員を対象に「学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築」に関する研究も実施中である。今後は，QOL，うつ状態，修学状況，学力などをアウトカムとした縦断研究を展開する予定である。さらに，児童の体力と生活習慣および心身の健康状態，学業成績等に関する疫学研究を，日本，韓国および中国において展開している。グローバル COE の申請に向けた本学のリサーチコアとして「身体運動の科学を通しての社会貢献」が 2009 年 9 月に認定されており推進中である。

斉藤　篤司

2 つの科学研究費研究がともに最終年を迎えた。子どもに対象を変えたネパール研究は，なかなか精度の高い研究というわけにはいかないが，無事調査を終えた。30 年近く積み上げてきた人脈により成り立つ研究もある。健康科学センターの歴史の一部であることには間違いない。何とか継続していかねば。本業の方の自己選択ペース走の研究も仮説と異なる結果が出てきて，かえって面白くなってきた。健康のためには至適運動強度での運動が必要，などと思っていたけれど，人は所詮好きなペースでしか歩かない，走らない。いずれにしても結果に早く日の目を見せてやらねば。また，ここのところ運動栄養の方が少しおろそかになっていたが，産学連携により再開した。少しでも研究費をもらってしまった以上，結果を出さないと尻をたたかれる。食べてやせようなんて，そんなうまい話はそう無いと言いながら，被験者を走らせる日々であった。しかし，おかげで特許出願という初めての体験もさせていただいた。うまいこと商品ベースに乗れば，億万

長者か。

山本　教人

今年度は，平成22年度より日本学術振興会科学研究費補助金を受けた研究「持久走のジョギング（健康走）化に及ぼしたメディア言説の影響に関する研究」（基盤研究（C）：研究代表）に関わる研究を推進した。具体的には，1965年1月1日から1994年12月31日の30年間に，「朝日」，「毎日」，「読売」新聞に掲載された，ジョギング，マラソン，長距離走関連記事の収集を行った。収集の対象としたのは，長距離を走ることにどのような意味があるのか，多くの人が走るようになった社会背景などについて記述している記事（たとえば，長距離走は精神力を高めるので，勉強の役に立つ，長距離走は肥満防止に役立つ，長距離走は精神力の強化に役立つ，など）であった。

これまでの検討結果から，次のような仮説を得ることができた。アメリカ生まれの健康作りを志向した新たな運動文化としてのジョギングは，我が国においては1970年代後半以降爆発的なブームとなる。この新たな運動文化に対するメディアの反応は，当初，健康作りのために有効であると積極的に評価するものから，スポーツが華美なファッションに流れていると批判するものまであり両義的であった。しかしその後，ジョギングが市民社会に広がりを見せ始めると，メディアはジョギングという新たな文化に乗せて，様々なメッセージを伝えるようになる。その内容は，たとえば，男女関係，障害者と健常者の関係，国際関係，仕事と余暇の関係などに及んでいる。これらのことより，現段階では，メディアはジョギングという報道対象を通じて，「量」から「質」へといった生活価値観の変化について様々な提言を行っていたのではないかと思われる。つまり，ジョギングをひとつのメディアとして「豊かさ」や「幸せ」の再定義がなされたのではないかというのが現在までに得ることのできた仮説である。研究補助の最終年度となる来年度は，この仮説を検証するために資料の丹念な読み込みを予定している。

このほか本年度は，過去に行った研究に関して，執筆依頼を多く受けた年度でもあった。研究成果が社会的に評価されているものと，肯定的に受け止めている。

杉山　佳生

平成23年度は，日本学術振興会科学研究費補助金を受けた研究「体育授業におけるノンバーバルスキル獲得・向上・発達プロセスの解明」（基盤研究（C）：研究代表者）の最終年度であったため，この研究の実施およびまとめ作業に重点を置いた。具体的には，体育授業に対する態度とノンバーバルあるいは対人スキルとの関係を定量的に検討し，体育授業に好意的である者ほど，表出系のノンバーバルスキルおよび関係開始にかかる対人スキルの獲得水準が高いことを明らかにした。また，体育授業での学習や経験あるいはコミュニケーション行動が，ノンバーバルスキルの発達に一定の影響を及ぼしていることを示した。そして，研究の総括として，学校体育に対する態度や特定の経験・行動がノンバーバルスキルの獲得および向上に影響を及ぼすという，総合的な発達モデルを提案した。

また，同じく科学研究費補助金を受けた研究「行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」（基盤研究（B）：研究分担者）の一環として，体育授業における社会的スキルの獲得に関する調査研究を行った。この成果は，橋本・根上・飯干（編著）「未来を拓く大学体育授業」（福村出版）に収録された。

林　直亨

実験が概ね順調に進み，研究成果をまとめることができた。研究室所属大学院生の研究遂行能力向上に伴うところも大きかった。

眼底血流に関する研究が軌道に乗り，実験から論文の受理までがスムーズになった。運動時の眼底血流に関して，体育学会のキーノートレクチャーで話す機会を頂いた。

顔面の皮膚血流から情動を評価する試みに関する研究も順調に進めることができた。これは上原記念生命科学財団からのご援助を頂いたお陰であった。昨年度にやずや食と健康研究所からご援助頂いた研究内容が PLoS ONE 誌に掲載され，この内容は新聞各社に報道され，また同研究所から表彰を受けた。

脳の血流と視覚に関する研究を開始した。上月財団から助成金を頂けることが決定し，今後順調に進捗し，また研究成果の発表が期待できそうである。

高柳　茂美

大学体育授業においてボディワークを教材として自己の身体や心への気づきを体験し，それらがどのように体験者の日常の自覚的行動に関連してくるかを考察した。また，ボディワークの体験により内的な変化が起こることについての質的研究や「心身一如のからだほぐし」が感情や免疫に及ぼす影響について生理的・心理的指標を用いて量的研究を継続的に実施している。

育児期にある女性を対象に運動・スポーツ実施の程度，身体活動量，精神的健康，首尾一貫感覚，育児不安について調査し，それらの間にどのような関連があるかを検討するため，収集したデータの分析を行った。

上園　慶子

平成 23 年度は，従前からの研究 1）九大在学生のライフスタイルについての調査，2）血圧変動に関する研究と，3）職員を対象にした運動が身体に及ぼす効果についての研究を進めた。

1）今年度は新たな調査は行わず，平成 21 年度までに入力したデータベースの確認と整備作業を行った。

2）若年者（大学生）の血圧変動については，高年次教養科目「応用健康学」の受講者 38 名の男女学生に対して立位負荷試験を行ない，性格特性や特性不安，ストレス度を調査し，データベースに追加入力した。

3）平成 20～21 年度九州大学 P&P に採択された「大学における効果的なヘルスプロモーションの展開とその評価」研究の 2 年目の測定結果を分析し全国集会で報告した。今回は，活動量（一日歩行数）があまり増加せず，糖代謝や脂質代謝の改善は認められなかった。年齢や性別など個人の属性や生活パターンの影響について分析を続けており，順次結果を報告する予定である。

山本　和彦

ホームページ参照のこと。

一宮　厚

平成23年度の研究的活動としては，長年検討してきた学生のコミュニケーション能力尺度による学生の変化についての解析を進めたことである。

学生のコミュニケーションの因子として，「傷つきの恐れ・同調と対立回避」，「親しい人との（円満な）関係」，「知らない人との関係・働きかけ」，「人付き合いへの消極性」の 4 つの因子を抽出しているが，新入生の入学年度による違い，また 4 年生における変化などを解析した。今後，順次報告していく予定である。

また健セ教員が行っている認知症の疫学研究，学生のメンタルヘルスの疫学研究にも参画した。

丸山　徹

平成 23 年度は，日常保健室業務で得られる健康関連情報の集約と解析，および筑紫キャンパスにおける他部局（総合理工学府および産学連携センター）との共同研究を進めた。学生健康診断のなかで心電図は全新入生を対象とした必須項目から除外したことで，伊都キャンパスでの健診を現実的なものとした。これまで蓄積された膨大な心電情報の解析を進めている。総合理工学府の量子プロセス理工学との不整脈シミュレーションに関する共同研究は AED の普及や有効性とも関連した重要な分野であり，今後も継続予定である。産学連携センターとの共同研究は昨年度福岡県 IST 産学官事業「無意識ストレス計測機器の製品化に向けた評価技術の開発」の研究費が得られたため今年度も継続予定である。来年度は業務負荷が最も大きい産業衛生分野での研究発表を産業衛生学会で行うことが目標である。

入江　正洋

健康に関する研究を，身体，心理，社会，環境などの様々な領域を包括した学際的な観点から，疫学，生理学，免疫学，分子生物学などの手法を用いて行っている。主な研究テーマは，（1）健康管理，メンタルヘルス，及び健康増進に関する研究，（2）ストレスマネジメントに関する研究，(3) 心理的ストレス，ライフスタイルと酸化的 DNA 損傷に関する研究，（4）職業性ストレスと免疫機能に関する研究などである。

平成 23 年度は，(2）に関して，一般企業社員を対象とした唾液アミラーゼ活性に関する研究を実施した。唾液アミラーゼ活性の勤務時間内における日内変動から平日 1 週間の変動，そして 1 年間の季節性変動にまで至る検討を行ったが，仕事に関連して明らかな短期的および長期的変動を示すという結果は得られなかった。

また，（4）に関しては，米国国立労働安全衛生研究所の Nakata らと共同研究で，長時間労働や疲労感が NK

細胞数の低下と関連することや，精神的不健康や抑うつ傾向が 1 年後の NK 細胞活性の低下に関連していること，男性において努力・報酬不均衡モデルにおける努力や努力・報酬不均衡が NK 細胞数の低下，報酬がその増加に関係していることなど，興味深い結果を報告した。

永野　純

生活習慣と疾病についての疫学研究: (1) 財）放射線影響研究所（広島，長崎）における研究プロジェクトに参加している。23 年度は，被爆者コホートにおける郵便調査（本格調査）の遂行に関与した。(2)「福岡大腸がん研究」（九大予防医学ほか）では，喫煙と遺伝子多型との相互作用について成果発表に関与した（共著）。(3)プロバイオティクス学（東海大学・古賀教授が主導）：脳卒中予防として用いられる低容量アスピリン療法による胃粘膜障害が，ヨーグルト定期摂取により抑制されることを検証する研究に参加し，論文発表した（共著）。

ストレスと健康についての研究: (1)慢性関節リウマチ患者の障害や QOL とストレスとの関連についての多施設共同研究: パーソナリティ・ストレスと重症度との関連について解析を行った結果，仮説に合致した知見を得た（研究助成金による研究を参照）。(2)ウィルス性慢性肝炎の進展とストレスおよび生活習慣との関連についての研究（九大心身医学ほか）に関与した。(3)ハイデルベルク研究への参加: 観察研究および介入研究データの一部を得て，その解析に着手した。このうち，喫煙に関する解析，ならびに介入方法についての資料翻訳作業を，助成金を受けて進めた（研究助成金による研究を参照）。(4) 睡眠時無呼吸症候群患者のアドヒアランス決定要因に関する研究（九大心身医学ほか）に関与し，論文発表した（共著）。(5) 九大予防医学と老年医学を中心に推進されている生活習慣病予防に関するコホート研究では，追跡開始時点でのデータの一部を用いた解析（パーソナリティと生活の質との関連など）に参加し，論文発表した（共著）。

福盛　英明

科学研究費基盤研究（C）平成 21 年度～平成 23 年度「大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究」（課題番:21530692，研究代表者:福盛英明）の最終年度として，研究の総括を行い，冊子体の報告書も発刊した。これらの知見を元に，日本学生相談学会第 30 回大会で「学生相談をどう発展させるか」というワークショップを担当するなど，実践に活かしてゆく予定である。また，3 年ぶりに九州大学学生を対象に，九州大学学生生活チェックカタログ調査を実施したので，データ分析などを鋭意行ってゆく。

眞﨑　義憲

平成 23 年度は，平成 22 年度から開始した学生・教職員に対する禁煙支援プログラムの効果などについて，禁煙への行動変容の契機に関する研究の成果発表と社会連携事業を中心に研究を行った。

(1) 禁煙への行動変容の契機に関する研究は,禁煙を希望する学生・教職員への禁煙支援を実施する卒煙プロジェクト（卒煙 Q）の 2 年目にあたる時期であった。昨年の反省を踏まえ，プログラム継続率の悪化をまねかない方策について検討を行った。禁煙成功率などは昨年と同様であり，プログラム継続率上昇のための検討を今後行っていくことになった。職員に関しては，医療機関での禁煙成功率よりも高い成果であった。

なお，この成果は第 6 回日本禁煙科学会学術総会に併行して開催された日韓合同シンポジウムにおいて，パネリストとしての発表を行った。

(2) 大学生の健康支援に関わる研究として，九州大学における禁煙支援プログラムの取り組みおよびその成果に関する報告を全国大学保健研究集会で行った。本学の禁煙支援プログラムは高い評価を受け，大学の標準プログラムとして考えたいという申し出がなされた。

(3) 社会連携事業として，糸島市の高齢者の健康づくりに関する調査・研究を実施した。糸島からの呼びかけで集まった方達は，老人会などのサークルに属している方達のみであり，ばらつきが大きく調査に支障が出たため，次年度以降は世代を下げて調査を行うことにした。

松下　智子

健康科学センター赴任（H23. 10）前より携わっている「失体感症」に関する研究において，論文が採択された。科学研究費基盤研究（C）平成 23 年度～平成 25 年度「失体感症質問紙の標準化」（課題番号 23530903 研究代表者有村達之）には，分担研究者として参画しており，今後も調査研究を行っていく。また，統合医療に関する研究（研究代表者　岡　孝和）に関しても，分担研究者として，厚

生労働科学研究費補助金への申請を行った。

学生相談に関する研究としては，福盛准教授の「大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究」に，研究協力を行った。今後，学生相談の実務に役立つ研究を行っていきたいと考えている。

2. 研 究 業 績

1. 著書・翻訳

（1）First author

橋本公雄: 第 2 章第 1 節, 第 3 節, 第 5 章, 第 8 章, 第 10 章. 橋本公雄・根上優・飯干明（編著）, 未来を拓く大学体育ー授業研究の理論と方法ー, 福村出版, 2012, pp.45-50, pp.76-85, pp.108-118, pp.146-155, pp.165-177.

西村秀樹: Ⅷ章 3 節 遊びとスポーツ.井上 俊・菊 幸一(編), よくわかるスポーツ文化論, ミネルヴァ書房, 2012, pp.82-83.

山本教人: 駅伝. 井上　俊, 菊　幸一編著, よくわかるスポーツ文化論. ミネルバ書店, 2012. pp.140-141.

杉山佳生: チームのまとまり（集団凝集性）. 攻撃性ー暴力か, それとも醍醐味か. ソーシャルスキルー他者と関わる技術. ジェンダーー女性とスポーツ. 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二（編著）, よくわかるスポーツ心理学, ミネルヴァ書房, 2012, pp.94-95, pp.104-105, pp.106-107, pp.108-109.

杉山佳生: 社会的スキル向上を図るスポーツ実践授業. 橋本公雄・根上　優・飯干　明（編著）, 未来を拓く大学体育授業, 福村出版, 2012, pp.166-174.

丸山　徹: 第 IV 章: 学校保健室や心臓二次検診への利用. 携帯型伝送心電図 （小沢友紀雄, 加藤貴雄編）, p213-214, 中外医学社, 東京, 2011

丸山　徹, 深田光敬: 心電図から探る電解質異常. 循環器医のための知っておくべき電解質異常（犀川哲典編）, p66-71, メディカルビュー社, 東京, 2011

Maruyama T, Kokawa Y, Nakamura H, Fukata M, Yasuda S, Odashiro K, Akashi K: Pulmonary venous flow pattern and atrial fibrillation: fact and controversy.　ed. Bajraktari G, Echocardiography in Specific Diseases. p 77-96,　INTECH, Croatia, 2011

入江正洋: 悪性腫瘍（pp8-10）, アナフィラキシー（pp22-23）, アレルギー（pp32-36）, 花粉症（pp162-163）, 感染（pp181-182）,後天性免疫不全症候群（pp294-295）, 自己抗体（pp380-382）, 自己免疫（pp389）, 薬物アレルギー（pp1001-1002）. 日本ストレス学会・財団法人パブリックヘルスリサーチセンター（監修）, ストレス科学辞典, 実務教育出版, 東京, 2011.

入江正洋: 第 3 章ストレスと疾患 7. アレルギー疾患. ストレスの基本的理解と抗ストレス食品の開発, pp51-57, シーエムシー出版, 東京, 2012.

2. 原著

A. 学会機関誌等論文

（1）First author

橋本公雄: 体育実技授業における心理社会的要因を媒介変数としたメンタルヘルス改善・向上効果のモデル構築. 大学体育学, 9: 57-67, 2012.

山本教人: 企業スポーツの未来 —旭化成陸上部・駅伝・メディア. 現代スポーツ評論 25, 77-85. 2011.

Hayashi N, Someya N: Muscle metaboreflex activation by static exercise dilates pupil in humans. Eur J Appl Physiol 111:1217-1221, 2011.

Hayashi N, Ikemura T, Someya N: Effects of dynamic exercise and its intensity on ocular blood flow in humans. Eur J Appl Physiol. 111: 2601-2606, 2011

Hayashi N, Someya N, Ikemura T: Changes in ocular flow induced by hypo- and hypercapnia relate to static visual acuity in humans　Eye Report. 1:e8: 20-24, 2011

（2）Co-author

Radak Z, Bori Z, Koltai E, Fatouros IG, Jamurtas AZ, Douroudos II, Terzis G, Nikolaidis MG, Chatzinikolaou A, Sovatzidis A, Kumagai S, Naito H, and Boldogh I: Age-dependent changes in 8-oxoguanine-DNA glycosylase activity are modulated by adaptive responses to physical exercise in human skeletal muscle. Free Radical Biology & Medicine, 51:417-423, 2011.

崎田正博, 石井禎基, 上阪雄介, 土手愛美, 中村泰章, 齊藤貴文, 熊谷秋三: 児童の性差と年齢における静的立位足圧中心動揺変数の発達的変化. ヘルスプロモーション理学療法研究, 1:39-50,2011.

齊藤貴文, 崎田正博, 松尾恵理, 野藤　悠, 森山善彦, 長野真弓, 古賀崇正, 熊谷秋三: 高齢者における膝痛の強度と罹患側の違いがメンタルヘルスに及ぼす影響. ヘルスプロモーション理学療法研究,1:21-28,2011.

Nofuji Y, Suwa M, Sasaki H, Ichimiya A, Nishichi R, and Kumagai S: Different circulating brain-derived neurotrophic factor responses to acute exercise between physically active and sedentary subjects. J. Sports Sci. Med., 11:83-88,2012.

磯貝浩久, 山本教人, 榊原浩晃, 杉山佳生: スポーツ界のパラドックスがもたらすトップアスリートの不品行問題. 九州体育・スポーツ学研究, 25(2): 19-28, 2011.

河津慶太, 杉山佳生, 中須賀巧: スポーツチームにおけるメンバーの共通理解尺度の作成. 九州体育・スポーツ学研究, 26(1): 27-35, 2011.

Ikemura T, Someya N, Hayashi N: Autoregulation in the ocular and cerebral arteries during the cold pressor test and handgrip exercise Eur J Appl Physiol 112: 641-646, 2012

Kashima H, Hayashi N: Basic taste stimuli elicit unique responses in facial skin blood flow. PLoS ONE 6: e28236, 2011

Nakaji G, Fujihara M, Fukata M, Yasuda S, Odashiro K, Maruyama T, Akashi K: Influence of common cardiac drugs on gastroesophageal reflux disease: multicenter questonnaire survey. Int J Clin Pharmacol Ther 49: 555-562, 2011.

Shimazu H, Nakaji G, Fukata M, Odashiro K, Maruyama T, Akashi K: Relationship between atrial fibrillation and gastroesophageal reflux disease: a multicenter questionnaire survey. Cardiology 119: 217-223, 2011.

古川陽介, 仲村尚崇, 深田光敬, 中司　元, 安田潮人, 小田代敬太, 丸山　徹, 赤司浩一: プロトンポンプ阻害剤がワルファリンによる抗凝固療法に与える影響. 心臓 43: 1515-1520, 2011.

Saito K, Kokawa Y, Fukata M, Odashiro K, Maruyama T, Akashi K, Fujino T: Impaired deformability of erythrocytes in diabetic rat and human: investigation by the nickel-mesh-filtration technique. J Biorheol 25: 18-26, 2011.

Nakata A, Irie M, Takahashi M: Association of general fatigue with cellular immune indicators among healthy white-collar employees. J Occup Environ Med. 53:1078-1086, 2011.

Nakata A, Irie M, Takahashi M: Psychological distress, depressive symptoms, and cellular immunity among healthy individuals: a 1-year prospective study. Int J Psychophysiol. 81:191-197, 2011.

Nakata A, Takahashi M, Irie M: Effort-reward imbalance, overcommitment, and cellular immune measures among white-collar employees. Biol Psychol. 88:270-279, 2011.

Nakata A, Takahashi M, Irie M: Association of overtime work with cellular immune markers among healthy daytime white-collar employees. Scand J Work Environ Health. 38:56-64, 2012..

Akama F, Nishino R, Makino S, Kobayashi K, Kamikaseda K, Nagano J, Koga Y,: The Effect of Probiotics on the Gastric Mucosal Permeability in Humans Administered with Aspirin. Scand J Gastroenterol 46: 831-6, 2011.

Otonari J, Nagano J, Morita M, Budhathoki S, Tashiro N, Toyomura K, Kono S, Imai K, Ohnaka K, Takayanagi R: Neuroticism and extraversion personality traits, health behaviours, and subjective well-being: the Fukuoka Study (Japan). Qual Life Res (Published online, 28 Dec 2011)

Tanahashi T, Nagano J, Yamaguchi Y, Kubo C, Sudo N: Factors that Predict Adherence to Continuous Positive Airway Pressure Treatment in Obstructive Sleep Apnea Patients: A Prospective Study in Japan. Sleep Biol Rhythms 10:126-135, 2012 (published online 19 Jan 2012)

Nisa H, Budhathoki S, Morita M, Toyomura K, Nagano J, Ohnaka K, Kono S, Ueki T, Tanaka M, Kakeji Y, Maehara Y, Okamura T, Ikejiri K, Futami K, Maekawa T, Yasunami Y, Takenaka K, Ichimiya H, Terasaka R: Microsomal epoxide hydrolase polymorphisms, cigarette smoking and risk of colorectal cancer: the Fukuoka Colorectal Cancer Study. Molecular Carcinogenesis (published online 13 mar 2012)

B. **紀要等論文**

（1）First author

橋本公雄, 村上雅彦, 本多芙美子: 快適自己ペース走における運動強度と感情に及ぼす走行距離の影響—900m と 2000m のフィールドを用いて—. 健康科学, 34: 1-8, 2012.

熊谷秋三, 古賀五月, 岸本裕歩, 佐々木悠: 2 型糖尿病を伴う閉経後女性の性ホルモン, 性ホルモン結合蛋白とメタボリックシンドロームの関連. 健康科学, 33:9-14,2012.

入江正洋, 小島　恵, 森　恭子: 事務系企業労働者を対象とした唾液アミラーゼ活性の日内, 週内および季節性変動に関する検討. 健康科学, 34: 27-33, 2012.

福盛英明, 隈本晶子, 飯田想平, 松下智子: 大学における学生相談機関の充実・発展に関する質的検討の試み, 健康科学, 34: 35-41, 2012.

（2）Co-author

佐々木悠, 熊谷秋三: 人型への眼差し, 造型美術にみる”肥満”と”痩せ”--旧石器時代後期この彫像美術（1）. 健康科学, 33:63-68 ,2012

佐々木悠, 熊谷秋三: 人型への眼差し, 造型美術にみる”肥満”と”痩せ”--旧石器時代後期この彫像美術（2）. 健康科学, 33:69-74,2012.

佐々木悠, 熊谷秋三: 人型への眼差し, 造型美術にみる”肥満”と”痩せ”--古代エジプト美術（3）. 健康科学, 33: 75-78 ,2012.

佐々木悠, 熊谷秋三: 人型への眼差し, 造型美術にみる”肥満”と”痩せ”--古代エジプト美術（4）. 健康科学, 33:79-82 ,2012.

Németh H, Kai Y, Kishimoto H, Sasaki H, and Kumagai S: Contribution of the oxygen uptake at the double product-break point to metabolic syndrome in male patients with newly diagnosed type 2 diabetes mellitus.- Endurance fitness and metabolic syndrome-. J Health Sci., 34: 15-26 ,2012.

畑山知子, 長野真弓, 松尾恵理, 森山善彦, 熊谷秋三: 地域在住高令者の QOL:太宰府研究. 健康科学, 33:43-54,2012.

長野真弓, 足立稔, 大植康司, 立石あつ子, 塩見優子, 熊谷秋三: 地方都市郊外の公立小学校児童における体力とメンタルヘルス関する調査報告. 文教大学心理社会的支援研究, 第2集. 2012.

中須賀巧, 杉山佳生, 須崎康臣: 体育における動機づけ雰囲気が生徒の学習意欲に与える影響. 健康科学, 34: 55-62, 2012.

中須賀巧, 杉山佳生, 阪田俊輔, 須崎康臣: 中学生の体育における動機づけ雰囲気の検討－熟達雰囲気に焦点を当てて－. 健康科学, 34: 83-87, 2012.

Sato N, Shimokawa M, Iwasaki H, Maruyama T, Akashi K: Brugada-like ECG associated with primary cardiac lymphoma. J Clin Exp Cardiol 2: e1000128, 2011

安田潮人, 古川陽介, 仲村尚崇, 深田光敬, 小田代敬太, 柳　統仁, 小池明広, 丸山　徹, 赤司浩一: 下側壁の早期再分極パターンを呈し心室細動をきたした Brugada 症候群の 1 例. 心電図 31: 476-484, 2011.

3. **総説**

（1）First author

丸山　徹, 深田光敬, 赤司浩一: インスリン抵抗性心筋症. 透析会誌 44:289-291,2011

入江正洋: 労働環境の変化と職場のメンタルヘルス. 心身医学, 51: 385-396, 2011.

松下智子, 有村達之, 岡　孝和: 失体感症に関する研究の動向と今後の課題－文献的検討－. 心身医学, 51 (5) : 376-383, 2011.

（2）Co-author

木内敦詞, 橋本公雄: 大学体育授業による健康づくり介入研究のすすめ. 大学体育学, 9: 3-22, 2012.

岡　孝和, 松下智子, 有村達之: 「失体感症」概念のなりたちと, その特徴に関する考察. 心身医学, 51(11): 978-985, 2011.

4. **資料･報告書**

（1）First author

橋本公雄, 堀田　亮, 谷本英彰, 木村　彩, 阪田俊輔: 平成 22 年度筑紫野市民のウォーキングの実態調査報告書, 筑紫野市健康づくり推進協議会, 2011.

橋本公雄: 平成 22 年度筑紫野市なかなかよか健康チャレンジ事業報告書「ウォーキングによる健康なまちづくり」, 筑紫野市健康づくり推進協議会, 2011.

橋本公雄, 小松智子, 堀田　亮: 地域健康づくりにおけるボランティア実践の意義, 筑紫野市健康づくり推進協議会, 2011.

熊谷秋三: 久山町研究: 運動疫学の視点から. 久山町研究 50 周年のあゆみ. 九州大学・久山町研究室. 141-141, 2011 年

熊谷秋三, 岸本裕歩: 生活習慣病予防検診の形態計測について. 久山町生活習慣病予防検診 50 周年のあゆみ, 久山町, p55, 2011 年

熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築: EQUSITE Study. 平成 22・23 年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト研究成果報告書. 2011

熊谷秋三: 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究. 平成 23 年度　厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患, 糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）総括研究報告書,2012.

熊谷秋三: 3 軸加速度センサー活動量計を用いた日本人の身体活動量・不活動量の実態評価の試み. 平成 23 年度　厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患, 糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）分担研究報告書. 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究（研究代表者: 熊谷秋三）2012.

熊谷秋三: 3 軸加速度センサー活動量計を用いた日本人の身体活動量・不活動量の実態評価の試み. 平成 21 年度－平成 23 年度　厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患, 糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）総合研究報告書. 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究（研究代表者: 熊谷秋三）2012.

熊谷秋三: 地域住民における運動習慣と認知症発症との関係: 久山町研究. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）研究報告書. アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研

究（研究代表者: 清原　裕）, 2012.

熊谷秋三: 携帯端末機器を活用した生活習慣改善プログラムに関する研究. 平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（ 糖尿病戦略 研究事業）分担研究報告書. 印刷教材と携帯電話フィードバックシステムを用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究.2012

上園慶子: 2.代謝症候群とその予防. CAMPUS HEALTH 48(3):49, 2011.11.

丸山　徹, 野村桃子, 濱田百合, 竹下恵梨, 荒川　令, 松園美貴, 戸田美紀子, 眞崎義憲, 永野　純, 入江正洋, 上園慶子: 全学 AED 授業のアンケート調査からみた AED に対する大学生の意識の変化. CAMPUS HEALTH 49(1):242-244, 2012.2.

眞崎義憲, 戸田美紀子, 松園美貴, 野村桃子, 田中朋子, 荒川　令, 山口祥子, 濱田百合, 高尾祐果, 豊田千寿子, 一宮厚, 丸山　徹, 入江正洋, 永野　純, 福盛英明, 上園慶子: 九州大学における喫煙対策「卒煙プログラムプロジェクト」について. CAMPUS HEALTH 49(1):382-384, 2012.2.

上園慶子: シンポジウム「時間薬理学の到達点」4.降圧薬の時間治療. 臨床薬理 43(2):103-104, 2012.3.

丸山　徹, 永野　純, 眞崎義憲, 入江正洋, 上園慶子:成人先天性心疾患をもつ本学学生の生活習慣病の実態調査. CAMPAS HEALTH 48(1): 514-516, 2011

永野　純, 角田千景, 本村知華子, 小田嶋博, 須藤信行, 西間三馨, 久保千春: 母親のストレス, 養育態度と子供の喘息の経過. ストレス科学 25:277-288, 2011

福盛英明, 吉武清實, 池田忠義, 高野 明, 山中淑江, 内野悌司, 大島啓利, 峰松　修: 大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究. 平成 21－23 年度科学研究費　基盤研究（C）報告書　課題番号 21530692. （研究代表者: 福盛英明）2012. 3.

（2）Co-author

清原泰治(代表), 西村秀樹, 五百蔵高浩, 米谷正造: 伝統的なスポーツ・イベントの記録と町づくりのための活用に関する研究, 平成 21～23 年度科学研究費補助金基盤 C 報告書, 2012.3, 30 頁.

松園美貴, 上園慶子, 眞崎義憲, 大柿哲朗, 熊谷秋三, 齋藤篤司, 成水貴代: 大学職員に対する運動教室の効果　—第二報—.　CAMPUS HEALTH 49(1): 361-363 2012.2.

荒川　令, 入江正洋, 戸田美紀子, 松園美貴, 野村桃子, 田中朋子, 山口祥子, 濱田百合, 一宮　厚, 丸山　徹, 永野　純, 福盛英明, 眞崎義憲, 上園慶子: 肥満学生を対象とした健康支援プログラムにおける歩数調査の有用性. CAMPUS HEALTH 49(1):358-360, 2012.2.

野村桃子, 眞崎義憲, 松園美貴, 戸田美紀子, 田中朋子, 荒川　令, 濱田百合, 山口祥子, 高尾祐果, 豊田千寿子, 一宮厚, 丸山　徹, 入江正洋, 永野　純, 上園慶子: 学生・教職員向け禁煙支援「卒煙Qプログラム」の取り組み. CAMPUS HEALTH 49(1):385-387, 2012.2.

Nishi N, Nagano J, Grant EJ, Sugiyama H, Sakata R, Hsu WL, Kasagi F, Suyama A, Ozasa K, Kodama K: Successful completion of a two-phase pilot study for a mail survey in the Life Span Study cohort: Phase 1 for validity and reliability and Phase 2 for feasibility. Technical Report for MS 12-10, Radiation Effects Research Foundation, 2011.

5. **学会・研究発表**

（1）First author

Ogaki T, Saito A, Nakao T, Nabetani T : Pedometer-determined physical activity in adolescents living in a rural village of Nepal.　The 16th East Asian Sport and Exercise Science Society Annual Congress, Korea, 2011.8.8.

Kumagai S, Nofuji Y, Suwa M, Yamashita S, Kishimoto H, Matsuo E, Nishichi R, and Sasaki H: BDNF predicts the

prevalence of dyslipidemia in Japanese male adults: A cross sectional study. The 4th International Congress on Prediabetes and Metabolic Syndrome.. Madrid, Spain, 6-9, April, 2011.

Kumagai S, Nemeth H, Kishimoto H, Nofuji Y, Ninomiya T, and Kiyohara Y: Prospective study on relationship between handgrip strength and mortality in Japanese general population: Hisayama Study. The 56th Annual Meeting on American College of Sports Medicine. Denver, USA, 31.May.-4.June,.2011.

Kumagai S, Kishimoto H, Nofuji N, Matsuo E, Yamashita S, Oshima Y, Nagano M, Kiyohara Y: Free-living physical activity by tri-axil accerometer in a Japanese population: A multi-chort study. The 21th International Puijo Symposium. Kuopio, Finland, 29.June, 2011-2. July, 2011.

斉藤篤司, 中尾武平, 濵田綾子, 野津亜季, 坂田俊輔, 山本美佳: 登山前日の積極的水分摂取が登山時の注意力に及ぼす影響. 第 31 回日本登山医学会学術集会, 東京都, 2011.6.12

Saito A, Honda F, Hashimoto K: Physiological and psychological responses to self-selected pace running. The 16th EASESS, Daegu, Korea, 2011.8.8

斉藤篤司, 本多芙美子, 橋本公雄: 音楽が自己選択強度でのランニングに及ぼす生理心理的影響. 九州体育･スポーツ学会第 60 回大会, 名護市, 2011.8.28

杉山佳生: 教科の嗜好と社会的スキルの関係. 九州体育・スポーツ学会第 60 回記念大会, 名護市, 2007.8.26-28.

杉山佳生: 学校体育における態度及び学習内容とノンバーバルスキル獲得との関係. 日本体育学会第 62 回大会, 鹿屋市, 2011.9.25-27.

Sugiyama Y, Wang X: Relation of verbal and nonverbal communication skills to interpersonal skills. 6th ASPASP International Congress, Taipei, Taiwan, 2011.11.11-14.

高柳茂美, 守谷めぐみ, 野藤 悠, 林 直亨, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築-研究の概要とうつ症状の実態-EQUSITE Study. 第 66 回日本体力医学会大会, 下関市, 2011.9.18.

Maruyama T, Sakaguchi H: Elimination of spiral chaos in two different numerical simulations. 4th Asia Pacific Heart Rhythm Society Scientific Session (APHRS 2011), Fukuoka, 2011. 9. 18-22.

入江正洋: 労働環境の変化と職場のメンタルヘルス. 第51回日本心身医学会総会, 仙台市, 2011. 6.26-27.

入江正洋, 小島 恵, 石川百合枝, 森 恭子: 新入社員の入社後の唾液中アミラーゼ濃度の変化. 第20回日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会, 札幌市, 2011.10.13-16.

福盛英明, 峰松 修: 大学内の学生の居場所活動の諸相～サイコリトリート, 26 年の歩みから～. 日本学生相談学会第 28 回大会（東京都,立教大学）,2011.05.22.

（2）Co-author

荒井久仁子, 橋本公雄: 高齢者の運動習慣を規定する身体的, 心理的, 社会的要因の検討－高齢者 2 次予防事業参加者を対象として－, 九州体育・スポーツ学会第 60 回大会, 2011.08.

谷本英彰, 橋本公雄: 小学校における音楽を用いた体育授業が学習意欲に及ぼす効果に関する試験的試み, 九州体育・スポーツ学会第 60 回大会, 2011.08.

堀田 亮, 橋本公雄: 運動が高齢者の心理･身体面に及ぼす効果について, 九州体育･スポーツ学会第 60 回大会, 2011.08.

荒井久仁子, 橋本公雄: 高齢者運動教室のメンタルヘルスの変化と規定要因の検討－特定高齢者予防事業参加者を対象として－, 日本スポーツ心理学会第 38 回大会, 2011.10.

木村 彩, 杉山佳生, 河津慶太, 橋本公雄: スポーツ選手のメンタルヘルスパターンと組織風土の関係－ステイルネス概念を用いて－, 日本スポーツ心理学会第 38 回大会, 2011.10.

谷本英彰, 堀田 亮, 藤原大樹, 橋本公雄: 高齢者のスポーツボランティアに関する研究－社会的側面に着目して－, 日

本スポーツ心理学会第 38 回大会, 2011.10.

堀田　亮, 谷本英彰, 橋本公雄: 高齢者のスポーツボランティアに関する研究－個人的側面に着目して－, 日本スポーツ心理学会第 38 回大会, 2011.10.

Hideaki Tanimoto, Kimio Hashimoto, and Ryo Hotta: Constructing the Spiral Model for Exercise Adherence(Children' Version) – A Comparison of the explanatory power between SMEAC and the existing models-, 6th ASPASP International Congress, 2011.11.

Ryo Hotta, Hideaki Tanimoto, and Kimio Hashimoto: The relationship between sports volunteer and commitment to community in elderly, 6th ASPASP International Congress, 2011.11.

Nakayama S, Hashimoto K, Ishihara K, Maruyama I, Hotta R, Tahara R, Ogaki T： Discrimination of health status based on physical fitness in community-dwelling and frail elderly, 58th Annual Meeting of the American College of Sports Medicine, Colorad (USA), 2011.

Yamamoto M, Ogaki T: The recent prevalence and trends of BMI distribution changes in Japanese first-year university students. The 16th East Asian Sport and Exercise Science Society Annual Congress, Korea, 2011.8.8.

松園美貴, 上園慶子, 眞崎義憲, 大柿哲朗, 熊谷秋三, 齋藤篤司, 成水貴代: 大学職員に対する運動教室の効果　—第二報—.　第 49 回全国大学保健管理研究集会, 山口, 2011.11.09.

岩瀬正典, 藤井裕樹, 土井康文, 清原　裕, 筒　信隆, 布井清秀, 中村宇大, 五島大祐, 篠原規恭, 中野昌弘, 南　昌江, 和田美也, 横溝由史, 菊池正統, 野見山理久, 中村　晋, 田代憲司, 吉成元孝, 市川晃治郎, 康東天, 岸本裕代, 熊谷秋三, 内田和宏, 城田知子, 神庭重信, 尾前照雄: 地域住民を対照とした福岡県糖尿病患者データベース研究(Fukuoka Diabetes Registry 1). 第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会, 札幌市, 2011 年 5 月 19 - 21 日

緒方梓奈子, 岸本裕代, 藤井裕樹, 菊池洋平, 大隈俊明, 筒　信隆, 布井清秀, 中村宇大, 五島大祐, 篠原規恭, 中野昌弘, 南　昌江, 和田美也, 横溝由史, 菊池正統, 野見山理久, 中村　晋, 田代憲司, 吉成元孝, 市川晃治郎, 熊谷秋三, 平川洋一郎, 土井康文, 康東天, 清原　裕, 岩瀬正典: 2 型糖尿病患者における身体活動量（メッツ）と臨床所見との関連: 福岡県糖尿病患者データベース研究(FDR6). 第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会, 札幌市, 2011 年 5 月 19 - 21 日

Yamatsu K, Nozu A., Matsuo E, Yamamashita S, Masaki M, and Kumagai S: CPA smart lifestyle program for changing physical activity and eating behaviors in Japanese subjects with metabolic syndrome. The 16th Annual Congress of East Again Society on Exercise and Sports Science. Daegu, Korea, 08.Aug.2011.

Won Tie, Ooue K, Nofuji Y, Adachi M, Nagano M and Kumagai S: The relevance between children's physical fitness and parents' living habits. The 16th Annual Congress of East Again Society on Exercise and Sports Science. Daegu, Korea, 08.Aug.2011.

楢崎兼司, 野藤　悠, 本田貴紀, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の軽度認知障害の評価と実態: 篠栗町研究.第 14 回運動疫学研究会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 15 日

守谷めぐみ, 野藤　悠, 高柳茂美, 林　直亨, 熊谷秋三: 大学生における SOC とストレスの程度, 運動習慣の関連（EQUSITE Study）. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16-18 日

野藤　悠, 岸本裕歩, 小原知之, 二宮利治 , 熊谷秋三, 清原　裕: 定期的な運動習慣が認知症発症に及ぼす影響: 久山町研究. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16-18 日

西内久人, 松尾恵理, 野藤　悠, 森山善彦, 佐藤広徳, 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住女性高齢者の BMI とうつ状態との関連性: 太宰府研究. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16-18 日

斎藤貴文, 松尾恵理, 野藤　悠, 長野真弓, 熊谷秋三: 3 軸加速度計を用いて評価した身体活動量と慢性的運動器疼痛との関連性－地域在住高齢者を対象として－: 太宰府研究. 第66回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011

年 9 月 16－18 日

佐藤広徳, 松尾恵理, 森山善彦, 長野真弓, 熊谷秋三: 独居高齢者の体力, 生活習慣, メンタルヘルスおよび身体活動量の特性に関する調査研究: 太宰府研究. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

森山善彦, 松尾恵理, 野藤　悠 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の身体活動量, 体力と認知機能について: 太宰府研究. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

松尾恵理, 野藤　悠, 森山善彦, 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住高齢者のうつ状態と身体活動量: 太宰府研究. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

高柳茂美, 野藤　悠, 林　直亨, 守谷めぐみ, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築-研究の概要とうつ症状の実態-: EQUSITE　Study. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

岸本裕歩, 野藤　悠, 松尾恵理, 山下幸子, 大島秀武, 清原　裕, 熊谷秋三: 3 軸加速度計で計測した日本人の身体活動量と肥満に対する週 23 メッツ・時の影響. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

本田貴紀, 岸本裕歩, 山下幸子, 森山善彦, 熊谷秋三: 勤労者の身体活動が睡眠時間と肥満の関係に与える影響. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

山津幸司, 松尾恵理, 熊谷秋三: 職域おける非対面生活習慣介入プログラムの効果. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

諏訪雅貴, 小田辺修一, 中野裕史, 佐々木悠, 熊谷秋三: アディポネクチン高発現 Tg マウスの骨格筋と輪回し行動の特性. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

大植康司, 大貫宏一郎, 熊谷秋三: 新規レスベラトロール 2 量体の骨格筋代謝に及ぼす影響. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

畑山知子, 松尾恵理, 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の身体活動と QOL との関連. 第 66 回日本体力医学会年次学術集会, 下関市, 2011 年 9 月 16－18 日

緒方梓奈子, 藤井裕樹, 岸本裕代, 大隈俊明, 井出脇康博, 菊池洋平, 井出　均, 平川洋一郎, 土井康文, 熊谷秋三, 清原裕, 北園孝成, 岩瀬正典: 2 型糖尿病患者の身体活動の実態:　Fukuoka Diabetes Registry6. 第 49 回日本糖尿病学会九州地方会, 2011 年 10 月 14 - 15 日

西地令子, 鷲尾昌一, 野藤　悠, 熊谷秋三: 女性における睡眠障害と血清脳由来神経系栄養因子との関連性. 第 70 回日本公衆衛生学会総会, 秋田市, 2011 年 10 月 19－21 日

長野真弓, 佐々木悠, 熊谷秋三: 健常者ならびに糖尿病者におけるメンタルヘルスと生活習慣との関連性 ― 睡眠と運動行動に関する指標を中心に―.第 27 回日本ストレス学会, 東京都, 2011 年 11 月 18－20 日

大曲めぐみ, 高柳茂美, 熊谷秋三: 大学生の QOL に関与する学生生活の要因及び SOC との関連について - うつ状態の有無による違い. 第 27 回日本ストレス学会, 東京都, 2011 年 11 月 18－20 日

本田貴紀, 山下幸子, 楢崎兼司, 松尾恵理, 野藤　悠, 岸本裕歩, 熊谷秋三: 勤労者における 3 軸加速度計を用いて計測した身体不活動の実態評価の試み. 第 13 回日本健康支援学会年次学術集会,つくば市, 2012 年 2 月 19-20 日.

長野真弓, 野藤　悠, 佐藤宏徳, 松尾恵理, 森山善彦, 熊谷秋三: 認知機能に及ぼす下肢運動機能強化プログラムの効果について. 第 13 回日本健康支援学会年次学術集会, つくば市, 2012 年 2 月 19-20 日.

西内久人, 松尾恵理, 森山善彦, 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住女性高齢者の BMI と老年症候群指標との関連性:太宰府研究. 第 13 回日本健康支援学会年次学術集会,つくば市, 2012 年 2 月 19-20 日.

長野真弓, 足立　稔, 大植康司, 立石あつ子, 塩見優子, 熊谷秋三: 地方都市郊外の公立小学校児童における体力とメンタルヘルスとの関連性. 日本発育発達学会第 10 回大会, 名古屋市, 2012 年 3 月 17-18 日

Yunru Chen, Norihito Yamamoto: A study of the portrait of men and women in Japanese health and physical

education textbooks used by junior high school. The 16th Annual Conference of East Asian Sport and Exercise Science Society. Daegu, Korea, 2011. 8. 7.

Qian Wang, Norihito Yamamoto: Sweets and gender. The 16th Annual Conference of East Asian Sport and Exercise Science Society. Daegu, Korea, 2011. 8. 7.

児玉光雄, 杉山佳生, 高橋仁大: テニス用タイミング予測トレーナーによるボレーのトレーニング効果に関する研究. 日本体育学会第 62 回大会, 鹿屋市, 2011.9.25-27.

中須賀巧, 杉山佳生: 体育授業における状況要因が志向性及び有能感を介して態度に与える影響. 日本スポーツ心理学会第 38 回大会, 東京都, 2011.10.8-10.

木村 彩, 杉山佳生, 河津慶太, 橋本公雄: スポーツ選手のメンタルヘルスパターンと組織風土の関係－ステイルネス概念を用いて－. 日本スポーツ心理学会第 38 回大会, 東京都, 2011.10.8-10.

中澤 史, 杉山佳生, 山崎将幸: 自我状態が社会的スキルに及ぼす影響. 日本スポーツ心理学会第 38 回大会, 東京都, 2011.10.8-10.

Xuelian Wang, Yoshio Sugiyama: Changes in health and lifestyle in physical education lesson for college students in China. 6th ASPASP International Congress, Taipei, Taiwan, 2011.11.11-14.

児玉光雄, 杉山佳生, 高橋仁大, 池田翔太: テニス用タイミング予測トレーナーによるボレーテスト②. 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 春日市, 2012.3.10-11.

王 雪蓮, 杉山佳生: 中国女子大学生を対象とした新しい体育授業プログラムの効果. 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 春日市, 2012.3.10-11.

須崎康臣, 杉山佳生, 中須賀巧: 体感型ゲームの有効性を探る. 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 春日市, 2012.3.10-11.

中須賀巧, 杉山佳生, 須崎康臣, 阪田俊輔: 中学校の体育授業が生徒の道徳性に与える影響. 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 春日市, 2012.3.10-11.

大石彩加, 中須賀巧, 杉山佳生: 大学運動部活動における動機づけ雰囲気の検討. 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 春日市, 2012.3.10-11.

阪田俊輔, 杉山佳生, 中須賀巧: 大学運動部員のストレスコーピング過程における種目間の比較. 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 春日市, 2012.3.10-11.

木村 彩, 杉山佳生: ステイルネス研究の動向と今後の課題. 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 春日市, 2012.3.10-11.

Ikemura T., Hayashi N., Ocular circulation response to exhaustive exercise in humans. Experimental Biology 2011. Washington DC 2011.4.10-13

Kashima H, Hayashi N. Facial skin blood flow response to peasant and unpleasant taste stimulation. Experimental Biology 2011. Washington DC 2011.4.10-13

鍛島秀明, 池村 司, 林 直亨: 昇圧刺激に対する顔の皮膚血流応答. 第 66 回日本体力医学会大会. 下関 2011.9.16-18

Kashima H, Hayashi N: Effect of temperature and capsaicin stimuli on responses in facial skin blood flow in the oral cavity. 第 26 回生体・生理工学シンポジウム 立命館大学 2011.9.20-22.

松村 潔, 有馬久富, 富永光裕, 大坪俊夫, 笹栗俊之, 藤井弘二, 福原正代 上園慶子, 守永友希, 大田祐子, 乙成孝俊, 川崎純也, 土橋卓也: COMFORT 試験グループ: 降圧薬合剤が服薬遵守および血圧コントロールに及ぼす影響に関する無作為化比較試験: COMFORT 試験 Impact of Combination Pill of Antihypertensive Drugs for Improvement of Medication Compliance: COMFORT Study. 第 34 回日本高血圧学会総会, 宇都宮, 2011.10.21.

村谷博美. 笹栗俊之, 土橋卓也, 上園慶子: 職域集団における慢性腎臓病(CKD)とその関連因子. 第34回日本高血圧学会

総会, 宇都宮, 2011.10.22

松園美貴, 上園慶子, 眞崎義憲, 大柿哲朗, 熊谷秋三, 齊藤篤司, 成水貴代: 大学職員に対する運動教室の効果－第二報－. 第 49 回全国大学保健管理研究集会, 山口, 2011.11.09.

丸山　徹, 野村桃子, 濱田百合, 竹下恵梨, 荒川　令, 松園美貴, 戸田美紀子, 眞崎義憲, 永野　純, 入江正洋, 上園慶子: 全学 AED 授業のアンケート調査からみた AED に対する大学生の意識の変化. 第 49 回全国大学保健管理研究集会, 山口, 2011.11.09.

眞崎義憲, 戸田美紀子, 松園美貴, 野村桃子, 田中朋子, 荒川　令, 山口祥子, 濱田百合, 高尾祐果, 豊田千寿子, 一宮厚, 丸山　徹, 入江正洋, 永野　純, 福盛英明, 上園慶子: 九州大学における喫煙対策「卒煙プログラムプロジェクト」について. 第 49 回全国大学保健管理研究集会, 山口, 2011.11. 9.

荒川　令, 入江正洋, 戸田美紀子, 松園美貴, 野村桃子, 田中朋子, 山口祥子, 濱田百合, 一宮　厚, 丸山　徹, 永野　純, 福盛英明, 眞崎義憲, 上園慶子: 肥満学生を対象とした健康支援プログラムにおける歩数調査の有用性. 第 49 回全国大学保健管理研究集会, 山口, 2011.11.09.

野村桃子, 眞崎義憲, 松園美貴, 戸田美紀子, 田中朋子, 荒川　令, 濱田百合, 山口祥子, 高尾祐果, 豊田千寿子, 一宮厚, 丸山　徹, 入江正洋, 永野　純, 上園慶子: 学生･教職員向け禁煙支援「卒煙 Q プログラム」の取り組み. 第 49 回全国大学保健管理研究集会, 山口, 2011.11.09.

大山　翼, 永井里枝, 小西涼子, 三田真史, 上園慶子, 財津　潔, 浜瀬健司: オンライン酸化を組む込んだ全自動 HPLC 装置を用いるヒト内因性メラトニンの含量解析. PPF（フィジカルファーマフォーラム)2011,10.

Mase A, Ito N, Komada Y, Oda M, Nagae D, Zhang D, Kogi Y, Tobimatsu S, Maruyama T, Nagayama Y, Kuwahara D, Yoshinaga T, Yamaguchi S, Tokuzawa T, Kawahata K, Padhi S: Microwave reflectometric measurement of biological signals.The Electromagnetic Compatibility Society of Australia (EMCSA) Symposium, Nov 9-11, 2011, Perth, Australia

6. 講演・ワークショップ・シンポジウム・コメンテータ―等

橋本公雄（招待講演,・司会）：Sport and Physical Education in Taiwan：The Influence of Japan and the World. Dr. Flank Lu 氏（国立台湾体育大学 体育研究所教授）, 平成 23 年度 春季 体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議, 九州地区大学体育連合, 宮崎市, 20112.3.14-15.

橋本公雄（特別講義）：大学体育を考える, 九州地区大学体育連合平成 23 年度春期研修会, 2012.03.

橋本公雄（基調講演）：研究のオリジナリティを求めてー視点をどこに置くかー, 九州スポーツ心理学会第 25 回記念大会, 2012.03.

熊谷秋三（特別講演）：糖尿病とメンタルヘルスの運動疫学.第 10 回福岡糖尿病治療研究会, 福岡市, 2011 年 7 月 6 日.

熊谷秋三（座長・企画・シンポジスト）：ポピュレーションアプローチによる大学生のメンタルヘルス支援システムの構築. 第 24 回日本健康心理学会年次学術集会・企画シンポジウム, 東京, 2011 年 9 月 11-12 日.

熊谷秋三（シンポジスト）：身体活動および体力と健康に関する運動疫学研究と今後の課題: 久山町研究. 第 14 回運動疫学研究会学術集会・シンポジウム,下関市, 2011 年 9 月 15 日.

熊谷秋三（座長・企画）：わが国における高齢者の介護予防に関する運動疫学研究の成果と今後の展望. 第 66 回日本体力医学会大会年次学術集会・ワークショップ, 下関市, 2011 年 9 月 16-18 日.

熊谷秋三（講演）：運動によるこころの健康増進: 健康科学センターの取り組み. 九州大学システム情報科学府・工学府・工学部合同ＦＤ, 学生のこころの健康支援の実際, 2011.12.08.

熊谷秋三（講演）：疫学的手法を用いた大学生のメンタルヘルス対策.九州大学全学 FD,心の危機の予防と連携～われわれ教職員にできること.箱崎キャンパス, 2012.03.01.

Sugiyama Y: キーノート: To reduce the psychological stress of natural disaster victims through sport and physical

activity. Seminar on Sport and Disaster, Yogyakarta, Indonesia, 2011.9.16.

高柳茂美（シンポジスト）：ポピュレーションアプローチによる大学生のメンタルヘルス支援システムの構築—九州大学 EQUSITE Study の結果と課題および展望—. 日本健康心理学会第 24 回大会. 東京都, 2011.9.11.

林　直亨: 運動時の眼底血流の応答とその調節. 日本体育学会第 62 回大会キーノートレクチャー（運動生理学専門分科会企画）　鹿屋体育大学　2011.9.25

上園慶子（座長）：セッション「薬物治療」（一般発表, 9~12). 第 13 回時間循環血圧研究会, 東京都, 2011.7,2.

上園慶子（シンポジスト）：「代謝症候群とその予防」. シンポジウム 1.健康教育維新～キャンパスから社会へ繋ぐ －在学中に獲得すべき医学知識と確立すべき生活習慣－. 第 49 回全国大学保健管理研究集会, 山口市, 2011.11. 9.

上園慶子（シンポジスト）：「降圧薬の時間治療」. シンポジウム 6.時間薬理学の到達点. 第 32 回日本臨床薬理学会年会, 浜松市, 2011.12. 1.

上園慶子（座長）：一般口頭発表, B-1・2. 第 13 回日本健康支援学会学術集会, つくば市, 2012.2.18.

一宮　厚（座長）：第 25 回日本老年精神医学会, 熊本市, 2010. 6. 24-25.

一宮　厚（座長）：第 32 回全国大学メンタルヘルス研究会, 東京都, 2011. 1. 25-26.

一宮　厚（座長）：第 12 回日本健康支援学会, 福岡市, 2011. 2. 19-20.

丸山　徹（講演）：運動負荷試験の実際. 平成 23 年度健康運動指導士養成講習会, 福岡,　2011. 9. 19.

丸山　徹（講演）：心房細動合併 GERD に対する治療の留意点. PPI フォーラム in 倉敷, 倉敷, 2011. 10. 26.

丸山　徹（シンポジスト）：糖尿病ラットおよび糖尿病症例における赤血球変形能の低下. 膜シンポジウム 2011, 沖縄, 2011. 11. 18-19.

Nagano J: (lecture) Epidemiological studies in Japan based on the Grossarth-Maticek principle/theory. Seminar zum Autonomietraining, Heidelberg, Germany, 2012.3.30-4.1

入江正洋（シンポジスト）: 労働環境の変化と職場のメンタルヘルス. 第51回日本心身医学会総会, 仙台市, 2011.6.26-27.

福盛英明（話題提供者）：［シンポジウム］大学カウンセラーの処遇の実情と希望—ことに私立大学において—. 第 45 回全国学生相談研究会議, 福山市, 2012 .1 .26-28.

福盛英明（助言者）：九州メンタルヘルス研究協議会, 大分市, 2011. 9.15-16..

福盛英明（座長・講師）：ワークショップ「日常の学生相談実践活動経験・体験を言葉にしてみよう」.日本学生相談学会第 29 回大会, 立教大学, 東京都, 2011. 5. 21.

福盛英明（座長）：日本人間性心理学会第 30 回大会, 愛知教育大学, 愛知, 2011. 10. 9.

福盛英明（座長）：日本心理臨床学会第 30 回秋季大会, 福岡国際会議場, 福岡, 2011. 9. 2.

眞﨑義憲（ファシリテーター）：福岡県教育委員会, 学校活性化人材育成事業・スーパーセミナー合宿, 2011. 8. 17-19.

眞崎義憲（シンポジスト）：The Challenges to Reduce the Number of Smoker at Kyushu University. 日韓ジョイントシンポジウム「Smoking Control of Children and Youth: 那覇: 2011.11.26

7. 論文査読

氏　名	雑 誌 名 な ど	編 数
橋本　公雄	体育学研究	1
	名桜大学総合研究所紀要	1
大柿　哲朗	J. Physiol Anthrop & Appl Human Sci	1
	健康支援	1
	九州体育・スポーツ学研究	1
西村　秀樹	スポーツ社会学研究	1
熊谷　秋三	健康支援	16
	Diabetes Care	1
	Am J Cardiol	1
	Med Sci Sports Exerc	1
	肥満研究	1
	J Phys Fit Sports Med	1
斉藤　篤司	登山医学	2
	九州体育･スポーツ学研究	1
	体育･スポーツ教育研究	1
	生理人類学会雑誌	1
山本　教人	体育・スポーツ教育研究	1
杉山　佳生	スポーツ心理学研究	2
	体育学研究	3
林　直亨	Medical Science Monitor	1
	Journal of Physiological Anthropology	1
	Clinical and Experimental Ophthalmology	1
上園　慶子	Clinical & Experimental Hypertention	2
一宮　厚	Campus Health	1
丸山　徹	Circulation Journal	5
	J Cardiology	1
	健康支援	1
入江　正洋	BioPsychoSocial Medicine	1
	Psychiatry Research	2
	健康支援	1
永野　純	Biopsychosocial Medicine	1
	Journal of Epidemiology	1
福盛　英明	日本学生相談学会	1
	日本感情心理学会	1
眞﨑　義憲	日本健康支援学会雑誌	2
松下　智子	日本学生相談学会	1

8. **その他（民間商業雑誌投稿，新聞等）**

山本教人: スポーツとジェンダー. 月刊女性＆運動, 353: 22-25, 2012.

山本教人: わかりにくさもスポーツの魅力. 経済, 197: 6-7, 2012.

杉山佳生: 体育で高める子どもたちのコミュニケーション・スキル. 体育科教育, 60(3): 36-39, 2012.

Kashima H and Hayashi N: PLoS ONE 2011 の研究内容が掲載. 2011.12.2 付　朝日新聞西日本版夕刊一面, 毎日新聞, 読売新聞　などに.

3. 研 究 助 成 金

●政府官公庁研究助成金

研究テーマ: 行動理論に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発

研究代表者: 橋本公雄

共同研究者: 根上　優，飯干　明，長岡良治，山本教人，杉山佳生，西田順一，磯貝浩久，正野知基，柿山哲治，内田若希，角南良幸

補 助 金 名: 文部科学省研究助成金基盤研究（B）

課 題 番 号: 21300222

研　究　費: 494 万円（直接経費 380 万円，間接経費 114 万円）（3 年継続，最終年度）

内　容:

本研究は九州地区大学体育連合に加盟する大学の多領域にまたがる研究者で大学体育授業改善を意図する研究プロジェクトを立ち上げ，科研費申請した第二期の大型科研費（B）の採択に基づくものである。最終年度の平成 23 年度はメンバー各自が 2 年間実施してきた独創的な体育授業プログラムの開発と実証的研究，ならびに理論構築をさらにバージョンアップして遂行した。この成果は研究報告書としてまとめ製本した。またこれまでの 7 年間の長年にわたる研究成果を九州大学の P&P 研究の刊行物出版助成を受け，「未来を拓く大学体育－授業研究の方法と理論」というタイトルで福村出版から書籍を出版した。本書はわが国初の大学体育授業研究の学術図書となる。

研究テーマ: スポーツ選手における心理的ウェルビーイング向上の因果モデルの構築

研究代表者: 橋本公雄

共同研究者: 根上　優，西田順一，内田若希

補 助 金 名: 文部科学省研究助成金（挑戦的萌芽研究）

課 題 番 号: 22650147

研　究　費: 117 万円（直接経費 90，間接経費 27 万円）（3 年継続，2 年目）

内　容:

本研究はスポーツドラマチック体験によるポジティブ特性を介した心理的ウェルビーイング向上の因果モデルを構築することを目的として行われているものである。2 年目の平成 23 年度は各共同研究者が自らの役割を担い，理論的・実証的研究を遂行した。スポーツドラマチック体験が QOL やポジティブ特性に及ぼす影響のメカニズムを明らかにするため，スポーツドラマチック体験とポジティブ特性の関係を分析しているが，ポジティブ特性にスポーツ参加は経験年数ではなくドラマチック体験が寄与していることが明らかにされており，きわめて興味深い知見が得られている。

研究テーマ: 野外教育によるコミュニケーションスキルの獲得—プログラム開発と因果モデルの構築—

研究代表者: 柳　敏晴

共同研究者: 橋本公雄，西田順一，中島俊介，堤俊彦，藤永　博，渡壁史子，榮樂洋光，松本裕史

補 助 金 名: 文部科学省研究助成金基盤研究（B）

課 題 番 号: 19300212

研　究　費: 配分額 13 万円（直接経費 10 万円，間接経費 3 万円）（3 年継続，2 年目）

内　容:

本研究は青少年の非社会的行動の増加を予防することを意図して，コミュニケーションスキルの獲得に焦点を当ては効果性の高い野外教育プログラムを開発することであり，野外プログラムにおける複数の関連要因から効果の媒介変数を特定化し，因果モデルの構築を目的としている。平成 23 年度は大学生を対象に開催された野外キャンプをとおして，なぜ野外ではコミュニケーションが促進されるのかを質的・量的側面から検討した。

研究テーマ：リズム体操の動きの習熟に伴うポジティブ感情の変化とそのメカニズム

研究代表者: 坂下玲子

共同研究者: 橋本公雄

補 助 金 名: 文部科学省研究助成金基盤研究（C）

課 題 番 号: 22500547

研　究　費: 配分額 13 万円（直接経費 10 万円，間接経費 3 万円）（3 年継続, 2 年目）

内　容:

本研究は心理学的仮説に着目し，リズム体操の動きの習熟も学習意欲や運動継続に関係すると推察されることから，「リズム体操」における動きの習熟に伴うポジティブ感情の変化とそのメカニズムを明らかにすることを目的としている。2 年目の平成 23 年度は研究を分担しているポジティブ感情尺度（MCL-2.）の改定版の作成を試みた。結果的には MCL-2.を構成する「快感情」「リラックス感」以外の因子は抽出できなかった。

研究テーマ：計画行動理論を用いた運動の継続化における運動強度自己選択の有効性

研究代表者: 斎藤篤司

共同研究者: 橋本公雄

補 助 金 名: 文部科学省研究助成金（挑戦的萌芽研究）

課 題 番 号: 21650162

研　究　費: 配分額 13 万円（直接経費 10 万円，間接経費 3 万円）（3 年継続，最終年度）

内　容:

本研究は斎藤篤司氏との共同研究であり，詳細は斉藤氏の報告を参照されたい。研究の一環として，環太平洋諸国（日本，アメリカ，中国，韓国，台湾，マレーシア）の大学生の身体運動・運動の意識と行動を調べるため，計画行動理論に基づく調査票を作成し，国際比較調査を実施した。分析した結果，文化的差異はみられるが，その理由となる変数を調査票の中に網羅していなかったので，再調査を行った。現在分析中である。自己観や身体観の相違が説明要因として挙がってくるものと考えている。

研究テーマ：多点観察による身体活動・運動量，体力と健康事象に関する運動疫学研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 清原　裕, 上園慶子, 内藤義彦, 長野真弓, 山津幸司, 畑山知子

補 助 金 名: 文部科学省科学研究補助金基盤研究（A）（平成 22-26 年度）

課 題 番 号: 22240073

研　究　費: 910 万円（直接経費 700 万円，間接経費 210 万円）（5 年継続, 2 年目）

内　容:

わが国の生活習慣病予防研究のみならず介護予防研究領域においても，運動疫学研究に基づく証拠は不足している。欧米では，生活習慣病の罹患率および死亡率，さらにうつ，認知症や認知機能低下への身体活動・運動の影響に関するメタ分析などにより，運動の有効性が実証されつつある。しかしながら，多くの疫学研究では，運動などの暴露指標の測定はベースライン調査での 1 回の測定成績に基づいてのみ解析されている場合が殆どであり，暴露指標の経時的変化（多点観察）を独立変数とした疫学研究は，その多大な労力のために世界的にも殆ど報告されていない。本研究は，各種のヘルアウトカム（うつ状態，認知機能低下，メタボリックシンドロームなど）の発現に及ぼす多点観察された身体活動・運動の関連性について前向き研究手法を用い検討する大規模運動疫学研究である。平成 22 年度は，3 つのコホート研究の構築を行った。久山研究は 40 歳以上の全町民約 3,500 人）を対象とした 50 年に及ぶ生活習慣病の罹患および認知症発現をアウトカムとした世界的な前向きコホート研究である。ここでは，身体活動・運動量の調査を実施した。大宰府研究は，65 歳以上の地域在住高齢者を対象とした前向きコホート研究である。アウトカムは，メンタルヘルス（うつ，閉じこもり，認知機能）である。身体活動・運動量は，三軸加速度計を用いて調査している。現在までに約 800 名の調査が終了した。職域研究では，2 つの会社を対象としたコホートの設定を継続している。メインアウトカムは，メタボリックシンドロームとうつ症状である。既に，700 名以上の調査が終了している。コホート設定が終了している場合は，繰り返し測定を継続すると共にアウトカム

評価指標の継続的な収集を行っている。全てのコホート設定はスムーズに進んでおり，当初の研究計画以上の成果が上がっており，極めて良好であると自己評価している。

研究テーマ: うつ・代謝障害のバイオマーカーとしての血清脳由来神経栄養因子に関する運動疫学研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 一宮　厚，諏訪雅貴

補 助 金 名: 文部科学省科学研究補助金挑戦的萌芽研究（平成 22-24 年度）

課 題 番 号: 22650164

研　究　費: 156 万円（直接経費 120 万円，間接経費 36 万円）（3 年継続，2 年目）

内　容:

神経栄養因子は神経細胞や標的細胞で発現し，神経の成長やネットワークの形成，修復，その他の細胞の成長などに働く自己分泌・傍分泌物質であるが，特に脳由来神経栄養因子（BDNF;Brain derived neurotrophic factor）は，脳の可塑性に影響する神経栄養因子である以外に，節食抑制やインスリン感受性調節機能を有する。このBDNF は血液脳関門を通過することに加え，末梢でも産生されることから，運動によるうつ症状および糖代謝能改善のバイオマーカーとなりうる可能性がある。申請者は，文部科学省科学研究費（平成 20・21 年度）の補助を受けて「脳由来神経栄養因子の運動生理学的意義に関する研究」を遂行し，運動の影響を含めメンタルヘルスおよび糖・脂質代謝能のバイオマーカーとしての意義を明らかにした。しかし，一般集団を対象とした前向き調査は行っていないことから，その因果関係は不明のままであった。そこで，本研究では，血清 BDNF とうつ傾向や糖・脂質代謝能のバイオマーカーとしての意義に関して，身体活動や運動の影響を含め，運動疫学研究の観点から前向き研究デザインを用い検討を加えるものである。平成 22 年度は，成人男性の血清 BDNF とうつ状態およびメタボリックシンドローム発現の関連性に関する前向き疫学研究を実施するためのコホート作成を行った。具体的には，約 700 名の男女勤労者を対象とした調査を修了した。この数値は，当初の計画の約 2 倍の対象者数である。また，身体活動・運動量は全対象に関して三軸の加速度計を用い評価している。全てのコホート設定はスムーズに進んでおり，当初の研究計画以上の成果が上がっており，極めて良好であると自己評価している。

研究テーマ: 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 上園慶子，眞﨑義憲，長野真弓，山津幸司，内藤義彦，清原　裕

補 助 金 名: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業）（平成 21-23 年度）

課 題 番 号: H21-循環器等（生習）- 一般-008

研　究　費: 790 万円（直接経費 790 万円，間接経費 0 万円）（3 年継続の 3 年目）

内　容:

1989 年に厚生省によって「健康づくりのための運動所要量」が策定された当時，所要量の策定には危険因子と運動の関係を調査した横断的調査による研究成績が用いられた。その後 2006 年に作成された「新しい健康づくりのための運動基準・指針」では，「健康づくりのための身体活動・運動量の基準値」や「健康づくりのための最大酸素摂取量の基準値」作成に，多くの研究が参考にされたが，その多くは欧米人を対象とした疫学研究であり，日本人に関する論文は数本で参考程度に留まっている。かかる背景を踏まえ，九州大学健康科学センターを中心とする運動疫学研究グループは九州大学医学部が主催する「久山町研究」グループとの共同事業として久山コホート，および他の職域コホートを用いた大規模運動疫学研究を計画するに至った。本研究では，久山町の一般地域住民を対象に，身体活動・運動および体力指標としての握力と総死亡率，疾患別死亡率および罹患率との関連性に関する大規模疫学前向き研究を行うと共に，新たに加速度計によって評価された身体活動・運動量と糖尿病やメタボリックシンドローム（MS）の発現に関する 2 年間の前向き調査に加え，さらに運動による介入研究を施行し，生活習慣病の一次予防に向けた実践研究を展開する。最新の久山町研究の

成績で，糖尿病はアルツハイマー病，がん，心疾患の有意な危険因子であることが判明し，糖尿病対策が最も急務であるとことが実証されている。さらに，職域においては，信頼性の高い身体活動量評価法である JALSPAQ（質問紙法）に加え加速度計を用い，生活習慣病やその危険因子との関連性に関する 2 年間の前向き研究の継続と，IT 環境などを駆使した運動を中核とした非対面式生活習慣プログラムによる介入効果を併せて検討する。これらの成績より，生活習慣病の一次予防に関する身体活動・運動量の基準値策定を目指すものである。

研究テーマ: アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研究

研究代表者: 清原　裕（九州大学医学研究院）

共同研究者: 神庭重信，岩城　徹，中別府雄作，久保充明，城田知子，熊谷秋三

補 助 金 名: 厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）（平成 20-24 年度）

課 題 番 号: H20-認知症-一般-004

研　究　費: 130 万円（直接経費 130 万円，間接経費 0 万円）（5 年継続の 4 年目）

内　容:

わが国では，高齢人口が急速に増加し，高齢者の精神疾患として最も頻度の高い認知症が大きな医療・社会問題となっている。認知症の予防対策を講じるには，地域住民中の認知症の実態を把握し，その危険因子を明らかにする必要がある。しかし，現在にところ，AD の危険因子はほとんど明らかにされていない。福岡県久山町では，1985 年から 65 歳以上の高齢住民を対象に，世界で最も精度の高い認知症の疫学調査が進行中である。また，同町では 2002 年より生活習慣病のゲノム疫学研究が開始され，その基盤が整備されている。本研究では，老年期認知症の疫学調査において，AD をはじめ認知症の有病率・発症率の時代的変化を明らかにし，危険因子・防御因子を包括的な健診成績の中より明らかにする。そしてゲノムワイド研究およびマイクロアレイ解析によって AD の遺伝的危険因子を特定する。さらに，以上の結果を踏まえ，食事・運動の面からの介入試験を行い，その予防手段の確立を図る。本研究によって，地域住民における AD をはじめとする認知症の有病率・発症率の時代的推移と現状，および高齢者全体における日常生活動作（ADL）および生活の質（QOL）に及ぼす認知症の影響が明らかとなる。また運動，食事性因子，高血圧・糖尿病などの症候因子を含む包括的な健診を基盤とした追跡調査とわが国のトップレベルのゲノム解析によって，認知症の危険因子が解明されると考えられる。その成果は，認知症の予防手段の確立を通して，国民の保健・医療・福祉の向上をもたらし，とくに高齢者医療費の削減につながると期待される。

研究テーマ: 印刷教材と携帯電話フィードバッグシステムをも用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究

研究代表者: 山津幸司（佐賀大学文化教育学部）

共同研究者: 熊谷秋三，佐藤　武，小西史子

補 助 金 名: 厚生労働科学研究費補助金（糖尿病戦略研究事業）（平成 21-23 年度）

課 題 番 号: H21-糖尿病等-若手-006

研　究　費: 30 万円（直接経費 30 万円，間接経費 0 円）（3 年継続の 3 年目）

内　容:

近年，2 型糖尿病やメタボリックシンドロームなどの生活習慣病保有者の増加が国家的な問題となっている。その対策のひとつを提案することを目指し，本研究の目的は，後述する先行研究で確立した非体面行動療法による生活習慣介入の方法論を応用し，2 型糖尿病やメタボリックシンドロームの予防に適用させることである。本研究は，平成 21 年度からの 3 ヵ年で遂行される。初年度（平成 21 年度）は，糖尿病やメタボリックシンドロームの予防に有効とされる生活習慣（特に食と身体活動）のエビデンスをレビューし，その結果を受けて紙媒体（小冊子）の教材を作成する。2 年目の平成 22 年度には，初年度作成の教材を用いた生活習慣への介入を実施するとともに，紙媒体のコンテンツと同時に活用する携帯電話による個別フィードバックシステムを構築する。最終年の平成 23 年度には，個別フィードバックシステムの生活習慣改善プログラムを用い職域や地域の対象者への介入を試み，より完成度の高いプログラムを構築する。初年度（21 年度）には食と身体活動を中心とした生活習慣介入のための印刷教材（小

冊子）を作成し，次年度（22 年度）に本教材を用いた生活習慣改善プログラムを開発しその有効性を検討する。同時に，本印刷教材の後に用いる携帯電話による個別フィードバックシステムを開発し，最終年度（23 年度）に地域または職域にて印刷教材と個別フィードバックシステムを用いた生活習慣改善プログラムの有効性を明らかにする。研究代表者の山津は，これまで情報技術（IT）を活用した非対面生活習慣変容プログラムを開発し，肥満，高血圧および高脂血症での有効性を報告してきた（肥満研究，2005；糖尿病，2005；行動医学研究，2006；Behaviour Research and Therapy, 2007）。その独自な点は，問診の解析とそれに基づく個別アドバイスの提供をコンピュータ化による通信指導であった。通信指導とすることで，これまでの対面型指導で対照とするのが難しかった層（有職者など）を拡大でき，またアドバイスの自動化により費用対効果に優れた集団戦略となりうる方法論のひとつを確立した。共同研究者の熊谷らは，九州大学が誇る世界の久山町コホート研究にも参画しており，今後，地域住民の生活習慣改善に向けた取り組みも行うこととなっている。

研究テーマ：うつ状態とクオリティ・オブ・ライフに関する運動

研究代表者：畑山知子

共同研究者：熊谷秋三

補 助 金 名：文部科学省科学研究補助金基盤研究(C)（平成 22-24 年度）

課 題 番 号：22500646

研　究　費：78 万円（直接経費 60 万円，間接経費 18 万円）（5 年継続，2 年目）

研究テーマ：児童における体力ならびに定量化された身体活動量と心理的因子との関連性

研究代表者：長野真弓

共同研究者：熊谷秋三，足立稔，島田香

補 助 金 名：文部科学省科学研究補助金基盤研究（C）（平成 23-25 年度）

課 題 番 号：23601026

研　究　費：39 万円（直接経費　30 万円，間接経費　9 万円）（5 年継続，2 年目）

研究テーマ：加速度センサーを用いた運動疫学研究による肥満と歯周病の因果関係の解明

研究代表者：嶋崎義浩

共同研究者：熊谷秋三，清原裕，山下喜久

補 助 金 名：文部科学省科学研究補助金基盤研究（B）（平成 23-27 年度）

課 題 番 号：23390483

研　究　費：25 万円（直接経費　25 万円，間接経費 0 万円）（5 年継続，2 年目）

研究テーマ：一般住民における身体組成が心血管病発症および死亡に与える影響：久山町研究

研究代表者：岸本裕歩

共同研究者：二宮利治，熊谷秋三，清原裕

補 助 金 名：文部科学省科学研究補助金基盤研究（C）（平成 23-25 年度）

課 題 番 号：23500842

研　究　費：8 万円（直接経費　8 万円，間接経費 0 万円）（5 年継続，2 年目）

研究テーマ：運動無関心および身体不活動に対する運動疫学研究

研究代表者：山津幸司

共同研究者：熊谷秋三

補 助 金 名：文部科学省科学研究補助金基盤研究（C）（平成 23-25 年度）

課 題 番 号：23500737

研　究　費：65 万円（直接経費　50 万円，間接経費 15 万円）（3 年継続，2 年目）

研究テーマ：持久走のジョギング（健康走）化に及ぼしたメディア言説の影響に関する研究

研究代表者：山本教人

補 助 金 名：文部科学省研究補助金基盤研究（C）

課 題 番 号：22500580

研　究　費：52 万円（直接経費 40 万円，間接経費 12 万円）（3 年継続の 2 年目）

内　容：

かつては「持久走」と呼ばれていた鍛錬的色彩の濃い走運動の一形態が，美容や健康づくりを目的とした

走運動化（ジョギング化，健康走化）する過程で，メディアがジョギングという新たなスポーツ文化をどのように言説化し関わってきたのかを検討する。

研究テーマ: ネパール人小児の身体活動量および栄養素等摂取量が身体組成の変化に及ぼす影響

研究代表者: 中尾武平

共同研究者: 大柿哲朗，斎藤篤司

補 助 金 名: 文部科学省研究補助金基盤研究（C）

課 題 番 号: 21610026

研　究　費: 130 万円（3 年継続, 3 年目）

内　容:

ネパールの山岳地と都市に居住する小児を対象に，形態計測（身長，体重，皮下脂肪厚，周径囲，生体インピーダンス等），日常生活中の歩数や心拍数の測定，体力測定，栄養素等摂取量に関して，3 年目の調査研究を実施した。平成 23 年度も，平成 22 年度に続き従来の測定項目に加えて，足型，足指の筋力などの測定を行った。

研究テーマ: 大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究

研究代表者: 福盛英明

共同研究者: 吉武清實，池田忠義，高野　明，山中淑江，内野悌司，大島啓利，峰松　修

補 助 金 名: 文部科学省研究補助金基盤研究（C）

課 題 番 号: 21530692（平成 21-23 年度）

研　究　費: 130 万円（3 年継続の 3 年目）

内　容:

平成 23 年度が最終年度である。本研究の目的は，全国の学生相談機関の充実の様相と過程について，学生相談機関の発展をモデル化し，学生相談機関を整備するにあたっての指標や段階を提示することである。具体的には，学生相談機関の「発展段階イメージモデル表」の作成である。「発展段階イメージモデル表」とは，学生相談機関の充実発展を領域や項目別に段階的に示し，「ここまで来たのか」「次はあそこを目指そう」というように，里程標であるとともに道標となるものである。これによって提示されるのは，評価基準ではなく「イメージモデル」である。各学生相談機関の発展状況を時系列でイメージし，現在の状況をプロフィールによって把握し，全体像と課題を明確にすることで，今後の発展の方向性を検討するためのツールとして用いられることをねらいとしている。平成 23 年度は，平成 21-22 年度で作成された「学生相談機関発展段階表」（ver.1）を改良し，「学生相談機関発展段階イメージモデル表」を作成した。「学生相談機関発展段階イメージモデル表」を用いて，全国の学生相談機関の発展段階の実際を調査し，項目別の分布などを分析した。また吉武ら（2010）による学生相談機関全国調査のデータを学生相談機関発展段階イメージモデル表によって整理することによって，学生相談機関の充実のあり様について検討をおこなった。またこれらの結果を踏まえて，学生相談の発展は，①学生相談機関の充実②学生相談機関の活動実績・連携実績③学生相談機関のスタッフの健康度，の 3 次元モデルを提案した。今年度が研究の最終年度となるため，報告書を冊子体で発行し，各協力大学にすることで，研究結果を周知することによって学生相談機関の充実の一助となるようにした。

研究テーマ: 計画的行動理論を用いた運動の継続化における運動強度自己選択の有効性

研究代表者: 斉藤篤司

共同研究者: 橋本公雄

補 助 金 名: 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（平成 21- 23 年度）

課 題 番 号: 21650162

研　究　費: 330 万円

内　容:

健康・体力づくりのための運動には継続が不可欠である。従来の運動処方では効果や効率を重視したため，運動強度や時間，頻度といった量的側面での処方がなされ，継続につながりづらいというデメリットがあった。これに対し，我々は運動者が自ら選択したペースでの運動により，「快」や「満足感」などのポジティブな感情を増加させることを示し，このような運動者の欲求や態度を含めた運動処方の必要性を呈示してきた。しかし，ポジティブな感情がどのように行動に結びつくかというモデルあるいは理論に欠けていた。そこで，計画的行動理論に基づき，自己選択ペースによる走行が「態度」や「コントロール感」にどう影響するかについ

て検討している。また，実験室内で自己選択ペースをどのようにコントロールするかがこれまで課題であったが，スピードシンクロトレッドミルという新たな装置の導入により，より実走に近い形で研究を行うことか可能となった。自己選択強度での運動は，「快」を高めることにより，運動に対する好意的な「態度」を形成・強化し，「快」が高まり，「行動の統制感」を高め，結果として，行動および行動意図を生起する可能性を高める，という仮説のもと，検証してきた。しかし，自己選択ペースの運動では感情の変化はむしろ小さく，運動強度や外的環境に対し，生理的に変化させながら，感情は変化させず，ニュートラルな状態で運動していることが示された。

研究テーマ：体育授業におけるノンバーバルスキル獲得・向上・発達プロセスの解明

研究代表者：杉山佳生

補 助 金 名：日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（平成 21-23 年度）

課 題 番 号：21500564

研　究　費：91 万円（直接経費 70 万円，間接経費 21 万円）（3 年継続の 3 年目）

内　容：

本研究の目的は，体育の授業を通してノンバーバルコミュニケーションスキルが獲得され，向上するプロセスを，発達的な視点から明らかにすることであった。そのために，関連要因を理論的に推測した上で，それらの要因とノンバーバルスキルの獲得水準との関係を検討した。その結果，体育授業に対する好意的態度，授業での特定のスポーツ体験，あるいは，授業での実際のノンバーバル行動が，特定の種類のノンバーバルスキルの獲得・向上と結びついていることが示唆された。

研究テーマ：関節リウマチの予後に対するストレス・パーソナリティの影響についての縦断研究

研究代表者：永野　純

補 助 金 名：科学研究費補助金基盤（C）

課 題 番 号：21590765

研　究　費：78 万円（3 年継続の 3 年目）

内容：

特定の精神的ストレス・パーソナリティが関節リウマチの病状に影響するかどうかを検証する前向き研究である。とくに関心があるのは，リウマチ発症の危険因子としての報告がある，「陰性感情を合理化し，感情的になることを抑圧する」ことを特徴とする「タイプ 5」パーソナリティである。本年度は，統計解析を行った。リウマチの病状の総合的指標として，追跡時点における機能障害（class）を目的変数とし，ベースライン時点における機能障害を説明変数として含めた重回帰分析を行った。人口統計的要因，疾患活動度や進行度，治療，教育水準などを補正した結果，陰性感情合理化・感情抑圧が強いことは，2 年後の不良な機能障害と関連していた。この関連は，生活習慣要因では説明されなかった。この内容についてまとめた論文を，現在学術誌に投稿中である。

研究テーマ：失体感症質問紙の標準化

研究代表者：有村達之

共同研究者：岡　孝和，松下智子

補 助 金 名：科学研究補助金 基盤研究(C)

課 題 番 号：23530903

研　究　費：290 万円（3 年継続の 1 年目）

内　容：

失体感症とは身体感覚への気づきが乏しいという心身症患者の特徴を指す概念である。失体感症は心身症のリスクファクターで，治療抵抗性心身症の特徴でもあると多くの臨床家は感じているが，研究は進んでいない。そこで，失体感症を評価する質問紙を開発し，心身症症状との相関を調査する。具体的な計画として，1. 失体感症質問紙を開発し，妥当性と信頼性を検討する（心療内科外来患者を対象）。2. 失体感症質問紙と疼痛閾値との対応を調査する（質問紙の妥当性検証）。3. 失体感症傾向と心身症症状（糖尿病血糖コントロール）との相関を調査する。

●研究助成金

研究テーマ：顔面皮膚血流の非接触計測を利用したヒトの情動センシング

研究代表者：林　直亨

補 助 金 名：公益財団法人上原記念生命科学財団研究助成金

研　究　費: 500 万円

内　容:

情動に伴う表情の変化と，自律神経応答の変化は，両者ともに，脳の扁桃体中心核から投射されているので，自律神経活動の応答から情動を評価できる可能性がある。そこで，情動変化に伴って顔面の皮膚血流は特異的に変化するかどうかについて検討し，顔面の皮膚血流変化から情動を推定する手法について探索した。12 名の被験者にビデオ視聴によって情動変化を引き起こした際に，非接触型の血流計を用いて，顔面の多部位の皮膚血流を計測した。その結果，ビデオ視聴に伴って，特に前額および頬部の血流が有意に変化した。情動は，それぞれに異なる顔の皮膚血流応答を示し，特異的な応答を示すことが明らかとなった。一方，喜びの情動は有意な血流変化を起こさなかった。これらのことから，負の情動は顔面の皮膚血流に特異的な変化をもたらす可能性が示唆された。

研究テーマ: 喫煙の健康影響を修飾する心理社会的要因の解明と，心理療法的介入による喫煙の健康影響低減の試み—大規模コホートデータの解析と介入手法の開発—

研究代表者: 永野　純

補 助 金 名: （財）喫煙科学研究財団研究助成金

研　究　費: 200 万円（3 年継続の 2 年目）

内　容:

喫煙は，多部位のがんや心血管病の危険因子として確立している。禁煙がリスクを減らす第一の手段であることは無論であるが，それが必ずしも容易でないことも事実である。本研究は，喫煙の健康影響を修飾する身体的・心理社会的要因を解明し（課題 1），喫煙の健康影響低減のための心理療法介入の本邦における開発を目指す（課題 2）ものである。課題 1: ハイデルベルク・コホート研究標本より，代表性のある標本において実施された，オートノミー・トレーニングの効果を検証するランダム化比較試験によって，オートノミー・トレーニングがストレスを低減し，結果として喫煙者の生存率が改善することが証明された。課題 2: 語学専門家の協力を得て，AT の詳細な資料の邦訳に取り組んだ。約 100 頁の資料翻訳を行った。

研究テーマ: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 一宮　厚，林　直亨，高柳茂美，杉山佳生，福盛英明，眞崎義憲，淵田吉男

補助金名: 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト

研究費: 389.6 万円（直接経費 389.6 万円，間接経費 0 円）（2 年継続，2 年目）

●学会財団等からの研究助成金

研究テーマ: 高齢者の身体活動量の実態とうつ・認知機能との関連性

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 一宮　厚，野藤　悠，森山善彦，長野真弓

補 助 金 名: 総合健康推進財団

研　究　費: 90 万円（直接経費 90 万円，間接経費 0 円）（単年度）

●共同研究

研究テーマ: 新たな健康指標の開発と健康支援システムの構築に関する研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: なし

補 助 金 名: 共同研究（合同会社 SHP 企画&株式会社 NINOSystem）

研　究　費: 20 万円（直接経費　18 万円，間接経費 2 万円）

●受託研究

研究テーマ: 元気な高齢期を送るための生活習慣づくり支援事業

研究代表者: 眞崎義憲

共同研究者: なし

補 助 金 名: 社会連携事業経費（九州大学）

研　究　費: 570,000 円

内容:

本事業は「元気な高齢期を送るための生活習慣づくり支援事業」として，本学の社会連携事業として支援を受

け，糸島市において実施した。

糸島市が推進する健康いとしま21には，食事指導や運動指導などは掲げられているもの，喫煙対策については市としての行動方針が掲げられていない。そこで，糸島市の健康対策で実施が遅れている喫煙対策について，市の外側から推進することを事業の目的として，市が実施している事業の中で，受動喫煙防止を中心とした喫煙対策と喫煙状況の自己評価と受動喫煙評価を実施した。

元気な高齢期を迎えるためには，高齢期になる以前の青年期，壮年期の働き盛り世代を対象に，生活習慣を考える機会を設けて，自分の健康状態を把握してもらうことが重要である。本事業では，生活習慣のうち，喫煙習慣の是正に関わる教育と参加者自身の健康状態把握を目的として，講習とそれに続く，呼気中一酸化炭素濃度などの測定を実施した。

研究テーマ: 地域における効果的な介護予防対策に関する調査研究（太宰府研究）

研究代表者: 熊谷秋三

補 助 金 名: 受託研究（大宰府市）（平成21-23年度）

研　究　費: 200万円（直接経費200万円，間接経費なし）（3年継続，3年目）

内　容:

わが国の高齢化率は19%を超え，5人に1人が高齢者という超高齢社会となり，要介護高齢者の増加や介護期間の長期化など介護ニーズが増大している。さらに，近い将来には，第1次ベビーブーム世代が高齢者となるため，そのニーズはさらに増えることは確実であるが，増大する社会保障費に歯止めがかかっておらず，介護保険制度そのものの存続が危ぶまれている。厚生労働省は，要介護認定軽度者の大幅な増加や，軽度者のサービス利用が状態改善につながっていないことを問題視し，予防重視型システムへの転換のため，2006年に介護保険制度を全面的に見直した。特に介護予防において強化すべき分野を5つ列挙し対策を講じたが，その中で充分なエビデンスが蓄積されていない認知症，うつ，閉じこもり対策に関しては，市町村が行う地域支援事業に位置づけられた。これまでの介護予防教室や健康教室は，要介護状態を個人の生活習慣の結果としてとらえ，個人の健康行動に焦点を当てる傾向にあったが，認知機能低下，うつ状態，閉じこもりは，個人の要因だけでなく，社会的・環境的な因子も強く関連することが示されつつある。すなわち，社会や環境が，個人の健康行動や心理状態に関与し，その結果個人の健康も多大な影響を受けるわけである。しかし，その詳細な実態やメカニズムには不明な点が多い。本研究の目的は，太宰府市における介護予防事業の効果的な運営方法とその評価システムに関する基盤の確立を図るため，認知機能低下，うつ状態，閉じこもりとそれらに影響する諸因子を前向き研究により検討することである。

研究テーマ: 握力強化増進用具のツール開発と運動プログラムの評価

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: なし

補 助 金 名: 受託研究（株式会社ころがらん本舗）

研　究　費: 3万円（直接経費2.4万円，間接経費0.6万円）（単年度）

研究テーマ: 効果的な介護予防対策の構築のための大規模疫学調査

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: なし

補 助 金 名: 受託研究（篠栗町）

研　究　費: 270万円（直接経費270万円，間接経費0万円）（5年継続，1年目）

研究テーマ: 継続的な運動プログラム実施による効果測定と評価

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: なし

補 助 金 名: 受託研究（糸島市）

課 題 番 号:

研　究　費: 267.8万円（直接経費　267.8万円，間接経費　0万円）（単年度）

4. 国際学術交流活動

氏　名	目 的 地	目　的	期　間	種別
熊谷　秋三	スペイン	第 4 回境界型糖尿病とメタボリックシンドローム国際学会参加	平 23. 4. 5－ 4.11	出張
林　直亨	アメリカ合衆国	学会参加及び発表（Experimental Biology 2011）	平 22. 4. 8～ 4.15	出張
熊谷　秋三	大韓民国	東洋大学の朴教授との運動疫学に関する共同研究の打ち合わせ	平 23. 4.22－ 4.25	出張
熊谷　秋三	中華人民共和国	大連市の小学校児童の体力と生活習慣に関する共同研究打ち合わせ	平 23. 4.30－ 5. 4	出張
熊谷　秋三	アメリカ合衆国	第 58 回アメリカスポーツ医学会出席	平 23. 5.30－ 6. 6	出席
熊谷　秋三	フィンランド	東フィンランド大学学位論文公聴会の公開審査および第 21 回 Puijo シンポジウムの打ち合わせ・出席	平 23. 6.26－ 7. 3	出席
熊谷　秋三	大韓民国	第 16 回東アジア運動・スポーツ科学会への参加とこどもの健康と体力に関する共同研究打ち合わせ	平 23. 8. 6－ 8.10	出張
大柿　哲朗	大韓民国	第 16 回東アジア運動・スポーツ科学会への参加	平 23. 8. 7－ 8.10	出張
斉藤　篤司	大韓民国	第 16 回東アジア運動・スポーツ科学会への参加	平 23. 8. 7－ 8.10	出張
山本　教人	大韓民国	第 16 回東アジア運動・スポーツ科学会への参加および共同研究者との打ち合わせ	平 23. 8. 7－ 8.10	出張
熊谷　秋三	中華人民共和国	中国の小学校児童の疫学調査	平 23. 8.27－ 9. 4	出張
大柿　哲朗	ネパール	ネパールの都市と山岳部の児童・生徒の身体活動量に関する調査研究	平 23. 9.12－ 9.26	出張
斉藤　篤司	ネパール	科学研究費（基盤研究（C））「ネパール小児の身体活動量および栄養素等摂取量が身体組成の変化に及ぼす影響」の調査	平 23. 9.12－ 9.27	出張
杉山　佳生	インドネシア共和国	共同研究にかかる研究会議等	平 23. 9.14－ 9.18	出張
熊谷　秋三	大韓民国	子供の生活習慣と体力および学業成績との関連に関する調査	平 23. 9.25－ 9.29	出張
橋本　公雄	台湾（台北市）	第 6 回アジア南太平洋スポーツ心理学会（6th ASPASP International Congress）への参加	平 23.11.10－11. 14	出張
杉山　佳生	台湾	第 6 回アジア南太平洋スポーツ心理学会（6th ASPASP International Congress）への参加	平 22.11.10－11.13	出張
斉藤　篤司	大韓民国	全日本スキー連盟スキー指導者研修会参加	平 23. 12. 9－12.11	出張
熊谷　秋三	中華人民共和国	中国小学生の疫学調査に関する報告のため	平 24. 2.25－ 2.28	出張
熊谷　秋三	ハンガリー共和国	サーチュインに及ぼす身体不活動の影響に関する共同研究打ち合わせ	平 24. 3.22－ 3.27	出張
永野　純	ドイツ連邦共和国	リウマチ患者コホートに関する研究打ち合わせ、最終討論のため	平 24. 3.29－ 3.31	出張

5. 学会・研究会での役職

氏　名	学会名・役職名	
橋本　公雄	日本体育学会	理　事
	日本体育学会体育心理学専門分科会	理　事
	日本スポーツ心理学会	理　事
	九州体育・スポーツ学会	会　長
	九州スポーツ心理学会	副会長
	九州地区大学体育連合	前会長
大柿　哲朗	日本運動生理学会	評議員
	日本健康支援学会	常任理事
	日本体育学会	九州支部長
	日本体育学会	論文賞選考委員
	東アジア運動スポーツ科学会	会長
西村　秀樹	九州体育・スポーツ学会	理事
熊谷　秋三	運動疫学研究会	編集顧問
	日本健康支援学会	編集委員長
	日本体力医学会	評議員
	日本肥満学会	評議員
	日本運動生理学会	評議員
	九州・山口スポーツ医・科学研究会	運営委員
斉藤　篤司	東アジア運動・スポーツ科学会	理　事
	日本登山医学会	評議員
	九州体育・スポーツ学会	理　事
	福岡県体育協会・スポーツ・医科学委員会	副委員長
山本　教人	九州体育・スポーツ学会	理　事
杉山　佳生	九州スポーツ心理学会	理事長
	日本スポーツ心理学会	理　事
	九州体育・スポーツ学会	理　事
	九州地区大学体育連合	理　事
	日本健康支援学会	評議員
	スポーツ社会心理学研究会	事務局
林　直亨	日本生理学会	評議員
	呼吸研究会	世話人
	日本コンクリート工学協会九州支部研究専門委員会	「温暖化環境下におけるコンクリート施工品質の確保に関する調査」研究委員
高柳　茂美	日本健康支援学会	理事
上園　慶子	全国大学保健管理協会	評議員
	日本時間生物学会	評議員
	日本健康支援学会	理　事
	時間循環血圧研究会	世話人
一宮　厚	日本老年精神医学会	評議員
	九州精神神経学会	評議員
	日本健康支援学会	理　事
	全国大学メンタルヘルス研究会	評議員
丸山　徹	日本心電学会	評議員
	福岡不整脈同好会	世話人
	日本不整脈学会	評議員
	日本バイオレオロジー学会	理　事
	日本生理学会	評議員
	日本膜学会	理　事
永野　純	日本心身医学会	代議員
入江　正洋	米国 NIOSH（The National Institute for Occupational Safety and Health）/APA(American Psychological Association)	運営委員
	九州心理相談員会	会　長
福盛　英明	西日本芸術療法学会	理　事
	日本学生相談学会	理　事
	西日本心理劇学会	理　事

6. そ の 他

1）運動・スポーツ心理学研究会

本研究会は，センター教員，大学院生，修了生および学外の研究者で構成され，研究会には，毎回十数名が参加している。平成 23 年度は，毎週月曜日 18 時 30 分～20 時 30 分に開催され，論文講読と個人の研究データ発表を行った。論文講読では，参加者が各自の研究に関連する論文を紹介し，研究データ発表では，実際に収集したデータおよびそれらを分析した結果について報告した。いずれのセッションにおいても，報告後，活発な討議が行われた。また，年度の後半には，英語で討論をするセッションを試行した。

（文責: 杉山 佳生）

2）行動科学研究会

本研究会は開始して 7 年目を迎え，例年同様の研究活動を行った。健康運動心理学をベースにおき，身体活動・運動の促進や健康づくりのための介入に関する研究を中心に研鑽していくため，基本的に毎週 1 回のペースで開催した。参加者は，人間環境学府の大学院生であり，筑紫野市の「なかなかよか健康チャレンジーウォーキング事業ー」の運営・サポートに関する内容を題材に研究会を行った。また，飲酒運転撲滅に向けての介入に関する文献研究を行い，収集した資料を製本した。

（文責: 橋本 公雄）

3）木曜研究会

本研究会は健康科学センターおよび他大学の教員，学生による運動・スポーツ生理学，生化学，栄養学関連の研究会である。月 1 回，第 2 木曜日に健康科学センターで開催され，各月 2 名の担当者が発表を行う他，会員による著書の執筆，英文作成補助資料の作成，体力測定結果データベースソフトの作成等も行っている。

著書: ヘルス＆フィットネス（ナカニシヤ出版），現代人のエクササイズとからだ（ナカニシヤ出版）

（文責: 斉藤 篤司）

4）九州心理相談員会

厚生労働省の初めてのメンタルヘルスに対する行政措置である「心とからだの健康づくり（Total Health Promotion Plan, THP）」（昭和 63 年）において，心理相談が勤労者の健康増進のための重要な柱として位置づけられ，今日まで心理相談員制度の普及が図られてきた。

心理相談員の制度化に伴い，心理相談員の資格の継続および技能向上を目的として心理相談員会が設立されたが，その後全国 6 地域に分割され，平成 15 年から入江が九州心理相談員会の会長職を担当している。活動の詳細は，九州心理相談員会のホームページ（http://www18.ocn.ne.jp/~k-shinri/）に掲載している。

平成 23 年度は，以下のような研修を福岡市（第 3 回は熊本市）で開催し，心理相談員の技能の向上を図った。

平成 23 年度第 1 回研修会（平成 23 年 6 月 4 日）
午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）
午後: 研修会「心の危機における対人援助職の役割とメンタルヘルス」
入江正洋氏（九州大学健康科学センター准教授）

平成 23 年度第 2 回研修会（平成 23 年 8 月 6 日）
午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）
午後: 研修会「引きこもり支援に学ぶ心理相談～ご縁を紡ぐ～」
峰松 修氏（九州産業大学国際文化学部臨床心理学科教授）

平成 23 年度第 3 回研修会（平成 23 年 10 月 29 日）
午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）
午後: 研修会「メンタルヘルス不調事例への対応を考える際のポイント」
有村達之氏（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）

平成 23 年度第 4 回研修会（平成 23 年 12 月 3 日）
午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏

（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）

午後: 研修会「職場での事例対応～労務・企業の日常から～」

西野敦子氏（西野人事労務マネジメント事務所代表）

平成 23 年度第 5 回研修会（平成 24 年 3 月 17, 18 日）

集中研修会「Social Skills Training～職場でのよりよい人間関係を目指して～基礎編　応用編」

皿田洋子氏（福岡大学人文学部教授）

（文責: 入江 正洋）

5） ESSENS （Expert Society of Sport and Exercise Nutrition Science）

本研究会は運動・スポーツ栄養学に興味のある研究者と学生による研究会である。月 1 回, 第 4 土曜日, 15 時-18 時に健康科学センターで開催されている。主な内容は各自の研究発表や論文の紹介である。特に ergogenic をキーワードに, 様々な栄養素やサプリメントが ergogenic なのかどうかを発表された論文を基に検証している。また, 授業中に学生自身が自分の摂取エネルギー量を計算できる簡便な栄養計算表を作成している（現在 ver.1.2）。

発表内容は http://www.geocities.jp/essens7854/に。

（文責: 斉藤 篤司）

社 会 的 活 動

教員の学外活動 …… 97
公開講座 ……101
個人の社会的活動 ……101
その他 ……101

社 会 的 活 動

1. 教員の学外およびセンター外活動

応嘱非常勤講師等

氏　名	応　嘱　先	応　嘱　内　容
橋　本　公　雄	熊本大学教育学部	体育心理学，スポーツ心理学Ⅱ
	熊本学園大学社会福祉学部	スポーツ心理学
西　村　秀　樹	九州工業大学情報工学部	運動科学Ⅰ
	福岡教育大学教育学研究科	スポーツ社会学特論
	福岡教育大学教育学部	体育社会学
斉　藤　篤　司	久留米大学	スポーツ実技
		健康・スポーツ科学実習
		健康科学概論
	東九州短期大学	運動生理学
	福岡医療福祉大学	健康科学
山　本　教　人	久留米大学	スポーツ社会学
		スポーツ実技
杉　山　佳　生	中村学園大学	健康・スポーツ科学実習
上　園　慶　子	九州大学留学生センター	留学生の健康管理
	九州大学病院	腎・高血圧・脳血管内科
一　宮　　厚	九州大学医学部	老年精神医学
丸　山　　徹	九州大学医学部保健学科	病態生理学
	九州大学医学部医学科	心臓病学，循環生理学
	熊本保健科学大学	循環病態学
福　盛　英　明	九州大学人間環境学府	健康支援学特論
	学校法人　産業医科大学	健康管理センター学生相談室　相談員
	九州大学歯学部	臨床心理学

応嘱委員

氏名	委員会	委嘱機関名
橋本公雄	スポーツ医事・健康体力相談事業に係わるスポーツアドバイザー	（財）福岡県スポーツ振興公社
	筑紫野市健康づくり推進協議会委員	筑紫野市
	健康運動指導士養成講習会・講師	健康・体力づくり事業財団
	九州大学人間環境学府同窓会・副会長	九州大学
	九州大学学生後援会理事・運営委員会委員長	九州大学学生後援会
	日本学術振興会新学術領域研究（研究領域提案型）審査会専門委員	独立行政法人日本学術振興会
大柿哲朗	福岡市健康づくり財団　理事	（財）福岡市健康・体力づくり事業財団
	健康運動指導士養成講習会　講師	（財）健康・体力づくり事業財団
	日本体育協会スポーツ指導者養成　講師	（財）日本体育協会
	九州大学学生後援会　顧問	九州大学学生後援会
西村秀樹	福岡市スポーツ推進審議会委員	
	福岡市体育協会評議員	
	筑紫野市健康推進協議会委員	
熊谷秋三	高齢者体力つくり支援士（ドクターコース）養成講習会講師	（財）体力つくり指導協会
	健康運動指導士養成講習会　講師	（財）健康・体力づくり事業財団
	健康運動実践指導士講習会講師	（財）日本エアロビックフィットネス協会
	科学研究費委員会専門委員	文部科学省
	VIP クラブ西日本幹事	International VIP Club
	健康いとしま 21 推進委員会　会長	糸島市
斉藤篤司	スポーツ医事・健康体力相談事業に係わるスポーツアドバイザー	（財）福岡県スポーツ振興公社
	スポーツ医・科学委員会委員	〈財〉福岡県体育協会
	太宰府市健康づくり推進委員	太宰府市
山本教人	普及開発委員会委員	（財）福岡県体育協会
	ビジョン推進委員会委員	（財）福岡県体育協会
林　直亨	春日市健康づくり推進協議会委員	春日市
	スポーツ医科学委員会委員	（財）福岡県体育協会
高柳茂美	春日市スポーツ推進審議会委員	春日市教育委員会
上園慶子	健康日本 21 福岡市計画次期計画準備検討会	福岡市
	健康運動指導士養成講習会　講師	（財）健康・体力づくり事業財団
	臨床試験審査委員会委員	医療法人相生会臨床薬理センター
一宮　厚	平成 23 年度メンタルヘルス研究協議会本部運営委員会委員ならびに九州地区実行委員会委員	独立行政法人日本学生支援機構
丸山　徹	福岡市医師会学校心臓検診部会会員	福岡市
	健康運動指導士養成講習会講師	（財）健康体力づくり事業財団
	NPO 日本 ICD・CRT-D の会顧問	NPO 日本 ICD・CRT-D の会
永野　純	健康づくり推進協議会委員	大野城市
入江正洋	独立法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センター基幹相談員	独立法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センター
	独立法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス支援センター相談員	独立法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス支援センター
	厚生労働省「心とからだの健康づくり（THP）」九州心理相談員会会長	中央労働災害防止協会
眞﨑義憲	糸島市高齢者保健・福祉事業協議会委員（会長）	糸島市

講演・指導等の発令

氏　名	テ　ー　マ	場　所	期　間
入江　正洋	「職場におけるハラスメントと対策」平成 23 年度中・四国心理相談員会総会・記念研修会（中・四国心理相談員会主催）	広島市	平 23. 4.16
福盛　英明	「公務職場のメンタルヘルス」第 50 回九州地区中堅係員研修	福岡市	平 23. 5.10
斉藤　篤司	平成 23 年度（財）福岡県体育協会第 1 回スポーツ医・科学委員会	福岡市	平 23. 5.12
入江　正洋	「職場における心理相談対応～基礎編～」平成 23 年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平 23. 5.20
福盛　英明	「人生危機につきあう」いのちの電話・電話相談員養成講座	福岡市	平 23. 5.25
入江　正洋	「職場における心理相談対応～応用編～」平成 23 年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平 23. 6. 3
入江　正洋	「心の危機における対人援助職の役割とメンタルヘルス」平成 23 年度九州心理相談員会総会・第 1 回研修会（九州心理相談員会主催）	福岡市	平 23. 6. 4
福盛　英明	「カウンセリングの基礎技能（傾聴）」専門研修講座「生徒指導・教育相談リーダー養成講座」（福岡県教育センター主催）	福岡県糟屋郡	平 23. 6. 9
入江　正洋	「管理者が学ぶメンタルヘルス」平成 23 年度九州大学新任係長・専門職員研修（九州大学主催）	福岡市	平 23. 6.17
眞崎　義憲	「企業内のパンデミック拡大防止の実例－問題解決における情報の重要性－」産業医科大学産業医実務研修センター産業医学実務講座	北九州市	平 23. 6.22 平 24. 3. 2
大柿　哲朗	「健康づくり運動の理論　トレーニング概論」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会（財団法人健康・体力づくり事業団主催）	福岡市	平 23. 6.23
林　直亨	「健康づくり運動の理論　トレーニング条件と反応・トレーニング強度」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会（財団法人健康・体力づくり事業団主催）	福岡市	平 23. 6.24
斉藤　篤司	「健康づくり運動の理論　青少年期の成長発育とトレーニング」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会（財団法人健康・体力づくり事業団主催）	福岡市	平 23. 6.25
上園　慶子	「第 13 回時間循環血圧研究会」	東京都千代田区	平 23. 7. 2
眞崎　義憲	「学校活性化人材育成事業スーパーセミナー合宿」	福岡市	平 23. 7. 6
山本　教人	「平成 23 年度（財）福岡県体育協会第 2 回普及開発委員会」	福岡市	平 23. 7.12
斉藤　篤司	「平成 21 年度（財）福岡県体育協会第 2 回スポーツ医･科学委員会」	福岡市	平 23. 7.14
大柿　哲朗	「健康づくり運動の実態　ストレッチングと柔軟体操の実際実習」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会（財団法人健康・体力づくり事業団主催）	福岡市	平 23. 7.16
斉藤　篤司	「健康づくり運動の実際　ウォーミングアップとクーリングダウン実習」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会（財団法人健康・体力づくり事業団主催）	福岡市	平 23. 7.16
丸山　徹	「新規化合物『ASP3550』に関する意見聴取」アステラス製薬株式会社	福岡市	平 23. 7.19
高柳　茂美	「健康教育」平成 23 年度社会教育主事講習	福岡市	平 23. 7.20
福盛　英明	「こころが不調になった学生の理解と接し方－メンタルヘルスの基礎知識－」平成 23 年度農学研究院 FD	福岡市	平 23. 7.20
杉山　佳生	「コミュニケーション能力をはぐくむ－学校における望ましい人間関係のために－」平成 23 年度小学校初任者研修講座（やまぐち総合教育支援センター主催）	山口市	平 23. 7.29
大柿　哲朗	「トレーニング論Ⅱ①」平成 23 年度公益財丹法人日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会共通科目Ⅱ・Ⅲ 講習会	福岡市	平 23. 8. 3

大柿　哲朗	「運動プログラムの管理　運動プログラムの作成の理論(1)(2)」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会（財団法人健康・体力づくり事業団主催）	福岡市	平 23. 8.20
丸山　徹	「運動負荷試験　マスターダブルツーステップ」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会(財団法人健康･体力づくり事業団主催)	福岡市	平 23. 8.21
入江　正洋	「職場のメンタルヘルス」平成 23 年度産業カウンセラー養成研修（社団法人日本産業カウンセラー協会主催）	福岡市	平 23. 8.21
入江　正洋	「心の健康問題」平成 23 年度職場管理研修（国土交通省九州地方整備局主催）	久留米市	平 23. 8.24
杉山　佳生	「コミュニケーションスキルを育てる」平成 23 年度県立学校等初任者研修会（福岡県教育センター主催）	福岡市	平 23. 8.26
斉藤　篤司	「平成 23 年度第 1 回太宰府市健康づくり推進協議会」	太宰府市	平 23. 9. 1
福盛　英明	「大学生の QOL とコミュニケーション」中村学園大学指導主任研修会	福岡市	平 23. 9. 7
入江　正洋	「メンタルヘルス対策に活かす管理監督者･職場リーダーのためのラインケアセミナー」平成 23 年度メンタルヘルスセミナー－職場の風通しをよくするために－(中央労働災害防止協会九州安全衛生サービスセンター主催)	福岡市	平 23. 9.13
熊谷　秋三	「シンポジウム～身体活動および体力と健康に関する運動疫学研究と今後の課題～」第 14 回運動疫学研究会	山口県下関市	平 23. 9.15
入江　正洋	「職場のメンタルヘルス」平成 23 年度産業カウンセラー養成研修（社団法人日本産業カウンセラー協会主催）	熊本市	平 23. 9.18
橋本　公雄	「運動行動変容の理論と実際（1）（2）（3）実習」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 23. 9.19
丸山　徹	「運動負荷試験　運動負荷試験の実際」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 23. 9.19
熊谷　秋三	「健康づくり施策概論　生活習慣病と運動疫学」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 23. 9.20
眞崎　義憲	「健康づくり施策概論　健康づくり施策」平成 23 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 23. 9.20
入江　正洋	「こころの健康管理－ストレスチェック制度を踏まえた職場のメンタルヘルス対策」平成 23 年度心とからだの健康セミナー(福岡労働局その他主催)	福岡市	平 23. 9.21
入江　正洋	「こころの健康管理－ストレスチェック制度を踏まえた職場のメンタルヘルス対策」平成 23 年度心とからだの健康セミナー(福岡労働局その他主催)	北九州市	平 23. 9.28
入江　正洋	「職場における自殺の予防と対策」平成 23 年度後期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会(福岡産業保健推進センター主催)	福岡市	平 23.10.14
入江　正洋	「心がつながる話の聴き方～」平成 23 年度傾聴ボランティア講座（福岡市西区社会福祉協議会主催）	福岡市	平 23.10.27
入江　正洋	「心の危機における対人援助職の役割とメンタルヘルス」平成 23 年度後期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平 23.10.28
入江　正洋	「職場不適応に対する支援について」平成 23 年度冬季講座（福岡県精神保健福祉センター主催）	春日市	平 23.12. 7
入江　正洋	「メンタルヘルスケア技法（交流分析・リラクセーション技法)」平成 23 年度「心とからだの健康づくり（THP)」指導者養成専門研修（中央労働災害防止協会主催）	福岡市	平 23.12. 8
入江　正洋	「公務職場のメンタルヘルス～セルフマネジメント～」第 51 回九州地区中堅係員研修（人事院九州事務局主催）	福岡市	平 23.12. 14
入江　正洋	「職場におけるメンタルヘルス－管理職や同僚の対応を中心に－」メンタルヘルス講演会（国土交通省国土地理院九州地方測量部主催）	福岡市	平 24. 1.17
入江　正洋	「職場のハラスメント対策」平成 23 年度公開講座（日本産業カウンセラー協会中国支部主催）	山口市	平 24. 1.24

西村　秀樹	「地域社会におけるスポーツの役割」福岡市生涯スポーツ講座「スポーツを科学する」	福岡市	平 24. 2. 1
入江　正洋	「労働組合員を対象としたメンタルヘルスケアについて」平成 23 年度女性委員会幹事学習会（サービス連合九州地方連合会主催）	福岡市	平 24. 2.23
入江　正洋	「職場におけるメンタルヘルス」平成 23 年度九州大学教室系技術職員研修（九州大学主催）	福岡市	平 24. 3. 6
入江　正洋	「職場におけるメンタルヘルス対策～ハラスメントを中心に～」（日鉄環境エンジニアリング株式会社主催）	北九州市	平 24. 3.24

2. 公開講座

平成 23 年度の健康科学センター主催の公開講座は，平成 22 年度と同様に一日に集約して開催した。ただし，場所を「福岡市博多南地域交流センター・さざんぴあ博多」から「福岡市西部地域交流センター・さいとぴあ」に変更した。受講料は 2,000 円である。

参加者は 25 名で，平成 22 年度の 14 名と比べて増加がみられた。次年度はテーマや場所などを再度見直して，さらに魅力ある公開講座にしたいと考えている。

テーマ: 「こころとからだの健康の常識・非常識」
（福岡市西部地域交流センター・さいとぴあ）
10 月 30 日（日）

健康維持に必要な身体活動と身体不活動の常識・非常識（熊谷）
からだの健康の常識・非常識（眞崎）
大相撲の常識・非常識（西村）
こころの健康の常識・非常識（一宮）
動作の常識・非常識（高柳）

（文責: 入江 正洋）

3. 個人の社会的活動

入江正洋

九州大学では，教育，研究，国際貢献と並んで，社会貢献も教員が果たすべき 4 つの大きな柱の 1 つとして位置付けられている。そうした方針に準じて，全ての事業場で取り組むべき 2 大テーマである過重労働対策とメンタルヘルス対策の両方にこれまで深く係わってきた経験を活かして，種々の重要な社会貢献活動に従事している。

過重労働に関しては，平成 13 年に示された脳・心臓疾患（いわゆる過労死を含む）の労災認定基準の作成を前任地で分担した。この労災認定基準で明示した時間外労働の多寡等によって過重性が評価され，労災認定の判断がなされているのは周知の通りである。

健康科学センターに赴任した平成 15 年からは，厚生労働省が昭和 63 年に「心とからだの健康づくり（Total Health Promotion Plan, THP）」で取り入れた心理相談担当者の技能向上の役割を担う九州心理相談員会の会長（九州大学赴任前は中部心理相談員会の副会長）と，独立行政法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センターの基幹相談員（メンタルヘルスとカウンセリング担当）の役割を担っている。

さらに，平成 21 年度からは，新たに創設された独立行政法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス対策支援センターの相談員や中央労働災害防止協会の「事業場の心の健康づくりアドバイス事業」アドバイザーにも就任した。

その他，米国の NIOSH (The National Institute for Occupational Safety and Health) / APA (American Psychological Association)の Scientific Committee や，Journal of Psychosomatic Research, Medical Science Monitor, The European Journal of Psychiatry の reviewer も担当している。詳細な活動については，九州大学健康科学センターのホームページ（http://www.ihs.kyushu-u.ac.jp/）の研究者情報欄を参照されたい。

そのような活動が認知・評価されて，学外からの講演（研修）依頼が相次いでいる。九州大学赴任後に講演（研修）を実施した主な機関や組織は，人事院九州事務局，総務省九州管区行政評価局，国土交通省九州地方整備局，中央労働災害防止協会，福岡高等裁判所，福岡労働局，労働基準監督署，労働基準協会，福岡産業保健推進センター，医師会，病院，自治体，教育委員会，財団法人産業雇用安定センターや社団法人日本産業カウンセラー協会などの各種法人，一般企業など多岐にわたる。

こうした学外講演（研修）を，毎年 20-30 回実施している。前掲された「**講演・指導等の発令**」に示したように，最近はハラスメント関連の講演依頼が増えている。

（文責: 入江 正洋）

4. その他

筑紫地区学内開放

平成 23 年 6 月 4 日（土）午前 10 時～午後 5 時に，筑紫地区の学内開放（オープンキャンパス）が行われた。この学内開放は，社会交流や地域交流を目的とした，小中高校生を含む一般の方々に日ごろの研究内容を分かりやすく体験してもらうための企画であると同時に，近隣大学の学部生に対する大学院進学相談の意味合いも有している。健康科学センターでは，「からだの健康」，「たばこと健康」，「マラソンの世界記録ペースを体験」，「こころの健康」，「見ることの不思議」の 5 つのコーナーを設け，人間環境学府行動システム専攻健康行動学コースの大学院生の協力のもと，実演や体験を重視した企画を行った。健康科学センターへは 422 名の来訪者があり，アンケート調査では，いずれの企画も，非常に高い評価を得ていた。

（文責: 杉山 佳生）

委 員 会 活 動

マスタープラン……103
研究交流……103
人事……103
自己点検・評価……103
総務……103
倫理……104
健康教育社会交流……106

委　員　会　活　動

マスタープラン（MP）委員会

平成 23 年度のマスタープラン委員会は，大柿センター長（委員長），一宮副センター長，西村教授，上園教授，斎藤准教授（総務委員会委員長），丸山准教授（自己点検・評価委員長），高柳講師（研究交流委員会委員長）の 7 名で構成した。検討事項は，新しく導入された大学改革活性化制度への対応，定年退職教員の後任補充人事が主体となった。しかし平成 23 年度は，緊急に対応すべきことが多く，通常の本委員会のメンバーに加え全教員への参加を呼びかけた「拡大マスタープラン（MP）委員会」として計 7 回の委員会を開催した。拡大 MP 委員会の検討事項は，大学改革活性化制度への対応，環境安全推進室の年次計画の作成，総長面談への対応，概算要求書の作成，九大 100 年メッセージの作成などであった。

（文責: 大柿 哲朗）

研究交流委員会

教員間の研究面での情報交換や協力体制の強化を図るため，研究交流会議を実施している。平成 23 年度は以下のような会議を 1 回開催した（発表順）。開催場所はいずれも本センター2 階ラウンジで，研究発表はいずれも発表時間 20 分，質疑応答 10 分であった。健康科学センター教員に加えて，オープン参加で人間環境学府の大学院生も参加した。

第 1 回研究交流会議（平成 23 年 12 月 7 日）

松下智子 准教授「研究紹介」

斉藤篤司 准教授「自己選択ペースでのランニング時の生理心理的応答」

入江正洋 准教授「健康科学センターにおける心療内科—これまでを振り返ってー」

（文責: 高柳 茂美）

人事委員会

平成 23 年度の人事委員は前年度と変わらず，大柿センター長・西村・杉山・永野・上園であった。

・今年度は同 23 年度末で定年を迎える旧第一部門教員の後任人事を行った。平成 23 年 10 月に人事委員会を開催して，選考委員の人選を行い，同年 12 月選考委員会を立ち上げた。全国公募で 10 件の応募があり，平成 24 年 2 月に一次選考で3名に絞った後，同年3月末に実技試験と面接による二次選考を行い，候補者を決定した。 年度末には橋本公雄教授が定年のため退職した。

・看護職の人事は，今年度も発生した。まず平成 23 年 4 月に野村桃子保健師が 8 時間の健セ非常勤から常勤職員となった。竹下恵梨・三谷梨紗・木村友香保健師が 8 時間の健セ非常勤職員として新規に雇用された。また，環境安全衛生推進室所属の産業保健師として，三輪　彩保健師が 8 時間の非常勤職員として新規に雇用された。年度末には，山口祥子保健師が福岡県に就職のため，三輪 彩保健師(産業)が企業就職のため，荒川 令保健師が自己都合，豊田千寿子保健師(産業)が育児専念のため退職した。

非常勤看護職は有期雇用のため身分が不安定であり，向上心が強く能力も高い人々が次々と辞めていくという残念な状況が続いている。 更に年度途中の突然の退職により，業務の継続に支障を来している状況である。

（文責: 上園 慶子）

自己点検・評価委員会

自己点検・評価委員会は本学の 5 年目評価 10 年目以内組織見直し制度に基づいて，部局の年度計画を作成する際に開催される。平成 23 年度は急な対応を迫られ，本年報をもとにメール会議を行って，年度計画を作成した。自己点検委員会は将来構想を練る上では重要な委員会であり，本年報を充実させることもその助けになると考えられる。

（文責: 丸山　徹）

総務委員会・情報公開委員会

1. 経理・施設関係

（1）経理関係

平成 23 年度の健康科学センターへの配分額は，52,968,800 円（前年度 56,121,000 円）であった。

予算の内訳は，筑紫地区共通経費 4,722,130 円（前年度決算 5,389,999 円），図書館筑紫分館経費 664,000 円（同 756,000 円），光熱水料費 3,331,000 円（同 2,928,541 円），

電話料 414,000 円（同 413,014 円），センター共通経費 7,510,000 円（同 7,506,800 円），非常勤職員経費 22,723,514 円（同 25,447,416 円），ジャーナル刊行費 720,000 円（同 740,250 円），および特別事業費 1,500,000 円（同 869,808 円）であった。

以上の残額 10,854,156 円（同 10,034,566 円）を教員研究費の予算額とした。部門内科研費制度や前年度実績を考慮することで，傾斜配分を行っている。

（文責: 林　直亨）

（2）施設関係

共通経費により，オートクレーブおよび共通のレーザープリンタを購入した。単独で 10 万円を超える支出は以上であったが，ウェブサイトを外注したことに伴い，ウェブサイト更新及び保守管理作業が月々31500 円であった。

（文責: 林　直亨）

2. 出版関係

「年報」第 33 巻と，研究紀要「健康科学」第 34 巻を出版した。内容については，例年の項目に準じて，教育活動，業務活動，研究活動，社会的活動，委員会活動，資料と，各教員の活動が掲載された。また紀要の「健康科学」第 34 巻には，原著論文 7 編，研究資料 6 編の合計 13 編が掲載され，総ページ数は 96 ページであった。

（文責: 斉藤 篤司，福盛 英明）

3. 情報関係

新しいホームページで可能となった新着情報のシステムを用いて，健康診断情報や FD の実施情報，健セの活動やかわら版などを随時更新することができた。

QU ウォークや公開講座の情報なども，ユーザーからみてたどり着きやすい構造になったことで容易にアクセスできるようになったようである。今後も内容の改善に取り組んでいく予定である。

（文責: 山本 教人，眞﨑 義憲）

倫理委員会

平成 23 年度は倫理委員会が 7 回開催された。審査の申請件数は計 18 件であった。倫理委員会のメンバーは，大柿教授，一宮教授，丸山准教授，山本（教）准教授， 委員長は高柳講師，外部委員は医学研究院医療経営・管理学講座の馬場園教授が担当した。下記に倫理委員会開催日，申請者，課題番号，課題名および判定を示す。

第 1 回倫理委員会（平成 23 年 5 月 11 日）

1）申請者: 熊谷秋三
課題番号: IHS-2011-01
課 題 名: 地域における効果的な介護予防策に関する調査研究（太宰府研究）
判　定: 条件付き承認

2）申請者: 熊谷秋三
課題番号: IHS-2011-02
課 題 名: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築
判　定: 承認

3）申請者: 熊谷秋三
課題番号: IHS-2011-03
課 題 名: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築
—継続調査—
判　定: 承認

4）申請者: 高柳茂美
課題番号: IHS-2011-04
課 題 名: 育児期にある女性の精神的健康と運動について
判　定: 条件付き承認

第 2 回倫理委員会（平成 23 年 6 月 1 日）

1）申請者: 山本美佳（人間環境学府）
課題番号: IHS-2011-05
課 題 名: 女子学生の「やせ」の実態調査
判　定: 変更の勧告

第 3 回倫理委員会（平成 23 年 7 月 6 日）

1）申請者: 熊谷秋三
課題番号: IHS-2011-06
課 題 名: 初年次教育を活用したメンタルヘルスや就学

支援などの学生支援法の構築に関する研究
判　定: 条件付き承認

2）申請者: 王　王其（人間環境学府）
課題番号: IHS-2011-07
課 題 名: 子どもの生活習慣と体力および成績との関連性に関する研究
判　定: 条件付き承認

3）申請者: 権藤雄一（精華女子短期大学　講師）
課題番号: IHS-2011-08
課 題 名: 認知機能における身体運動の有効性に関する研究
判　定: 条件付き承認

4）申請者: 山本美佳（人間環境学府）
課題番号: IHS-2011-09
課 題 名: 女子学生の「やせ」の実態に関する調査研究
判　定: 承認

5）申請者: 福盛英明
課題番号: IHS-2011-10
課 題 名: 「大学生活チェックカタログ」「九州大学版コミュニケーションスケール」を用いた九州大学学生のQOSL（Quality of Student Life）の実態調査とコミュニケーション障害・発達障害傾向学生の支援に関わる調査研究
判　定: 条件付き承認

第 4 回倫理委員会（平成 23 年 8 月 1 日）

1）申請者: 熊谷秋三
課題番号: IHS-2011-11
課 題 名: 職域における IT 環境を利用した非対面健康支援プログラムによる介入研究
判　定: 承認

第 5 回倫理委員会（平成 23 年 9 月 7 日）

1）申請者: 池村　司（人間環境学府）
課題番号: IHS-2011-12
課 題 名: 運動が眼底血管における二酸化炭素の感受性に及ぼす影響
判　定: 承認

2）申請者: 池村　司（人間環境学府）
課題番号: IHS-2011-13
課 題 名: 目の加温および冷却が引き起こす眼底血流の変化が視力に及ぼす影響
判　定: 承認

3）申請者: 山口裕嗣（人間環境学府）
課題番号: IHS-2011-14
課 題 名: 運動強度が neurovascular coupling に与える影響
判　定: 承認

第 6 回倫理委員会（平成 23 年 10 月 5 日）

1）申請者: 丸山　徹
課題番号: IHS-2011-15
課 題 名: 従来型の標準 12 誘導心電計と比較したパソコン心電計の精度評価
判　定: 承認

2）申請者: 内田若希（北九州市立大学准教授）
課題番号: IHS-2011-16
課 題 名: 障害のあるトップアスリートにおける自己変容プロセスの因果モデルの構築
判　定: 承認

3）申請者: 池村　司（人間環境学府）
課題番号: IHS-2011-17
課 題 名: 暑熱負荷が眼底循環に及ぼす影響
判　定: 承認

第 7 回倫理委員会（平成 24 年 3 月 7 日）

1）申請者: 眞崎義憲
課題番号: IHS-2011-18
課 題 名: 非喫煙者の受動喫煙状況把握のための調査
判　定: 条件付承認

（文責: 高柳 茂美）

健康教育社会交流委員会

健康教育社会交流委員会は，主に健康科学センター単独で行う秋の公開講座と，筑紫地区の他の研究教育施設と共同で行う春の学内開放（オープンキャンパス）を担当している。

平成 23 年度の公開講座は，平成 22 年度の「福岡市博多南地域交流センター・さざんぴあ博多」から「福岡市西部地域交流センター・さいとぴあ」に会場を変更し，一日に集約して実施した。参加者が 14 名から 25 名に増加し一応成果がみられたが，公開講座をより実り多いものにするために，参加者からのア.ンケート結果について解析を行い，次年度の企画内容に反映させる予定である。。

一方，学内開放は，筑紫地区全体での実行委員会が作成する年間計画に基づいて開催されている。健康科学センターでは，こころとからだの健康に関する様々な体験学習を取り入れており，来室者に好評を博している。

（文責: 入江 正洋）

資　　料

1. 定期健康診断に関する基礎資料.

1）平成 23 年度　学生定期健康診断　学部学年別　受診者数　受診率

学　部　等	項目	学部学生						修士課程			博士課程					合計
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	4年	5年	
文学部	学生数	170	164	159	227			45	52		27	22	55			921
	受診数	168	113	137	167			43	37		24	19	22			730
人文科学府	受診率	98.8	68.9	86.2	73.6			95.6	71.2		88.9	86.4	40.0			79.3
	学生数							67	65		44	32	75			283
比較社会文化学府	受診数							66	47		23	16	12			164
	受診率							98.5	72.3		52.3	50.0	16.0			58.0
教育学部	学生数	53	57	51	55			136	156		45	42	86			681
	受診数	53	38	47	40			127	113		36	29	33			516
人間環境学府	受診率	100.0	66.7	92.2	72.7			93.4	72.4		80.0	69.0	38.4			75.8
法学部	学生数	200	199	206	268			63	45		8	11	26			1,026
	受診数	200	78	158	195			25	12		5	1	8			682
法学府	受診率	100.0	39.2	76.7	72.8			39.7	26.7		62.5	9.1	30.8			66.5
	学生数							79	81	68						228
法 務 学 府	受診数							73	46	35						154
	受診率							92.4	56.8	51.5						67.5
経済学部	学生数	257	246	259	343			91	88		21	15	31			1,351
	受診数	254	117	211	213			42	25		13	10	6			891
経済学府	受診率	98.8	47.6	81.5	62.1			46.2	28.4		61.9	66.7	19.4			66.0
理学部	学生数	292	288	293	390			137	155		20	36	34			1,645
	受診数	291	170	195	260			134	133		15	27	17			1,242
理学府	受診率	99.7	59.0	66.6	66.7			97.8	85.8		75.0	75.0	50.0			75.5
	学生数							57	66		19	15	23			180
数理学府	受診数							53	50		14	13	14			144
	受診率							93.0	75.8		73.7	86.7	60.9			80.0
	学生数										87	71	32	22	36	248
システム生命科学府	受診数										83	59	22	14	27	205
	受診率										95.4	83.1	68.8	63.6	75.0	82.7
医学部	学生数	262	276	271	254	105	105	69	59		137	118	134	153		1,943
	受診数	260	179	178	239	90	99	64	37		116	90	94	85		1,531
医学系学府	受診率	99.2	64.9	65.7	94.1	85.7	94.3	92.8	62.7		84.7	76.3	70.1	55.6		78.8
歯学部	学生数	58	62	54	57	53	64				57	39	34	53		531
	受診数	55	35	21	46	53	57				38	34	24	30		393
歯学府	受診率	94.8	56.5	38.9	80.7	100.0	89.1				66.7	87.2	70.6	56.6		74.0
薬学部	学生数	85	90	80	86	34	33	51	62		19	22	23			585
	受診数	85	57	50	74	34	30	50	42		12	13	10			457
薬学府	受診率	100.0	63.3	62.5	86.0	100.0	90.9	98.0	67.7		63.2	59.1	43.5			78.1
工学部	学生数	869	814	854	1,019			452	435		122	168	145			4,878
	受診数	852	227	587	839			445	395		68	99	68			3,580
工学府	受診率	98.0	27.9	68.7	82.3			98.5	90.8		55.7	58.9	46.9			73.4
芸術工学部	学生数	211	201	208	280			145	200		33	36	70			1,384
	受診数	210	78	177	197			132	133		18	16	10			971
芸術工学府	受診率	99.5	38.8	85.1	70.4			91.0	66.5		54.5	44.4	14.3			70.2
	学生数							180	190		44	46	54			514
システム情報科学府	受診数							178	167		27	30	20			422
	受診率							98.9	87.9		61.4	65.2	37.0			82.1
	学生数							216	230		60	65	48			619
総合理工学府	受診数							205	211		49	52	35			552
	受診率							94.9	91.7		81.7	80.0	72.9			89.2
農学部, 農学研究科	学生数	248	236	243	275			225	230		62	73	75			1,667
	受診数	240	81	193	226			199	188		41	35	41			1,244
生物資源環境科学府	受診率	96.8	34.3	79.4	82.2			88.4	81.7		66.1	47.9	54.7			74.6
	学生数	25	28	28	43											124
21世紀プログラム	受診数	25	2	18	24											69
	受診率	100.0	7.1	64.3	55.8											55.7
	学生数							63	70		14	8	8			163
計	受診数							58	55		10	3	4			130
	受診率							92.1	78.6		71.4	37.5	50.0			79.8

2）平成 23 年度　学生定期健康診断精密検査実施状況

胸部Ｘ線

事　　項	間接撮影受検者	要精密者	未受検者	受検者	区　分				
					D30	D31	D32	R	C1
要観察者・その他*		104	28	76	25	48	1	0	2
胸部 X 線間接撮影	14124	83	1	82	54	6	4	3	15

*前年度の健康診断の結果, D31 または D32 と判定された者

検尿（尿蛋白）

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受検者	区　　分					
					C1	C2	D21	D32	D33	R
学部生	2693	266	41	225	0	4	0	16	202	3
大学院生 (修士課程)	1888	135	19	116	0	2	1	5	108	0
大学院生 (博士課程)等	108	6	1	5	0	0	0	0	5	0
その他	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	4689	407	61	346	0	6	1	21	315	3

検尿（尿糖）

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受検者	区 分			
					C1	C2	D32	R
学部生	2693	6	1	5	0	1	4	0
大学院生(修士課程)	1888	10	2	8	0	0	8	0
大学院生 (博士課程)等	108	0	-	-	-	-	-	-
その他	0	-	-	-	-	-	-	-
計	4689	16	3	13	0	1	12	0

血圧

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受験者	区　　分						
					C1	C2	D23	D22	D21	D3	R
学部生	8722	191	21	170	0	1	9	5	33	105	17
大学院生 (修士課程)	3619	120	16	104	0	1	8	9	13	67	6
大学院生 (博士課程)等	1734	79	16	63	0	2	3	4	13	36	5
その他	14	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	14089	390	53	337	0	4	20	18	59	208	28

内科検診

学生区分	内科問診	診察受検	証明書記載要	後日面談者	区　　分			
					C1	C2	D3	R
学部生	8719	3058	35	3	1	1	0	1
大学院生 (修士課程)	3620	2031	27	3	0	1	2	0
大学院生 (博士課程)等	1735	197	15	1	1	0	0	0
その他	14	0	-	-	-	-	-	-
計	14088	5286	77	7	2	2	2	1

心電図

学生区分	受検者数	要面談者	証明書発行時要面談者	後日要面談者	区　分			
					C21	C23	D3	R
学部生	2842	49	13	33	2	8	16	7
大学院生 (修士課程)	695	10	3	6	1	2	2	1
大学院生 (博士課程)等	60	3	1	3	1	0	2	0
その他	0	-	-	-	-	-	-	-
計	3597	62	17	42	4	10	20	8

別表検査判定基準（学校保健法施行規則第 7 条第 2 項の別表第 1）

区　　分		内　　容
生活規正の面	A　（要休業）	授業を休む必要があるもの
	B　（要軽業）	授業に制限を加える必要があるもの
	C　（要注意）	授業をほぼ正常に行ってよいもの
	D　（健　康）	全く平常の生活でよいもの
医　療　の　面	1　（要医療）	医師による直接の医療行為を必要とするもの
	2　（要観察）	医師による直接の医療行為を必要としないが，定期的に医師の観察指導を必要とするもの
	3　（健　康）	医師による直接，間接の医療行為を全く必要としないもの
要観察の頻度	1	年 1 回観察を要する
	2	年 2 回観察を要する
	3	年 3 回以上の観察を要する

3）胸部疾患学生健康診断実施状況（平成 23 年度）

胸部 X 線間接撮影異常者

	受検者	異常者	判定内訳		
			E 判定	A 判定	B 判定
学部生	8701	33	4	26	3
大学院生（修士課程）	3584	28	1	23	4
大学院生（博士課程）等	1709	18	1	15	2
その他	130	4	1	3	0
計	14124	83	7	67	9

要観察対象者

	要観察者
学部学生	28
大学院生（修士課程）	45
大学院生（博士課程）等	27
その他	4
計	104

直接撮影実施数

	受検者	直接撮影実施時期	
		5 月	10 月
要観察者・その他	79	76	3
間接撮影異常者※	67	67	
秋季留学生健康診断	336		336
計	482	143	339

※間接撮影Ａ判定の全員，およびＢ判定のうち医師が必要と認めた者

胸部Ｘ線間接撮影判定基準		
区　　分		**内　　容**
要精査	E	緊急を要するもの
	A	肺野の異常（直接撮影を必要とするもの）
心精査	B	心血管陰影の異常
精査不要	C	上記以外の異常（側弯など）

2. 日常業務に関する基礎資料

1）保健施設利用者数（平成 23 年度）

月別	地区別	受付総数	診察	与薬	病院紹介	健康相談	休養室利用
4 月	センター	66	14	12	5	0	0
	箱崎地区分室	460	44	15	34	2	5
	病院地区分室	151	56	6	3	0	0
	大橋地区分室	42	11	12	0	0	1
	伊都地区ｳｴｽﾄ	365	46	33	17	2	2
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	907	127	116	42	12	30
	計	1,991	298	194	101	16	38
5 月	センター	188	28	18	12	5	2
	箱崎地区分室	720	101	33	48	5	12
	病院地区分室	425	89	26	25	0	6
	大橋地区分室	72	17	16	0	1	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	658	95	76	47	23	10
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	909	185	103	24	9	32
	計	2,972	515	272	156	43	62
6 月	センター	224	25	23	14	6	2
	箱崎地区分室	648	90	25	33	11	13
	病院地区分室	676	79	18	15	0	6
	大橋地区分室	73	8	9	0	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	652	83	62	33	18	20
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	703	107	104	24	21	50
	計	2,976	392	241	119	56	91
7 月	センター	176	23	15	9	1	1
	箱崎地区分室	773	89	20	30	7	23
	病院地区分室	480	83	9	23	2	6
	大橋地区分室	38	6	6	0	0	1
	伊都地区ｳｴｽﾄ	684	46	39	24	14	15
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	533	65	58	19	5	43
	計	2,684	312	147	105	29	89
8 月	センター	110	16	12	5	6	1
	箱崎地区分室	519	72	18	20	11	7
	病院地区分室	276	84	2	10	1	3
	大橋地区分室	24	10	9	0	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	483	40	33	17	13	11
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	182	16	14	7	3	7
	計	1,594	238	88	59	34	29
9 月	センター	158	36	27	13	46	0
	箱崎地区分室	602	106	30	25	51	9
	病院地区分室	388	130	67	13	92	3
	大橋地区分室	33	10	3	2	2	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	485	58	47	17	43	10
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	105	20	11	3	8	0
	計	1,771	360	185	73	242	22
10 月	センター	143	14	14	14	45	1
	箱崎地区分室	615	96	21	32	57	16
	病院地区分室	316	95	80	9	71	6
	大橋地区分室	50	12	11	3	3	1
	伊都地区ｳｴｽﾄ	590	81	60	19	57	17
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	317	23	35	18	15	37
	計	2,031	321	221	95	248	78

11 月	センター	132	17	17	6	39	0
	箱崎地区分室	640	123	36	30	47	10
	病院地区分室	289	90	26	15	54	7
	大橋地区分室	101	15	13	6	5	4
	伊都地区ｳｴｽﾄ	639	203	86	25	53	9
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	318	46	45	22	19	29
	計	2,119	494	223	104	217	59
12 月	センター	109	20	17	4	33	0
	箱崎地区分室	540	107	46	21	40	6
	病院地区分室	346	78	8	12	24	0
	大橋地区分室	86	7	15	6	4	5
	伊都地区ｳｴｽﾄ	446	98	63	26	34	4
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	210	27	29	12	9	15
	計	1,737	337	178	81	144	30
1 月	センター	83	16	15	2	16	1
	箱崎地区分室	515	116	27	30	32	10
	病院地区分室	250	90	12	15	9	1
	大橋地区分室	60	16	11	0	2	3
	伊都地区ｳｴｽﾄ	442	80	71	20	21	5
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	265	44	45	12	3	19
	計	1,615	362	181	79	83	39
2 月	センター	68	16	15	7	4	0
	箱崎地区分室	463	91	33	24	19	9
	病院地区分室	221	96	8	16	16	3
	大橋地区分室	47	6	4	1	2	1
	伊都地区ｳｴｽﾄ	407	90	76	23	13	6
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	136	20	13	14	1	9
	計	1,342	319	149	85	55	28
3 月	センター	60	12	8	4	9	0
	箱崎地区分室	383	62	12	26	16	3
	病院地区分室	193	78	5	5	6	4
	大橋地区分室	28	5	3	3	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	272	37	25	17	9	3
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	63	8	4	2	1	0
	計	999	202	57	57	41	10
計	センター	1,517	237	193	95	210	8
	箱崎地区分室	6,878	1,097	316	353	298	123
	病院地区分室	4,011	1,048	267	161	275	45
	大橋地区分室	654	123	112	21	19	16
	伊都地区ｳｴｽﾄ	6,123	957	671	285	300	112
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	4,648	688	577	199	106	271
	計	23,831	4,150	2,136	1,114	1,208	575

2）地区別保健施設利用者数（対学生数の率）

地区	総来室数*	学生来室数	†学生一人あたり年間来室回数
伊都センター	4,648	4,112	0.85
箱崎	6,878	4,307	0.67
病院	4,011	1,452	0.59
筑紫	1,517	921	1.46
大橋	654	496	0.42
伊都ウエスト	6,123	4,682	1.13
計	23,831	15,970	0.81

*総来室数には職員等を含む
†前期と後期の学生数の違いを考慮して算出

3）学部別保健施設利用者数

課程	学部・学府	学生来室数	学生数*	学生一人あたり年間来室回数
学部	文学部	494	755	0.65
	教育学部	141	227	0.62
	法学部	527	898	0.59
	経済学部	717	1,140	0.63
	理学部	1,074	1,269	0.85
	医学部	508	1,328	0.38
	歯学部	206	348	0.59
	薬学部	191	408	0.47
	工学部	2,622	3,562	0.74
	農学部	776	1,010	0.77
	芸術工学部	500	915	0.55
	21 世紀プログラム	101	124	0.81
大学院	人文科学府	249	215	1.16
	比較社会文化学府	238	325	0.73
	人間環境学府	312	522	0.60
	法学府	76	158	0.48
	経済学府	218	248	0.88
	理学府	418	388	1.08
	数理学府	173	183	0.95
	医学系学府	445	682	0.65
	薬学府	161	188	0.86
	工学府	2,596	1,368	1.90
	システム情報科学府	522	538	0.97
	総合理工学府	909	625	1.45
	生物資源環境科学府	677	674	1.00
	芸術工学府	239	572	0.42
	法務学府	283	229	1.24
	統合新領域学府	138	172	0.80
	歯学府	72	191	0.38
	システム生命科学府	324	255	1.27
	留学生センター他	63	87	0.72
計		15,970	19,604	0.81

*学生数は平成 21 年 5 月 1 日現在（研究生等を含む）

4）健康診断証明書申込者及び発行者（平成 23 年度）

①　総括表

月別		文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	シ生	芸工	法務	統合新	留セ	計
4月	発行数	2	0	1	0	3	2	0	0	32	2	0	1	2	4	0	1	1	3	2	0	0	0	56
5月	発行数	120	18	62	151	190	418	106	78	1,029	63	7	246	259	118	25	35	366	40	224	4	52	0	3,611
6月	発行数	79	22	50	68	98	140	84	71	270	25	9	61	76	65	26	24	130	34	111	2	31	0	1,479
7月	発行数	35	9	22	39	118	168	25	15	134	27	19	11	29	25	1	22	60	9	57	1	14	3	840
8月	発行数	24	4	27	53	38	133	13	52	71	7	4	9	34	43	6	0	27	11	32	0	7	0	595
9月	発行数	38	4	20	29	40	84	2	12	79	4	0	26	22	20	6	4	31	12	18	1	8	0	460
10月	発行数	18	2	5	33	15	88	10	13	44	1	0	8	19	10	3	10	35	4	21	2	1	0	342
11月	発行数	9	1	4	19	7	75	9	5	31	6	0	15	4	13	7	0	16	1	8	1	0	0	231
12月	発行数	3	3	3	16	8	34	4	5	49	4	4	2	3	15	2	1	21	5	12	0	1	1	196
1月	発行数	15	1	10	27	22	23	10	38	142	2	0	86	3	19	14	6	8	26	42	0	2	0	496
2月	発行数	45	1	9	20	104	67	57	96	252	6	9	48	22	73	9	38	51	29	69	0	14	0	1,019
3月	発行数	40	13	39	207	150	46	15	43	659	39	0	57	66	168	13	24	226	111	162	1	39	0	2,118
計	発行数	428	78	252	662	793	1,278	335	428	2,792	186	52	570	539	573	112	165	972	285	758	12	169	4	11,443

②　証明書自動発行機による健康診断証明書発行数

月別		文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	医短	芸工	法務	新統合	留セ	計
4月	発行数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	発行数	111	18	58	147	184	417	106	78	1,002	57	7	234	250	98	22	30	349	38	209	4	49	0	3,468
6月	発行数	77	22	50	63	98	139	84	71	230	25	9	61	69	53	14	23	119	32	101	2	29	0	1,371
7月	発行数	35	9	21	33	116	159	25	13	132	26	19	11	25	25	1	22	55	8	55	1	11	0	802
8月	発行数	22	4	27	51	35	110	13	41	67	7	4	9	34	43	6	0	23	11	28	0	7	0	542
9月	発行数	38	4	20	28	39	79	2	11	73	4	0	26	20	20	6	4	30	11	16	1	8	0	440
10月	発行数	18	2	5	31	15	88	10	13	41	1	0	8	17	10	1	10	35	4	21	2	1	0	333
11月	発行数	9	1	4	9	7	68	9	5	30	1	0	15	4	13	7	0	14	1	8	1	0	0	206
12月	発行数	1	3	3	13	8	28	4	5	43	4	4	2	3	15	2	0	19	4	12	0	1	0	174
1月	発行数	15	1	10	19	22	17	8	38	138	2	0	86	3	18	12	6	8	16	42	0	2	0	463
2月	発行数	45	1	9	20	97	62	54	90	248	6	9	47	22	72	8	28	51	29	69	0	14	0	981
3月	発行数	39	10	39	197	139	46	13	42	654	39	0	56	66	165	11	24	210	111	162	1	39	0	2,063
計	発行数	410	75	246	611	760	1,213	328	407	2,658	172	52	555	513	532	90	147	913	265	723	12	161	0	10,843

③　各分室毎の申込数及び発行数

月別		文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	シ生	芸工	法務	新統合	留セ	計
センター	申込計	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	32	0	0	0	0	0	36
	発行計	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	57	0	0	0	0	0	61
箱崎	申込計	13	3	4	27	13	0	1	0	0	7	0	15	2	22	3	1	1	3	0	0	3	2	120
	発行計	18	3	5	50	28	0	1	0	0	14	0	15	3	41	6	1	1	12	0	0	5	4	207
病院	申込計	0	0	0	0	0	87	8	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	125
	発行計	0	0	0	0	0	59	6	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	87
大橋	申込計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	2	0	20
	発行計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	0	2	0	37
伊都W	申込計	0	0	0	0	1	0	0	0	96	0	0	0	17	0	0	2	1	7	0	0	1	0	125
	発行計	0	0	0	0	1	0	0	0	124	0	0	0	23	0	0	2	1	7	0	0	1	0	159
伊都C	申込計	0	0	1	1	4	5	0	0	5	0	0	0	0	0	7	2	0	0	0	0	0	0	25
	発行計	0	0	1	1	4	6	0	0	6	0	0	0	0	0	16	15	0	0	0	0	0	0	49
計	申込計	13	3	5	28	18	92	9	29	105	7	0	15	19	22	10	5	34	11	18	0	6	2	451
	発行計	18	3	6	51	33	65	7	21	134	14	0	15	26	41	22	18	59	20	35	0	8	4	600

3. 学生相談・精神保健相談関係統計

1）健康支援パッケージによる面接の結果（平成 23 年度）

精神・心理系

健康支援パッケージの結果					面接結果							
入学者数	回収数	回収率（%）	面接該当者数	面接該当率（%）	受面接数	受面接率（%）	異常なし	性格問題群	神経症問題群	精神病群	身体問題・他	発達群
2730	2686	98.3%	172	6.30%	151	87.8%	68	50	7	1	12	25

身体系

健康支援パッケージの結果					面接結果						
入学者数	回収数	回収率（%）	面接該当者数	面接該当率（%）	受面接数	受面接率（%）	異常なし	障害問題群	身体疾患群	精神疾患群	家族の問題・他
2730	2686	98.3%	11	0.40%	9	81.8%	1	2	6	0	0

2）学生相談・精神保健相談（平成 23 年度）

		経済	教育	文	法	工	理	農	芸工	21C	経院	人環	人文	法院	工院	理院	生資	総理	比文	シ情	数理	シ生	法科	統領	医	歯	薬	留セ他	卒業生	職員	その他	計
学生相談・	利用回数	111	30	90	49	102	132	135	201	31	39	99	57	0	115	174	217	159	5	135	25	72	32	7	121	61	50	0	169	1275	149	3842
精神保健相談	利用者数	11	3	15	7	19	21	16	26	6	3	10	4	0	19	22	25	19	2	13	5	8	4	2	15	7	9	0	16	298	68	673
ｻｲｺﾘﾄﾘｰﾄ	利用回数	109	0	2	74	1	2	49	15	0	0	3	54	0	4	0	0	33	0	14	0	0	2	0	2	0	0	0	361	1	77	803
・ロビー	利用者数	3	0	1	1	1	2	1	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	2	0	0	1	0	1	0	0	0	16	1	4	39

3）学生相談・精神保健相談ケースの診断分類と治療進度（平成 23 年度）

＊教職員自身および教職員に関する相談は除く（学生に関する相談は含む）

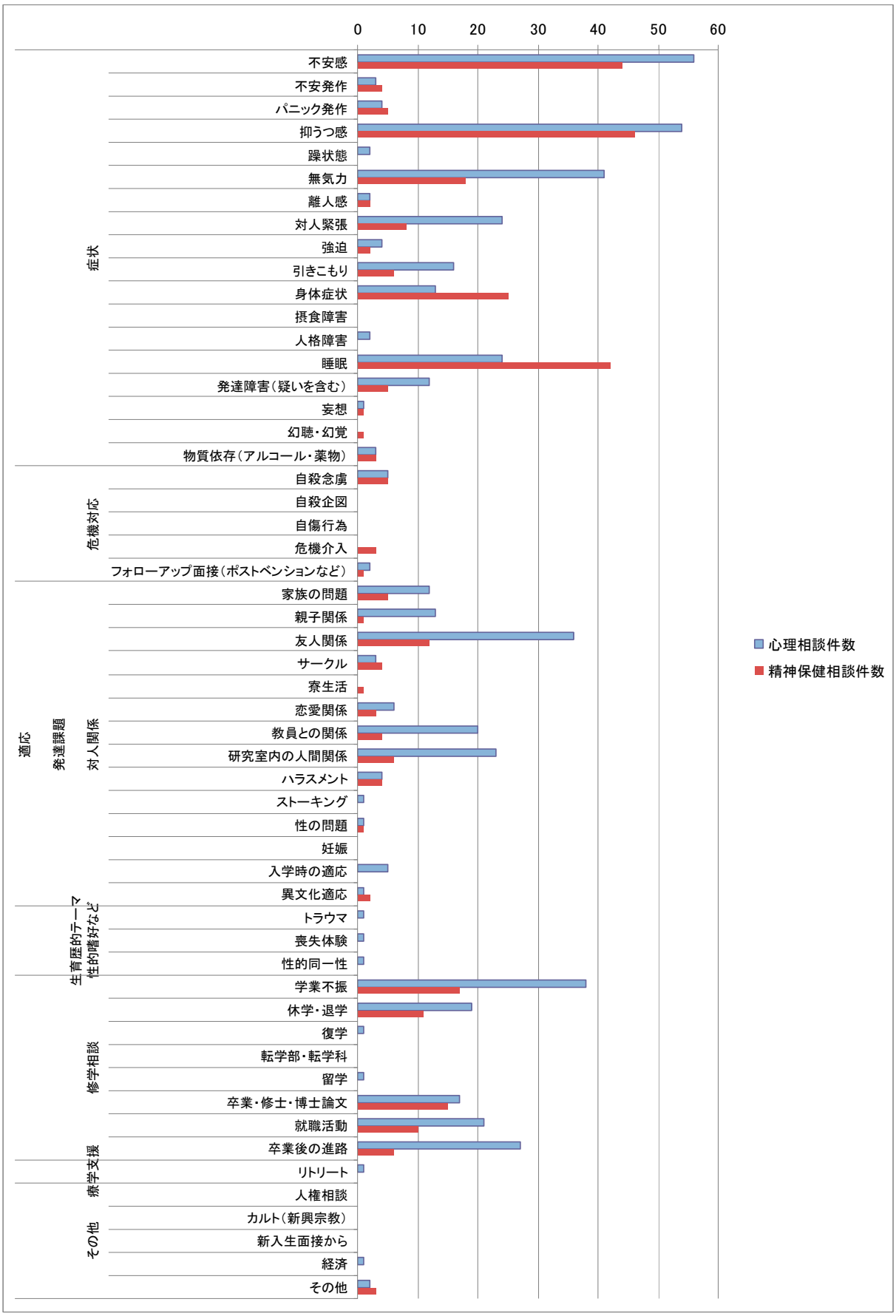
精神保健相談 178 名

	終了	委託	継続	中断	計（%）
1．ガイダンス	2		5	1	8　(4.5)
2．情緒不安	23	9	23	6	61　(34.3)
3．ノイローゼ	7	5	7	7	26　(14.6)
4．サイコパス群	0	0	0	0	0　(0.0)
5．精神病群	4	1	1		6　(3.4)
6．その他	21	5	7	2	35　(19.6)
7．関係者の相談	23	4	11	4	42　(23.6)
計（%）	80（45.0）	24（13.5）	54（30.3）	20（11.2）	178（100.0）

心理健康相談 298 名

	終了	委託	継続	中断	計（%）
1．ガイダンス	11		6	1	18　(6.0)
2．情緒不安	40	2	69	10	121　(40.6)
3．ノイローゼ	16	2	15	5	38　(12.7)
4．サイコパス群	2				2　(0.7)
5．精神病群	5		7	1	13　(4.4)
6．その他	8	1	10	1	20　(6.7)
7．関係者の相談	54	1	28	3	86　(28.9)
計（%）	136（45.6）	6（2.0）	135（45.3）	21（7.1）	298（100.0）

4）平成 23 年度 新規来談精神保健相談・心理相談内容副次分類（ICU の分類に準じる）
（複数チェック有）（来談から現在に至るまでの相談内容分析）



4. 学籍移動と健康に関する基本統計（平成 22 年度）

1）休学者数とその理由

課程 理由	学　部	修　士	博　士	計
疾病	５８	３９	１８	１１５
経済的理由	１３５	４２	８１	２５８
海外留学	１５	１６	１９	５０
その他	１２	１９	１０６	１３７
計	２２０	１１６	２２４	５６０

2）疾病による休学者の疾患詳細

理　　由	疾患者数
精神科神経科疾患	
統合失調症	6
気分障害	3
うつ病	２２
抑うつ状態	7
双極性障害	2
気分変調症	1
適応障害	１９
ストレス反応	1
心因反応	1
神経症	１０
パニック障害	3
社会不安障害	4
スチューデントアパシー	1
引きこもり	3
離人症	1
身体表現性障害	1
自律神経失調症	5
心身症	1
慢性疲労	1
不眠症	2
境界性人格障害	1
不適応発達障害	1
アスペルガー症候群	1
小　　計	９７
内科疾患	
関節リウマチ	1
潰瘍性大腸炎	2
全身性エリテマトーデス	2
低酸素脳症	1
脳脊髄液減少症	1
腰痛症	1
感染性心膜内炎	1
急性前骨髄球性白血病	1
右急性感音性難聴	1
慢性腎不全	1
重度のアトピー性皮膚炎	1
抗リン脂質抗体症候群	1
小腸大腸型クローン病	1
低ｺﾞﾅﾄﾞﾄﾛﾋﾟﾝ性性腺機能低下症　　結石	1
急性膵炎	1
小　　計	１８
計	１１５

3）退学者数とその理由

課程 理由	学　部	修　士	博　士	計
疾病	１０	6	3	１９
就職	１４	２９	７０	１１３
他大学入学　他	１８	1	2	２１
大学受験	9	1	1	１１
他学校受験	1			1
再受験	4			4
一身上の都合	２４	１７	１１	５２
経済的理由	１７	9	7	３３
大学院入学	5			5
在学期間満了	4	5	1	１０
単位取得			3	3
家庭の事情	1	7	2	１０
学業不振	3			3
海外留学				
その他		1	5	6
計	１１０	７６	１０５	２９１

4）除籍者とその理由

課程 理由	学　部	修　士	博　士	計
疾病				0
事故死	1			1
自殺	2	3		5
授業料未納等	8	8	4	２０
計	１１	１１	4	２６

年間行事（平成 23 年度）

月	行　事	内　容	備　考
4 月	学生定期健康診断の実施 新入学生向け健康教育の開講 新入留学生向け健康教育の開講 健康診断後の精密検査の実施 肥満学生に対する栄養生活指導の実施 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.35 入学式	身体計測・検尿・胸部Ｘ線 内科・血圧・心電図 医師派遣	受診者: 8,723 名 （院込み 14,007 名） 受診率: 新入生 98.6% 4 年生 76.4% 全学年 74.0% （院込み 73.2 %）
5 月	健康診断後の精密検査の実施 胸部Ｘ線精密検診の実施 健康支援パッケージに基づく新入生面接の実施	 定期健康診断で精密を要すると判定された学生,胸部疾患の既往歴を有する学生対象 健康（心理・精神・身体）支援のためのスクリーニング面接	各地区分室で実施 受診者: 63 名 来室者: 160 名
6 月	健康診断後の精密検査の実施		
7 月	保健管理専門委員会開催		
8 月	九州大学説明会への協力 工学府・システム情報科学府入学試験 総合理工学府入学試験 芸術工学府入学試験 九州地区大学保健管理研究協議会	医師・保健師派遣 医師・保健師派遣 医師派遣 医師派遣	 久留米市
9 月	保健管理専門委員会(開催) 九州地区メンタルヘルス研究協議会 来談学生の親のためのメンタルヘルス講習会		 大分市
10 月	秋季新入外国人留学生健康診断 新入留学生向け健康教育 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.36		受診者: 339 名
11 月	工学府駅伝大会参加者の健康診断 留学生健康診断後の精密検査 全国大学保健管理研究集会 国立大学法人等保健管理施設協議会総会 2011 卒煙 Q プロジェクト講演会、卒煙イベント(肺年齢測定等)開催 九大祭（伊都地区） ＡＯ選抜（21 世紀プログラム）	 保健師派遣 医師・保健師派遣	受診者: 103 名 下関市 下関市
12 月	システム情報科学府・工学府・工学部合同 FD（学生のこころの健康支援の実際） メンタルヘルス研修会 （メンタルヘルスに配慮した研究室マネジメント） 組み換え DNA 実験従事者等に係る健康診断		 問診 1,391 名
1 月	大学入試センター試験	医師・保健師派遣	
2 月	保健管理専門委員会開催 個別学力検査（前期）への協力	 医師・保健師派遣	
3 月	個別学力検査（後期）への協力 メンタルヘルス講演会（心の危機の予防と連携～われわれ教職員にできること）	医師・保健師派遣	

5. 定期健康診断表

2011(H23) 九州大学学生健康診断票(A)　　旧学生番号　1ED07017T

受検月日 Date: 11 12 13 14 — 1 2 0 1

学生番号 ID: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 — 2 H E 1 1

フリカナ
氏名 Name
生年月日 Birthday　西暦　年 YY　月 MM　日 DD　生

性別 Sex: M
年令(4月1日現在) Age(As of 4/1)　才 Y

学部生 Undergraduate・修士 Master・博士 Doctor・その他 Others (　　)

人環　学部(学府) School　都市　学科(専攻) Dept　1　学年 School year

該当する項目□にレをつけてください。

(1)今までに病気などで入院や手術をうけたことがありますか？

□ イイエ
□ ハイ

病名	いつ頃
□結核	
□気胸	
□その他 (　　)	

(2)現在、どれに該当しますか？ ②～④に答えた方は、病名等を記載して下さい。

□①健康(とくに医療機関の受診はしていない)
□②医療機関に通院(または入院)している
□③慢性の病気などで修学や日常生活への支障がある
□④心身の不調で相談を希望している

(3)現在タバコを吸っていますか？

□イイエ　□ハイ　禁煙したいと考えていますか？ □イイエ □ハイ

連絡先 Means of contact

現住所 Address (〒　－　)
携帯電話 Cell phone　－　－
電話 Phone　－　－
E-mail:
研究室名 Name of lab.　内線 Ext. No. (　　)
帰省先 Country (〒　－　)
保護者名 Name of parent　電話 Phone　－　－

内科

問診・診察 15: 不要 1 / 要 2　印

診断所見
所見なし
所見あり

	疾患名	医療の状況	修学・就労
①		□経過観察中 □現在治療中	□支障なし □支障あり
②		□経過観察中 □現在治療中	□支障なし □支障あり

※ 診断所見及び判定(カラム16)をご記入下さい

判定 16	
特記事項なし(健康)	1
健診証明書記載 不要	2
健診証明書記載 要	3

印

異常チェック: 既応歴　内科

身体計測

身長 17 18 19 20 cm　体重 21 22 23 24 kg　体脂肪 25 26 27 %　BMI　体脂計　腹囲 28 29 30 31 cm

BMI 23 25　腹囲 ●

血圧

スクリーニング 一回目: 収縮期血圧 32 33 34　拡張期血圧 35 36 37　脈 38 39 40
二回目: 41 42 43　44 45 46　47 48 49

二回目: 収縮期血圧 50 51 52　拡張期血圧 53 54 55　脈拍 56 57 58　印

血圧

胸部X線

間接撮影番号 59 60 61 62 63

間接番号が「00000」と記入されている人は，直接撮影が必要です。間接撮影は受けないで下さい。(回収時に日時をお知らせします。)また過去に直接撮影をうける指示のでた人は受付に相談してください。

直接撮影指示 64: 要観察 1 / その他 2

胸写

尿検査

蛋白 65: － 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5 / 4+ 6
糖 66: － 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5 / 4+ 6
印　M 67: 1　再検月日・印

蛋白　糖

心電図

所見

68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78
N	SA	Af	SB	ST	SVPC	VPC	RAD	LAD	LVH	RVH

79	80	81	82	83	84	85	86	87	88
LAO	RAO	IRBBB	CRBBB	LBBB	V-II°	III°	WPW	AST	Other

二次検査 89: 不要 1 / 要面接 3 / 発行時面接 4　印

心電図異常なし

判定

精密: 既応歴 / 内科 / 血圧 / BMI / 尿蛋白 / 尿糖 / M / 卒煙 / ECG / X線

判定 90: 健康 1 / 要二次 2 / 保留 3　印

証明書自動発行 91: 不可 1 / 既往歴 不可 2

分室案内: 案内 1

備考

フリガナ		学部（学府）	学科（専攻）	学部生 MC DC その他（　） 年	学生番号
氏名					

精密検査（B）

内科

月	日	面接記録	発行時面接	印	病院紹介	医療機関名	内科(PH) 生活	医療	回数
11	12	13	14	15		16		17	18	19
			不要 1 / 要 2		不要 1 / 要 2				

診断名

血圧

	月	日	収縮期血圧	拡張期血圧	脈拍		月	日	収縮期血圧	拡張期血圧	脈拍
一回目	20	21	22	23	24 25 26	27 28 29	30 31 32	自己測定	59	60	61	62	63 64 65	66 67 68	69 70 71
二回目	33	34	35	36	37 38 39	40 41 42	43 44 45	AM PM	72	73	74	75	76 77 78	79 80 81	82 83 84
三回目	46	47	48	49	50 51 52	53 54 55	56 57 58								

病院紹介 85：不要 1 / 要 2　診断名（　）　医療機関名（　）　血圧(P) 86 生活 / 87 医療 / 88 回数

胸部X線

間接判定 89：緊急 E / 要直接 A / 心精査 B / その他 C

直接撮影 月	日	撮影番号	直接判定 98 不要 1	精査 2	6ヶ月 3	1年後 4
90	91	92 93	94 95 96 97			

精査(直接含む)結果 99：正常 1 / 異常 2　異常記載　診断名　医療機関名　X線(X) 100 生活 / 101 医療 / 102 回数

尿二次

二次	月	日	蛋白 107	糖 108	潜血 109	PH
	103	104	105 106	− 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5 / 4+ 6	− 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5 / 4+ 6	− 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5

尿(蛋白)

三次	110	111	112	113	114	115	116
					− 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5 / 4+ 6	− 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5 / 4+ 6	− 1 / ± 2 / + 3 / 2+ 4 / 3+ 5

問診 117：なし 1 / あり 2　病院紹介 118：不要 1 / 直ちに 2 / 要 3 / 1年後 4　診断名　医療機関名　尿蛋白(k) 119 生活 / 120 医療 / 121 回数

尿(糖)

病院紹介 122：不要 1 / 要 2　診断名　医療機関名　尿糖(G) 123 生活 / 124 医療 / 125 回数

心電図

月	日	再ECG 130	再ECG結果	印
126	127	128 129	なし 1 / あり 2		

面接記録（　）　病院紹介 131：不要 1 / 要 2　診断名　医療機関名　心電図(HF) 132 生活 / 133 医療 / 134 回数

備考

コード表

*生活規正						*医療			*回数			備考	証明書自動発行 135
要休業	要軽業	要注意	健康	未受検	保留	要医療	要観察	放置可	年1回	年2回	年3回以上		可
A	B	C	D	P	R	1	2	3	1	2	3		1

《記　入　例》

※学生番号は、定期健康診断の際に、ご記入ください。

理	学部	物理	学科	学生番号								

学部コード

1	2
S	C

生年月日

3	4	5	6	7	8	9
2	0	6	0	6	2	4

1：昭和
2：平成

注）1．太枠部分をご記入ください。
2．濁点、半濁点は、1文字分をご使用ください。
3．姓と名の間は、1文字分をお空けください。

	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
フリガナ	ヤ	マ	タ	゛		タ	ロ	ウ												
氏　名	山田　太郎																			

《コード表》

＊学部コード

文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部
LT	ED	LA	EC	SC	MD

歯学部	薬学部	工学部	芸術工学部	農学部	21世紀
DD	PS	TE	DS	AG	NC

2012. 4

健康生活支援調査パッケージ（学部生用）

九州大学健康科学センター

合格おめでとうございます。入試の難関をみごとに突破され洋々たる希望に胸をふくらませておられることでしょう。

さて、九州大学では、みなさんがつつがなく学業に精励することができるよういろいろな対策を講じております。なかでも、健康科学センターは学生の心身両面にわたる健康維持増進に万全を期しています。

こうした健康サービス業務をより一層推進するためには、まずあなたの入学当初の健康状態をできる限り正確に知ることが大切です。そのためこのように健康生活支援調査を実施し、その結果にもとづいて、それぞれの専門の教員が、必要に応じてみなさんの今後の学生生活に助言・指導することになっています。

皆さん自身の健康管理、健康増進のために必ず提出してください。

この調査の取扱いについては、個人の秘密が厳守され、健康管理以外の目的（入学取り消し、成績評価など）には絶対に使用されません。

提出方法：4月2日（月）・3日（火）・6日（金）の定期健康診断の際、あなたの割り振られた日に持参してください。

なお、入学後は、伊都地区センターゾーンの健康相談室あるいは学生生活修学相談室を、伊都地区ウエストゾーン、箱崎地区、病院地区及び大橋地区でも健康相談室を気軽に利用されるようおすすめします。

この調査表の記入の仕方

1．各項目の内容をよく読んで、番号を選ぶ回答の場合は、該当する番号を（　）の中に記入してください。
2．「ハイ」「イイエ」を選ぶ回答の場合は、「ハイ」の場合には1を○で囲み、「イイエ」の場合には0を○で囲み、とばさないようにしてください。
3．氏名、学部等の記入もれがないようにしてください。
4．氏名等の記入例及び学部コードは、最終ページを参照してください。

	学部		学科	学生番号	

学部コード

1	2

生年月日

3	4	5	6	7	8	9

注）1．太枠部分にご記入ください。
2．濁点、半濁点は、1文字分をご使用ください。
3．姓と名の間は、1文字分をお空けください。

	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
フリガナ																				
氏　名																				

入学後の連絡先

住　所（〒　　－　　）	電話　（　　）　　番
帰省先（〒　　－　　）	電話　（　　）　　番

Ⅰ．大学での修学や生活について

A．合格されましたが満足度はいかがですか
該当する番号を選んで右の（　）にご記入ください……（　　）30
1．満足している
2．満足はしていないが、他大学や他学部を受け直すつもりはない
3．満足しておらず、他大学や他学部を受け直すかもしれない

B．入学後の学費および生活費について不安がありますか
該当する番号を選んで右の（　）にご記入ください……（　　）31
1．ほとんど不安はない
2．アルバイトをしたり、奨学金がもらえれば何とかなると思う
3．アルバイトをしたり、奨学金がもらえても不安である

	ハイ	イイエ	
C．障害者手帳を持っていますか	1	0	32

持っている場合　その部位（　　）　障害の級（　）

D．心身の病気や障害のために日常に支障をきたしていますか

1．身体の病気や障害のために日常の生活に支障をきたしている	1	0	33
2．精神の病気や障害のために日常の生活に支障をきたしている	1	0	34

Ⅱ．高校時代の生活習慣や健康状態などについて

	ハイ	イイエ	
1．朝、昼、晩、1日3回、規則正しく食事をとっていた	1	0	35
2．やせたり太ったり体重の変化が激しかった	1	0	36
3．毎日、だいたい同じ時刻に寝るようにしていた	1	0	37
4．朝起きがとても苦手である	1	0	38
5．寝付きが悪い	1	0	39
6．眠りが浅く、夜中によく目が覚める	1	0	40
7．朝早く目が覚めて睡眠不足である	1	0	41
8．軽い運動でも、ひどく疲れてしまっていた	1	0	42
9．風邪をひくと、いつも寝込むほどひどくなる	1	0	43
10．小さな事にこだわりやすい	1	0	44
11．ちょっとしたことで心を傷つけられやすい	1	0	45
12．ちょっとしたことでひどく不安になる	1	0	46
13．ちょっとした失敗をずっと悔やんでしまう	1	0	47
14．何事でも悲観的に考えてしまう	1	0	48
15．思い通りにいかないとカッとして抑えがきかなくなる	1	0	49
16．気分が落ち込み、やる気が起こらない	1	0	50
17．対人緊張が強くて困っている	1	0	51
18．友達作りがうまくできず、いつも孤独である	1	0	52
19．悩みを相談できる友人がいた	1	0	53
20．学校でイジメにあったことがある	1	0	54

Ⅲ．次の病気であると病院などの医療機関で診断されたことがありますか？

	ハイ	イイエ	
1．喘息	1	0	55
2．アトピー性皮膚炎	1	0	56
3．1．2．以外のアレルギー疾患（鼻アレルギーなど）	1	0	57
4．肺結核	1	0	58
5．心臓病	1	0	59
6．高血圧	1	0	60
7．低血圧	1	0	61
8．糖尿病	1	0	62
9．高コレステロール血症	1	0	63
10．甲状腺腫または甲状腺機能亢進症	1	0	64
11．胃・十二指腸潰瘍	1	0	65
12．肝炎	1	0	66
13．自律神経失調症（中学生以降）	1	0	67
14．学校の検尿で尿蛋白か尿潜血あった	1	0	68
15．腎臓の病気	1	0	69
16．貧血	1	0	70
17．てんかん	1	0	71
18．発達障害	1	0	72
19．神経衰弱・ノイローゼ	1	0	73
20．統合失調症・うつ病・心因反応	1	0	74
21．摂食障害	1	0	75
22．自殺未遂	1	0	76
23．膠原病（SLE、リウマチなど）	1	0	77
24．膠原病以外の難病	1	0	78
24でハイの人　病気の名前（　　）			
25．手術を要した病気	1	0	79
25でハイの人　病気の名前（　　）（　　）歳頃			
26．入院を要した病気（手術以外）	1	0	80
26でハイの人　病気の名前（　　）（　　）歳頃			
27．肥満症	1	0	81
28．（女性のみ）ひどい月経異常（月経痛・月経不順・無月経）がありますか	1	0	82

Ⅳ．家族に次の病気の人がいますか

	父親			母親			兄弟（姉妹）		
	ハイ	イイエ		ハイ	イイエ		ハイ	イイエ	
1．高血圧	1	0	83	1	0	84	1	0	85
2．糖尿病	1	0	86	1	0	87	1	0	88
3．高コレステロール血症	1	0	89	1	0	90	1	0	91
4．肥満症	1	0	92	1	0	93	1	0	94
5．肝炎	1	0	95	1	0	96	1	0	97

Ⅴ．健康科学センターでは、診療の他に心身の健康相談および健康教育を行っています

	ハイ	イイエ	
1．大学での勉学について現在なやんでおり、相談したいという希望がありますか	1	0	98
2．現在、心理的問題があり、専門家に相談したいですか	1	0	99
3．現在、身体的問題があり、専門家に相談したいですか	1	0	100
4．家族の病気について、専門家に相談したいですか	1	0	101
5．健康教育を受けるのであれば次のテーマに興味がありますか			
1）エイズ、肝炎などの感染症予防	1	0	102
2）禁煙	1	0	103
3）成人病予防	1	0	104
4）ストレス対策	1	0	105
5）性教育	1	0	106
6）減量教室	1	0	107
7）アルコール問題	1	0	108
8）その他（具体的に：　　）	1	0	109

※もう一度記入したものを見なおして、記入もれなどがないか確かめてください。

《記　入　例》

※学生番号は、定期健康診断の際に、ご記入ください。

理	学府	物理学	専攻	学生番号								

学府コード

1	2
S	C

生年月日

3	4	5	6	7	8	9
2	0	2	0	6	2	4

1：昭和
2：平成

注）1．太枠部分をご記入ください。
2．濁点、半濁点は、1文字分をご使用ください。
3．姓と名の間は、1文字分をお空けください。

	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
フリガナ	ヤ	マ	タ	゛		タ	ロ	ウ												
氏　名	山田　太郎																			

《コード表》

＊学府コード

人文科学府	比較社会文化学府	人間環境学府	法学府	法務学府	経済学府
LT	CS	HE	LA	LS	EC

理学府	数理学府	システム生命科学府	医学系学府	薬学府	工学府
SC	MA	SL	MD	PS	TE

システム情報科学府	総合理工学府	生物資源環境学府	芸術工学府	統合新領域学府
IE	ES	BE	DS	FS

2011. 4

健康生活支援調査パッケージ（大学院生用）

九州大学健康科学センター

合格おめでとうございます。入試の難関をみごとに突破され洋々たる希望に胸をふくらませておられることでしょう。

さて、九州大学では、みなさんがつつがなく学業に精励することができるよういろいろな対策を講じております。なかでも、健康科学センターは学生の心身両面にわたる健康維持増進に万全を期しています。

こうした健康サービス業務をより一層推進するためには、まずあなたの入学当初の健康状態をできる限り正確に知ることが大切です。そのためこのように健康生活支援調査を実施し、その結果にもとづいて、それぞれの専門の教員が、必要に応じてみなさんの今後の学生生活に助言・指導することになっています。

皆さん自身の健康管理、健康増進のために必ず提出してください。

この調査の取扱いについては、個人の秘密が厳守され、健康管理以外の目的（入学取り消し、成績評価など）には絶対に使用されません。

提出方法：４月２日（月）・３日（火）・４日（水）午後・５日（木）午前の定期健康診断の際、あなたの割り振られた日に持参してください。

なお、入学後は、伊都地区センターゾーン、箱崎地区、病院地区、伊都地区ウエストゾーン、筑紫地区及び大橋地区の健康相談室を気軽に利用されるようおすすめします。

この調査表の記入の仕方

1．各項目の内容をよく読んで、番号を選ぶ回答の場合は、該当する番号を（　）の中に記入してください。
2．「ハイ」「イイエ」を選ぶ回答の場合は、「ハイ」の場合には１を○で囲み、「イイエ」の場合には０を○で囲み、とばさないようにしてください。
3．氏名、学府等の記入もれがないようにしてください。
4．氏名等の記入例及び学府コードは、最終ページを参照してください。

	学府		専攻	学生番号								

学府コード

1	2

生年月日

3	4	5	6	7	8	9

注）1．太枠部分にご記入ください。
2．濁点、半濁点は、1文字分をご使用ください。
3．姓と名の間は、1文字分をお空けください。

	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
フリガナ																				
氏　名																				

入学後の連絡先

住　所（〒　　－　　）	電話　（　　）　　番
帰省先（〒　　－　　）	電話　（　　）　　番

Ⅰ．大学院での修学や生活について

A．合格されましたが満足度はいかがですか
該当する番号を選んで右の（　）にご記入ください……（　　）30
1．満足している
2．満足はしていないが、他の進路を考えるつもりはない
3．満足しておらず、他の進路を考えるかも知れない

B．入学後の学費および生活費について不安がありますか
該当する番号を選んで右の（　）にご記入ください……（　　）31
1．ほとんど不安はない
2．アルバイトをしたり、奨学金がもらえれば何とかなると思う
3．アルバイトをしたり、奨学金がもらえても不安である

	ハイ	イイエ	
C．障害者手帳を持っていますか……	1	0	32
持っている場合　その部位（　　）　障害の級（　）			
D．心身の病気や障害のために日常に支障をきたしていますか			
1．身体の病気や障害のために日常の生活に支障をきたしている……	1	0	33
2．精神の病気や障害のために日常の生活に支障をきたしている……	1	0	34

Ⅱ．大学（学部）時代の生活習慣や健康状態などについて

	ハイ	イイエ	
1．朝、昼、晩、1日3回、規則正しく食事をとっていた……	1	0	35
2．やせたり太ったり体重の変化が激しかった……	1	0	36
3．毎日、だいたい同じ時刻に寝るようにしていた……	1	0	37
4．朝起きがとても苦手である……	1	0	38
5．寝付きが悪い……	1	0	39
6．眠りが浅く、夜中によく目が覚める……	1	0	40
7．朝早く目が覚めて睡眠不足である……	1	0	41
8．軽い運動でも、ひどく疲れてしまっていた……	1	0	42
9．風邪をひくと、いつも寝込むほどひどくなる……	1	0	43
10．小さな事にこだわりやすい……	1	0	44
11．ちょっとしたことで心を傷つけられやすい……	1	0	45
12．ちょっとしたことでひどく不安になる……	1	0	46
13．ちょっとした失敗をずっと悔やんでしまう……	1	0	47
14．何事でも悲観的に考えてしまう……	1	0	48
15．思い通りにいかないとカッとして抑えがきかなくなる……	1	0	49
16．気分が落ち込み、やる気が起こらない……	1	0	50
17．対人緊張が強くて困っている……	1	0	51
18．友達作りがうまくできず、いつも孤独である……	1	0	52
19．悩みを相談できる友人がいた……	1	0	53
20．学校でイジメにあったことがある……	1	0	54

Ⅲ．次の病気であると病院などの医療機関で診断されたことがありますか？

	ハイ	イイエ	
1．喘息……	1	0	55
2．アトピー性皮膚炎……	1	0	56
3．1．2．以外のアレルギー疾患（鼻アレルギーなど）……	1	0	57
4．肺結核……	1	0	58
5．心臓病……	1	0	59
6．高血圧……	1	0	60
7．低血圧……	1	0	61
8．糖尿病……	1	0	62
9．高コレステロール血症……	1	0	63
10．甲状腺腫または甲状腺機能亢進症……	1	0	64
11．胃・十二指腸潰瘍……	1	0	65
12．肝炎……	1	0	66
13．自律神経失調症（20歳以降）……	1	0	67
14．学校の検尿で尿蛋白か尿潜血あった……	1	0	68
15．腎臓の病気……	1	0	69
16．貧血……	1	0	70
17．てんかん……	1	0	71
18．発達障害……	1	0	72
19．神経衰弱・ノイローゼ……	1	0	73
20．統合失調症・うつ病・心因反応……	1	0	74
21．摂食障害……	1	0	75
22．自殺未遂……	1	0	76
23．膠原病（SLE、リウマチなど）……	1	0	77
24．膠原病以外の難病……	1	0	78
24でハイの人　病気の名前（　　）			
25．手術を要した病気……	1	0	79
25でハイの人　病気の名前（　　）（　　）歳頃			
26．入院を要した病気（手術以外）……	1	0	80
26でハイの人　病気の名前（　　）（　　）歳頃			
27．肥満症……	1	0	81
28．（女性のみ）ひどい月経異常（月経痛・月経不順・無月経）がありますか……	1	0	82

Ⅳ．家族に次の病気の人がいますか

	父親			母親			兄弟（姉妹）		
	ハイ	イイエ		ハイ	イイエ		ハイ	イイエ	
1．高血圧……	1	0	83	1	0	84	1	0	85
2．糖尿病……	1	0	86	1	0	87	1	0	88
3．高コレステロール血症……	1	0	89	1	0	90	1	0	91
4．肥満症……	1	0	92	1	0	93	1	0	94
5．肝炎……	1	0	95	1	0	96	1	0	97

Ⅴ．健康科学センターでは、診療の他に心身の健康相談および健康教育を行っています

	ハイ	イイエ	
1．大学院での勉学について現在なやんでおり、相談したいという希望がありますか……	1	0	98
2．現在、心理的問題があり、専門家に相談したいですか……	1	0	99
3．現在、身体的問題があり、専門家に相談したいですか……	1	0	100
4．家族の病気について、専門家に相談したいですか……	1	0	101

Ⅵ．そのほか、入学後の以下のようなことについて悩んでいますか

次の3つの回答のうち該当する番号を選んで右の（　）にご記入下さい。
1．ほとんど不安はない　2．どうにかなると思う　3．不安である

1）入学後の研究について心配がありますか……（　　）102
2）指導教員との人間関係に不安がありますか……（　　）103
3）研究室の他の学生との人間関係に不安がありますか……（　　）104
4）大学院を卒業した後、将来について不安がありますか……（　　）105

※もう一度記入したものを見なおして、記入もれなどがないか確かめてください。

人 事 等 の 一 覧

教職員・兼任教員……125
非常勤講師……127
学医……128
保健管理専門委員会名簿……129

教　職　員（平成 24 年 3 月 31 日現在）

センター長　大柿哲朗

副センター長　一宮　厚

教授	西村秀樹	（スポーツ社会学）
教授	大柿哲朗	（運動生理学）
教授	橋本公雄	（スポーツ心理学）
教授	熊谷秋三	（健康・運動疫学）
准教授	齊藤篤司	（運動生化学）
准教授	山本教人	（スポーツ社会学）
准教授	杉山佳生	（スポーツ心理学）
准教授	林　直亨	（応用生理学）
講師	高柳茂美	（スポーツ心理学）

教授	上園慶子	（内科学・時間生物学）
教授	山本和彦	（内科学・生理人類学）
教授	一宮　厚	（神経精神医学）
准教授	丸山　徹	（内科学・循環器病学）
准教授	入江正洋	（心身医学・産業医学）
准教授	永野　純	（内科学・心身医学）
准教授	福盛英明	（健康心理学・臨床心理学）
准教授	眞﨑義憲	（呼吸器内科学・健康科学）
准教授	松下智子	（臨床心理学）

事務系職員

事務補佐員	高原由紀子
事務補佐員	笹部澄恵
事務補佐員	下川峰子
事務補佐員	成水貴代
事務補佐員	藤尾幸子
事務補佐員	安籐美紀
事務補佐員	田川久美子
事務補佐員	高尾寿美子

技術系職員

技術職員	松園美貴	保健師
技術職員	戸田美紀子	保健師
技術職員	野村桃子	保健師
技術補佐員	田中朋子	看護師
技術補佐員	荒川　令	保健師
技術補佐員	竹下恵梨	保健師
技術補佐員	濱田百合	保健師
技術補佐員	山口祥子	保健師

兼任教員（平成 24 年 3 月 31 日現在）

氏　名	所　属・職　名
吉良潤一	大学院医学研究院・教授
鈴木孝彦	情報基盤研究開発センター・准教授

健康科学センター内委員会委員名簿（平成 23 年度）

委　員　会　名	委　　員　　名	任　　期	
副センター長	一宮	1	23. 4. 1～24. 3.31
マスター・プラン委員会	大柿，一宮，西村，上園，斉藤，丸山，高柳	1	23. 4. 1～24. 3.31
研究交流委員会	大柿，一宮，山本(教)，高柳，丸山	2	22. 4. 1～24. 3.31
健康教育社会交流委員会	林，高柳，入江，眞﨑	1	23. 4. 1～24. 3.31
人事委員会	大柿，西村，杉山，上園，永野	1	23. 4. 1～24. 3.31
総務委員会	大柿，斉藤，林，山本(教)，一宮，福盛，眞﨑	1	23. 4. 1～24. 3.31
自己点検・評価委員会	大柿，橋本，杉山，上園，丸山	1	23. 4. 1～24. 3.31
教員業績評価委員会	大柿，一宮，西村，上園，熊谷	1	23. 4. 1～24. 3.31
倫理委員会	大柿，一宮，山本(教)，丸山，高柳，馬場園*	2	22. 4. 1～24. 3.31
新キャンパス検討委員会	大柿，杉山，林，福盛，眞﨑	1	23. 4. 1～24. 3.31

非常勤講師（平成 23 年度）

氏　名	所　属・職　名	任　期
精神保健相談		
平　岡　健太郎	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 4. 1～24. 3.31
本　田　慎　一	九州大学病院精神科神経科・大学院生	23. 8. 1～24. 3.31
中　尾　智　博	九州大学病院精神科神経科・助教	23. 4. 1～24. 3.31
川　島　範　子	こころのクリニックやまがた・医師	23. 4. 1～24. 3.31
学生相談		
佐々木　玲　仁	九州大学人間環境学研究院・准教授	23. 4. 1～24. 3.31
吉　永　亮　治	フリー	23. 4. 1～24. 3.31
太　田　あや乃	フリー	23. 4. 1～24. 3.31
斉　藤　明　子	フリー	23. 4. 1～24. 3.31
高　野　尚　子	福岡カウンセリングセンター・代表	23. 4. 1～24. 3.31
中　園　照　美	フリー	23. 4. 1～24. 3.31
井　上　綾　子	フリー	23. 4. 1～24. 3.31
馬　場　弓　歌	フリー	23. 4. 1～24. 3.31
健康相談		
三小田　周　弘	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 4. 16～24. 3.31
池　田　源太郎	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 4. 16～24. 3.31
池　田　昌　隆	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 4. 16～24. 3.31
伊勢川　健　吾	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 4. 16～24. 3.31
中　城　　総一	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 4. 16～24. 3.31
甲　木　雅　人	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 4. 16～24. 3.31
上　原　晶　子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
上　田　　彰	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
植　木　尚　子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
古　川　牧　緒	九州大学大学院医学系学府・研究生	23. 5. 16～24. 3.31
大　徳　真　也	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
田　中　　淳	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
大　田　俊一郎	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
宮　脇　恒　太	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
田　村　真　吾	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
山　内　拓　司	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
隅　田　幸　佑	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
小田原　　淳	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
青　木　孝　友	九州大学大学院医学系学府・大学院生	23. 5. 16～24. 3.31
笹　栗　俊　之	九州大学医学研究院・教授	23. 4. 1～24. 3.31
馬 場 園　　明	九州大学医学研究院・教授	23. 4. 1～24. 3.31
桑　原　一　彰	九州大学医学研究院・准教授	23. 4. 1～24. 3.31
二　宮　利　治	九州大学病院第二内科・助教	23. 4. 1～23. 9.30
浅　野　光　一	九州大学病院第二内科・助教	23.10. 1～24. 3.31
尾　前　　豪	今津赤十字病院・内科部長	23. 4. 1～24. 3.31
佐々木　　悠	フリー	23. 4. 1～24. 3.31

平成23年度九州大学学医一覧

平成23年 4月 1日現在　　健康科学センター

診療科目名	医師氏名	任期開始年月日	新患日	再来日	外来電話	備考
九州大学病院						
内　科	堀内孝彦	17年10月 1日	月～金	月～金	5302	救命救急センター 642-5871
	岩瀬正典	20年 4月 1日				
	伊藤鉄英	21年 4月 1日				
心療内科	岡　孝和	20年 6月 1日	月・木	火・水・金	5335	
神経内科	立石貴久	23年 4月 1日	火・木・金	月・水	5349	
循環器内科	井手友美	23年 4月 1日	月～木		5371	
産科婦人科	小林裕明	21年 4月 1日	月～金（予約制）	月～金	5409	
第一外科	永井英司	20年 4月 1日	火・木	火・木	5453	
第二外科	矢野 篤次郎	19年10月 1日	月・水・金	月・水・金	5479	
整形外科	播广谷　勝三	23年 4月 1日		金	5504	
脳神経外科	溝口昌弘	21年4月 1日	月・水・金	月・水・金	5533	
心臓血管外科	中島淳博	19年 3月 1日	月・水・木	水・木	5565	
皮膚科	師井洋一	18年 4月 1日	月・水・金	火・木	5597	
泌尿器科	横溝　晃	19年 4月 1日	火・木	月・水・金	5615	
精神科神経科	川嵜弘詔	19年 10月 1日	火・木	月～金	5640	
眼　科	宮崎勝徳	19年 4月 1日	月・水・金	月～金	5660	
耳鼻咽喉科	松本　希	21年 4月 1日	火・木	月・水・金	5681	
放射線科	阿部 光一郎	22年 4月 1日	月・水・金	月～金	5705	
放射線部	畠中正光	17年10月 1日				
総合診療科	林　純	3年 7月 1日	月～金	月～金	5300	
九州大学病院（歯科医療センター）						
口腔機能修復科（歯内治療科）	吉嶺嘉人	20年 8月 1日	月～金	月～金	6430	
口腔機能修復科（咬合補綴科）	坂井貴子	18年 4月 1日			6435	
口腔機能修復科（義歯補綴科）	築山能大	19年 4月 1日			6440	
口腔顎顔面外科（顎口腔外科）	大部一成	17年10月 1日			6445	

受付時間

新　患	8:30～11:00（窓口受付）
再　来	8:20～17:00（窓口受付）　8:15～17:00（自動再来受付機）

平成 23 年度保健管理専門委員会委員名簿

（平成 23. 4. 1 現在）

地　区　等	部　　局　　名	氏　　名	任　　期
委員長	健康科学センター長	大 柿 哲 朗	
箱崎文系地区	文学部	坂 上 康 俊	平成 24. 3. 31
箱崎理系地区	農学部	松 山 倫 也	平成 24. 3. 31
病院地区	薬学部	王子田 彰夫	平成 24. 3. 31
筑紫地区	大学院総合理工学府	原 田　　明	平成 24. 3. 31
大橋地区	大学院芸術工学府	平 井 康 之	平成 24. 3. 31
伊都地区	大学院統合新領域学府	外 井 哲 志	平成 24. 3. 31
基幹教育院	基幹教育院	福 留 留 美	平成 25. 3. 31
九州大学病院	九州大学病院	古 庄 憲 浩	平成 25. 3. 31
健康科学センター	健康科学センター	上 園 慶 子	平成 24. 3. 31
	学 務 部 長	鈴 本　司	
	筑紫地区事務部長	増 原 敬 二	

編　集　後　記

平成24年は、日本の政治経済の問題に関する不穏なニュースが絶えませんでしたが、それとともに、ロンドンオリンピック・ロンドンパラリンピックでのメダル獲得や、ノーベル賞受賞など、日本人の活躍に関するニュースも多い一年でした。iPS細胞の発見でノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥教授は、授賞式から一夜明けた次の日を、「科学者としての仕切り直しの最初の朝」と表現し、 新たな始まり"であると述べていました。オリンピックにしても、４年に１度の試合が終われば、次の日はまた新たな始まりとなるのでしょう。健康科学センターも、平成24年度は大きな変化の年となり、平成25年度は新たな始まりが待っています。良くも悪くも、何かが終わり何かが始まるときには、将来への希望とともに、どこかさみしさや心細さも感じるものですが、地に足をつけて新たな目標に向かって進むほかありません。そうすることで新たな道ができていき、新たな道が開けてくることを信じて、皆で助け合いながら進むことが私たちにできることではないでしょうか。現実には、この年報では表しきれない日々の教育、研究、業務活動も多くあり、それらが様々な人々に支えられて成し遂げられていることに、心から感謝したいと思います。

総務委員会　熊谷秋三　入江正洋　山本教人　永野　純
杉山佳生　高柳茂美*　松下智子*　(*編集担当)

健康科学センター年報　第34巻

平成25年３月22日　印 刷
平成25年３月26日　発 行
発行責任者　熊　谷　秋　三
〒816-8580　福岡県春日市春日公園６丁目１番地
(TEL 092-583-7685, FAX 092-592-2866)
発　行　者　九州大学健康科学センター
印　刷　所　城島印刷株式会社